第 5 類
第 目
№ 210

PL
726
.6
I92
1932

East
Asiatic
Studies

Iwaki, Juntarō
Meiji bungaku shi

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

Digitized by the Internet Archive
in 2010 with funding from
University of Toronto

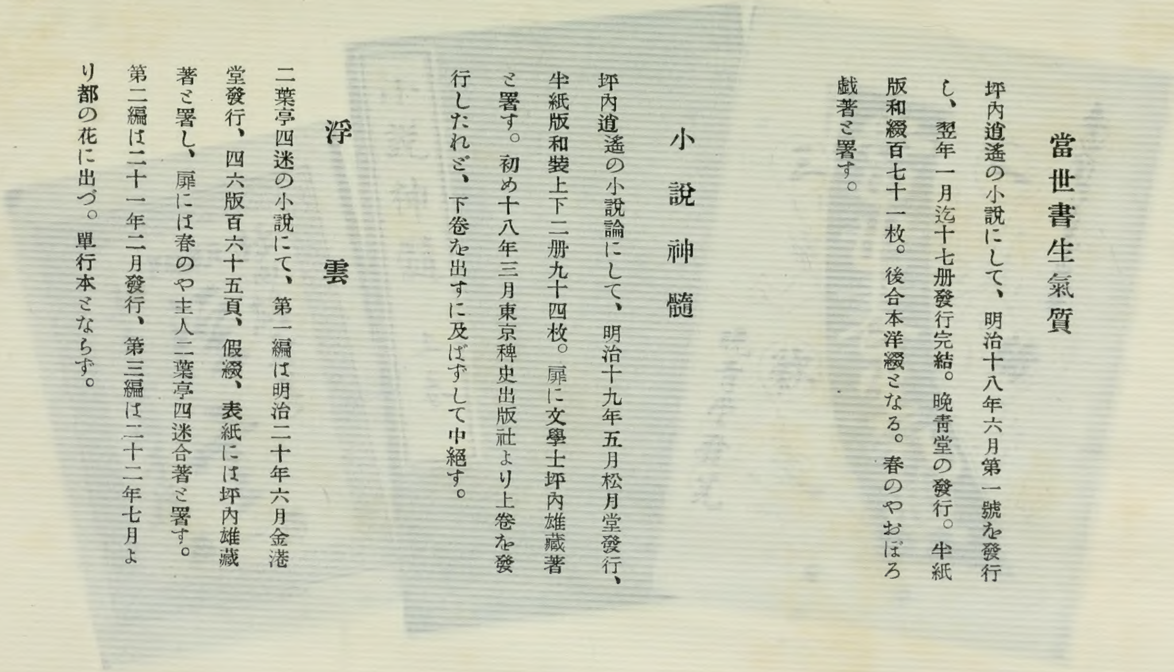
http://www.archive.org/details/meijibungakushi00iwak

明治文學史

明治文學史

PL
726
.6
I92
1932

LIBRARY
FEB - 7 1967
UNIVERSITY OF TORONTO



當世書生氣質

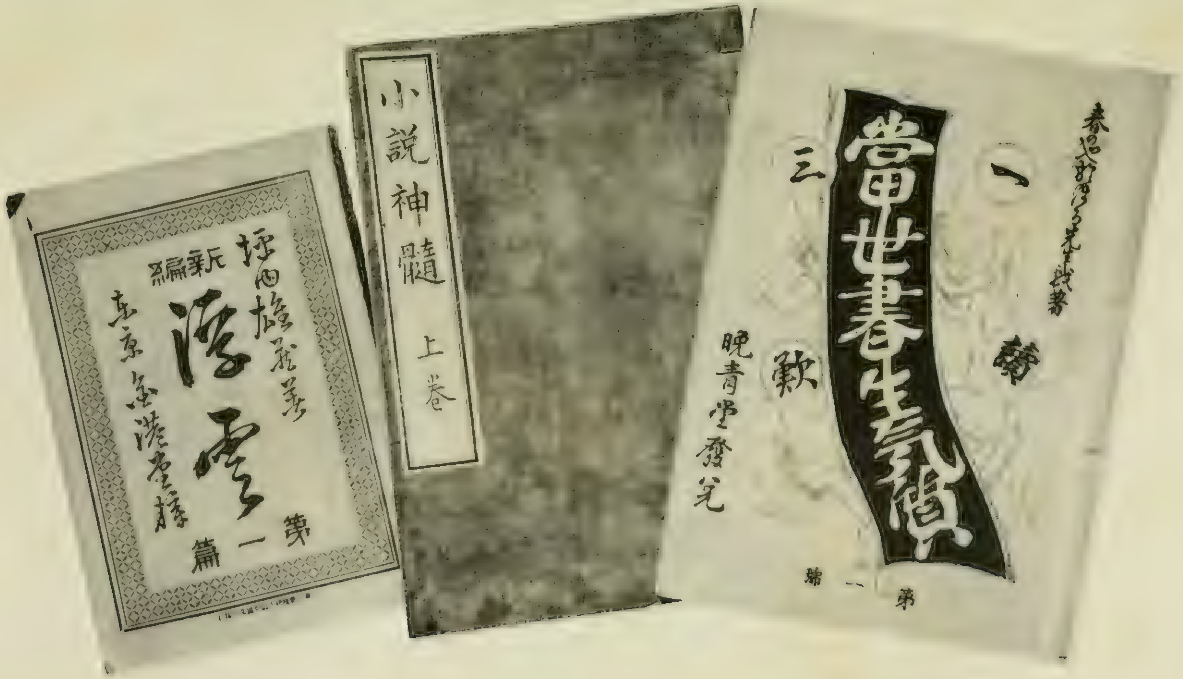
坪内逍遙の小說にして、明治十八年六月第一號を發行し、翌年一月迄十七册發行完結。晩靑堂の發行。半紙版和綴百七十一枚。後合本洋綴となる。春のやおぼろ戯著と署す。

小說神髓

坪内逍遙の小說論にして、明治十九年五月松月堂發行、半紙版和裝上下二册九十四枚。扉に文學士坪内雄藏著と署す。初め十八年三月東京稗史出版社より上卷を發行したれど、下卷を出すに及ばずして中絶す。

浮雲

二葉亭四迷の小說にて、第一編は明治二十年六月金港堂發行、四六版百六十五頁、假綴、表紙には坪内雄藏著と署し、扉には春のや主人二葉亭四迷合著と署す。第二編は二十一年二月發行、第三編は二十二年七月より都の花に出づ。單行本とならず。


新編
浮雲
第一篇
小説神髄
上巻
當世書生氣質
第一號

二人比丘尼 色懺悔

尾崎紅葉の小説にして、新著百種の第一號として出づ。新著百種は明治二十二年四月吉岡書籍店發行の小說叢書にして、四六版約百頁、假綴、價拾貳錢。幸田露伴の風流佛もその第五號に出づ。

夏木立

山田美妙齊の短篇集にして、武藏野外五篇を收む。明治二十一年八月金港堂發行、四六版百三十四頁假綴の册子。

尾花集

幸田露伴の小說五重塔に血紅星を添へたるもの、明治二十五年十月青木嵩山堂發行、四六版百九十三頁假綴。五重塔は同一月より新聞國會に連載せるものなり。

柵草紙

森鷗外等の新聲社（SSS）發行の評論を主とする文藝雜誌にして、明治二十二年十月創刊、菊版約五〇頁、價七錢、月刊。

ほとゝぎす

日本派俳句雜誌にして正岡子規・高濱虛子の發行。明治三十一年十月の創刊。菊版約六〇頁、價金拾貳錢前年松山にて柳原極堂等の發行せるものを東京に遷せるなり。

早稻田文學

坪内逍遙等の早稻田專門學校より發行したる文藝雜誌にして、明治二十五年二月創刊、菊版約三〇頁、價九錢。月二回刊。

明治廿四年十月二十日發兌
早稻田文學
東京專門學校
ほとゝぎす
文學評論
志からみ草紙

新俳句

正岡子規等の日本派新俳句最初の選集、明治三十一年三月民友社發行、四六版四百二頁、假綴、句は主に新聞日本の俳句欄より取れり。

桐一葉

坪内逍遙の新史劇にして、明治二十九年二月春陽堂發行、菊版二四〇頁假綴。二十七年一月より、雜誌早稻田文學に連載したるものを單行せるなり。

亂れ髮

與謝野晶子の第一短歌集、明治三十四年八月、金尾文淵堂發行、三六版。

春の家おほろ著
桐一葉
新俳句

序

徳川時代の學者は知徳を重んじて情を輕んじ、文藝の暗黒面を認めて、その價値の至大なるを忘れたるが如し。新井白石は猿樂の流行を見て、政綱紊亂の兆として苦言を將軍に進め、山本北山は淨瑠璃の文を愛讀しながら、尙之を厠中にのみ繙讀せりといふ。曲亭馬琴の如き、生涯を小說の述作に委ねたる人すら、言ふところは有用の書を購はんが爲に無用の書を著すといふに在り。何ぞその文藝に對するの冷淡にして、これを輕侮したるの甚しきや。日露戰爭の捷利は古來武士道の敎訓に原因すとは道學者の言にして、維新の鴻業は水戸學に胚胎し、學者の論議よく天下の大勢を左右したりとは史家常套の說なれども、その武士道を宣傳し、忠君愛國の思想を國民一般に浸染せしめ

たるものは、實はかの士君子の見るを陋とし耻としたる小說淨瑠璃演劇等、いはゆる平民文學の功勞によらずんばあらず。狂言の吉例とせられたる曾我兩孝子の名は草刈童にも知れ渡り、忠臣藏の幾幕かは津々浦々の村芝居にも演ぜられざる無かりしを思へば、無用の書は却つて有用の功を齎らし、戲作の影響は甚だ眞面目なるものありしにあらずや。

純文學の士君子の間に尊重せられざりし結果は、精神界第一流の人物をして筆を斯方面に執らしむることなく、小說戲曲の如き、眞個に生命あり活氣ある文學を擧げて、嗜好低き中流以下の社會に委ぬるに至り、爲に文學も亦鄙陋淫猥の域を脫する能はざりしは、我德川文學史上の一大遺憾といふべし。文藝を尊重する風の盛なること歐洲諸國の如くなりしならんには、白石の如きは蓋し世界に雄視する一代の大文豪たりしならん。

然れどもかくの如き時代にありて、いはゆる平民文學の發展のさばかりに顯著なりしを思へば、亦自ら人意を强うするものあり。凡そ國家の隆昌なる、必ず文學の見るべきものあり。國民の意氣銷沈するや、文學も亦委靡して振はず。支那朝鮮等近世文學の甚だ寂寥なるを思へば、我國が東洋の覇者たるべき形勢は已に德川文學を以て豫言し得べかりしなり。

吾人はこゝに舊來の文學を繼承して、新に西洋の文化を受け、今よりは東西を融合渾化せる新國文學の發生を希望する地位に立てり。純文學に關する見解は一大變遷をなして、今や德川時代に士君子の繙讀するを憚りし無用の書は、多數の學者により て研究せられ、德川時代に士君子の列に伍する能はざりし戲作者は、詩人文學者を以て社會の上流に遇せらるゝに至れり。文學に對する尊重の此の如きを思ひ、國家の隆運前古其の比なく

國民の發展亦益〻際涯なからんとする今日の狀勢を念ふに、國文學の前途に向つて赫灼たる光明の閃影を認め得たる感なき能はず。

今日は正にこれ過渡の時代なり。音樂に於て。繪畫に於て、尙蔚然たる大家の輩出せざる限り、國文學に於ける偉人の發現も亦未だしかるべし。たゞこの過渡の時代が如何に經過し、如何に變遷し來れるかを見んは、將來の希望と理想とを滿足せしむる上に於て、幾多の興味を感ずべきのみならず、將來に起るべき新國文學の先驅たるべき現代文學を現今の人の手に叙述し評論せる本書は、後人の目より見ば亦如何に多大の興味を惹起すべきならんと信じ、本書の刊行を喜悅するの情に禁へず。

明治三十九年十二月　芳賀矢一しるす

緒言

明治維新は本邦文明史に於ける空前の事件なり。東西の文明相交りて茲に一新文明を現出し、社會百般の事象悉く新彩を帶ぶるに至れり。然れども、明治の文明は、年を閲すること四十に滿たず。譬へば、靑春の人、經驗未だ足らず、思慮未だ熟せず、勇往の氣徒に盛にして未だ調和の妙境に達せざるが如く、新舊の二素到る所に乖戾す。我が文明が壯年の域に上り、成熟の期に入るが如きは尙遠き未來に屬す。所謂「過渡時代」は、斯かる時期に命ずべき最も陳腐にして又最も適切なる名稱たるべし。而して此の現象の特に著しきは、文藝界に在り。由來文藝界の推移變遷は常に物質界の其れに後る。物質界革新の事業を完成してより、文華爛熟の盛運に達するまでには、更に幾十

の歳月を經ざるべからず。大化革新ありてより三十年を經、天武持統の世に至りて物質界の革新殆ど完成したりき。而も文藝界の發展を遂げたる天平の盛事は八十年の後に在りき。桓武帝京を拓きてより三十年を經、平城嵯峨の世に至りて紀綱張り國運盛なりき。而も延喜の文運勃興は百年の後に來りき。元和偃武以來三十年、家綱軍職に就く頃は、恰も德川氏覇業の完成せし時なりき。而して文藝界の新氣運は八十年を經て元祿享保の交に興りき。維新の一元勳は豫言すらく、明治維新の大業は三十年にして成らんと。思ふに二十七八年戰役の前後は、維新の宏謨を完成したりし一大時期に非ざりしか。物質界の方面は此の時に方りて略成人の域に達せしが如し。唯文藝界の天平時代、延喜時代、元祿時代は未だ到らざるなり。

然り。明治文學は尚混沌たる過渡期に在り。然れども、古來

文學史上の過渡期にして斯くの如く興味饒きは未だ有らざるなり。平安文學の過渡期は、印度支那の文藝を取りて之を本邦固有の文藝に融和したる時代なりき。江戶文學の過渡期は、舊文藝復興の氣運に乘じ、一千年間浸潤し來りし支那印度思想が、純然たる我が文學思想となりて現はれ、東洋文明の精華悉く萃りて我が文學に入りし時代なりき。明治文學の過渡期は、則ち之に止らず、前代萃め得たる東洋文藝の精華を提げて、新に泰西の文藝と接觸し、其の英を摘み其の芳を採り、以て世界的發展の途に就かんとする時代なり。明治文學史は此の意義深き過渡期文學の一般を髣髴せんとするものなり。

遮莫、明治文學は年齒尙若く、思潮の變遷文運の推移、未だ容易に究むべからず。されば之を論ずるに方り、期を分ち章を定め、劃然たる彙類をなして、各種文學を同一體系の下に攝取

論述すること甚だ難し。此の書に試みしが如きは、所詮一の試みに過ぎず。

此の書主として代表的作家、及び代表的著作を取りて文學發展の迹を辿る。多數の作家作品を悉く採錄する餘裕なきを憾む。

此の書收めたる文學は、純文學に限る。又純文學に在りても、所謂美文紀行文乃至漢詩漢文等は省略に從ふ。

文學評論と新聞雜誌との文運發展に及ぼす影響や甚だ大なり。此の書特に節を設けて之を詳述せんとせしも、紙數に限あり、唯略敍に止む。

最近文學の概觀は、三十六七年の交、文運一轉せんとするに至つて筆を擱く。象徵文學の勃興、社會主義小說の出現、藤村漱石獨步等新文星の活動、及び文藝協會の事業等の新現象は、尙將來の發展を待つべき者なれば、暫く之に論及せず。

非才寡聞敢て事に當る。誤謬と脫漏と、冗漫と粗笨と、定めて卷に普からん。偏に江湖の叱正を俟つ。

明治三十九年十一月　著者識す

増補例言

本書は初版の全部に訂正を加へ、特に末章「最近文學の概觀」を改作し、新に二章を増補し、添ふるに明治文學年表を以てしたる者なり。

初版は其の緒言に述べしが如く、三十六七年の交に筆を擱けり。當時文壇の風雲頗る險惡にして、大勢の何れに傾くべきか、若しくは如何なる新現象の起るべきかは、聰明なる批評家と雖、觀測するに難んずる所なりき。衝天の意氣を以て崛起し來れるロマンチック運動の歸趨は如何に、デカダン詩派を模倣せる象徵詩は如何に發展すべきか、將來小說界の覇權は天外の科學的寫實小說に歸すべきか、蘆花春葉の家庭小說に歸すべきか、はた全然新作風を捲き起すべきかに關しては、何人も權威ある論斷をなし得ざりき。況んや自然主義の文學、俳諧派の小說の、突如萬丈の光焔を擧ぐべきを豫想するに於てをや。爾來我が文壇は、急轉直下ロマンチック運動の統を繼ぎて舊文藝破壞の運動を逞うし、敍事詩史詩夢の如く去り、家庭小說は

第二流讀者の間に墮ち、代りて立てる新興文學の旗幟獨り鮮明に、文壇の各隅に樹つに至れり。今にして過去文學界を顧みれば、歷史の進程略分明に、文運發展の徑路亦瞭乎として双眸に入る。文學上の維新革命ありて約二十五年、第二の維新は今正に斯界に行はれつゝあるなり。茲に初版の末章を改めて文學一轉の兆を示し、混沌期の文學を總敍し、新に二章を加へて新興文學の由來を明にし、進んで昨四十一年に至る最近文壇の狀勢に說き及べり。庶幾くは初版の面目を一新して多少の光彩を添ふるを得んか。

本書附する所の明治文學年表は、尨然たる草稿の中、專ら文運の大勢に關係深き事象を取り、要を拔き略に從ひ、僅に十の一を揭ぐ。編者多年苦心の餘に出づと雖、固と學暇零碎の時間を用ひて之を蒐集したる者、涉獵遍からず訪索博からず、時に或は誤脫なきを保せず。特に必ず採錄せざるべからずして而も年月不明なるが爲、已むを得ず省略せる者あるは、最も編者の遺憾とする所なり。江湖博覽の士幸に是正を吝む勿れ。

本書初版を公にするや、恩師藤岡博士、畏友志田學士、其の他新聞雜誌

著者是によりて蒙を啓くこと鮮少に非ず。茲に特筆して聊か謝意を表す。

記者諸士、或は有益なる批評を加へられ、或は懇篤なる教示を賜はる。著者是によりて蒙を啓くこと鮮少に非ず。茲に特筆して聊か謝意を表す。

明治四十二年五月　　　　著　者

複刻凡例

明治文學史は、明治三十六年、井上・坪井・芳賀三先生の、明治歷史全集の編纂を企畫せらるるに際し、芳賀先生の委囑を受けて著作したるものなり。翌三十七年五月稿を起し、滿二年を經て、三十九年六月之を脫稿し、卽時芳賀先生の閱に供へ、同年十二月、明治歷史全集第一編として發行せり。

明治四十二年、更に增補版を出さんことを求められ、一月筆を執り、三月筆を擱き、六月增補明治文學史と題して刊行したり。

爾後數年を經て、種々の事情により、何時となく絕版となり、以て今日に及ぶ。其の間江湖の此の書を求めらるるもの、年々急を加へ、近時明治文化の硏究熾なるに方り、特に訪索を受くること頻りなるに至れり。

修文館主鈴木氏、此の際本書の容しく絕版書となり了るを惜み、切に之が複刻を勸む。二十年以前の舊著、顧みて赧然たるもの尠からずと雖も、明治時代硏究の資料として、聊か學界に貢献することを得ば、本書の著作

亦徒爾ならずとすべし。乃ち鈴木氏の勸めに從ひ、昨年十一月以來整理校訂に從事し、半年を經て茲に功を終ふ。

本文は、原形を保存するを主として、斧鑿を加ふるを避け、唯甚しき誤謬、送假字用語の妥當を缺くもの、植字の過誤等を訂正するに止めたり。底本は增補明治文學史を取りたれど、此の書名を襲用する時は、新增と誤らるる虞あるを以て、增補の二字を削つて、明治文學史と題することとせり。

本書の複刻に著手するや、書信を芳賀先生に奉りて之を報じ、且つ往年賜ふところの序文を再び卷頭に揭げんことを乞ふ。時に十二月下浣なりき。而して未だ其の許諾を拜受するに至らずして、先生病俄かに篤く、今年二月初卒然として逝去せらる。本書成りて之を淸覽に供するを得ざりしは、誠に痛恨に堪へざるところなり。然れども先生の序文は、之を失ふに忍びず、乃ち恣に之を冠して往時の記念となす。蓋し先生在天の尊靈莞爾として之を許容したまはん。

附錄明治文學年表は、增補明治文學史に附載したるものを增訂して、稍〻面目を改めたるものなり。又口繪六葉は今回新たに加へたるもの、明治前半期の文學史の上に、特に有意義の地位を占むる著作を選び、その版式等を知るの便に供せるなり。著者所藏に缺けたるものは、愛書趣味社の好意により、同社の藏本を以て之を補ふことを得たり。深く同社に謝す。

昭和二年六月十五日

著　者

明治文學史目次

第一期の文學（明治元年—同十八九年）

第一章　前代繼承の文學……二

第一節　暗黑の文學界……二

第二節　外來の思想……一一

第三節　前代繼承の文學……二九

第二章　新文學の先驅……四九

第一節　飜譯文學……四九

第二節　政治小說……五八

第二期の文學（明治二十年—同二十七年）

第三章　新文學思想……六八

第一節　固有思想の反動……六八

第二節　文學思想の革新……七九

第四章　新文學の勃興（其の一）……九七

第一節　新文學の曙光……九七

第二節　寫實小說の興起……一一九

第三節　傳奇小說の興廢……一六七

第四節　新體詩及び戲曲……一八二

一　新體詩……一八二

二　戲曲……一九一

第三期の文學（明治二十八年—同三十七年）

第五章　新文學の勃興（其の二）……二〇四

第一節　文運興隆の因緣……二〇四

第二節　俳句の革新……二一〇

第三節　和歌の革新……二三四

第六章　文學の轉進……二四九
第一節　小說（其の一）……二四九
一　觀念小說……二四九
二　心理小說……二六六
三　先進作家の心理小說……二八八
第二節　新體詩……三〇七
第三節　戲曲……三三九
第四節　小說（其の二）……三五六
第七章　文學一轉の機……三六四
第一節　俳句和歌及び新體詩……三八六
第二節　小說及び戲曲……三九八

第四期の文學（明治三十八年—同四十一年）

第八章　新興文學の由來……四一八
第一節　舊文藝破壞の思潮……四一八
第二節　海外文學の輸入……四二七
第三節　象徴詩の勃興……四三三
第四節　自然派小說の源流……四三九
第五節　俳諧派小說の出現……四五〇
第六節　脚本界の新聲……四五九
第九章　新興の文學……四六九
第一節　思想界の新潮……四六九
第二節　新興の小說……四七七
第三節　新興の詩歌……四八九
附錄
明治文學年表……一
索　引

第一期の文學

明治元年——同十八九年

第一章　前代繼承の文學

第一節　暗黑の文學界

潮流の相撃つや、勢、浪を起し渦を旋らし、寒暖相交る所、忽ち濃霧を結び、千里に瀰漫して慶海客を惱ます。思潮衝突の事亦頗る是に類する者あり。幕末以來動き初めたる新思潮は、頻々として繼起せる外來の刺戟によりて、日一日其の勢を伸べ、遂に滔天の大勢力となりて舊思想の前面に現れ來り、論爭、戰亂、變革、所有破壞的運動を逞うして維新の大革新は成出でぬ。其の間、社會の舊秩序悉く破れて、之に代るべき新秩序未だ確立せず、世を擧げて、一時混沌の界に陷り、一代の民衆徨々として五里霧中にさ迷ふが如き狀態なりき。

而して此の維新當初の社會を支配せし所謂新思潮は、疑もなく泰西の思想より來りき。思ふに新思潮の横流は其の由來する所甚だ遠く、洵に幕末

一日の故に非ず。室町の季世、南蠻の來航ありてより、江戸幕府の初期紅毛の通商に至るまで、既に泰西思想の一端に觸れ、島原の騷亂に鋭鋒一度頓挫せしも、八代將軍の英斷、新文明の輸入を復興し、爾來日進月歩の西洋文明は、絶えず紅毛人の手によりて本邦具眼の士に傳へられしかば、所謂新思想の萠芽は此の間既に養はれたりし事疑ふべくもあらず。此の時に方り、黑船來航の飛信は露人北邊を侵すの警報と共に全國を愕かし、闔國の存亡此の一瞬に極まるが如く見えしかば、攘夷、開國、尊王、佐幕、衆論沸騰し國內騷擾し、續いて外艦砲撃となり、幕府の解體となり、大政奉還となり、時局は走馬燈の如く廻りて、急轉直下、遂に王政維新となり、赫々たる新思想の勝利を以て一段落を結びぬ。南蠻通航以來、國民の間を流れ來りし泰西思潮は、茲に至りて汪々たる奔流となり、新たに建設せられし明治政府は、悉く此の思潮に浴せる當代の俊才によりて組織せられたりしかば、舊物革新の政治は一瀉千里の勢を以て行はれ、二百年の舊慣一朝にして改まり、東照公の威靈全く地に落ち、封建世襲の制廢せられ、四

民の階級撤せられ、結髮を切り帶刀を解き、暦日を改め年中行事を變へ、社祚の折目正しきは洋服帽子の當世風に移り、驛路傳馬の悠々たるは汽車汽船の快速と代りぬ。斯くて、上は政治の大本より下は衣食住の瑣末に至るまで、一として泰西に法らざるはなく、世を擧げて西洋文明に心醉するに至り、物質界に於ける泰西思想の勝利は明かに認められぬ。

然り、改革は疾風の如く行はれぬ。疾風の過ぐる所、草を飛ばし木を摧き、家を破り垣を壞ち、野を荒し林を掠め、當る所の物破摧し盡さずんば止まず。維新の改革は破壞の歷史なり。總ての舊制度、舊習慣は根柢より覆されたり。啻に制度習慣のみならず、總ての舊思想、舊學術は舊弊といふ一語の下に斥けられたり。啻に思想學術のみならず、總ての舊道德、舊信仰、乃至舊文學、舊美術は悉く破壞し去られたり。換言すれば、物心兩界に亘りて總ての舊事物は名殘なく破壞し盡されたり。斯くて世は荒寥たる木枯の野となりて、一代の民衆は、制度確立せず、思想定まらず。はた信仰なく文藝なき混沌界に投ぜられぬ。

斯かる民衆の第一に要求する所の者は、言ふまでもなく物質的滿足なり。猛烈なる破壞に驚かされて茫然爲す所を知らざりし民衆は、譬へば饑ゑたる者の食に就くが如く、翕然として物質的新文明の下に集まり、文明若しくは開化と名の附く事物は、善惡美醜の識別なく之を貪り取りぬ。是に於てか、維新の改革家は、其の勇往なる破壞の手を收めて之を建設の方面に廻らさざるべからず。而して其の建設事業の第一着手は、實に物質的新事物に向つて爲されざるべからざりき。聖天子即ち此の氣運を察し、勅諭を下して國民の向ふ所を指導し給へり。明治元年三月天下に宣明し給ひし五事の御誓文即ち是なり。曰く、廣く會議を起し萬機公論に決すべし。曰く、上下心を一にして盛に經綸を行ふべし。曰く、官武一途庶民に至るまで、各其の志を遂げ、人心をして倦まざらしめんことを要す。曰く、舊來の陋習を破り天地の公道に基くべし。曰く、智識を世界に求め大に皇基を振起すべしと。是實に機宜に適ひたる施設にして、其の徹頭徹尾物質的建設に關する者なるが如きは、當時の人心の躍如として之に反映するを見るべし。

爾來國民の歸趨は一に之に集まり、孜々として物質的新事業の經營に勤めぬ。元年三月、太政官『日誌』を發行してより、民間新聞紙の起る者相次ぎ、二年府縣に小學校を設け東京に大學校を興し、京濱間に電線を架し、鐵道を起工し、四年、廢藩置縣を斷行し、穢多非人の稱を廢して四民平等となし、五年、太陽曆を採用し、六年、全國に徴兵令を布き、八年、行政釐革の詔を發して行政組織の完美を計り、元老院を設けて立法議院建設の準備をなし、大審院を置きて司法權を確立し、其の他人才登庸の道を開き、留學生を西洋各國に送り、新聞雜誌を發刊して益〻此の思想を鼓吹し、盛に窮理書を著譯して科學的智識の傳播に勤めたる等、明治の初年全國民の奮勵努力は、一として五事誓約の實現ならざるは無かりき。大水堤を決したるが如き物質的新文明の流に當る者、何人か敢て精神界の缺陷に想到し、若しくは進んで精神的新建設を試みんとする程の餘裕を有すべきぞ。社會の大變動に遭遇して擧措其の度を失ひたる國民が、物質的要求の滿足に忙殺せられて、又他を顧みるに暇なかりし事、誠に宜なりと言ふべし。

げに衣食足りて人始めて禮節を知るべし。物質的要求を滿たすに惟れ日も足らざる餘裕なき國民が、道德や宗教や美術や文學や、所謂精神的方面を閑却し、特に美術文學の如き、實用必須を離れたる高尙なる精神的方面に屬する活動を以て全然社會に用なき者となし、破壞に繼ぐに破壞を以てし、千年の傳統一朝弊履の如く棄て去つて顧みず、世は科學萬能、開化萬能の世、人は麵麭のみにて生活し得る者と思惟せしが如くなりしは、正に然るべき所。されば明治の初年に於ける是等精神的方面の慘憺たる運命は、今より想像するに餘あり。國初以來國民固有の精神に加ふるに儒教の倫理觀を以てし、年所數多の訓練と陶冶とを經て遂に莊嚴なる社會道德となり、以て上下の人心を支配し來りし所謂武士道の道德は、社會の解體、四民階級の撤去、帶刀の禁令と共に其の權威を失墜して、社會道德の地盤は蕩然壞れ去りぬ。而も之に代るべき新道德未だ確立せざるなり。之を宗敎に見れば、國民敬神の風に鑒みて之を佛道に習合し、以て國民の信仰を繫ぎ來りし所謂日本佛教も、維新改革家の外教撲滅、神佛分離の斷行と共に、如

宗世尊の威德俄然として薄らぎ、迷信の名の下に此等の信仰は名殘なく地を拂はんとす、而も之に代るべき新信仰未だ起らざるなり。斯くて國民は上下相率ゐて功利の門に拜跪しぬ。

美術の狀態に至りては更に慘澹たる者あり。舊物破壞の精神は、特に斯界に其の勢力を逞うし、神佛分離の一擊、幾多優秀なる宗敎的古美術を破却し、社寺料地の奉還、國民信仰の乖離は、社寺を死地に陷れて、傳來の尊像珍什多く蓬散して外人外商の手に移らしめ、美術の保護者たりし上流人士は、社會の變動と共に生活の困難を來し、延いて美術品の如き裝飾的什器は、悉く賣却せられて日常必須の器具と代りぬ。芝の增上寺、奈良興福寺の五重塔を無用の長物なりとして、燒き拂はんとしたるが如きは、當時の形勢の極端なる發現なりと雖、蒔繪物の棄てられてガラス物のもてはやされ、陶磁の精巧なるはブリキの粗造なるに代り、雪舟探幽、絜よりも輕くして、石版の洋畫却つて千鈞よりも重かりしが如きは、尋常の事驚くに足らず。されば美術家、工藝家は其の職を失ひて路頭に迷ふ者多く、明

治畫界の天才狩野芳崖の英資を以てして、尚當時赤貧洗ふが如く、五十の畵幅、連夜露店にさらして漸く三圓の金に換へ得たりといふ。一代美術の衰運寧ろ悼むべきにあらずや。

飜つて思ふ、當代文學の趨勢は如何。天保弘化以來、漸衰の域に向ひたる我が文學は、一たび幕末變亂の爲に打撃せられ、二たび維新以來の泰西物質的新文明の爲に打撃せられて沈衰の極に達せり。所謂西洋實學の勢力はあらゆる文學を蹂躙して無用の文字となし、和漢文學に關する在來の典籍は、其の他一般の和漢書と共に、新世界の時勢に添はざる者として擯斥せられ、此等を藏する者亦因循固陋として嘲けらるゝこと少からざりしかば、古今の名著大家の述作、乃至希世の珍本奇籍、惜し氣もなく反古として沽却せられ、片々たる窮理の書代りて諸家の珍藏となり、物理學の初歩を心得たる者は大學者の如く思ひ上りぬ。されば新文學固より起るよしなく、新文學者亦出づべくもあらず。唯此の變轉活動の社會と相關することなき一派の閑人等、積衰の餘に出でたる舊文學の殘肴冷杯を甞めて、社會

の裏面に一脈の文運を維持する有るのみ。其れすら生存問題の苦痛容赦なく彼等を迫害し、戯作を以て身を立つるの困難は愈〻甚しくして、之にたづさはる者漸く跡を絶たんとす。幸に新聞紙の起る有りて、戯作者の少しく才ある者之に從事し、新作取るに足る者無しと雖、頼りて以て一縷の命脈を保てり。要するに明治初年の文學界は、微光一點の明滅する者有るのみにて、大勢の上より見れば暗黑無明といふも不可無きに似たり。而も其の微光や、舊文學の繼承に過ぎずして、未だ以て明治新文學の新光明と稱するに足る者あらざりき。餘裕なき國民の俗惡なるは今に始まりたる事ならずと雖、當時の國民の如くしかく詩味の缺乏したる者あらず。輕浮淺薄の風上下を靡かして、世は永へに功利一遍の世とならんせり。

維新の歷史は舊物破壞の歷史なり。明治の初年は物質的要求の滿足に全力を注ぎし世なり。心靈界の要求未だ起らざる世なり。古今に比類なき沒趣味の時代なり。新舊思潮衝突の序幕は實に斯くの如き慘澹たる光景を以て開かれたり。明治文學史は實に憫むべき文學の悲境を以て始められざる

べからざりき。

第二節　外來の思想

維新改革に於ける泰西思想の勝利は、物質界に對して多大の貢献をなせりと雖、心靈界に對しては上述の如き不吉なる結果を殘せり。されば國民の自省自識未だ起らず、思想界に於ける自主自立の域尚遠くして、朝變暮改、一に外來思想の赴く所に從ふ。是を以て、且に英國思想を迎へ、夕に佛國思想に就き、昨は功利主義盛にして今は幸福主義起り、民心の蕩搖極りなく、遂には尊外卑内の弊に陷るに至るまで、只管泰西思想の後影を追ふ。されば一度物質界に於て勝利を得たる泰西思想は、進んで精神界に勢力を振ひ、延いては文藝に於ける新思想輸入の階梯ともならんとす。因て茲に後來文藝界新思想の先驅ともいふべき思想界の新潮を探り、其が物質的文明に對する交渉以外、如何なる影響を我が人心に與へしかを見ん。

蘭學は本邦洋學の祖なり。大凡、外國の思想乃至學術の我邦に入りしは、

古代にしては佛學と漢學とあり。近代にしては即ち蘭學あり。而して佛學と漢學とは、共に我が思想界文藝界に入りて共の有力なる元素となり、物質的文明の進捗以外、靈界に殘せる痕跡頗る顯著なりき。然れども蘭學は醫學天文等の實用科學を傳へ、我が物質的文明に對して多大の貢献をなししに係らず、倫理文藝に對して共の足跡を印する者甚だ少かりき。本邦洋學の祖先は、唯物質的文明の指導者としてのみ二百年間の勢力を維持せしが、幕末、歐米各國の言語、思想、學術等、一時に流入するに及び、大渦盤旋、蘭學の勢力を沒し去りて、想海一度中心思潮を失ひ了りぬ。斯くて、幕府衰亡の大變亂を經て王政一新となるに及び、俄然勃興し來りて本邦文明を指導し、以て前代蘭學の地位を奪ひし者は、實に英國思想なりき。

當時世界の海上權力は既に蘭國を離れて英佛米の手に歸し、文明の中心亦此等新興の邦國に移りしかば、十九世紀文明の新潮は彼等の手によりて東洋に運ばるるに至り、特に英國、富强宇內に冠し、海上王として勢力五洲に及べる時なるを以て、英國の思想及び學術は驀然として國內に入來れ

り。啻に之のみならず、英國の分身たる北米合衆國は、提督彼理來航以降、本邦開國に深き關係を有し、我が爲政家改革家先づ彼に見事して開化文明の師と仰ぎ、彼の國も亦私かに東瀛蓬萊國を開發する嚮導を以て任じたりしかば、英國的文明の分子は西より東より盛に此の國に移植せられたり。當時英語は世界の通語と稱せられ、我が朝野先覺の士、歐米諸國を視察し若しくは數年留學の功を積みて歸朝する者、多くは英語を操り、英國學者乃至其の著書によりて文明の智識を得たる輩なれば、此の方面よりも政治、經濟、風俗、衣食、其の他萬般の事物、概ね英國を宗とせるなりき。

斯くして英國思想は泰西新思潮の先頭として國内に横流し、續いて他の諸國の思想を導き、到る處革新の波を揚げにき。而して此の思想を抱きて國民の唱首となり、所有荊棘を拓きて此の氣運を鞭韃し、以て一世の木鐸となりし先覺者は實に福澤諭吉なりき。彼は既に明治以前、慶應義塾を江戸三田に開き、天下の學生を招きて革新の曉鐘を撞き初めたり。其の宗とする所は專ら英米功利の學風に在り、政治、道德、風俗、習慣等、一に舊

來の弊を打破して新文明の光に浴せしめんとす。其の舊道德、舊習慣、舊教育を罵倒するや峻烈を極め、教壇に公開演說に、新聞に著書に、勇往直前、新主義を鼓吹して止まず、『世界國盡』『窮理圖解』『西洋事情』等、通俗の著書、又は種々の飜譯書を出して公衆を教へ、遂には時人をして一般洋學書を稱して福澤本と呼ばしむるに至り、三田の先生若しくは三田翁なる名は、斯くて我が新文明を開きたる大光明となりぬ。

げに思想界の嚮導としての福澤は極めて偉大なりき。而も彼れの事業は獨り之に止まらず、文學者としても亦新文壇に於ける最初の新文學者たる光榮を荷ふ者なり。勿論彼れの文學者たるは、純文學の作家たる所に存するに非ずして、單に文體の上に在り。換言すれば、散文家飜譯家としての文學者たるに過ぎず。然れども從來の文壇に於ける誇大粗放の漢文と、優長迂遠なる和文との外、別に平易流暢の一體を創めて新思想の發表と俗間の普及とに便したりしは、其の功績實に鮮少に非ざるなり。明治六年『文字の教』を草し、其の端書に曰く、「今より次第に漢字を廢するの用意專一

なるべし、其の用意とは文章を書くにむつかしき漢字をば成るべく用ひざるやう心掛くる事なり。むつかしき字をさへ用ひざれば、漢字の數は二千か三千にて澤山なるべし。此書三冊に漢字を用ひたる言葉の數僅かに千に足らざれども、一通りの用便には差支なし。之に由て考ふれば、漢字を交へ用ふるとてさまで學者の骨折にも非ず、唯古の儒者流儀に倣ひて、妄に難しき字を用ひざるやう心掛くる事緊要なるのみ云々」と。彼が文章に對する第一の主張は漢字制限に在り。斯くの如きは、豈三十年後の今日、我が教育社會が取りつゝある方針の的確なる豫言に非ずや。且其の文體と用語と、全然從來の型式を離れ、口語の語彙と語脈との大膽なる採用を試み、以て上揭の如き文語と口語との渾然たる調和體を創始せり。是豈に吾人が今日此の文を讀んで何等の不思議を感ぜざるまでに讀み習ひ書き習ひたる普通文の範を垂れたる者ならずや。後年或は假字のみを以て國語を記載せんとし、或は言文一致の文體を創始せるが如きは、皆其の源泉を茲に汲めりといふべし。げに彼れの文體は自由なり、平易なり。明治思想を述べん

には、斯くの如く自由ならざるべからず。之を民間に普及するには、斯くの如く平易ならざるべからず。正に是れ、時勢の要求此の文を起しゝもの明治文壇到る所に其の影響を殘しゝも亦宜なり。

福澤は又、世界の地理、歴史を童蒙に敎へんが爲に、明治二年『世界國盡』を著し、吟詠の中おのづから之を諳んぜしめんとて、平易流暢なる七五調を以て一篇を始終せり。此の書一度出でて、到る所節調を附して吟誦せられ、其の吟調相傳へて後日の軍歌調となれり。而して其の文章も、冒頭「世界は廣し萬國は」より始めて、沒趣味なる地理歴史の敍述に過ぎざれども、其の記載の對象により、興來り情昂る時は、文字精彩あり、聲調昂揚して一段の詩味を帶ぶ。特に英京を敍する所、及び北米合衆國の歴史を謳ふあたりは、宛然後年『新體詩抄』の詩調を喚起したる先聲なるの觀あり。彼は又、英人チャムバーの『モーラル。クラス。ブック』を譯して『童蒙敎草』と題し、例の平易自由なる文體を以て童蒙の訓話を記載せり。是亦、後の童幼の讀み物の所有種類に採用せられたる文體の嚆矢にして、別

しては飜譯文の最達意なる者の一なり。固と是れ、教訓書にして文學上の作ならざれば、飜譯文學とは稱するを得ずと雖、唯其の文章の上より、同人の他の譯書と共に頗る尊重を價すべき者となす。

要するに彼れの文章は、平易と自由と暢達とを以て特色となし、之を以て『西洋事情』以來多數の著書論文を一貫せり。斯くして彼は明治の文章に、風體と用語との革新を加へ、一代の散文をして向ふ所を知らしめたり。其の成功の著しき、彼が思想界に於ける成功に比べて必しも遜色なし。否後者の成功は、半ば其の文章の功績に歸せざるべからず。彼が明治文學史上に有する位置は正に此の點に存す。

私塾を開いて洋學を授けたりし者の中、慶應義塾を除きて最有力なりしを東京小石川なる中村正直の同人社となす。是亦、英國風の社會教育に力め、『西國立志編』『西洋品行論』等、スマイルスの著書を譯述して、品性修養の根據を洋風道德の上に置きたりき。其の他明治初年にありし各地洋學の塾には、箕作秋坪塾、鳴門二郎吉塾、福地源一郎塾、尺振八塾等甚だ多

く、何れも明治新文明に直接間接の貢献をなせり。明治四年の調査によれば、當時福澤塾生三百二十三、福地塾生七十八、箕作塾生百六、鳴門塾生百四十一、尺塾生百十一名ありきと。以て洋學當年の狀勢を見るべし。

教育の方面にて此の新氣運興隆に力ありしは、此等民間教育家のみならず、政府當局の施設亦沒すべからず。維新以前より洋學輸入の中樞たりし開成所は、慶應三年學制を改めしより、蘭學漸く衰へて英佛獨の學術漸く盛に、該國教師を聘し、專ら其の國語によりて諸生を導かしめ、超えて明治二年、府縣に小學校を設けて初等教育の端を開き、次に開成所を大學南校と改稱して語學を專らとし、昌平黌を大學東校と改稱して醫學を專らとし、以て高等專門教育の基を立て、三年大、中、小學規則を制定し、南校に各藩の貢進生を集め、其の英佛學上等生を英佛二國に留學せしめ、次いで中學校を立てて中等教育の機關を設けたり。爾來大學南校益擴張せられて、四年には雇外國教師、英五、米四、佛三、獨三、瑞一の多きに及び、生徒總數千百九十五名の盛況に達し、留學生には五名の女子を見るに至り、

同年文部省を置きて教育行政の首腦となし、政治法律より日用技藝に至るまで、百般の學校備はらざるなく、以て十年東京大學の設立に及ぶ。政府の洋學教育が斯く駸々として其の步を進むる間、他方に於ては文明進捗に資すべき著譯頻りに出で、益〻此の氣運を助けたりき。

此等著譯は主として民間學者の手に成りきと雖、文部省亦大に之を奬勵し、或は自ら飜譯出版に從事し、或は其の保護の下に著譯を完成せしめたり。試みに明治十二三年以前に出でし主なる者を擧ぐれば、福澤中村二家の著書を始め、政治、經濟には『新政大意』『立憲政體畧』『萬國公法』『經濟原論』『銀行論』、歷史には、『西洋史記』『萬國新史』『歐羅巴開化歷史』『萬國史畧』『泰西通鑑』、地理風俗には『輿地誌畧』『五洲記事』『西洋夜話』『西洋新書』『地理學』、窮理には『物理全誌』『人身窮理』『博物新編』、修身倫理には『勸善訓蒙』『修身論』『智氏家訓』等、其の他文部省がチャムバーの百科全書を譯出せる等、枚擧に暇あらず。

更に新文明の發展に與つて大に力ありしは新聞紙と雜誌との發刊なりき。

岡と新聞紙は新文明渡來に伴うて起りしものなるも、知識の傳播者、開明の通達者として最適當なる新聞其の物の性質は、直ちに繼つて新文明宣傳の大機關となりにき。特に此等の事業に從ふ者は、當然の現象として新知識を具へたる當代の先覺者、乃至文筆に堪能なる朝野知名の士なりしかば、其の說く所は、尙半暗黑なる當代社會を照す光明なりしこと疑ふべからず。抑も新聞紙の始めて本邦に發行せられしは夙く文久年間に在り。『バタビヤ新聞』『六合叢談』『中外新報』等は、蓋し此の事業の祖なるべし。而も每月數回の定期刊行をなせるは、元治元年、英人ウェーランドが橫濱に發刊し、岸田吟香之が主筆たりし『新聞紙』なるべく、次に慶應四年、柳川春三が發行せる『中外新聞』は蓋し邦人の手に出でし最初の者ならん。然れども其の記事は皆橫濱なる歐字新聞の抄譯に過ぎざりき。同年政府『太政官日誌』を出して新政の主旨を知らしめ、現今『官報』の基を作り、福地源一郞(櫻痴)『江湖新聞』を出して民間時論新紙の開祖となれり。福地が『新聞紙實歷』に述ぶる所を見るに、曰く「慶應二年再び幕使に隨行して英佛二

國に駐在せる凡十ヶ月、此の間巴里倫敦の諸名家に會して新聞紙の事を問ひ、其の内外の政治に關して輿論を左右する者は即ち新聞の力なりと聞き、あはれ余にして若し文學文章あらば時機を得て新聞記者となり時事を痛快に論ぜんものをと思ひ初めたりき。中略 竊に條野傳平、廣岡幸助、西田傳助の三人に謀り、乃ち新に『江湖新聞』と名づけたるを發兌刊行したり。活字もなく活版もなかりければ、之を木版に彫刻して馬連(バレン)摺にしたり。半紙二切にて毎號凡十枚乃至十二枚を一冊として之を綴りたれば、取りも直さず今日の雜誌の疎末なる者なり。其の體裁は雜報あり、寄書あり、時論文ありて、其の草稿は盡く余一人の筆に出で、其の淨書の如きも時として余自ら版下を書き、概ね三日若しくは四日毎に發兌を試みたるに、諸種ありける中にも『江湖新聞』は尤發兌の部數多しと稱せられて、頗る世人の矚目を惹きたりと。以て此の新聞の起れる因縁と、發兌當時の事情と體裁とを知るべし。爾來民間新聞紙を起す者踵を接し、橋爪貫一の『内外新報』を始め、『遠近新聞』『新聞事畧』、横濱の『もしほ草』、大阪の『内外新聞』等、

明治四年に洋紙活字版の嚆矢たる『横濱毎日新聞』『新聞雜誌』『日新眞事誌』等相前後して出で、五年『江湖新聞』發行禁止となりしかば、條野等更に『東京日々新聞』(支那製活字、日本紙一枚摺、後洋紙兩面摺)を刊し、次いで小西義敬等『郵便報知新聞』を出し、其の他大和、名古屋、大阪、山梨西京、茨城等、各地競うて新紙を發行するに至れり。されど當時の新聞には社說を揭げて時事を評論することなく、唯世上公私の記事を秩序なく臚列せしに過ぎず。故に其の品位未だ具はらず、世人の見る目未だ重からざりき。然るに六年に至りて新聞界の氣運漸く動き、福地櫻癡、官を辭し、『日々新聞』に入りて社說を起草せしより、當時の名士文筆にたづさはる者、次第に新聞に筆を執るに至り、岸田吟香『日々』に入り、七年『朝野新聞』起りて成島柳北之に從事し、八年『新聞雜誌』改題して『曙新聞』と稱し、岡本武雄、末廣鐵腸之に執筆し、其の他『報知』には栗本鋤雲、藤田鳴鶴、矢野龍溪あり、『日々』に末松青萍、甫喜山景雄あり、『横濱毎日』に沼間守一あり、『朝野』に末廣鐵腸、大久保鐵作あり。所謂五大新聞競うて時事を

論じ文藻を研き、殊に櫻痴は議論斬新文章雄麗、草する所の社説は卓然として一世の瞻仰する所となり、當時文筆の間に名を成さんとする者、期せずして櫻痴を標的とする狀況なりき。柳北の盛名殆ど之に頡頏し、觀察奇警文辭輕妙、獨得の壇場は雜錄に在りき。斯くて新聞紙は隱然天下に重きをなし、記者の抱懷する進步思想は其の主張の漸進なると急進なるとを問はず、往々一世の輿論を喚起せんとするに至れり。されば十年前後に於ける新聞紙の創刊殊に夥しく、就中、七年鈴木田正雄『讀賣新聞』を出し、八年落合芳幾、高畠藍泉、繪入新聞の嚆矢たる『平假名繪入新聞』を出し、假名垣魯文『假名讀新聞』を出し、『讀賣』の摯實、『繪入』の華麗、『假名讀』の洒落、三者鼎立して童蒙に入り易かるべき世態人情に關する記事を載せ、『日々』『朝野』の男性的なるに反して、專ら女性的趣味に富むを特色とせり。

雜誌の發達は新聞紙と其の軌を一にして、唯少しく專門的研究的なるを異なりとす。然れども其の初、『太平海新報』『新聞雜誌』『飜譯新聞誌』『海外雜誌』等の出でし頃は、多くは外國新聞雜誌の飜譯などを載せたる週刊物

にして、其の性質も新聞と異ならざりしが、明治七年明六社より『明六雜誌』出づるに及び、始めて雜誌の體裁を具へたり。明六社は新政後に於ける文人學者の結社の嚆矢にして、其の名は創立の年を表はせるもの、首唱者は森有禮、社員は西周、西村茂樹、大槻文彦、加藤弘之、田中不二麿、津田眞道、津田仙、辻新次、中村正直、九鬼隆一、畠山義成、福澤諭吉、杉亨二、箕作秋坪等にして、正に是れ當代學者の粹を集めたる學士會院なりき。されば其の發刊する『明六雜誌』は實に當代先覺者の思想發表の機關として學術的研究的の所論を包容し、社會百般の事象に渉りて時事を論議すること頗る盛にして、特に社員の多數は、其の主義に漸急の差別こそあれ、何れも新思想を抱いて改進の氣運を鞭韃せんと勉むる人々なりしかば、當時勃興し來りし『日々』『朝野』等の諸新聞と相呼應して新文明の扶植に盡したり。不幸にして時の政府が此等新聞雜誌の縱論横議に堪へずして發布せる新聞條例は、此の雜誌の發達を阻害して八年末遂に廢刊しぬ。日刊雜誌『洋々社談』之に代りて同年發行せられしが、說く所時事論より

も寧ろ史傳語學等の研究に富み、大槻文彦、那珂通世、小中村清矩等、之に執筆したりき。當時又樋口鐵廣の『共存雜誌』中村正直の『同人社文學雜誌』發刊せられ、續いて『扶桑雜誌』『近事評論』『評論新聞』『草莽雜誌』等の政論誌、『穎才新誌』『文明雜誌』『學庭志叢』『花月新誌』『新文詩』等の詩文誌、其の他、家庭、宗教、教育、農業、醫事等百般の專門雜誌、『團々珍聞』の如き滑稽諷刺の雜誌、都鄙共に盛に發刊せられ、新聞紙と相並んで新文明の宣傳に勉めぬ。明治十年末の現在數を見るに、新聞雜誌總計百五十六種、發賣部數一年間三三、二八七、五二九の多きに達せり。

斯くの如きは明治十年以前に於ける泰西思想傳播の大勢なりき。然れども此の滔天の潮勢を見て直ちに當時之が前途を遮る一の抵抗だも無かりきと考ふるは速斷に過ぎたり。天下の事、見來れば常に相反の二要素を含み、百般の現象一として其の反面を有せざるなし。革新の活動は守舊の反動を伴ひ、青春の進取は老輩の退嬰と相乘く。思潮革新の事、豈抵抗なくして成就すべけんや。所謂新舊思潮は到る所に衝突し、政治の大本より衣食の

末に至るまで、所として此の顯象を見ざるはなし。社會革新家が口を極めて舊弊打破を說くは、是れ的なきに發する矢に非ず。新聞雜誌の疾呼宣傳するは啻に新主義を顯さんとするのみならず、合せて舊主義を破らんとするなり。而も此等の革新運動は總ての妨害を排して直前邁往するなりき。

かくて新文明の物質界を照すこと維新以降今に到るまでこゝに十年、國民の物質欲に對する要求は漸く滿足せられしかば、自然の順序として精神界の缺陷に向つて其の欲求を感ずるに至りぬ。政治、經濟の施設、住居衣食の改良に惟れ日も足らざりし國民は、茲に漸く小康を得しかば、顧みて靈界の新主義を翹望し初めたり。倫理宗教より始めて美術文學に至ス迄、革新の曙光漸く東天を染めなしぬ。福澤翁が舊來の儒教道德及び武士道道德の固陋を打破してより泰西の倫理說漸く入り來り、或は自主自彊の精神に富む『西國立志編』『西洋品行論』となり、或は君父に對する義務よりも自己に對する義務を先にせる『勸善訓蒙』『智氏家訓』等となりぬ。宗敎に在りては、從來の天主敎以外、耶蘇新敎俄かに勃興し、特に此の氣運に鞭つ

て起ちし新島襄は、耶蘇教を以て國民を感化するにあらずんば新文明の眞精神を傳ふる能はずと信じ、八年同志社を京都に建て、耶蘇教的教育の大道場を開きたり。更に他の一方に於ては英、佛、獨の各國語學新興の結果、從來蘭語及び蘭文典とのみ比較せられたりし我が國語は、新たに此等各國語文典と比較して其の得失を論ぜらるゝに至り、後年活潑なる國語問題論爭の端緒を茲に發しぬ。既に文字に關しては漢字全廢說先づ起りて、六年『日々』に新字製造を說く者、漢字全廢の準備として漢字交り文を普通用とすべきを說く者あり。七年『明六雜誌』出づるや、西周率先して羅馬字採用說を出し、假字說之に對して起り、以て後來羅。馬。字。會、かなのくわい等の基をなせり。續いて文體に關し、漢文乃至耳遠き從來の文章を廢して言文一致體を取るべしといふ說起り、『日々』の福地は其の階段として先づ力めて日語を交へたる平易の文を作るべきを論じぬ。氣運は徐〻進みて今や藝術に及びぬ。五年文部省が墺國博覽會に高橋由一の洋畫を出品せし頃より洋畫の新芽斯境に萠し、九年工部大學校内に美術學校を置き、洋人を聘し

て繪畫、彫刻、裝飾術等を敎授せしめ、音樂、演劇に關しては、『明六雜誌』等に國樂振興、演劇改良を說く者あり、『日々』の福地亦脚本院本の改良及び芝居見物人の改善を論じ、以て後年音樂振興、演劇改良の運動の先驅をなせり。若し夫れ新文學の發達に至りては精神界活動の中、最非實用的なるものなれば、功利主義を第一とせる明治新文明に遇せらるゝこと最薄く、十年以前に於ける斯界の曙光甚だ微弱なりき。然れども其の間又一道の潛勢後日の盛運を含む者なきに非ず。其の詳細は次章を俟つて述ぶる所あるべし。

精神界に於ける新文明の活動は斯くして漸く其の端緒を開きぬ。此の氣運に乘じて起り此の光景を前驅として進める我が新文學は、果して如何なる者なりしか。未だ其の面影に接せずと雖、今や暗黑の裡一點の光を示したる十年以後の飜譯文學は、即ち新文學の大光明に到達すべき前提に非ざるか。吾人は將に暗黑の文學界を去らんとす。而も此の暗黑裡何等の傳ふべき文學なきか。吾人をして暫く回顧せしめよ。

既に述べし如く、明治十年以前は文學界の暗黑時代なり。文運地に落ちて新光明未だ起らず、喘々焉として餘息を存する者は、唯憐れむべき舊文學の殘骸なりき。換言すれば純然たる江戶文學の繼承にして、其の明治文學に於ける位置は、恰も殘燈夜の暗黑を守りし者漸次曉の新光に沒し去るが如き者なれば、嚴正なる意義に於て、或は明治文學と稱し難かるべし。然れども文學は固と時勢の反映人情の鏡なれば、當代人文の狀態は、寫して此等繼承文學の中に存すること言を俟たず。明治初年の時勢人情、一部たりとも寫し出されたりとすれば、假令其の形式手法舊文學の殘骸なりと雖、其の技巧拙劣內容貧少なりと雖、はた其の光焰甚微茫たりと雖、明治文學を叙するに方り、必しも棄つべきに非ず。況んや文學の發達は一朝一夕の故に非ず、新文學の樹立は常に舊文學の土壤の上にせられざるべからざるをや。

第三節　前代繼承の文學

江戸文學の繁榮は本邦文學史に於ける空前の壯觀なり。其の發達の著大、其の種類の富贍、實に百世の瞻仰を値する者ありき。然れども大御所の榮華一度去つて幕府衰運に向ひ、邊境警を傳へて世漸く亂れんとするに方りては、文學の發展復往時の如くならず。和歌は絶代の巨匠景樹逝いてより、其の門流八田知紀、熊谷直好等之を繼ぐと雖、技倆固より之に接踵すべくもあらず。唯從來の惰力によりて桂園一派を率ゐるのみ。發句は天明の俳傑去つてより、蓼太の俗氣墮落の端を開き、天保の宗匠梅室、蒼虬、鳳朗に至りて其の極に達し、崇拜者模倣者全國に普きに係はらず、詩趣蕩然として地を拂ふ。淨瑠璃は精華、出雲、半二に落ちて文耕堂以後注目すべきなく、脚本には新七、二三治、治助、如樂在りと雖、五瓶、南北の餘唾に過ぎず。小説に至りては天才馬琴逝いてより片々たる戯作者の世となり、春水、一九の末輩、鄙俚なる人情本、淺薄なる滑稽本を作りて偏に先人の殘肴に甘んず。其の他俳文、狂歌、狂句等、一として散り過ぎの花、あはれなる衰へを示さゞるなく、百般の文學悉く模倣飜案の弊に陷り、量に於

て著しき衰退を見ずと雖、質に於ては日に月に俗惡の度を增し、其の形勢相傳へて明治の初頭に及べり。

維新以來十年頃に至る我が文壇を支配せる文學者は、實に上述の如き文學の繼承者なりき。啻に十年頃までのみならず、種類によりては二十年前後、文學思想革新の運動起るに至るまで、依然として舊態を改めざる者あり。然れども此等繼承文學は、何れも明治新文學の基礎をなす者にして、一代の氣運を捲き起したる明治の新文學者は、多くは一度繼承文學を味ひ來りし者なるを以て、新文學に入るに先だち、暫く前代繼承の文學界を觀察せん。

當代の和歌壇は景樹の末流、即ち桂園派の獨占する所なりき。景樹天禀の歌才を以て京師に蟠崛し、香川家に入りて勢力を堂上に伸ぶるや、從來歌學の宗たりし冷泉、二條の諸家を壓倒して斯界の主權を握りしかば、桂園の歌風遂に當代瞻仰の中心となりにき。曩きに元祿の世、海內の文章布衣に落ちて歌道亦地下の手に歸し、縣居翁起りて主權一度江戶に移りしが、

茲に至りて歌壇の中心復び京都に返りぬ。明治の初め都を東京に遷さるゝに方り、此の形勢宮庭と共に東遷し、八田知紀の門に出でし高崎正風御歌所長となるに及びて、桂園の流風復動かすべからざるに至りぬ。御歌所は明治年間唯一の帝室文學の府にして、寄人、參候等當代歌人の中より任命せられ、毎月一回宮中歌御會の行事に從ふ。正月の御會は之を歌御會始と稱し、明治二年以來古例を復活して之を行ひ、五年より百官有司をして詠進せしめ、七年より一般臣民にも詠進せしむ。而して此の派の詠歌は概ね景樹の末流を汲める者なれば、思想狹隘、聲調纖弱、到底新時代の文學たる能はざる者なり。斯くて二十八九年文運興隆期に方り、所謂新派和歌が、地下より起りて在來の風調を一新し、歌壇の中心地下に移るに至るまで、歌界は大口鯛二、小出粲等の製作によりて代表せられ、舊思想舊形式の徒に繰返さるゝを見るのみなりき。

御歌所一派が當時歌界の代表者たると同じ意義に於て、俳界の代表者は老鼠堂永機と春秋庵幹雄となり。天保以來發句の俗惡、文學的作品たる品

格を失ひ、遂には無學の閑人が道樂の一種として、碁將棋と同一視せられ、點取の方法變じては賭博に近き一種の技術となり、之を敎ふる宗匠なる者は、所謂點料を以て衣食する營業となり了りぬ。永機、幹雄等は即ち當時宗匠商賣を營める者の領袖に外ならず。永機は其角の傳統を引ける者なれども、作る所多く瀟洒の趣あらん事を勉め、其の宗徒は一般無學の平民より最上流の社會に至るまで所有階級に存し、其の勢力地方に於てよりも寧ろ東京に於て大なり。幹雄は白雄の後にして、作る處多くは豪放ならん事を求め、宗徒は全國の平民社會に普く、其の勢力は寧ろ地方に於て大なり。以上二人の外、尚其角堂機一（永機門）、江南居松江（幹雄門）、雪中庵雀志、京都の花の本聽秋等、各多少の勢力あり。然れども俳諧の精神を沒了して徒に殘骸を抱くに至つては、何れ劣る所なく、斯界革新は後來二十五六年の頃に於ける新派の運動に俟たざるべからざりき。

　漢詩、漢文に就きては多く語るべき者なし。唯舊時代の餘流、漢詩人、漢文家の存する者少からず。二十四五年頃までは强弩の末勢、尙宿儒共の

人に乏しからざりき。詩人には小野湖山、岡本黄石、向山黄村、大沼枕山、森春濤、鱸松塘等あり。漢文家には川田甕江、重野成齋、島田重禮、安井息軒、信夫恕軒等あり。明治五六年の交、新聞雜誌競ひ起るや、彼等の詩文往々採錄せられ、春濤の如きは『新文詩』と稱する雜誌を發刊するに至り、次いで成島柳北『花月新誌』を出し、服部誠一『東京新誌』を出して盛に戯詩戯文を作り、且服部の『東京新繁昌記』を著しゝ頃、漢文の繁昌記頻に行はれたり。然れども漢詩、漢文は到底新時代の文學たる資格なき者なれば、此等作家百年の後は畢竟永久文壇を辭し去るべき運命を荷ふ者なり。

和文は春海、千蔭の擬古文ありて以來、典雅流麗の筆に接せざる事茲に久しく、維新當時の國學者共の人に乏しからざりしも、遂に一の文章家を見ざりき。明治初年の散文家として擧ぐべき者を求むれば夫れ新聞文學者か。『日々』の櫻痴『朝野』の柳北の二人は當代記者の冠冕にして、前者は清新瑰麗を以て勝り、後者は奇抜輕妙を以て稱せらる。其の他岡本武雄、

藤田鳴鶴、矢野龍溪等皆十年前後の記者として盛名ありき、而して彼等の散文は多く漢文の素養に出で、中には純然たる漢文直譯體なる者あり。此の點に於ては此等も亦繼承の文學たるを免れず。されど其の思想は多少新潮に浴し、後來明治の普通文の胚胎する所となりにき。

繼承の文學中最注意すべきは蓋し戯作者流の作ならん。此等は其の種類、其の作意、其の文體、共に文化文政以後の作者の餘流を汲めること論を俟たず。先づ全體に通ずる著しき風潮は、いふまでもなく勸善懲惡の主義にして、馬琴一度此の大旆を擁してより、勸懲の一語は端なく當時の片々たる戯作を飾る美名となり、文學の本質の何たるを解せざる彼等無學の戯作者輩が、自己の作物を無用有害なりと非難せらるゝを忌み、且つ曩に寛政、天保の兩度、當局の爲政者が壞風亂俗の罪を以て戯作者を罰せし事件に鑑み、又維新後教部省の訓令に考へ、爭うて勸懲の美名を偸み、自ら借して童蒙婦女に對する教訓を寓すと稱し、以て鄙俚猥雜、讀者に媚ぶるを以て專らとせる拙作を被ひ飾らんとせり。次に其の結構は日先の變化を以て第

一條件となし、脚色の統一人物の性格を藐視して、支離滅裂、一卷の趣向の尋ぬべき無き者、滔々皆然り。次に又作中の人物は、概ね善惡二種の類型にして、善人は所有善德の權化、惡人は所有惡德の化身たるが如く、其の英雄或は勇士、往々非凡の智謀力量を有し、多くは人間界を超絶す。而して此等種々の戯作を大體に就きて分類すれば、馬琴に出でたる讀本、春水に出でたる人情本、種彥に出でたる草双紙、一九に出でたる滑稽本、及び鶴屋南北等に出でたる脚本の五種なり。其の文體は各〻其の宗とする作者の舊套を襲へり。

維新の初、戯作の發兌は舊慣により、毎年正月と盆との二期に於てせり。當時の出版物には維新以前より發行し來れる長編の續き物も少からず、兵馬倥偬の間、微々たるながらも戯作の出版を絶たざりき。先づ讀本、草双紙の類にては、二世種彥の『白縫物語』『八犬傳犬廼草子』、萬亭應賀の『釋迦八相倭文庫』、二世春水の『北雪美談時代加賀實』『雜談雨夜之質庫』、種彥の『室町源氏胡蝶卷』、春水の『新編九尾傳』、應賀の『蟲類大議論』『諸藝畑水

練二『近世阿幾禮幕』、岳亭知足軒合作『俊傑神稻水滸傳』等あり。其の他同じ頃の作者には鶴亭秀賀、柳水亭種清、山々亭有人（條野傳平）梅亭金鵞、假名垣魯文等あり。次に脚本にては三世如皐、三世如樂歿して他の座附作者皆言ふに足らず、二世河竹新七、即ち古河默阿彌獨り芝居作者の壇場を占めたり。然れども之等の作は畢竟前代の遺物にして、所謂樣に依りて胡蘆を畫く者のみ。新時代に接觸する何等の交渉を有するに非ず。唯夫れ魯文と默阿彌とは、繼承作者の身を以て當代の人氣を集めたりし者なれば、彼等二人を擧げて繼承時代戲作者の代表者たらしめ、少しく之に就いて當時の作風を窺はん。

假名垣魯文は江戸の人、少にして花笠魯介（文京）の門に入り、『政談青砥碑』を處女作として數多の戲作あり、萬延元年『滑稽富士詣』を出すに及びて文名世に布き、年、明治に入るに及び『西洋膝栗毛』『安愚樂鍋』『胡瓜遣』等を續出して盛名を馳せたり。

『西洋膝栗毛』は、其の名の示す如く、一九の名作に倣ひて西洋旅行の滑

稽を描きし者にして、全部十五編、明治三年より五年に亘りて出版せられ、『胡瓜遣』は福澤翁の『窮理圖解』を飜案して、所謂天地の道理を茶にしたる滑稽物なり。三年秋出づ。『安愚樂鍋』は半開化の俗衆が牛屋に鍋を圍んで喋々論議する趣向にて、所謂當世の穿ちなり、四年萘出づ。此の三者は魯文をして明治初年の戯作界に嶄然頭角を拔かしめし滑稽本にして、他の作者等が　文章も趣向も材料も共に舊套を脱する能はざるに際し、在來の手法を以て新時代の材料を理し、以て時勢を諷する筆致の輕妙なるは、暗黒なる文學界に於て聊か珍とするに足る。勿論應賀輩『新文鬼談』『日本女教師』『異形異物各覽會』等、材を維新後に取りたる短篇をものせりと雖、固より魯文に比すべきに非ず。彼れの作には尚『百貨物產西洋器械』『太洋新話』『世界都路』等あり。しかも其の中最世に持囃されて、明治の一九、三馬と過稱せらるゝに至りし者は、言ふまでもなく『西洋膝栗毛』なり。

此の作の脚色は、東京神田の蕩兒彌次郎兵衛、北八の二人が、英國龍動に渡航せんとする横濱の豪商大腹屋に伴はれて飛脚船に乘り込み、以來海

上港泊に於て所有失敗滑稽を盡しつゝ英國へ渡る趣を綴り、所謂「此節の西洋ばやりへつけこんで目先の變つた趣向」を凝しゝ者にして、當時魯文世潮につれて所謂福澤本を讀み、西洋旅行の大體を知りし上、岡文紀の飜譯書などを見、尙友人富田砂燕が巴里博覽會見物の實話を聞き、此等を種として編み出せるなり。げに彼が小說家としての技倆は暫く之を措くも、其の機智の縱橫なる、着筆の奇警なる、時勢粧の作者として巧妙を極めたりといふべし。吾人は之を讀んで新舊思潮の至る所に衝突するを見、而も其の衝突や皮相に止まり淺薄を極めたる時世の適切に描かれたるを感じぬ。所謂新潮流は「方今開化一時に進み、余輩僥倖に學ばざる子曰の迂遠を去り、經驗窮理の洋風に傾き、市街の兒童等に至るまで、芥子坊主の支那頭を殘截(ザンギリ)の歐羅巴流に一變し、孔氏の遺書はペケにして英、獨、佛の横文ェビシ、四百餘州は何のその、萬國世界五大洲、天地の理を知る開端(コグチ)に至るは、めでたき御代に新玉の春を待ち得たる心地になん。而して廢藩(オタイ)舊知事の公達子(フトコロゴ)も無僕獨步に世間を見知り、歸農の扶持は嗤鳥川、水に流して商

法開業、父母在せども遠く遊び、艦砲一發三千里、旦に道を聽くとも夕に死するを可なりとせず。牛肉を食しビイルを飲み、體を壯健にして壽を保ち、利を得て國を富ますを以て今日の報恩とす」（膝栗毛十一編序）なる皮相文明の潮流なり。此の新潮に浴せし半可の西洋通が、丁髷の舊弊頑固を嘲り、因循姑息を罵り、一切の舊慣舊俗を嗤笑せし情狀、又は僅かに絢爛たる洋風の事物に逢着せる一般俗衆が、驚愕し誤解し歎服し眩倒せし事態、はた淺薄なる滑稽鄙俚なる諧謔に心を遣りし有樣、髣髴として思ひ浮べらる。其の他彌次、北八が頻りに生咬りの漢語を使ひ、神道を辨じ、窮理を云々するは皆是れ時代の反映にして、特に極力英國の富强を說き、旅先を英京に置き、通事の言語を英語に取りしなど、英國心醉の事情を表して餘あり。此の作に於て人物の性格一篇の理想などを探らんは愚の極なれども、諷刺の意は明かに認めらる。蓋し魯文自ら文明開化の當世人を以て任じ、所謂舊弊を嘲笑して開明を謳歌せんとせる者の如し。然れども其の根本性質を舉げ來れば、依然たる舊型にして、作者の弄する滑稽や無識に出で、

痴態に出で、酒色に出で、其の趣淺薄にして變化なく、其の旨陋卑にして理想なく、而も之を叙するに地口語呂等、所有言語上の遊戲を盡せる對話を以てす。正に是れ一九三馬の殘肴冷杯にして、江戸作者の末輩の得意とする手法に非ずや。げに此の作は啻に魯文が戲作の代表たるのみならず、明治初年の繼承文學に於ける好箇の代表なりき。

默阿彌は五代目鶴屋南北の門人にして、通稱を吉村新七といひ、俳名を其水といふ。芝居作者となりて河竹新七二世となり、後改めて古河默阿彌と稱す。好んで世話物をものし、俳優市川小團次と結びて舊幕時代下層社會の世態人情を脚色し、夙に才名を江湖に馳せたり。而して當時彼が作りし世話物は、概ね盜俠を主題とせるを以て世に白浪作者の目ありき。彼が一代の傑作として賞賛の聲嘖々たる『村井長庵巧破傘』の如き、即ち當時の作風を代表する者といふべし。此の戲曲は又『勸善懲惡覗機關』と稱し、八幕十一場より成り、文久二年小團次等が守田座に與行せしを始として、年々明治に入りても尚盛に行はれたり。麴町の町醫村井長庵が其の妹婿、

百姓重兵衛を殺害して其の娘を吉原に賣りし身の代金を奪ひ、而も其の罪を浪人藤掛に嫁して之を死せしめしを始め、或は人をして妹を暗殺せしめ、或は人を欺きて財を奪ふ等、惡行至らざる所なく、而も巧に世の耳目を晦ましゝが、天網疎にして漏さず、惡事露顯して判庭に伏罪し、遂に惡は亡び善は榮え、目出たく收まるを以て一篇の筋となす。結構布置例によりて巧妙、舞臺面の變化多き、勸懲旨意の明瞭なる等、舊劇の長所概ね之に具はる。然れども凡近なる勸懲の外、何物をも吾人に敎ふるなき、事件の發展常に偶然的關係に出づる、人殺其の他慘酷無道の所行を舞臺の上に敢へてする等、舊劇の短所亦概ね之を備ふ。斯くの如きは獨り此の篇に止るに非ず、白波作者時代の彼が世話物皆此の型に出づ。而して彼れの勸懲主義は爾來益〻甚しく、惡漢の主人公たる事漸く減じ、よし盜賊を以て主人公となすとも、必ず改心の一條を加へ、以て諷誡の意を寓し、且其の各部分に於ける寫實的分子漸く加はり、超自然の事實成るべく避けられ、同時に江戶時代を寫せる世話物以外、新たに明治の世話物を創作せり。例へば十二

年の作なる『霜夜鐘十字辻筮』『木間星箱根鹿笛』、十四年の『島衛月白浪』、十五年の『僞甲當世簪』、『戀暗鵜飼燎』十七年の『滿二十年息子鑑』、十八年の『水天宮利生深川』、十九年の『西洋噺日本寫繪』等の如き、皆維新以後の人物事件を材料とせる者にして、以て其の頃に於ける默阿彌の作風を窺ふに足る。

明治十八年前後までの默阿彌作の戯曲は、總數五十種に上るべく、二十年間東京梨園に於ける作者の隨一として最勢力あり。得意の世話物の外、時代物にも筆を染め、其の熟練なる舞臺上の知識と、豐富なる結構布置の才と、老巧なる人情描寫の筆力とを以て永く斯壇の光明たりき。蓋し默阿彌は舊劇を刷新して掉尾の活動をなし、以て將に起らんとする新劇に移る一大段落の上に立てる斯壇の殿將として、長く傳へらるべきなり。

當時の劇場作者は尙、勘彌、彥作、大阪の能進等二三知名の者なきに非ざりしも、固より以て默阿彌に比ぶべきに非ず。然れども舊派の殿將は畢竟舊派の殿將に過ぎず。其の作は以て舊知識の觀衆を敎ふるに足るべきも、

以て新時代の新人物の滿足を買ふに足らず。舞臺効果に關する知識洵に企及すべからざる所あるも、人情を描いて未だ性情劇の片影を庶幾すべからざるなり。彼れの世話物は二十五年春陽堂の發行にかゝる『狂言百種』に收めらる。不幸、興行上の故障により中途續刊を廢し、八卷十一種を出すに止れり。

其の他舊文學の中には尙講談の一種あり。其の末路を代表する名人は、三遊亭圓朝にして『怪談牡丹燈籠』等最世に持囃されたり。固より些の創意なしと雖、亦通俗文學として繼承時代の文學たるに足るべし。

繼承時代の小說脚本の粹は魯文、默阿彌の二人に盡く。然れども社會の進運は一日も止らず。文學の暗黑時代はしかく長へなるべからず。戲作の風潮も十年前後に及びては漸く變調を來さんとす。當時魯文の滑稽物に對し、實錄物を作りて一方に勢力ありし松村春輔の作の如きは、材を王政維新及び其の際に於ける勤王佐幕の名士に取りしのみにて、守田座新富座の演劇に間〻維新事件を仕組めると同じく、畢竟片々たる際物に過ぎずと雖、

作中の人物は、大に前代の實錄物乃至一般時代物の人物と其の性質を異にし、英雄豪傑といふとも、超凡の智勇辯力を備へたる半神的怪物的の者ならずして、普通人間らしき偉人勇士として現はれ、漸々寫實的傾向を取るに至れり。八九年頃に出でし『復古夢物語』、『近世櫻田紀聞』及び『春雨文庫』等は、或は大老暗殺事件、或は彰義隊、會津戰爭等を材料とし、總べて新時代の歷史小說の先驅たるべき者なり。同時に諷刺滑稽の側に於ても魯文に一步を進め、稍深き意義を有するに至りき。服部誠一の『東京新繁昌記』(七年乃至九年發行)及び之に類する幾多の繁昌記、同人の『東京新誌』(九年創刊)成島柳北の『花月新誌』(十年創刊)野村文夫の『團々珍聞』(同)等の如きは即ち此の例にして、此等に現はれたる戲文は、勿論小說に非ざれども、單なる滑稽諷刺の文學として之を魯文の作に比ぶる時は、魯文は開化と舊弊との不調和を描き、以て舊弊を嘲笑せる趣ありしが、此等に至りては、頑固因循を諷刺するが如きは敢て奇ならずなり行き、却て開化を以て自任せる社會の一部に幾多の滑稽痴態を發見し、之を訐き來り

て皮相文明に眩惑せる社會を諷したりき。魯文の諷刺に比し幾分の深刻を加へたりといふべし。

此の時に方りて、新聞紙の勃興するあり、記者の需要著しく增加せしかば、文筆の士爭うて之に赴き、勢極まる所戲作者の吸收となり、爾來諸新聞戲作を載する者多かりき。之を續き物といふ。蓋し草双紙讀本等に對する稱呼なり。明治六年魯文先づ『橫濱毎日』に入り、八年高畠藍泉（三世種彥）、九年染崎延房（二世春水）、相次いで『平假名繪入』に赴き、十年梅亭金鵞『團々』に入り、又條野傳平は五年『日々』を起し、魯文は八年『毎日』を去りて『假名讀』を發刊し、各戲筆を紙上に揮ひしが、就中延房の續き物、魯文の滑稽物、最婦幼の人氣を集めたり。之より草双紙讀本等の發兌漸く衰滅し、十二三年頃に至るまで、各新聞の續き物は繼承戲作の殿として立ち、各種の繪入新聞起りて皆之を載せたり。作者には上述數人の外、古川魁蕾、伊東專藏、須藤南翠、渡邊義方等あり、概ね人情本の系統を引ける物語風の小說をものしき。

維新革創の際、文藝の暗黑時代に於ける文學は大畧上述の如し。一代の民衆が新舊二潮の間に飜弄せられて、洋服に下駄、丁髷に洋傘、ズボンマンテルに帶刀の奇態を演じつゝありし際なれば、其の文學趣味の低劣俗惡なる事言を俟たず。作物の出づる事必しも少しとなさゞれども、斯かる趣味によりて養はれたる文學の斯壇に於ける地位や憐むに堪へたり。魯文の滑稽物を謳歌せる讀書界の淺薄輕浮にして鄙俚猥雜、絕えて餘裕なく趣味なき事察するに餘あり。かゝる作物によりて代表せられたる當時の文學の陳腐俗惡なる事亦思ふべし。

時は移りぬ。明治十年西南の亂あり。新政以來明治政府を喜ばず、一新の制度を便とせず、反對黨不平派相結びて反亂を起す者所在相次ぎしが、遂に凝りて西南の大謀反となりにき。此は總べての內亂の中最大最終の者にして、政治上の舊思想は共の平定と共に永久に掃蕩せられたり。西南役の文明史上に於ける意義は、此の戰爭が政治上の新舊思想最後の衝突にして、之を契點として新思想の全く舊思想を壓倒し去りしに在り。爾來此の

潮流は延いて思想界及び文藝界に入り、舊時代の文學思想漸く謝して、明治の新文學思想漸く之に代らんとす。而して此の文學思想革新に與りて最力ありし者は、即ち十年以後に於ける泰西文學の飜譯、及び之に伴ふ西洋文學思想の傳來なりき。

第二章　新文學の先驅

第一節　飜譯文學

明治十二年頃に其の萠芽を發せし飜譯文學の勃興は、當時の政治思想と離るべからざる關係を有する者にして、此等文學の主たる者は、民權說の流布と共に接踵輩出したる民間政論家が、自由を唱へ代議政を說くに際し此の思想の由て來る泰西政治界の狀態、及び彼の地政論家在野志士の生活を叙せる小說傳記等を讀んで多大の興味を感じ、直ちに其の文才を驅りて之を飜譯したる歷史的政治的小說なりき。されば此の時代の飜譯文學を說くに方りては、先づ此の民權思想の興起を述べ、併せて其の結果として生ぜる革命小說を記さゞるべからず。

西南の叛亂平らぎ、政治界の舊思想屛息するや、時勢の進運は駸々として前往し、民間の政治思想は一躍して從來新思想の中心たりし廟堂有司を

超え、極端なる民權自由說となりて現はれ出でしかば、政治界の新舊思想の衝突は茲に一進化をなしたりき。抑も此の思想の勃興は、本邦思想界空前の新現象にして、其の由て來る所は泰西政治思想、就中佛國十八世紀の思想家ルーソー、ボルテール、モンテスキュー等の政治思想に在り。特にルーソーの「民約論」は新思想を抱ける政治家及び政論家に取りて天賚の福音の如く聞きなされ、遂に十五年其の首唱者の一人たる中江兆民居士の手に譯出せられて天下に布き、一世の風潮翕然として之に赴きぬ。是に於てか曩に英國の功利思想を迎へて社會の實利實益に心身を傾倒したる國民は茲に又新に佛國の自由思想を迎へて政體革新の根本的大問題に驀進しぬ。彼等の說く所全く民約論の主旨に出で、本邦立國の大本、民性の特質を究めず、國家の歷史當時の狀勢を悉くすことなく、ひたすら彼の國に行はれし所を以て之を我邦に施さんとす。其の單純淺薄なる、寧ろ彼の國政體の美に眩惑せる好奇の性情の發露といふべき者にして、正に明治初年に於ける物質的文明の盲目的吸收に對比すべき無謀の盲動なりき。然れども在野

志士の思想が靡然として之に赴き、在朝の有志冠を挂けて尙其の主張を貫徹せんと勉めたりし所以の者は、德川幕府が殆ど人權を無視せる極端なる貴族政治の下に三百年の抑壓を忍び來りし反動として、國民の枉屈一時に伸びんとせる者、亦與りて大に力ありしなるべし。彼等が政府の失行を議し、言論の自由を說くや、筆に舌に、縱橫辯難、危激を極めたりしかば、柳北、鐵腸等を始として律に觸れて禁獄せらるゝ者前後相繼げり。十三年に至り、此の風潮全國に亘りて國會開設の請願各地に起れり。

文學は時勢の反映なり。かゝる時勢に際し、自由主義の革命小說の出でしは自然の數なり。十五六年の頃、政界の風雲頗る嶮しきに方り、『繪入自由』『繪入朝野』『東洋自由』『自由の燈』等の新聞雜誌を舞臺として現はれたる宮崎夢柳、小室案外堂等の小說は、此の氣運を代表すべき者にして、『鬼啾々』『夢戀々』『自由の凱歌』『西洋血潮の荒波』等は、佛國革命又は露國虛無黨の反亂等を材とせる西洋小說の飜案、抄譯、若くは演義に屬し、其の他新作種々あれども、多くは自由民權に關する寓意小說なりき。然り、唯此の

主義に基ける寓意あるに過ぎず。泰西の文學思潮に觸れて新氣運を開くに至りては未だし。故に其の文體趣向依然として草双紙の範圍を脫せず、文學としての價値亦從うて高からざるなり。

斯かる間に明治新文學の端緒となるべき飜譯文學は、同じく時勢の反映として他の一方に現はれたり。政論沸騰してより國民多く泰西政治界の狀態を想望し、民權自由の理想が普く行はるゝ泰西諸國、就中英佛に於ける政治家の生活を欽羨し、即ち之を描ける政治小說及び歷史小說を耽讀して其の渴望を醫しぬ。特に當時の政論家は概ね新聞記者にして、文筆の才あるが上に多少外國語の知識ある者なりしかば、論議奔走の傍、會〻文學に慰藉を求めんとするや、本邦在來の文學乃至當時の繼承作者の新作の如きは到底新教育を受けて多少高尙となりし文學的嗜好を滿足する能はず。相率ゐてリットン、ヂスレリー等英國近代の歷史的政治的小說に赴き、遂に進んで之が飜譯を試むるに至れり。されば當時の飜譯文學は、文學者が文學として飜譯せし者にあらず、宛然政論家の餘業たるの觀あり。然れども、一

般國民をして之によりて英國文學の片影を覗ふを得しめ、以て後來文學思潮革新の因緣となり、兼ねて異邦の文學を吸收すべき端緒を開きしが如き歷史的意義決して少からずとなす。今之を述ぶるに方り、少しく泰西文學輸入の沿革を尋ねん。

泰西思想の傳來は夙く交通開始の古に起りしも、其の純文學に觸接して影響の我文學に現はれしは、萬治二年の出版なる『伊曾保物語』を以て嚆矢となす。いふまでもなく『イソップ寓話』の飜譯にして、譯者傳らずと雖、御伽草子の系統を引ける假名草子の流の作なり。然れども、此の物語の影響は、淺井了意、山岡元隣等が教訓物に少しく見ゆるのみにして、甚だ著しからず。其の後繼者として入來る西洋文學亦不幸にして存せず。伊曾保物語』は流星の如く現はれて流星の如く隱れぬ。爾來南蠻紅毛の書、入來る者概ね實學に關し、文學の方面甚だ僅少なりしが如く、平賀源内の作に見えたる二三洋語の如きも亦實學より來る。唯彼の遊谷子の『和莊兵衛』之より出でし馬琴の『夢想兵衛』の着想、及び此の二者の出所として特筆

すべき鳩溪の『志道軒傳』巡國の條に至りては、莊子の寓言に擬し、在來の島巡りの趣向に基きしこと勿論なりと雖、『ガリバー旅行記』に其の骨を得たる事も亦殆ど否むべからず。維新の當時、開成所は洋學の淵叢たりしも、授くる所は未だ文學に及ばず。此の間强ひて文學を學ぶ者ありきとすれば、其は語學の材料として之を用ひしに過ぎず。然れども明治年代泰西文學の萠芽は、畢竟語學研究の副產物にして、渡邊溫の譯にかゝる通俗伊蘇普物語』(六年—八年)の如きは亦斯かる因緣に成りしなるべし。外國文學の飜譯が常に『イソップ』を以て始まるは、此の物語の平明にして童蒙に入り易く、古今東西に通ずべき寓話なるに因るべしと雖、又是れ草創の際、粗雜なる讀者の頭腦が未だ風俗習慣の差によりて、興味に厚薄の差あるべき他國の小說詩歌等を味ふに足らざりしに由らずんばあらず。斯かる間に國民の讀書力漸く進み、敎養ある人士は文學を樂む餘裕を得、而も讀書眼の漸く高きや、在來の小說戲作に比べて西洋文學の優秀なるを認め、耽讀の餘、之を譯出して西洋心醉の高潮に鞭ちたりき。乃ち知る、語學研

究の材料としてのみ文學を讀むこと既に止みて、文學其の物を樂む健全なる讀者の生ぜし事を。明治十二年に出でたる『花柳春話』は、實に其の陣頭に立ちし飜譯小說なりき。

『花柳春話』は織田純一郎がロード、リットンの『アーネスト、マルトレーバス』を飜譯せし者にて、一篇漢文直譯體の文章、即ち當時新聞の論說に行はれし文體を以て成る。之を今日より見れば、思想の人を動かす者あるに非ず、譯文の巧妙なる者あるに非ず、唯其の珍しきが故に當時多大の歡迎を以て社會に受取られ、世評一時嘖々たりき。げに此の小說はリットンの作物の本邦文壇に紹介せられし濫觴にして、兼ねて明治文壇に於ける飜譯小說の嚆矢なり。此の點より見れば明かに新小說の先驅にして、一步進めて言へば一般新文學の先驅と稱すべし。要するに『花柳春話』は文學としての價値よりも史上の位地を以て勝れる者とす。

爾來飜譯小說連りに行はれぬ。關直彥の『春鶯囀』藤田鳴鶴の『繫思談』牛山鶴堂の『梅蕾餘薰』尾崎學堂の『經世偉勳』服部誠一の『二十世紀』

井上勤の『六萬英里海底旅行』『月世界旅行』『狐の裁判』坪内雄藏の『慨世士傳』等は其の最著名なる者にして、就中『繫思談』『慨世士傳』等はリットンの原作、『春鶯囀』はヂスレーリーの原作を取り、皆歷史小說を選べり。又『海底旅行』『月世界旅行』等は所謂科學小說にして、學術上の事實を小說に寓せる者、小說としての價値は問はずして知るべし。飜譯の文體は概ね『花柳春話』に類するも、十八九年頃の作に至りて漸く和ぎそめぬ。然れども中には往々修辭に於て缺けたる者あり。文學としての形式を失へり。井上の譯書の如きは、所謂直譯に過ぎざりき。

飜譯小說の興隆は疑もなく新思潮の賚賜なりき。然れども、當時の新思潮は尚粗笨生硬にして十分に消化せられず。入る所、皮相に止まりて深く內部生命に及ぶこと能はず。故に其の讀む所解する所は、概ね歷史小說、政治小說、科學小說等、多少實際的傾向を有する者の中極めて平易なる者に限られ、同種類の者と雖、思想界の深き消息に觸るゝは、未だ其の趣味を感受するに至らざりき。況や人情世態の微妙なる描寫を試み、心的生活

の精細なる解剖を試みたる者に於てをや、當時飜譯せられたる西洋小説が、悉く比較的單純なる歴史小説等なりしは、即ち主として之に由る。加之、江戸時代傳來の傳奇的小説に慣れたる眼は、先づ其の類例を歴史小説等に求め、他に先だちて一度之に就かんとする傾向あり。會以て此の種の小説の持囃さるゝを致せり。

此の時代の飜譯小説は主としてリットンの原作を取りしが、爾來二十年前後に亘り、英譯より重譯せられたるユーゴー、ヲーレル等あり、遂に末松青萍の『谷間の姫百合』に至る。此の書はベルサ・クレーの「ドラ・ソルン」を譯せる者にて、二十一年の版行にかゝり、政論文學者の筆に成りし飜譯小説の殿をなせり。飜譯小説も此の頃に至りては既に寫實的の者を生じ、此の作の如き、現に然りと雖、全體の風趣より論ずれば、尙之を次期の小説家の作品と區別すべきなり。

飜譯文學は、小説の外、尙院本と詩歌とあり。先づ劇には、十六年坪内逍遙遊人（雄藏）のセークスピヤを譯せる『該撒奇談』あり。詩には十五

年外山、山等のテニソン、カムベル、グレー、ロングフェロー等を飜譯せる「新體詩抄」あり。然れども是等は皆後章、更に說くべき機會あるを以て、茲には唯其の名を擧ぐるに止め、顧みて飜譯文學を通觀するに、曩に小說に就て述べたりし諸件、多くは詩歌に附いても言はるべく、概して思想淺薄文章粗笨の誹りを免れず。且當時學習せし外國語は主として英語なりしを以て、飜譯は皆英米の原作若しくは英譯の諸國文學なりき。

第二節　政治小說

飜譯小說は淺薄粗笨なりき。然れども在來の戯作に比すれば尚幾分の淸新と深遠とあり。文壇之を味ひては、復彼の卑野なる戯作を顧みんとはせず。加ふるに、哲學、科學漸く開けて思想界の深さと廣さと愈其の度を增し、語學研究益進みて泰西文學の知識愈民間に弘布せしかば、曩きに西洋小說を耽讀し飜譯したる政論文學者の輩、進んで筆を創作に着け、嘗て彼等が飜譯せし原作の作家が爲しゝ所の者を以て、直に之を身に行はんとせ

り、故に其の創作は言ふまでもなく政治小說若しくは歷史的政治小說なり。要するに飜譯小說と政治小說とは、其の發達の原因を同うする二樣の結果なりといふべし。

明治十七年、『報知』社の政論家藤田鳴鶴作る所の『文明東漸史』は、恐らく此の種の創作の嚆矢なるべし。筆を米艦來航に起して泰西文明の極東帝國に傳はりし始末を叙し、貫くに高野長英、渡邊華山の傳記を以てし、交ふるに幾多義人烈士の美談を以てしたる者にして、或は史傳と見るべく、或は文明史論とも見るべきも、又一個の歷史的政治小說と見らるべし。文章は例の如く漢文直譯體なり。此の書出でてより政治小說の創作甚だ多かりしが、就中柴東海散士が『佳人の奇遇』『世路日記』矢野龍溪が『經國美談』、末廣鐵腸が『雪中梅』『花間鶯』、須藤南翠の『綠簑談』『新粧の佳人』等最有名なり。『佳人の奇遇』と『經國美談』とは、共に『文明東漸史』と同じく歷史的政治小說にして、而も一層史傳に遠くして小說に近く、全然政治小說の部に屬すべき者、『雪中梅』『新粧の佳人』等に至りては、純空想の

政治小説なり。

『佳人の奇遇』は、世界を舞臺として近代歴史上の事件を網羅し、亡國の辛酸を嘗めたる國民に滿腔の同情を表して其の心事を描出せる者にて、維新の際、亡國の悲運を見たりし會津の遺臣東海散士が、東西に歴遊して到る處亡國の跡を弔ひ、遺民の志士に交り、北米合衆國の獨立と自由と隆盛とを目にして今昔の感に堪へず、乃ち無量の感慨を吐露して他年の報復を計るに至る顛末を叙するを以て大體の脚色となす。主人公は勿論東海の遊子にして、配するに愛蘭の一貴女幽蘭女史を以てし、之を中心として明國、西班牙、波蘭、匈牙利、土耳古、埃及等、普く亡國の志士仁人を網羅せり文章は亦漢文直譯體を取る。次に『經國美談』は詳くは『齊武名士』の割書を冠し、往古希臘の各邦併び立て覇を爭ひし時、齊武(セーベ)の名士エパミノンダスが、同ペロピダスと協力して一時國威の全盛を致せし史上の美談を取り、演義敷延して一篇の小説に仕組める者なり。文章は前者に比すれば一脈古文の趣を交へ、馬琴の讀本等の體に倣ひて流暢和易の氣あり。挿入せ

る歌詞の如きは七五調の和文にてものせり。此の二書は當時の讀書界、特に青年の間に多大の讃美を以て迎へられ、中にも後者は明治年間文學上の著作中最廣く讀まれし者の一にして、作中の主人公は一部青年政客の理想的人物とせられき。

『雪中梅』と『花間鶯』とは、上述二者の傳奇的なるに比すれば、遙に寫實的分子に富み、多少當時の政界を寫さんと試みたる者なれども、其の文壇に於ける勢力は遙に之に劣れり。『新粧の佳人』は當時歐化熱及び政治熱の最高潮を表せる者にして、荒唐突飛の弊ありと雖、時勢の一面を反映するに足る。其の他政論文學者及び新聞小說家の、筆を政治小說に染むる者甚だ多かりきと雖、概ね鐵腸、南翠の亞流に過ぎざるを以て、茲に其の作例を擧ぐるを省き、總つて當時の政治小說其の物の價値に言及ばん。

一括して言へば、彼等作家は、政治小說其の物に對する觀念に於て、根本的の誤謬を懷けり。彼等は政界の眞相を窺ひ、社會の表面に現はるゝ百般の政治活動の依て起る所の政治家の心理、政治界の秘密を描かんとはせ

ず。新聞の雜報にも見ゆる如き皮相の事實を羅列し、演說公會等の外、何等の寫し出でし事なく、作中の政治家は、皆行動を缺き、唯其の意見を演說して喝采を博するを以て能事となし、而も其の演說たるや、概ね作者自身の政論を發表するに止まりき。換言すれば政治の舞臺を見て其の樂屋を察せず、小說の本領を沒して自己政論の發表の方便にせしなり。斯く其の着眼と目的とに於て既に根本的の誤謬あり。加ふるに技術の點に於ても、脚色は千篇一律、意匠の變化殆ど空しく、要するに貧書生が立身出世の夢物語に過ぎず。之を以て高く標置して政治小說と稱するは頗る當を失ふ。且其の人物も、性格偉大、欽仰すべき者に非ずして、屑々たる小才子、世渡上手の利巧者にして、當時の批評家の所謂「政治社會の丹次郎」に外ならず。而して之を敍せる文章、修辭の技巧に至りては其の缺陷の最大なる躰にして、中には全然文學としての形式を缺けるものあり。

斯くの如きは、獨り『雪中梅』以下の作のみならず、『文明東漸史』以來此の期の創作に通有する缺點なり。思ふに政治小說は明治新文學の先驅に

して、當時尚草創の際に在り、且つ其の作者概ね專門文學者に非ず、所謂政論家發憤の餘に成りし者なれば、彼等に向つて備れるを求むるは或は酷ならん。むしろ却て最も善き時勢の反映を此の間に見るべきなり。よし其の反映は單に皮相に止まるを憾とすべきも、尙其の有する唯一の價値と稱すべし。

文壇は斯かる狀態を以て明治二十年前後に及べり。此の時に方り新文學の萠芽は、漸く葉を開き蕾を孕み、文界革新の機運正に動き、政治小說は其の絢爛の華彩に遇ひて忽ち其の光を失ひぬ。今や進んで新文學に論じ入らんとするに方り、顧みて新舊二潮流の消長を追跡すれば、飜譯文學の發生以來、文壇に於ける新潮漸く勢力を增し、繼承の文學は日に月に衰へて復十年以前の如くならず。作家は年々物故する者あるのみにて、之を繼ぎ之に代る者絕て無く、追々作家と作物とを減じつゝあり。唯條野採菊（傳平）前田香雪、三木愛花等數人、新聞雜誌に據りて僅に戲作の末勢を維持するを見るのみ。而して前期以來漸く發展したる新聞紙は、西南戰爭の刺

擊によりて一大進歩をなし、益〻此の潮勢を助けぬ。所謂五大新聞の外、十五年には福澤諭吉『時事新報』を創刊し、其の他各地發刊比年相繼ぎ、記者の輩出亦頻りに、『報知』の龍溪、鳴鶴、『朝野』の鐵腸等、往年の櫻痴、柳北の後を襲ぎ、政論と小說との兩方面に向つて錚々の名を馳せ、就中龍溪の文、雅馴流暢、論議精細、最も當代に喜ばれたり。福澤諭吉亦居然たる記者にして、其の文章平易暢達、第一章に詳述せし特色を發揮して益〻老練の境に進み、常に輿衆に先だてる豫言的言論は、直ちに『時事』の聲價を江湖に布きぬ。福澤は獨り自己の新聞に於て成功せしのみならず、三田の先生として慶應義塾に養成せし幾多の秀才は、夙に新聞事業に從事して文名既に世に高き者少からず。鳴鶴、龍溪、鐵腸、學堂等、此の時代の飜譯文學政治小說の作家は概ね之に屬し、二十年以前の文壇は恰も福翁門下の掌握する所なるが如き觀あり。世に稱して三田派文士といへり。文壇の新潮は、此等記者及び其の新聞の鼓吹によりて益〻社會に擴がりぬ。

終りに臨みて一言すべきは、當時隆々の勢ありし基督教の我が文學に對

する關係なり。明治の初、切支丹邪宗門の禁、何時となく解け、爾來基督教は西洋心醉の思潮に乘じて天下に瀰漫し、十七八年の交、時の政府の極端なる奬勵の下に、英米の言語風俗を學びし時に至りては、期年ならずして全國到る所會堂說敎場を見、青年男女到る所聖書を弄び讃美歌を唱ひ、斯敎の勢力將に天下を風靡せんとするに及べり。斯かる精神界の現象を見ん者は、直ちに其が當時の文學に及ぼせる影響に想ひ到るべし。曩に英國思想の傳來は延いて英文學の輸入となり、進んで其の小說詩歌の飜譯となり、又佛國思想の傳來は直ちに政治思想の發達を促し、延いて政治小說の勃興となりぬ。然らば泰西文明の母と呼ばれし幽遠熱烈なる基督教の思想が、本邦精神的文明の開拓者として、文藝の上に劃然たる印象を殘しゝならんと想像せらる。然れども當時基督教の思想は未だ文藝の內容とならず、繪畫、彫刻は勿論、詩歌小說等一として其の色彩を帶ぶる者なかりき。思ふに宗敎思想が文藝の內容とならんには、先づ國民思想の內容とならざるべからず。之を東西の思想史文藝史に徵するに、古來新宗敎に觸接するや、

必先づ同化受用の微妙なる能力によりて之を國民的に渾成し、國民思想の內容に牢乎たる根柢を作り、爰に始めて美術に現はれ、文學に影響を與ふ。而もかくの如きは決して短日月の間に成就すべきに非ず、國民不斷の努力と、時所幾多の鍛錬とによりて、始めて成るべきなり。されば新來の基督教の如きも、亦此の約束に從ひ、傳來日尚淺き斯教は、未だ同化の妙用を受けず、未だ國民思想の內容とならず。且當時斯教の盛況は、信仰の深き根柢より生ぜしに非ず、西洋文明に心醉せる國民が、所謂文明の宗教に趨れる一時の盲動に過ぎざれば、同化受用の如き眞面目なる問題には未だ到達せざりしなり。其の文藝思想の內容たるが如きは、尚將來の事に屬す。

第二期の文學

明治二十年——同二十七年

第三章　新文學思想

第一節　固有思想の反動

維新以降、日に月に昂上し來れる歐化熱は、十八年に建設せられし新政府の極端なる模倣主義を執るに及んで其の絶頂に達せり。國民は其の文明をして歐米諸國と對等ならしめんとの燥急輕忽なる空望の爲に動かされ、固有文明の特質、新來文明の適否を究めず、徒に皮相の文明に眩惑して之を移植せんと努めぬ。二十年の頃は此の風潮の最も高度に達せる時なりき。物窮まれば則ち反る。反動の氣運は茲に喚起せられ、長く屈辱を忍びたりし固有思想、俄然として頭を擡げぬ。而して此の運動の陣頭に立ちし者を政教社の人々が唱道せる國粹保存主義となす。

歐化思想に對する保守思想の反抗は、從來屢〻種々の形を以て起りき。維新當初、神道一派は一時反動の氣勢を示し、六七年の頃、排洋興神の思想

一部の人心を風靡して歐化熱に反對したりき。弘道會なる者次いで起り、儒教主義を提げて當時の實利主義に反抗し、固有道德を稱へて浮薄なる時潮を制遏せんと試みたりき。次に民選議院設立の運動上下を搖かすに方り、獨逸流の國家主義を執る一部學者は、起て佛國流民主說に反對したりき。而も歐化主義の勢力は之を推倒して進みぬ。斯くの如く、保守主義の反抗數回に及ぶと雖、さながら蟷螂の龍車に向ふ如く、悉く破摧せられ畢んぬ。然りと雖、今や歐化熱の昂上極端に進むに及んで、國民漸く自己の盲動を悟り、二十年來の經驗によりて、西洋心醉の弊一にして足らざるを覺りぬ。所謂西洋の文明、乃至文明の宗教と稱する者、其の根柢の極めて輕浮にして、其の內容の極めて落莫なるを知りぬ、是に於てか國民の思潮は翕然として國粹保存主義の下に集り、政教社の人々が其の機關雜誌「日本人」に出したる縱橫の論議は、天下の視聽を動かしぬ。

　政教社は此の國民思潮の凝りなせる一個の團體にして、三宅雪嶺、井上圓了、志賀矧川、棚橋一郞等、之が主唱となり、二十一年、雜誌「日本人」

を刊して大に國粹主義を鼓吹し、泰西文明の缺點を指摘して國民警醒の聲を擧げたり。所謂國粹主義とは、從來歐化主義が泰西文明を崇拜するの極、我が國粹を蔑視し、我が短を去るに合せて我が長をも沒却せしに反抗し、飽くまでも國粹を保存し、補ふに彼が長を以てすべしといふに在り。論旨多少抽象的に過ぎ、國粹其の物の具象的説明に缺くる所少からず。爲に往往頑冥なる保守論者と誤解せられたりと雖、一代の氣運を捲起して國民自覺の道程に多大の貢獻を爲しゝ功績は、百世沒すべからざる者あり。勿論此の成功は時勢の然らしむる所にして、固より政教社のみの事業に非ずと雖、輿論の向ふ所を指導して其の言はんとする所を道破せる急先鋒の榮譽は、確かに是等の人々に存すべきなり。

此の運動の賜は國民の貴重なる自覺なりき。自覺は對比より來る。他ありて始て自あり、他を知悉して始て自の特色を知覺す。而も對比の能力は知識經驗の蓄積に待つ者多し。今や我が國民は二十年の經驗を積み、知識を蓄へ、其の結果、從來盲目的に吸收したりし歐米文明の缺陷を看破する

と同時に、固有文明の彼れに遜らざる者甚多きを知悉し、自他を比較して今更に昨の非を悟りぬ。即ち從來世界的知識の缺乏の爲、國民の意識に上らざりし者、該知識普及の結果、對比の能力を生じて茲に意識に上り、豁然として自覺の域に入らんとするなり。且歐米心醉の餘、初めは皮相的觀察に止まりし邦人も、多少其の眞相を覗ふに及び、彼等の爲す所常に其の國粹を尊重し、特に文學美術等は勉めて固有の美を保全發揮せんとするを知り、加ふるに、本邦在留の外人等口を揃へて本邦の文學美術を賞讃するを聞くに至りしかば、國民は自己の有する財寶の極めて富贍なるに驚き、國粹に對する自覺は油然として其の衷心より起りぬ。尊いかな此の自覺や。是在りて本邦文明は始めて獨立の文明たるを得るなり。二十年來の文明は模倣の文明、隷屬の文明、はた根據なき文明なりしが、茲に至りて始めて確固獨立の基礎を取るに至れり。本邦文物の發展は、此の時始めて眞正の進程に上りぬ。

斯の自覺は、實に我が文明史、思想史、及び文藝史の上に於ける極めて

重要なる契點にして、一度新來の大勢力の爲に奈落の底に推落されし文物の總べてが、奕々たる新光明を以て復活したる時を表はせり。曩に吾人は維新當初の破壞的風潮を叙して、世は一時荒寥たる暗黒界となりしを說き、次いでは此の缺陷を補はんが爲、恰も饑えたる者の食を選ぶに暇なきが如く、競うて泰西文物を吸收して其の適否を顧みざりし事を述べたり。今や是等西洋文物が漸く缺陷を露はせるに乘じ、甞て打捨てられし舊文物、士を捲いて重て來れり。歷史は常に繰り返す。而も繰返しつゝ進步すと稱す。復活は常に原形の儘に非ず、重ねて來りし者大に其の舊態を改めずんば非ず。二十年間新文物の下に雌伏したりし舊文物の復活は、文明の獨立の上、はた其の進步の上に於て、其の意義極めて重き一大現象なり。

文明の獨立は其の端緒を開けり。歐風米俗のわざとらしき者去りて固有風俗の醇美なる者之に代り、一時亢龍の勢ありし基督教は俄然として其の力を失ひ、從來醜陋の惰眠を貪りし佛教徒も、茲に覺醒して破邪顯正の運動を始め、一方に於ては、甞て反古紙屑と共に扱はれたりし和漢の古書、

茲に再び花咲く春に會ひ、斷縑零冊、世にもてはやされ、故紙廢墨、夜價を生ずるに至り、又彼の『日本人』一派の極力唱道したりし古美術保護の議は、遂に天下の輿論となり、曾て無用の長物として破壞せられたる神社佛閣、及び海外に賣り飛ばされたる佛像佛畫も、今は古美術保存の名の下に、寶物取調委員の鑑識證明によりて、永代國家の保護を受くべき國寶となるに至れり。轉じて國民教育の方面に見れば、森文部大臣が大膽なる洋風教育、特に國語を廢して英語を採用せんとせし如き極端なる外國語教育は、二十三年十月の勅語、續いては井上文部大臣の國家主義の教育、並に國語教育によりて其の風潮を一變し、更に藝術界に見れば、米人フェノロサが口を極めて歎賞したる邦畫の眞價は、端なく國民の宿醉を覺醒し、邦畫本來の面目を發揮せんとて奮起せし國粹派の運動は、從來の畫壇を領せし文人畫西洋畫を斥け、工部大學の美術學校も其の方針を變じて邦畫の保護獎勵に力め、爾來美術協會の設立となり、東京美術學校の開設となり、狩野芳崖の崛起となりて邦畫の特技は新に宣揚せられたり。

復古的精神は所有文物に普及して、遂に本論の主眼たる文學界に及べり。斯かる潮流の文界に入りて先づ與ふべき直接影響は、言ふまでもなく國文學の復興なり。曩に神道派の國學が一時歐化主義に反抗せし事ありしが、國粹思想の崛起するに及び、先の國學は純文學に姿を變へて復活し、從來西洋文學の爲に壓倒せられて其の聲息を潜めたりし我が古文學再び世に出で、皇典講究所、東京大學の和文學科及び古典講習科等は、皆古文學攻究の好機關となり、國文學の知識は駸々として國民の間に擴がり進みぬ。勿論是等設備の主眼とする所は、恐らく國史國典の研鑽に在りて純文學に在らざるべしと雖、古史古典の研究は畢竟古文學の研鑽に頼らざるべからず、古文學を外にして國史國典攻究の資料を求むべからざるなり。斯かる間に大學古典科及び和文學科は落合直文、小中村義象等の卒業生を出し、是等少壯國文學者は、從來の國學者流と異なり、明治の新空氣に養はれて多少の新知識を藏し、着眼識見おのづから皇學一派の固陋を擺脫し、加ふるに年少の鋭氣を以てしたりしかば、歐化主義の横行の下に國文學の憐れむべ

き沈衰を見て默止するに堪へず、新聞に雜誌に演說に講義に、國文學を鼓吹して、彼の國粹保存論と呼應したりき。斯くて國文敎育の必要は天下の輿論となり、皇典講究所に國學院設立せられ、大學に國文學科を置かれ、尙國語傳習所も開かれ、爾來中等以上の學校にして國語國文の科を課せざる者なきに至れり。一方に於ては東洋學會、明治會の如き國粹主義の會合より『東洋學會雜誌』(二十一年發刊)『明治會叢誌』(二十二年發刊)の如き雜誌を出し、『日本人』等と相呼應して國文復興を呼號せり。

この時に方り、是等の運動に就き、常に其の主動となりし落合、小中村の二人、古文學の飜刻出版を成して古書缺乏の困難を救はんと企て、『日本文學全書』を編纂して二十三年第一編を刊行せり。遠くは竹取、伊勢の古物語より、近くは太平記、增鏡に至るまで、古文學の重なる者を網羅し、解題頭註を加へて逐次刊行すること二十四編に及べり。此の擧や實に天下の渴望に應じたるものにして、從來刊本甚だ稀少、坊間求めて得ること能はざりし貴重なる古文學が、今や至廉の小冊子となりて炮豆の寒生にも容

易に得らるゝに至りしかば、既に和歌和文の趣味を解し初めたる青年輩爭うて之に就き、古文復興の風潮は全國に行き亘りぬ。『文學全書』の成功は更に古歌集の出版を促し、少壯歌人佐々木信綱『日本歌學全書』を編し、萬葉集、八代集、及び中古の家集を纂め、總て分本十二冊として二十三年末より刊行し始むるを見るに至れり。是に於てか和歌和文の二全書完成し、學俟つて國文學興隆に至大の貢献をなせり。されば之を企畫せる少壯國文相者の功績は、二全書と共に永く傳ふべきなり。而して彼等の巨頭として常に此の運動の前面に立ちし者は實に落合直文なりき。

彼は仙臺の人、十五年大學古典科に入り、三年にして之を出で、爾來一身を國文教育に投じ、歌文復興に關する事業一として與らざるなかりき。彼は時人が自國文學の優秀卓越なるを知らざるを慨して、之が妙味を發揮するに全力を注ぎ、新聞雜誌の文章が拙惡格に入らず、支離滅裂讀むに堪へざるを指摘して、天暦以前の古文法を唱道し、桂園末流の和歌の、孱弱卑俗取るに足らざるを説破して、優雅清新の趣味を鼓吹し、從來の普通文

が乾燥なる漢文直譯體に流れ、國學者の文章が無氣力沒趣味なる擬古體に陷るに反抗して、優麗暢達の中、精彩おのづから奕々たる清新の體を創め、はた「孝女白菊の歌」を始め數多の長詩を作りて從來行はれたる蕪雜なる詞章を矯正する等、國歌國文の所有方面に創始的事業を遂行しぬ。彼が第一高等中學、皇典講究所、國學院、及び國語傳習所に於てなしゝ國文教育、『東洋學會雜誌』『明治會叢誌』『柵草紙』『日本』『歌學』『國文』等に掲げし論議創作は、即ち此の事業を成さんが爲に披瀝せし努力の熱血なりき。是に於て世人漸く國文學の尊むべきを悟り、國文典の重んずべきを知り、當時既に名を文壇に馳せたりし文學者すら、顧みて自家の文章の破格滅裂なるに驚き、彼に就いて文法上の修練をなせし者少からざりきと稱す。況んや、青年好文の徒に至ては、風を望んで起つ者頗る多く、門下多士濟々、後來文壇に名をなしゝ者少からず。斯くの如くにして國文學興隆の運動は其の功を收め、國文教育家としての彼れの地位復動かすべからざるに至りぬ。彼は歌人なり、文章家なり、批評家なり、學者なり。然れども國文教育家

たる一點に於ては總べてを合したるよりも大なりき。
古文學復興の主動者の少壯國文學者なりしは上述の如し。然れども此の氣運を助長するに與つて力ありし他の因緣亦一にして足らず。或は井上文部大臣の國語敎育主義の如き、或は新聞「日本」の鼓吹奬説の如き、或は其の主筆陸羯南の保護の如き、或は司法大臣山田顯義の國學振興に盡せるが如き、説き來れば底止する所を知らずと雖、事煩に亘るを以て、茲に之を省かん。
以上縷述せし所は、即ち國民の自覺及び之に伴ふ所有固有文物復活の概況なり。顧みて當代の風潮を概見すれば、反動の意、到る所に現はれ、復古の氣、所有方面に充てり。而も反動は常に退歩に非ず。復古は多く新彩を帶ぶ。正あり、反あり、茲に折衷的發達を遂ぐるは歴史の面目なり。固有文物の復古豈必ずしも文字通りに古に復るの義ならんや。況や此の自覺の因て起る所、亦世界的知識の傳播に存するをや。復活の美術には世界的意氣あり、復活の國文學には清新の趣味あり。歴史は着々として進歩しつ

つあるなり。

此の時に方つて、維新以來の過激なる革新的精神は漸く中正に赴き、盲目なる急進主義と頑冥なる保守主義とは相次いで勢力を失ひ、民權自由論と帝王神權論とは憲法によりて根本的に統一せられ、歐化主義の横行は國粹思想の反動に調節せられて穩正の進路を取り、所謂新舊思想の衝突漸く其の勢焰を收めんとす。是に於てか國民聊か餘裕を生じ、意を文藝界に傾くる者前日の比に非ずなりぬ。且一方に於ては學術の進歩に伴うて、國民の思想愈〻廣濶となり、泰西語學の普及と共に英佛文學を味ふ者益〻多く、甲因乙緣相扶けて文學趣味の瀰漫を促したりければ、明治文學革新の思潮茲に動き、新文學の勃興爰に萌せり。

第二節　文學思想の革新

文學に對する觀念の變遷は、作品の性質に根本的の變革を與ふ。所謂新舊文學の相異は主として此の觀念の相異に基く。過去の文學界を支配した

る文學思想、主義、原理は如何。現今の文學界に於て正に起りつゝある文學思想、主義、原理は如何。之を稽査せざれは新舊文學の性質の相異を精密に知る事難し。思ふに過去の文學界に於ては、或は達意の具、自己發表の器となし、或は道德の隸屬として世道人心に益あらん事を主となす等、總べて文學を以て實用の具と見倣し、何等か實用の素を備ふるに非ざれば文學の價値を生ぜずといふ思想最勢力ありしが、一般思想界に新潮入り來り、平民的思想の傳播益〻廣く、個人の發展益〻著しく、自由意志の思想暗々裡に根柢を張るに方つては、文學獨立の思想斯界に磅礴し、文學は其れ自身の價値を有し、其れ自身の形式を有し、決して實用の隸屬、道德の方便に非ずといふ思想は、漸く社會に勢力を得るに至れり。

斯くの如きは極めて大體の觀察なり。更に少しく之を細說せんに、先づ詩歌に對する從來の見解、主義等は、古今集以來、支那詩人が詩に對する主義見解等を繼承し、彼の詩經の序に『詩は志の之く所なり。心に在るを志となし、言に發するを詩となす。情、中に動きて言に形はるゝ時は、之

を言ふも足らず。故に之を嗟嘆す。之を嗟嘆するも足らず。故に之を永め歌ふ。」と言へる數句を以て金科玉條となし、所謂大和歌、唐歌の名に現はるゝ如く、和歌を以て我國の詩となし、詩を以て彼國の歌と思ひなせり。故に在來歌人の和歌を見るや、常に自己の主觀を諷詠するを以て能事畢れりとなし、而も漫然、目に見えぬ鬼神をも泣かしむと稱へ、未だ藝術の眞義に思ひ到ること能はざりき。且一方に於ては江戸時代儒教主義の浸潤甚しく、國民思想の中に牢乎たる根柢を置くに方つては、此の主義遂に詩歌にも入り、風教に利し世道に益あるを以て詩の用となし、然らずんば彫蟲の末技無用の贅物と貶稱し、此の思想延いて和歌に及び、之を律するに道徳の標準、實用の規矩を以てするに至れり。

次に小說戲曲に對する思想を稽ふるに、王朝の古に在りては、世態人情の鏡としての是等藝術の本義能く知られたるが如しと雖、鎌倉時代以後佛敎思想の根柢を國民の間に置くに及び、或は佛法弘通の具に供せられ、或は靈驗利生の記錄とせられ、所謂「狂言綺語讃佛乘」の語は是等文學の

性質を決定する斷案となされ、甚しきは王朝の物語をも是等の目的の爲に書かれたりと稱ふるに至る。降りて江戶時代に及びては、勸善懲惡の主義、小說戲曲の理想を一變し、是等の文學は道德特に儒敎道德の主義を宣揚し、兼ねて之を鼓吹する用に供せられ、「事を凡近に取りて義を勸懲に發す」と言ひし李笠翁の語は、恰も和歌に對する詩經の序の如く、千古不磨の確言と信ぜられ、所謂訓蒙的性質は是等文學を被ひ盡せり。斯くの如く詩歌、小說、戲曲等、總べて文學以外の主義によりて動かされ、文學以外の目的の爲に使はれ、其れ自身目的たるべき文學の特質を沒して一種の方便となり了らしめたり。

轉じて文學者の社會に於ける地位、彼等が文學に對する態度、はた彼等が自ら持する所の高卑、及び文學者たる人々の種類を見るに、和歌、和文、漢詩、漢文の如きは、其の作家たる者比較的に社會の尊敬を受け、又彼等が其の關する文學に對して比較的眞面目の態度を取り、從て自ら標置すること比較的に高く、且其の敎養學識比較的に深かり。特に和歌に在りては

其の評價最も高く、或は天地を動かし、鬼神を感ぜしむと信じ、或は神秘にして魔力ある者となし、或は一種の解脱法と崇め、甚しきは萬邦詩歌の最上位に在る者にして、「神人を感ぜしむるは獨り我が大和歌自然の妙用」と稱するに至る。小說戲曲の類にても、中古物語の榮えし頃に在りては、其の評價必しも和歌に下らざりけり。然るに佛教主義及び儒教主義相繼いで入り、小說戲曲を以て實用の具となすに方りてや、此等文學の作家が社會に於ける地位おのづから降りて、學者僧侶に從屬する者となり、彼等が文學に對する態度亦おのづから粗かに、狂言綺語の名に甘んじ、戲作の稱を拒まず。從て自ら重んずる事甚少く、戲作者と呼ばれて普通藝人と相距る事遠からず。其の人物も亦、二三の特例を除きては、概ね教養足らず、學識具はらずして、唯文筆の才を以て立つのみなるが如し。「羇旅漫錄」所載の近松巢林子の遺墨といふに曰く、「甲冑の家に生れて武林を離れ、三槐九卿に咫尺し仕へて寸爵なく、市井にさまよひて商賣を知らず、隱に似て隱に非ず、賢に似て賢ならず。世の迷ひ物、神釋儒道和歌有職弓馬郢曲歌

舞滑稽まで、事知り顏に一生を言ひちらす」と。又近松半二の『獨判斷』に曰く、「堂上の事を知らば有職者となるべし。弓箭の故實を知らば軍學者となるべし。聖經賢傳を記憶せば直ちに博識の儒者となるべし、菅公の事も楠公の事も丸吞に似つこらしく書いて、聞いた程の語を奥深げにつばらかし、和歌管絃より萬の道、何一つ正しく覺えたる事なく、聞取法聞耳學問、根氣をつめて學ぶ事のならぬ自墮落者が即ち作者となるなり」と。二者固より一場の戯筆にして、巣林子、半二必しも此の儕に非ずと雖、所謂戯作者の眞相は最も適切に之に露はる。大才巣林子等にして此の言をなすを以て見れば、爾餘の作者輩の事思ふべきのみ。

文學界の舊思潮は洵に斯くの如き者なりき。過去の文學界を支配せる思想は、常に道德上の者にして文學上の者に非ざりき。然るに一朝泰西の思想、特に彼の國の文學思想の入來るや、革新の運動一時に起り、詩歌を始として小說戯曲に至るまで、次を追うて舊思潮を棄てぬ。而して此の運動の最も早く文壇に現はれ、明確なる意識を以て改革に着手したりし者は、

即ち明治十五年刊行の『新體詩抄』なりき。

『新體詩抄』は東京大學の外山丶山、矢田部尙今、井上巽軒三人の撰にかかり、西詩飜譯又は撰者創作の詩篇を收む。新體詩とは其の名の示す如く、漢詩にも非ず、和歌にもあらず、西詩の體裁を取りて之を行るに七五調の國語を以てしたる一種新體の詩にして、本邦文壇に始めて提供せられし明治の創造なり。其の名の如きも本書撰者の命ずる所にして、爾來或は新體歌と稱せんと主張せし一二の作家ありしも、此の名は遂に一般文界に襲用せられて復動かすべからざるに至りぬ。而して所謂新體詩の特に創始せられし由來を溫ぬるに、撰者、巽軒本書に序せる所に從へば、從來詩界を古有したりし漢詩と和歌とは、共に吾人の情志を發紓するに足らず漢詩は以て支那の詩たるべし。本邦の文學として發達すべき者に非ず。和歌は本邦文學として尊むべき者なり。然れども此は過去の文學たるべくして、新日本の現在及び將來に於て詩界を古有すべき者に非ず。是を以て吾人新文明の大潮流に棲息する國民が、依つて以て情志を發紓せんには、現時の國

語を以て作れる歐風の詩形を取らざるべからず。平々坦々の言語を以て成れる長大の詩形を選ばざるべからずといふに在り。新體詩はかゝる主張の下に起りし者にて、七五一聯、句をなし、數句節をなし、數節章を成すこと恰も西詩の如く、用語は漢語を嫌はず俗語を棄てず、所有現代普通の語を收容して、勉めて耳遠き古語を除く。打見たる所、讀み易く解し易し。洵に詩界の大變革なりき。

詩界革新の運動は起されたり。世上同感の文學者は相率ゐて新體詩に赴けり。漢詩和歌の專門家、及び此の新彩に驚倒せる保守者流が、所有非難嘲罵を加へしに係らず、總べての反抗を排して一方の旗幟を立てたり。斯くの如きは固より時勢の然らしむる所なりと雖、之を十五年の當時に見たりしは、實に創始者の大膽なる發奮の致す所なりといふべし。

然れども、其の詩歌革新に對する主張は未だ根本的の者に非ざりき。勉むる所、外部詩形の改革に在りて、未だ詩想の內部に及ばざりき。巽軒は新體詩の特質を數へて、格法の自由なる事、規模の廣大なる事、言語の豐

富なる事、語格の近様なる事、字句の勁健なる事、旨意の明晰なる事、進歩の傾向ある事、新奇の着色ある事、の八個條を擧げたりと雖、總べて是、詩形上の得失に係り、詩想の根本的性質、乃至詩歌に對する觀念に就ては、何等の言ひ及ぶなし。從來主觀の諷詠に止まり、自己發表を以て要となしたる詩歌の性質は如何變化せしか、社會上道德上に裨益するを以て詩歌の價値となしたる實用主義は如何變遷せしかは、未だ知るべからず。況んや藝術の本義を明にし、詩歌は彼の繪畫彫塑等と等しく、藝術家の想像に出でたる一種の美術品にして、詞花言葉を以て宇宙の美を謳歌する者たる事を說くに於てをや。詩は志を言ふに止まるといふが如き觀念は或は是無かるべし。然れども、道德主義を以て詩歌を評價せんとする思想は、牢乎として拔くべからず。換言すれば、文學の獨立は未だ成らず、文學思想の根本的革新は未だ遂げられざるなり。

『新體詩抄』は、斯界の爲に敢て卒先の功をなし、荊棘を拓き蒙茸を開きて去れり。然れども、文學に對する觀念の革新は、擧げて之を後の文學者

に委ねたりき。時は進みて十八年となりぬ。果然新運動は小說界に起りぬ。『小說神髓』の出現即ち是なり。

『小說神髓』は坪內逍遙の著書にして、一部二卷に分れ、上卷に於て、先づ美術とは如何なる者なりやを論じ、小說は一種の美術なりと說き及び、以て小說其の物の根本性質を明にし、次に小說の起原より其の變遷の概畧を述べ、次に小說の主眼を說いて專ら人情の描寫に在りとし、以て從來の勸懲主義に大打擊を加へ、更に小說の種類と其の四大裨益とを述べたり。下卷は小說の法則を論じ、古來本邦の小說を剖析批判して將來執るべき方針を指示したる者にして、先づ種々の小說文體の得失を擧げ、次に小說の脚色を論じて主人公の設置に及び、最後に叙事法を述ぶ。總べて十章、所謂小說の神髓を說いて、今後小說家の向ふべきは模寫小說、人情小說に在るを詳論せり。是即ち著者逍遙が東西文學の比較研究より得たる一部の小說論にして、詩學又は美學の新知識の上に立ちて本邦古今の小說を觀察評騭し、併せて小說の性質を明にし、在來の戲作の範圍を脫すべきを說ける

者なり。其の緒言に曰く、「近來刊行せる小說稗史は、これもかれも馬琴種彦の糟粕ならずば、一九春水の贋物多かり。蓋し此の間の戯作者流は、ひたすら李笠の語を師として、意を勸懲に發するをば小說稗史の主腦と心得道德といふ模型を作りて、力めて脚色を其の内に工夫なさまく欲りするからに、強ち古人の糟粕をば甞めんとするにはあらざめれど、素と其の範圍の廣からねば、覺えず同轍同趣向の稗史をものすることとなるべし。さはあれ其の罪偏に作者の上に在るに非ず。讀者亦與りて力あるなり。何となれば、古來小說をもて敎育の一方便のやうに思ひて、奬誡勸懲は其の主眼なりと唱へながら、尚實際の場合に於ては、ひたすら殺伐慘酷なる、若くは頗る猥褻なる物語をのみ愛で喜び、他のかた苦しき筋の事は、目を注めてだに見る人稀なり。而して作者の見識なき、總じて輿論の奴隸なれば、競うて時好に媚びむとして、殘忍なる稗史陋猥なる情史を綴り、世の流行に從ふものから、勸懲の美名もさすがに打棄て難さに、強ひて勸懲の主旨を加へて、人情を枉げ世態を矯めて、無理なる脚色をなす事なりけり。是併

しながら、作者も讀者も、稗史の主眼を悟らざるに因るのみ。因て嗚呼がましき所爲とは思へど、敢て持論を世に示して先づ看官の惑を解き、兼ては作者の蒙を啓きて、我が小說の改良進歩を今より次第に企てつゝ、竟には歐土のノベルを凌駕し、繪畫音樂詩歌と共に、美術の壇頭に煥然たる我が物語を見まくほりす」と。是れ此の書の出でし由來なり。

著者は劈頭美術の本義を說きて、實用主義と目的主義との妄を辯じ、小說は即ち美術なれば、他の音樂繪畫彫刻建築等と等しく、所有美術の約束に從はざるべからずと述べ、次に小說の變遷を叙し、人情世態を寫せる彼のノベルを以て其の發達の頂點となし、眞の小說稗史は即ち是れなりとなせり。而して其の主眼に說き及ぶや、則ち曰く、小說の主腦は人情なり、世態風俗之に次ぐ。此の人情の奧を穿ち、心の中の內幕をば洩す所なく描き出して、周密精到なるを小說家の務とす。和漢に名ある稗官者流が、ひたすら脚色の骨髓に入らんことを力めたりしも、人情の皮相を寫して足れりとせり。憾むべきことならずや。夫れ稗官者流は心理學者の如し。宜し

く心理學の道理に基きて其の人物をば作るべきなり。苟にも己の意匠を以て強ひて人情に悖戻せる、否心理學の理に戻れる人物などを作り出さば、其の人物は既に人間世界の者にはあらで、作者が想像の人物なるから、其の脚色は巧なりとも、其の譚は奇なりとも、之を小説とは言ふべからず。中畧彼の曲亭の傑作なりける八犬傳中の八士の如きは、仁義八行の化物にて、決して人間とは言ひ難かり。作者の本意も、本よりして彼の八行を人に擬して小説をなすべき心得なるから、あくまで八士の行をば完全無缺の者となして、勸懲の意を寓せしなり。されば勸懲を主眼として八犬傳を評する時は、東西古今に其の類なき好稗史なりといふべけれど、他の人情を主腦として此の物語を論ひなば瑕なき玉とは稱へ難し。中畧されば小説の作者たる者は專ら其の意を心理に注ぎて、我が作りたる人物なりとも、一度篇中に出でたる以上は之を活世界の人と見なして、其の感情を寫し出すに、己の意匠を以て善惡邪正の感情をば作り設くることをなさず、唯傍觀して有りの儘に模寫する心得にてあるべきなり。中畧本居大人の玉小櫛に、

源氏物語の大旨を論じたる一節の如きは、頗る小說の主旨を解して、よく物語の性質を說き明らめたる者といふべしと。人情を模寫して神に入るを理想となし、寫實以外小說を認めざる著者の主旨、細かに說き盡されたり。

著者は又曰く、勸懲小說は小說の一種と稱すべけれども、其の旨狹く其の趣偏れり。模寫小說は人生の種々相收めて此の裡に在り。されば模寫主旨の小說には求めずして誹刺諷誡の法備はり、暗に人を敎化する力あり。別に勸懲主旨の小說を要せざるなり。されば斯かる小說には、第一、人の氣格を高尙にし、第二、人を勸奬懲誡なし、第三、正史の補遺となり、第四、文學の師表となるの四大裨益おのづから伴ふと。大に模寫小說を揚げて勸懲小說を抑へたり。

斯くの如きは即ち『小說神髓』の主旨にして、所說斬新、着眼超凡、洵に人の耳目を聳動するに足れり。勿論唱ふる所多少の誤謬なきに非ず。小說を以て總べての文學の最上位に置けるが如き、眞の小說をノベルに限りてローマンスの之と併立すべきを認めざるが如き、寫實小說を過重して理

想小說を過貶せるが如き、妥當を缺くの見尠からず。よしや斯かる誤謬なしとするも、今日より見れば當然の說にして、特に駭くべき新論に非ずと雖、一世を擧げて勸懲の舊思想を墨守し、空しく實用主義目的主義の奴隷となりて自ら悟らざる時に方り、藝術本位主義の大旆を飜して自然模寫を唱道し、以て從來、因果應報、惡は亡び善は榮ゆる團圓を追はんが爲に、强ひて人物事件の自然を枉げたりし戲作界を警醒するに至つては、洵に破天荒の卓說にして、文學史上一時期を劃するに足る有力なる地位を占むる者と言ふべし。

此の書出でて小說の名普く世に行はれ、主人公の稱、模寫寫實の語、廣く文壇に紹介せられたり。小說に對する觀念は一轉化し、十九世紀の新しき文學思潮は始めて本邦文學界に入り來れり。是に於てか、曩に飜譯小說によりても、又「新體詩抄」によりても未だ遂げられざりし文學思想の根本的革新漸く其の緒に就き、文學の獨立は漸く成るを得たり。「小說神髓」は、啻に小說のみならず、文學全體に向つて革新を促したる文壇有數の著

書なりき。

轉じて文學者共の人を見れば、所謂戲作者輩は舊文學と共に漸く社會の裏面に退き、教養あり學識ある新作家代りて文壇に現はれたり。「新體詩抄」の作者は悉く當代の學者なり。「小說神髓」の著者は直ちに作者となりて「書生氣質」を出し、以て共の所論を體現せしが、是亦大學出身の文學士たり。就中詩歌の人は古來多少教養ある社會より出でたれば、特に變化の激しきを見ざれども、小說戲曲等に至りては、社會的地位極めて低き戲作者輩の作る所なりしが、逍遙は社會の上流に立つべき學者の身を以て敢て此の事にたづさはり、舊慣を打破して作者の品位を高め、從つて小說戲曲其の物の品位をも高めたりしかば、斯界の空氣爲に一新し、低級なる戲作の境界を離れて高尚なる文藝の畛域に入り、更に進んで所有文學の中最も發達進步せる者とならんとす。

斯くの如くにして文學思想の革新は『新體詩抄』に萠芽を發し、泰西文學の流入と共に漸々生長し、『小說神髓』に至りて遂に蓊欝の美觀を呈する

に至れり。顧みて此の氣運を釀成せし原動力たる泰西文學思潮の傳播の迹を尋ぬるに、先づ創作と批評との二方面より傳はりしを見る。一方に於て英佛の詩歌小說が夙に飜譯せられしと同時に、他方に於て其の國の美學、詩學、修辭學、美術論等亦絕えず翫味せられたり。此の結果はやがて飜譯又は著書となりて現はれ、一方に於ては『新體詩抄』『東洋學藝雜誌』の譯詩、『花柳春話』以後の飜譯小說となり、他方に於ては、十六年中江兆民が譯せる『維氏美學』(佛ヴィロン原著)、其の前後に出でし菊池大麓譯の『修辭及華文』、フェノロサ等の美術論となり、前者は一括して泰西文學の標本となり、後者は一括して西洋美學思想の代表者となり、ついでは『新體詩抄』撰者の議論を生じ、遂に『小說神髓』の大旨となれり。二十二年に出でし高田半峰の『美辭學』は『修辭及華文』の系統を承けて、又此の風潮を聲援したりき。

此の時に方りて、前節に述べたる固有思想の反動漸く實相に入り、延いて古文學の復活運動となり、詩歌美文より始めて小說戲曲に至るまで、或

は語法を之に採り、或は文章を之に學び、速りに固有文學の面影を寫しぬ。是に於てか固有思想は曩に榮えし泰西思想に影響し、古文學は飜譯文學に影響し、兩者相依り相俟つて文學界に一新面目を開けり。明治新文學は即ち此の二者の渾然たる調和に與れり。

第四章　新文學の勃興（其の一）

第一節　新文學の曙光

文學思想の革新に伴うて現はれたる新文學の曙光は、十五年に出でたる新體詩に其の第一光芒を放ち、爾來十年の間に小說、戯曲、和歌、俳句等、所有文學に更新の彩光を齎しぬ。明治文學は此の時を以て本期に入れりといふべく、其の眞面目玆に始めて發揮せられぬ。而も時に先後あり、所有文學が期を同じうして勃興せしに非ず。新體詩先づ起り、新小說之に次ぎ、新飜譯又之に次ぐ。新戯曲と新和歌と新俳句とは時を經て興起し、其の曙光を放ちしは皆二十五年以後に屬す。

一、新體詩

和歌の起原や眞に遼遠なり。國民生存の曉、既に其の源泉を發してより流れ〳〵て萬葉集に至り、汪々たる大觀國民の瞻仰する所となる。就中長

歌の一體、瑰麗比ぶべきなく、洵に國民雄大の情懷を賦するに適したりき。惜いかな、華彩一朝の榮を奈良朝に止めて世は短歌獨占の壇場となり、轉じて連歌となり分れて發句となり、形體の短小茲に極まる。短詩必しも棄つべからず。短詩には短詩の利ありと雖、而も斯かる形體は決して國民情感の全體を盛るに足る者ならず。發達せる文壇が有する唯一の詩體として は餘りに憐なりといふべかりき。是を以て本邦詩歌の振はざること茲に久しく、舊風依然、古人の糟粕に甘んずる者滔々皆然り。此の時に方り泰西新思想の傳來ありて、詩歌の內容たるべき者益〻豐富となり、種々の外來語漸く國語に調和せられて、詩歌の用語たるべき言語益〻富贍となりたれば、明治の新文壇は到底從來の詩歌を以て滿足すること能はず。新詩歌に對する憧憬凝つて二三の新詩人を出し、新體詩の名の下に一新體を開くに至れり。前節既に述べし『新體詩抄』即ち此の代表者たり。

然れども此の運動は、何等の先蹤なくして突然起りし者に非ず。是より先、明治二年福澤諭吉『世界國盡』を著して萬國の歷史地理を簡明に述べ、

兒童諷誦に資せんとて平易流暢なる七五調を以て始終せることあり。旣に第一章に述べし如く、素と詩歌の域に遠き者なれども、興湧き情昂る時は筆おのづから精彩を帶び、思はず一種の詩調に入る。其の英京の條下「夜は三十六萬の瓦斯の燈火耀きて五月の暗も人知らず」以下數行、又は北米合衆國の條下「心に誓ふ國の爲、失ふ命得る自由、正理屈して生きんより、國に報る死を取らん、一死決して七年の、永の月日の攻守り、知勇義の名を千載に、流す血の河骨の山、七十二戰の艱難も、消えて忘るゝ大勝利」のあたり、今の鐵道唱歌地理唱歌に比ぶれば遙に詩調に富む。次いで六年「諳誦十詞」あり。前者と同樣の主旨を以て作られたる七五調の誦詞にして、皆後の軍歌の素をなし、延いては新詩歌の先驅をなす者なり。

十四年文部省音樂取調掛は、小學校唱歌の教科用として「小學唱歌集」を發行しぬ。是は西洋樂譜に合せて新作し若しくは飜譯せし單簡なる歌曲を集めし者にて、企圖の新しきに係はらず、歌詞の內容外形共に擬古派歌人の餘唾を嘗むるに止まり、何等新機運に貢献する所あらず。然れども後

の長歌にも非ず今樣歌にもあらぬ自由なる變體を韻文界に起し、而も典雅流麗の聲調を失はざりしが如き、後來益〻發達すべき樂曲歌詞の先蹤をなし、詩界又別箇の發展をなせるは注目すべき事實なりとす。

幾くもなくして『新體詩抄』初編發行せられたり。作者は丶山仙士外山正一、尙今居士矢田部良吉、巽軒居士井上哲次郞の三人にして、尙續編を出すべき計畫なりしも、刊行せられしは初編のみなりき。詩篇總て十九。巽軒、尙今二人の序を冠し、久米幹文の跋を附して出づ。十九首の中、創作は五首に止まり、他は總べて英詩の飜譯なり。譯せられたる詩人は、ブルームフィールド、カムペル、テニスン、グレー、ロングフェロー、シェークスピヤ、キングスレー等にして、就中カムペルの『英國海軍の歌』、テニソンの『輕騎兵進擊の歌』等、最も人口に膾炙す。創作に在りては『鎌倉大佛に詣でゝ感あり』『四季の歌』『拔刀隊の歌』等、最も注目するに足る。

新體詩の名稱及び由來に就きては、前章既に之を說きつ。其が西詩の模倣に出で、若くは之が影響の下に成れるは、譯詩は更にも言はず、創作と

雖明かに之を認むることを得。其の題材、其の形體を始として、思想の根本的調子に至るまで、一として之を反映せざるはなし。先づ形體に付て言へば、作者は在來國歌の形式たる三十一文字を棄てて寧ろ今樣式を取り、之を西詩の體に應用し、七五一句一行(バース)をなし、數行を累ねて一首となし、或は四六八等、一定數の行を連ねて一節(スタンザ)となし、數節を累ねて一首をなせり。中には間、脚韻を試みしあり。一節中、或は行を隔て、或は行を重ね、同一音の字を其の行末に置けり。『四季の歌』の如き其の好例なり。總べて詩形は著しく長大となり、時としては長歌を駕し古詩を凌がんとす。素より西詩の雄大なるに比ぶべくもあらざれども、短歌發句の小天地に跼蹐せし從來の眼を以てしては、誠に驚くべき展開と言はざるべからず。次に其の思想を見るに、從來の歌想たりし春花秋月の範圍を超え、神祇釋教戀無常の型式を脱して幾多の新版圖を拓き、淺薄ながら多少の哲理を寓し、平凡ながら人生觀社會觀を謳ひ、又は抒情の一面に馳せたりし舊詩歌に加ふるに一脈敍事の分子を以てし、等しく花月を詠ずるにも、其の着想の存す

る所、いたく從來と趣を異にし、蘆庵景樹の博大を以て尙夢想だも及ばざりし新景物は續々入り來り、總て思索想像の行く所に任せて敢て制限を設けず、無礙自在にして拘束する所なし。斯くの如きは詩界の大進步にして、文學思潮革新の事實と共に史上特筆すべき重要事件なりとす。

更に大膽なる試驗と稱すべきは其の用語なり。夫れ言語の分化發達は、素と思想の分化發展に從ふ。詩想豐富となり、趣味變遷を來さば、詩語亦增加變移して之に應ぜざるべからず。明治の歌界、詩想の一大進化をなしたる今日に方り、獨り詩語の之に伴はずんば新詩想も遂に體現せらるゝの機なけん。曩に蘆庵景樹等平語を主張して歌語の發展を企圖せしも、尙大勢依然として歌詞を定め、制詞忌詞を定め、自ら好んで壺中に住するを免れず。「新體詩抄」は即ち此の歷史的病弊を打破して詩語の領域を擴張し、漢語を採り口語に及び、芭蕉蕪村が發句に於て成しゝ所を襲うて更に一層の新彩を加ふ。斯くの如きは從來の和歌に在りて最忌み嫌へる所にして、之を敢てせしは、即ち此の新運動の主要なる部分に屬す。

上述の如く『新體詩抄』は種々の點に於て創始的試驗をなせり。而も此の書の價値は、唯其の創始的なる點にのみ存し、詩篇其の物の文學的價値は深く問ふに足らず。然れども、國民が新詩歌に對する憧憬發して茲に至りし者なれば、文學的價値の如何に係はらず、又和歌者流の固陋なる排斥的論議に係はらず、明治文壇に提供せられし新詩體として、遂に多數國民に迎へらるゝに至れり。

二、小說

明治新小說の發達は實に坪內雄藏に始まる。彼は名古屋の人、春の屋朧と號し又逍遙と號す。明治十六年東京大學文學部を出づるや、多年研鑽せし小說稗史に關する新運動を開始し、『小說神髓』を公にして小說革新を唱道すると同時に、創作『書生氣質』を出して彼れの意見に基づける寫實小說の粉本を示しぬ。此の作や洵に我が明治小說の新時期を開きたる極めて重要なる歷史的記念なり。

此の作詳くは『一讀三嘆當世書生氣質』と稱し、十八年六月『小說神髓』と

共に其の第一卷を出し、翌年一月に亘りて完結す。全部十七卷、署名して春の屋おぼろ戯著と稱す。寫す所は東京に於ける當代學生の狀態にして、某英學塾に於ける數名の書生を捉へ來りて氣質の種々相を現はすべき標本となし、檢束なき社會に入りたる血氣の青年が、其の氣質の異なるに從ひ、境遇の變るに從ひ、好否くさ〳〵の運命を捉ふるに至る徑路を描き、以て明治文明の懷に生ひ立ち、新教育の許に長じたる一新階級即ち書生なる者が、新舊思想の衝突尙止まざる當時の社會に處せる狀態に對して諷誡譏刺の筆を逞うし、之を貫くに一書生小町田粲爾と藝妓田之次との情話を以てし、之を彩るに守山父子兄妹の奇遇を以てす。通篇脂粉の氣あり、情緒奔放の青年が外圍の誘惑の爲に身を誤り、又は誤らんとする情狀、寫し得て委曲を極む。而して文章は詞に口語體を用ひ、地に雅文體を用ゐ、交ふるに諧謔を以てし、極めて平易に且巧に書きなされたり。

此の書一度出でて褒貶の聲四方より起りぬ。化政以來勸懲小說、豪傑小說に馴れたる眼は此の異樣の新彩に驚き、十年以來政治小說、演說小說に

謳歌せる人々は此の變體の作意を異しみぬ。然り。此の小說は在來の者に比ぶれば夥多の異彩あり。試みに其の要を擧ぐれば、第一、其の序に言へる如く「全編の趣向は專ら傍觀の心得にて寫眞を旨としてものせし」にて、勸懲を度外に置き、「此を訓誨の料にすると之を奬誡の資にするとは讀者輩の心に」任せたれば、童蒙を訓ふるが如き口調固より存せず。作中の人物亦其の趣を變じ、犬塚信乃白山雪若の如き道義の權化、關羽魯智深の如き模範的英傑、悉く其の跡を沒して世間通常の書生となれり。第二、政治小說に見るが如く、作者の主張主義を吐露せんが爲に小說の趣向を借ることなくして、專ら世態人情を直寫することとなれり。第三、從來の小說中、寫實方面にて類を同じうする者を取らば、三馬一九乃至春水等の作之に近けれども、膝栗毛の諧謔を存して其の鄙野を止めず、梅暦の妖艶ありて其の淫褻なし。若し諷刺の筆意滑稽の文致を以てすれば、浮世風呂西洋膝栗毛等、其の儔たるべしと雖、眞摯の態度に於て大なる徑庭あり。浮薄鄙猥なる從來の作物と伍すべきに非ず。第四、在來の小說が事件の變化に重き

を置き、脚色を主として所謂目先の奇を求めたりしに反し、人物の性情に重きを置き、多少心理的描寫を試みたり。第五、文章は馬琴等に負ふ所多きは言を俟たずと雖、敍事抒情の際、寫實的傾向著しく入り來り、且外國文學の影響として脩辭の上に稍新趣味を加へたり。之を要するに勸懲の陳腐を避け善玉惡玉の舊型を捨て、人情本洒落本の淫猥を去り、政治小說の枯燥を除き、模寫寫實の筆を以て新時代の生活を描き、童蒙敎誡の卑域を脫して敎養ある士人の翫賞に入りたりき。

『小說神髓』によりて蒔かれたりし寫實小說の種子は茲に至りて芽を萌し、『書生氣質』の名は忽ち讀本、草双紙の類を壓倒して世に布き、流を汲んで筆を寫實小說に染むる者前後相踵いで輩出しぬ。是に於てか勸懲小說の勢力漸次地に落ち、爾來寫實の風天下を靡け、文章に於ても新時代を表はすに適當なる一新文體を工夫して畧〻成功せる者もあるに至れり。此の點に於ては『書生氣質』の如き、實に明治文學の新紀元を造れる重要なる創作なり。

然り此の作は紀元開拓の作なり。然れども、こは其の歴史的價値の卓逸を表示する外、別の意義を含めるに非ず。文學としての絶對の價値を判せんには、おのづから別途の考察を要す。蓋し此の作の文學的價値は其の歴史的價値の如く優越なるに非ず。之を寫實小說の立脚地より見るも、第一、勸懲小說を排して起りしに係はらず、其の主旨諷刺誨誡に在るを以て、其の目的に添はんとするの極、動もすれば露骨なる諷刺に陷り、人情世態の大寫眞鏡たるべき者をして、强ひて諷誨の陰型に陷らしめんとす。勿論こは『小說神髓』に「模寫主意の小說には求めずして譏刺諷誨の法備はり、暗に人を教化する力あり」と說ける旨を實にせる者ならんも、開卷第一に「其れとは言はず語らずして讀む人々に悟らしむる覆車の誡因果の關係云々」と叙べしが如く、本文中作者自ら此の主旨を說ける箇所屢〻見えたり。其の筆致も亦描寫に少くして說明に多く、世態の模寫よりも寧ろ其の解說に近からんとす。第二、人物を主として心理描寫に筆を着けたりと言ふも、其は極めて低き程度に於て然るのみ。各人の性格の悉く模糊たる類型に終

れるは、所謂氣質物の常態として暫く之を措くとも、全體の結構到底事件の變化に重きを置くを免れず。而も其の變化や、概ね偶然の機會に出で、人物の性格より來る必然の結果ならず。奇禍奇遇等、舊時代傳奇の面影を存すること多く、特に大團圓に近づくや、急轉直下、奇機續發、偶然は偶然を生みてめでたし〳〵となる所、宛然夢幻劇の型なり。第三、新舊思想の衝突を描いて切ならず、内面的生活に存する深刻なる衝突を看過して、唯魯文一流の外面的衝突にのみ着目せるの觀あり。第四、其の文體に於ても未だ新時代の寫實小說に相應する迄に發達せず、全體の體裁人情本等に比して著しき進歩なく、特に地の雅文は掛詞文字鏁り等をもて飾れる馬琴流の七五調を用ひたり。其の他通篇諧謔に富みて輕妙を極むと雖、多くは地口駄洒落の類にして所詮一九魯文の餘唾に過ぎず。之を要するに『書生氣質』は全然新組織に成れる新時代の作物に非ず。其の立脚地は新舊作風旋轉の中心に立ちて、一代の潮流を喚起せる所に在りて存す。蓋し最も嚴格なる意義に於て所謂過渡期の產物たり。

春の屋は續いて「妹と背鏡』『内地雜居未來の夢』を著はし、心ある青年之に倣ふ者尠からず。尾崎紅葉等の結社硯友社は漸く社員を增し、頻りに創作の練習を力めたりき。此の時に方りて二葉亭主人長谷川四迷は、文壇未曾有の一新作を公にせり。『浮雲』即ち是なり。

二十年『浮雲』第一編出版せられ、翌年第二編續刊せられ、共に春の屋主人、二葉亭四迷合著と署す。されど實は二葉亭一人の作にして春の屋の加筆を得しのみ。第三編は後れて二十二年秋、小說雜誌『都の花』に連載せられたり。總べて十九回の章齣に分る。叔父に寄寓して某省に判任の出仕を勤むる内海文三、學才ありて世才足らず、冗官減員の際計らず免職となりしかば、叔父園田の後妻お政忽ち下司根性を現はし、曩に一人娘お勢の婿がねにと愛育せしに打て代り、彼を侮辱し薄遇して止まず。お勢は天性浮誇の質、學校に新教育を受け、内海の新議論に感服したりければ、常に母に逆つて内海を庇ふ。内海見て以て己に意ありとなしゝかば、お政の薄遇にも堪へ、同僚にして戀敵なる本田の侮辱にも忍びぬ。然るにお勢は

始め本田の無學陋劣なるを忌みしが、本來の華美を好める、内海日頃の不活潑に飽きて本田の快活に親しむ。内海此の眞相を知らず、遂に之に怨を述べしに、お勢は内海を戀ひしにもあらず、本田を戀ひしにもあらざれば、事の意外に驚き、且怒り且猛り、本田を疏んじ内海をも憎みぬ。内海尙も斷念し難く、種々の妄想を畫きつゝ、悶々の中尙去るに忍びずといふ筋を以て始終す。

『浮雲』の出づるや、世人は其の内容形式共に、全然從來の作物と選を異にするに驚き、『書生氣質』に比して隔世の感あるを認めたり。實に『浮雲』は『書生氣質』を過渡の橋梁として新時代に入りし小說界最初の創作なりき。思ふに『小說神髓』の所說を最も忠實に體認して、純粹なる新時代模寫小說の範となりしは『書生氣質』に非ずして『浮雲』なり。固より前者は模寫小說の粉本なりしも、前項に見えたる幾多の事實は之をして該種小說の範たらしめず、創新の名譽は擧げて後者に歸せり。

其の規模は狹小、其の舞臺は園田一家の外に出でず、其の時日は三旬の

中に止り、其の主要人物は四人に過ぎず。『浮雲』の結構の單純なること從來小說の總べてを超越す。然れども一篇の波瀾は總べて人物の性情に出で、脈絡貫通、悉く一主人公を中心として之に集まり、所謂其の綱を提ぐれば衆目悉く張るの趣ありて、全體一箇の有機的結合を形成す。描寫の當體は、園田勢子の性格、及び之によりて惹き起されたる內海が心裡の動搖葛藤にして、作者は其の間に幾多の波瀾を構へて二人が心理解剖を試みたるなり」お政、本田の性格は特に言ふに足らず、內海亦有り古りたる人物なれども、其の勢子の眞相を解する能はずして、半信半疑痛心煩悶を極むる所、お政に輕侮せられ本田に愚弄せられて憤懣心頭を衝けども、尙愛着の弱點、其の決心を腐らすあたり、心理描寫の筆委曲を極め、頗る人情の幾微に觸る勢子に至りては、作者が明治小說壇に提出せし一新性格にして、單純放恣輕燥開豁、事となく物となく、新奇より新奇に移り行き、嘗て操守あることなし。而も其の新事物に移るや、深く思ひ熟く見てするに非ず、唯感染の至す所のみ。幼うして學問好なる隣家の少女に感染れ、入塾しては洋風

好の塾頭に感染れ、退塾以後は朴茂なる內海に感染れ、其の沈鬱に陷るや去つて快活なる本田に感染れぬ。要するに未だ覺醒せざる初心浮誇の一少女にして、一切の行爲、及び行爲の因て來る心理の變化は總べて此の性格より起る。而して此の性格こそ內海をして懊惱せしめ憤懣せしめ、從て『浮雲』一篇を成立せしめし所以の者なれ。

此の作は、唯上述の點のみを以てするも破天荒の小說といふべし。加ふるに性格描寫の技倆の卓逸なる、お勢の人物が殆ど彫り浮められたらんが如く躍動するあり。且其は全然當代人物の代表と見るべき一新性格にして、十八九年の比、皮相文明の光に眩惑して自覺なく省察なく、徨々として新奇を追へる一代民衆の陋態は遺憾なく此の性格に現はれたり。思ふに『浮雲』亦一個諷刺の作、お勢をして新思想を代表せしめ、お政をして舊思想を代表せしめ、以て新舊文明の衝突を描かんと擬す。此の事や『西洋膝栗毛』以來の各小說家の爲す所に異ならずと雖、之を觀察し之を批評する事、斯くの如く深刻に且嚴格なるは未だ之あらず。げに二十年頃の明治文明の

描寫としての此の篇の價値は、之をして啻に歴史上に重きをなさしむるのみならず、文學其の物の中に於ても輕視すべからざる地位を占めしむ。唯、其の批判諷誡の筆、往々露骨に陷り、或は心理描寫の筆、往々、事實を按排して讀者の想像推理を俟つことをせず、直ちに作者の談理說明を以て之に充てたるを恨とす。例へば第五回お勢とお政との爭を叙して是が新舊主義の衝突なりと明かに辭りたるが如き、或は結末二回餘りに書き急ぎ、描寫に勉めずして解說に終れるが如き、頗る興味を殺ぐ。第十六回お勢の性格解剖の條の如きも亦描かずして說くの弊に陷る。

とにかく此の小說の內容は純然たる新時代の產物なり。然れどもかくの如きは獨り內容のみに非ず。其の形式即ち文體に於ても亦空前の試驗をなせり。『書生氣質』の文體は尙舊型を出づる能はざりしも、『浮雲』に至りては全く創始に出で、所謂言文一途を以て地と詞との全體を行り、且詞は常に行を改めて地と分ち、決して言者の名を冒頭に細注して地の文の中に書下す事なし。此の文體や實に寫實小說として此の作を成功せしめし要素な

り。蓋し、文體は思想を盛る容器なれば、或る思想には必ず最も之に適する文體あらざるべからず。委曲周匝なる新時代の思想を以て、觀察微細に入る寫實の筆を振はんとするに方り、讀本人情本の文體は到底之に添ふを得ず、乃ち顧みて一新文體を需めざるべからず。言文一途の新體は即ち此の目的に對する最初の試みなりしなり。而して二葉亭が此の體を用ふるや、時に冗漫の嫌なきに非ずと雖、概して洒脫にして才氣に富む。特に自然を叙するや、在來の文學に見るべからざる清新の趣味に滿ち、第三回の月光を寫す所、第七回上野の秋色を描くあたり、楚々として人に迫る者あり。

內容形式兩方面に於ける『浮雲』の得失は畧之を盡しぬ。蓋し作者は固と露國文學に通ぜる人、其の露國小說を讀破せる眼を以て『小說神髓』の所說を玩味し、其の神を持し來りて之を獨得の彩筆に寓し、以て空前の作を成せり。而も其の態度は、春の屋が尙戲作者の風を離れざりしに反し、純然たる文學者の態度を以てしたりき。

逍遙、四迷の二作家出でて明治小說壇の風潮は一變し、所謂寫實の風天

下を動かして起り、新小説の曙光爰に輝き出でぬ。事は十八年より二十二年の間に在り。

三、飜譯

泰西小説の飜譯は既に『花柳春話』に其の基を開き、爾來歴史小説政治小説の飜譯少からざりきと雖、前章に述べしが如く、此等譯者が之に對する態度は、多くは政論家の其れにして純然たる文學者の其れに非ず。其の種類に至りても、傳奇的の一面に限られて、寫實的方面の者未だ起らざりき。且譯筆の技倆の如き、頗る疑ふべき者ありき。逍遙は此の方面に於ても亦卒先して手を下し、純然たる文學者の態度を以てリットン卿の『リエンジ』を譯し『開卷悲憤慨世士傳』と題して世に示しぬ。然れども此の譯の内容は依然として歴史的なれば、之を新飜譯の曙光とせんより、寧ろ在來の飜譯が一轉して斯壇の過渡期に入らんとする際の所産とせん方適當なるを覺ゆ。其の內容に寫實的傾向を取り、其の形式に比較的忠實洗錬の譯筆を揮ひ、專門文學者の態度を以て之に對したる新飜譯小說の曙光は、實に思

軒居士森田文藏の作なるべし。而して此の氣運を鼓吹するに與りて最も力ありしは、即ち雜誌『國民の友』なりき。

二十年春『國民の友』は德富蘇峰によりて發刊せられぬ。政治、文學、宗教、社會の各方面に亘りて清新放膽の評論を試み、當時世に存せし總べての他の評論雜誌を壓倒して、獨り文壇に雄視せしが、特に純文學の趨勢を觀察して新氣運を鼓吹し、或は文學欄を設け、或は春夏二期に文學附錄を添へて當代作家の粹を集め、以て泰西文學の輸入、新文學の興隆に努力し、爾來『柵草紙』の出でし頃まで、隱然たる文學の保護者たりき。

思軒『國民の友』に據り、主として飜譯の方面を擔當し、載せし所の長短篇少からず。佛國ジュール・ベルヌ作『鐵世界』(二十年)及び『大東號航海日記』(二十一年)同ユーゴー作『瞽使者』(同年)『探偵ユーベル』(二十二年)、及び『哀史』、其の他チョツケ、ヂッケンス等の小品、總て彼れの譯筆は間々『報知新聞』に揭げたるもあれど、概ね、『國民の友』に出でたり。就中『探偵ユーベル』と『瞽使者』とは最も世に喧傳し、居士の名爲に文壇に高く、

遂にはユーゴーの紹介者、佛文學の輸入者として之を仰ぐに至りぬ。是に於てユーゴーの名一時斯界に重く、從來の飜譯界を獨占せる觀ありしリットンを壓して立ちぬ。此の間の消息は不思議にも創作界に於ける政治小說と寫實小說との消長と其の步趨を同じうす。勿論ユーゴーは所謂寫實派の詩人に非ずと雖、其の主觀的、感情的、個人的傾向を有する點を以て、彼の客觀的、理性的、社交的傾向を有する歷史的小說に對照する時は、恰も前二者の關係に似たる者あり。とにかく佛文學輸入の端緒は思軒によりて開かれ、曩に民權自由論の當時、中江兆民の筆によりて僅かに其の片鱗を見得たる佛文學は續々紹介せらるゝの運に向へり。然れども、思軒の飜譯は總べて英譯よりせる重譯なれば、絕世の才筆と雖、佛文學の眞趣を傳ふること恐らくは難し。況んやユーゴー其の人は、內容の高尙ならんことを求むると同時に、形式即ち文章の完全無缺ならんことを力めたるに於てをや。且思軒の文體は漢文調洋文直譯體にして、當時に於てこそ、能く泰西文章の情趣を傳へたりと持て囃されて、模倣者も尠からず生じたれ、有り體に

言へば、文字粗大に過ぎて精緻の情想を寫すこと難く、剩へ多少の誤譯あるを否む能はざりき。されば思軒は決して成功したる飜譯家に非ざると同時に、崇拜者の言ふ如き佛文學の輸入者に非ず。要するに尙純然たる新文學者たるに缺くる所あり。其の出所の政治小說家と等しく三田塾に養成せられたる新聞記者たるに於ても、其の文體の當時新聞文學者の共通文體たる漢文調を擺脫せざる點に於ても、正しく其の半身を過渡時代に置けりと言ふべく、恰も創作壇に於ける『書生氣質』の地位を占めたり。若し夫れ『浮雲』の地位を占むべき者に至りては、再び二葉亭四迷を推さざるべからず。

廿一年四迷は『あひびき』を『國民の友』に、『めぐりあひ』を『都の花』に出しぬ。共に露國小說家ツルゲネーフの短篇なり。譯筆『浮雲』に似て縱橫委曲、情趣盡さざれば止まず。而もよく歐文の調を存して直譯體の詰屈を脫し、一脈淸新の思想聲調を寄與して、文壇に貢献する所甚大なり。譯者は本邦に於ける最初の露國文學紹介者たるのみならず、飜譯界全般に

對して一新紀元を開ける者にして、爾來斯壇の氣運初めて動き、各國詩文の譯筆徐々として起りぬ。

斯くの如きは新體詩、小說及び飜譯の三方面に於ける曙光の概觀なり。事は十五年より二十一年に亘り、就中十八年以下三年間の現象に屬し、二十年以後盛運の基を開けり。然れども其の他の文學、即ち劇詩、俳句、和歌等は其の新曙光を現はすこと稍遲かりき。劇詩に在りては、依田學海、福地櫻痴の作を過渡として、二十八年逍遙が『桐一葉』を公にするに及びて初めて現はれ、俳句に在りては、所謂過渡の產物なる者無く、二十五年正岡子規出づるに及びて突如新光を漲らせ、和歌に在りては、落合直文等の作を過渡として二十八九年の比始めて現はれぬ。されば之等に關する詳細の叙述は暫く之を後節に讓り、先づ、曙光を放ちし三種の文學に就き、其の發展の跡を尋ねんとす。

第二節　寫實小說の興起

文學思潮革新の運動ありて以來、各種の新文學の陸續興起しける中に、獨り群を拔いて進步の先登に立ちしは、即ち『書生氣質』『浮雲』の後を承けたる寫實小說なりとす。而して此の氣運に乘じ、或は之に鞭つて一世を指導せしは、即ち尾崎紅葉、山田美妙齋、及び彼等を唱首とせる硯友社の人々なりき。抑も本邦寫實小說の由來を尋ぬるに、中古王朝の物語は概ね之に近く、降つて江戶時代元祿の頃、浮世草子の形を以て現れ、爾來八文字屋本となり、洒落本となり、滑稽本となり、人情本となり、以て明治文壇に移りしが、嚴格なる意義に於て寫實小說と言ふべきは、僅に西鶴等の作數篇に過ぎず。其れも馬琴一派の讀本に壓倒せられ、元祿時代一朝の榮華を止めて世は長へに傳奇小說の壇場なりき。此の時に方り、春の屋二葉亭、續いて紅葉美妙出でて遙に西鶴を紹ぎ、近く泰西小說の趣味を取り、以て新文壇に寫實の一派を開き、歷史小說全盛の勢を挫いて西鶴を九泉の下に喚起せり。

十八年春『小說神髓』世に出づるに先つ事正に二ヶ月、大學豫備門在學

の尾崎紅葉、石橋思案、山田美妙齋、丸岡九華等、好文の士相集まり、文會を結びて硯友社と名づけ、各自創作の小說、戲文、紀行、俳諧、都々逸、端唄等を集めて『我樂多文庫』と題し、相批評して以て文學の研鑽に勉めぬ。爾來同志の社員漸く加はり、十九年末には川上眉山人、巖谷漣山人、江見水蔭、岡田虛心亭、廣津柳浪、喜多川麻溪等十數人を增すに至れり。斯る間に新文學勃興の機運漸く熟し、春の屋、二葉亭相繼いで立ち、『國民の友』又發刊せられ、寫實小說の持囃さるゝ世となりしかば、二十一年遂に『我樂多文庫』を印刷發賣する事となし、五月第一號を出せり。之を新文壇に於ける文學專門雜誌發刊の嚆矢となす。當時此の雜誌の體裁組織等は柳北の『花月新誌』と相距ること遠からず、載する所、上述の種類の外、新體詩、狂歌、川柳等、所有純文學及び文界批評にして、或は言文一致を以てし、或は雅俗折衷を以てし、總べて「戀と淚とを硏究」するを以て窮竟となす。而も尙微々たる小冊子に過ぎず、作物未だ文壇を動かすに足らざりしも、社中の同人悉く大學豫備門、獨逸協會學校其の他に於て新教育

を受けたる年少氣鋭の士なれば、概して英語若くは獨語を解し、十九世紀學術の一般を覗ひ、泰西純文學の面影を知り、從つて其の述作にはおのづから新趣味現はれ、文體、修辭、句讀、記號を始め、全體の調子悉く明治の新彩を帶びたり。加ふるにこの新衣の下には江戸文學の深き愛好と巧なる模倣とより出でたる固有風尚の醇なる有り。されば彼等が寫實の筆を振ひ、戀と涙とを以て青春の思想に投ずるや、此等の作、大に青年の間に行はれて、隱然『浮雲』以後の小說壇を支配し、當時の批評界は硯友社を目するに文界の梁山泊を以てするに至りき。げに硯友社は啻に當時に於て梁山泊たりしのみならず、爾來長へに斯壇の一大勢力にして、社中の作家盛名を後日に馳せし者少からず、二十八九年に至る迄の我が文學界は、殆ど其の壇場たるの觀ありき。而して社中殊に秀でて之が牛耳を執り、當時直ちに文名を爲しゝ者は、即ち美妙齋主人と紅葉山人となりき。

美妙齋

『我樂多文庫』の發行に後るゝこと三月、山田美妙齋、其の短篇小說集『夏

木立』を出して盛名を文壇に馳せぬ。美妙齋は東京の人、紅葉思案等と硯友社を結び『我樂多文庫』に從事せしが、尙雜誌『以良都女』（二十年刊）を出し、讀賣新聞にも寄稿して短篇の創作を公にしたりしより、舊稿新作取り交ぜて總べて六篇、合して『夏木立』とは題せるなり。就中『籠の俘囚』は、沙翁の詩篇『レイプ・オブ・ルウクレシアス』に倣ひて、古羅馬のアッピアスとバージニアとの物語を綴りし者、『花の茨、茨の花』は骨を獨逸に取りたる牧歌風の小品、『柿山伏』はモリエール風の諷刺的滑稽物、『膃肭金剛石』と『仇を恩』とは、一は滑稽、他は可憐の御伽物、最後の『武藏野』は、材を南北朝時代に取り、武藏野に於ける新田一族の悲劇に織り成されたる一條の哀話を寫しゝ者なり。總べて歐文趣味の横溢せる斬新の言文一致體を以て瑰麗の文字を行り、本邦文壇未だ見ざる抒情詩的色彩を小說の作品に現はし、讀む者をして泰西ロマンチック詩人の作品に接する思あらしむ。思ふに『夏木立』の諸篇は、寫實的潮流の裡に成り出でしこと勿論なりと雖、『浮雲』の寫實とは大に趣を異にする者あり。『夏木立』には明

治思想の一面を代表すべき園田お勢の如き性格を見ること能はず、新舊思想の衝突を表はすべきお勢母子の爭論を見ること能はず、はた心裡の煩悶を解剖すべき內海文三の如き人物をも見ること能はず。唯『柿山伏』の一篇に、三十未滿の青年にて古今東西の文學を丸吞にせる一政治小說家を主人公となし、當時の政治小說の趣向と文章とを罵倒して完膚なからしめ、新聞記者輩の作品を諷刺して痛切を極むる有るのみにて、他は皆幽韻縹渺たる抒情詩の境に入り、『籠の俘囚』のバージニア、『花の茨』の羊飼兒、『武藏野』の秩父民部及び忍藻の如きは宛然詩中の人物なり。之を當代寫實小說を代表せる者としては、固より『浮雲』の匹儔に非ざるなり。

遮莫『夏木立』の本領は內容に在らずして寧ろ形式に在り。其の文壇讃美の中心となりしは、思想の卓絕なるに由るに非ず、文章の淸新瑰麗、遠く俗流を拔けるに基づく。言文一致は『浮雲』以來珍しからずと雖、文脈の上に著しく歐文の組織を交へ、情景を敍ぶるに聯想想像の頗る廣濶なるを以てし、又各種の譬喩を縱橫に使用する等に至りては遙に『浮雲』を凌

ぐ。特に擬人法の如きは、啻に非情物の擬人のみにあらず、進んで抽象概念の擬人に及び、宛然洋文を讀むの感あらしむ。例へば、「夜は根城を明け渡した。竹籔に伏勢を張つて居た村雀は新に軍議を開き始め、闇の隙間から斫り込んで來る曉の光は次第に四方の暗を追ひのけ、遠山の角には茜の幕がわたり、遠近の溪間からは朝雲の狼烟が立昇る」(武藏野下)といふが如き、到底在來の文學に見るべからざる脩辭上の技巧となす。作者が文章に留意せるは『柿山伏』に政治小說者流の文章を諷刺せるにも著るく、特に『夏木立』のはし書を見るに、其の苦心亦鮮少に非ざるを知る。彼の述作は常に斯かる硏究の結果として現はれ、絕えず新なる意匠を世に提出す。彼が其の儕輩を超えて一朝盛名を得し所以亦此の點に存す。

『夏木立』發售の頃、美妙齋硯友社を去りて獨り文壇に立ち、二十一年「都の花」に「花車」を連載し、翌年『國民の友』春期附錄に「胡蝶」を出し、「ぬれ衣」を單行し、續いて『都の花』に「此の子」及び「いちご姫」を掲げ、獨得の文章を以て益〻文名を博しぬ。就中「胡蝶」は當年の傑作、紅葉

の『色懺悔』と共に一時文壇を動かしゝ者にて、材を平家の末路に取り、戀と忠義との衝突に煩悶懊惱せる一少女胡蝶が悲劇的運命を描き出でし可憐の小說にして、其の趣「武藏野」に似て脚色一層複雜に、主人公の人物一層明瞭に、其の運命一層劇的なり。文章は得意の言文一致體、斬新豐麗の致を儘にす。

斯くて言文一致の文體は文壇の歡迎する所となり、矢崎嵯峨の舍を始として之に倣ふ者少からず。彼等の努力によりて種々彫琢せられ、粗笨なる口語も漸く醇化せられんとす。而して之を導て能く圓熟渾成の城に至らしめし者は、即二十七年以後に於ける紅葉及び其の他の小說家の力なり。

紅葉

明治文學史上の巨像尾崎紅葉は東京の人、十八年大學豫備門在學中、十九歲の青年を以て硯友社の牛耳を執り、「江島土產貝屛風」と題する一九流の戲文を處女作として、「風流京人形」「紅子戲語」等數篇の滑稽物を『我樂多文庫』に掲げぬ。然れども之等は尙同志間の硏究試驗の作に屬し、未だ以て

紅葉の文名を爲すに足る者を含まざりき。斯かる間に美妙齋『夏木立』を出して才名江湖に布きしかば、紅葉之に劣らざらんとし、奮つて斬新の作物に從事し、遂に二十二年美妙齋の『胡蝶』と時を同じうして『色懺悔』の一篇を得、乃ち之を世に問へり。

『二人比丘尼色懺悔』は此の年創刊の小説叢書『新著百種』の第一編として出づ。時代を說かず場所を定めざる一種の時代物なり。木枯吹きすさぶ山里の伏庵に、惜しや花の盛を墨染の衣に包みたる主客二人の比丘尼、身にしむ夜寒を紙帳に避けて語らふ中、緣なればにや迭みに懷かしくて身の上を明かす。主の尼、賴む夫の討死に惜からぬ命を長らへて亡き跡を弔ふ由を語れば、客の尼は振分髮の許嫁、悲しや戰國の習とて敵味方にうち分れ、鎬を削りて戰ふ中、懷しき其の人は傷きて我が方に病を養ひしに、義理と恩愛と忠義とに身を責められて、白刃一閃あへなくなりにし由を物語る。茲に二人の戀人の同一人なる事現はれて互に驚く時、板戶洩る日影白くほの〴〵と明くる一夜。是れ其の梗概なり。而して之を寫すに、雅俗折衷に

もあらず、言文一致にもあらぬ、記號に富める一種異樣の文體を以てし、之を彩るに彫琢の致を極めたる絢爛の文辭を以てし、製本の意匠を凝して世に出でぬ。世評は嘖々たり、褒貶自ら在りと雖、概して許すに當年の傑作を以てし、或は『胡蝶』にも勝れりと稱せられき。

之を作者の側より見れば、此の篇は美妙齋に對する紅葉の競技なり。彼が從來の戲筆を棄てて所謂「淚を主眼とする」時代物を作りしは、或は人目を一新せんとするに在りしか。其の文體に多大の苦心をなして變風を創始せるは、亦是れ美妙が言文一致に對する抗爭と見るべし。脚色に奇巧を求め、人物の類型を脫せざるは、從來の傳奇小說に於ける通病にして、此の作亦之に洩れず。勿論讀本合卷に比ぶれば、人物事件多少自然の風姿を帶びたれども、性格歸趣茫として尋ぬべきなく、絕えて時代精神の面影を認めず。然れども其の文章に至つては、洵に當代の逸品、『色懺悔』をして重きを斯壇に爲さしめし所以の主たり。修辭的技巧は暫く措き、文體の側より見れば、先づ地の文と對話と其の體を異にすること『書生氣質』等の

如く、對話は淨瑠璃體に俗話調を混じたる者、地の文は雅俗折衷の變體にして、簡潔なる文句を種々の句讀、記號を以て繫ぎ、各語句は概ね思想の上に印象を殘すべき中心概念を提出するのみにて、他は一切之を讀者の想像に任せ、省畧縱横、屢〻論理文法を破り、其の手法頗る斬新なり。此の變體は、言文一致雅俗折衷共に好ましからざるよりして、苦心慘憺の末に得たる者にて、思ふに紅葉が私淑愛讀したりし西鶴也有が俳文に學びて、其の簡潔と餘情とを取りしなるべし。

西鶴復活の氣運は此の時より漸く熟しぬ。此の事や固と紅葉一派の作者が私淑する所あるに出づと雖、之を文壇の趨勢に見る時は、おのづから二三の因緣を數へらる。第一は當時古文學復興の大潮流が西鶴に及べる事、第二、寫實的傾向の傳播と共に、寫實家としての西鶴の價値の認められし事、第三、言文一致體の弊に倦みて理想に近き文體を西鶴に得し事即ち是なり。先づ古文學復興の潮流は前章既に其の大勢を述べし如く、和歌和文より院本小說の類に及び、秤史出版社は夙く馬琴物を飜刻し、叢書閣は次

いで近松の戯曲を飜刻したりしが、是に至りて元祿時代文學の一明星たる西鶴に向つて尙古の眼を放ちしなりき。次に逍遙以來寫實を以て旗幟とせる作家が寫實家の典型を我が固有文學に求むるや、春水の妖冶三馬の奇警、可ならざるに非ずと雖、西鶴の着眼警拔觀察銳利、巧に世態人情の一部を描き、社會裏面の消息を寫す筆力遙に之に超えたるを以て、衆目の觀る所期せずして之に就きぬ。第三の文體に關する西鶴の特長は、彼れの崇拜を一世に瀰漫せしめし最大の動力なり。是より先き、美妙齋の言文一致體の出でしや、天下其の新彩を謳歌せりと雖、其れには委曲精緻の得ありて動もすれば冗漫繁瑣の失あり。揮灑自在の利ありて往々含蓄餘韻に乏しき弊あり。且語句の末、概ね同一の語尾に終るを以て、文勢おのづから單調に流れ、勁健の風を缺き、又平談俗話に近きを以て、章句おのづから雅致に乏しく、品位亦足らず。是に於て新しき人情と新しき世態とを寫すべき唯一の文體として採用せられたる言文一致體は、其の試驗の最中に於て、早く既に弊に堪へずと見做され、彫琢醇化の致を極め盡さざるに方り、既に

世に見離されんとす。而も之に代るべき好文體は果して文壇に存せりや。讀本體を取らんか、其の緩漫なる七五調、懸詞文字鏁の連續を如何せん。滑稽本體を取らんか、含蓄風韻に乏しくして卑野猥雜に傾くを如何せん。獨り西鶴の筆致、平民的にして、奇警簡淨、輕妙の趣を具へ、文辭卑近にして含蓄甚だ饒し。古今文學の中、若し明治の世態人情を寫すに足る文體を求むべくんば、西鶴を措いて他に在らざるなり。是に於てか西鶴を呼ぶ聲は、夙く『夏木立』に見え、續いて『色懺悔』を評せる批評家に現はれ、紅葉の好尚に著はれ、遂に幸田露伴が『國民の友』に西鶴を論ぜる頃（二十三年）に至りて殆ど興槃の口に上りぬ。

此の時より紅葉は西鶴を基礎とせる新なる雅俗折衷體を編み出で、暫く逍遙したりし傳奇的世界を去りて現實的世界に歸り、『色懺悔』に試みし時代物を棄てて直ちに『浮雲』の跡を追ひぬ。爾來二十七年の頃に至る迄、『文庫』『小說群芳』『國民の友』『都の花』『讀賣新聞』『聚芳十種』及『江戶紫』等、新聞雜誌叢書に出せる幾多の小說は、作意文體一として西鶴の影響を

受けざるはなし。二十三年『國民の友』に掲げし「拈華微笑」『新作十二番』に出でし「此のぬし」、『讀賣』に出でし「夏痩」「新色懺悔」、二十四年『都の花』に出でし「二人女房」、『讀賣』に出でし「伽羅枕」「おぼろ舟」「むき玉子」、二十五年『讀賣』に出でし「三人妻」、二十七年同新聞に出でし「心の闇」等は、該期間に於ける佳作と稱せらる。

『二人女房』と『伽羅枕』とは、西鶴の影響の下に立てる紅葉の作を代表する好箇の標本なり。前者は官省の裨吏を勤むる士族の娘二人が緣談より結婚懷姙に至るまでの運命を叙し、姉は美、妹は醜、姉は伊達、妹は地味、性情異なるに從ひて好惡を異にし、姉は官吏に歸ぎ、豪快一時の夢にして家道零落、姑小姑の嫉惡に苦勞絕間なく、妹は幼馴染の職工に歸ぎて平和幸福に世を送る狀態を描き、二者最後の運命に大差を來せる始末を明にせり。後者は傾城佐太夫とて一代に鳴りし廓女、今は六十歲の媼となりて、昔十四より二十までの泥水生活を懺悔せる體にものせし者。「芳き名を傳へずば、あられぬ者にてもあれ、世に知られん」と思ひなりし意氣あり張あ

る佐太夫が、「仔細あつて黄金を好まず、好男子を好まず、一癖者の名は廓中に隱もなし。情意氣張づくにしては随分此の命を吝まず、見事立派と言はるゝ程の事をしてのけ、死後末代まで吉原の佐太夫はと、黄金一式の遊女を男の怨言の中に引かれたき身の本願」と揚言しての傾城生活、名殘なく寫し出されたり。二者共に西鶴の筆意に學びたりといへども、「一人女房」は其の作風體裁に幾多の新味あり、地の文と對話とを分ち、作中人物の心理解剖を試み、其の精緻ならんことを求むる極、往々談理の筆を執つて說明の域に入ることなどもあれど、總べて所謂模寫小說の系統を引きたり。且西鶴の作は其の歸趣茫として尋ぬべからざるに反し、此の作はおのづから一篇の歸趣有り。姉妹の運命に寄せたる作者の人生觀、狹小なりと雖存す。其の西鶴に則りし所は、見來れば偏に文章に集まり、文致酷似するの極、往々利弊共に學び、輕妙達筆の利あると共に、文情冷靜、一味同情の溫きを缺くが如きところなきにあらず。

此の傾向は『拈華微笑』『此主』より『新色懺悔』に至りて益〻烈しく、遂

には文致のみならず、内容即ち思想まで、西鶴の得失併せ學ぶに至れり。蓋し西鶴は熱烈なる同情を以て自然と人生との種々相を描寫せる作家に非ず。彼は諷刺家なり。社會の一部に向つて鋭利なる觀察眼を放ち、恰も利害相關せざる傍觀者の如く、冷々として之を評し去る。而も其の社會の一部分なる者は、不幸にして當時の煩惱界、特に色慾境なりき。斯くの如きは即ち西鶴の特徴にして、紅葉は其の得失共に之を學べりしなり。而して其の學ぶや、素と文章筆法に始まりしも、形式と内容とは峻別すべき者ならず、形おのづから心を誘ひて、終に其の思想をも模倣するに至れり。『伽羅枕』の如きは即ち想形共に純然たる西鶴の模倣にして、此の傾向の絶頂に達せし者なりき。

『伽羅枕』は新思潮に觸れたる明治の人生の眞相を描きしにもあらず。明治文明の具體的批評にもあらず。又作者胸中の或觀念の社會現象に映發せる者にも非ず。はた性格の特殊なる者ありて、之より生み出されたる事件の變化を示せるにも非ず。唯、彼の人生の一面なる花柳の煩惱界に向つて鋭

利精緻なる觀察眼を放ち、傾城社會の豪傑、意氣と張りとの權化、粹道の神としての佐太夫を寫し出しゝのみ。而も其は明治以前の事、元祿以來醞釀し來りし大都の花街生活及び花街氣質、即ち從來戲作者の寫し誇りし所を描きしのみ。畢竟是西鶴の餘唾、戲作者の境地にして、見來れば宛然たる紅葉の『好色一代女』なり。されば明治の寫實小說としての價値は寧ろ『二人女房』の下に在るべし。然れども文章は實に模倣の妙を極め、長篇恰も無縫の天衣の如く、一部として弛廢を見ず。其の輕妙簡勁の運筆、特に每回結末の急轉直下、輕く切り上ぐるあたり、優に西鶴を凌ぎ、瀟洒妖麗を以て當代に鳴りぬ。

西鶴模倣は『伽羅枕』に至りて極まりぬ。『朧舟』『むき玉子』(『二人女』の中)以後の作に至りて文章思想漸く一家を爲さんとし、西鶴的なる形と想との中、おのづから紅葉の特色を帶び來れり。『朧舟』と『むき玉子』とは、昔氣質の二親に育てられ、氣立優しくよろづ內わに、而も情厚くて容顏なき佳人が、貧に迫られて親思ひの一念、何も世ぞと諦めて奉公に出づる悲

み、終に前者のお藤は妾となり、後者のお喜代は繪師の模型女となりし始末を寫し、『三人妻』は所謂明治紳商の一型とも見るべき葛城餘五郎に仕ふる三人の嬖妾を描ける長篇にして　お才は固と藝者の中の藝者と世間に知られ、意地飽くまでも強き江戶張りの才藏が、葛城の巧計に脆くも根引せられし圍ひ者、紅梅は「初々しき中に無量の情ありて媚を作らぬに媚ある」地女のお角が、河竹の勤に等しき奉公先より望叶ひて葛城に引取られし嬖ひ者、お艷は美色を烙鐵に傷けもせで、二十四まで春を護りて指もさゝせざりし一淑女が、ゆくりなく色魔葛城の目に觸れて遂に其の漁色の犧牲となりにし寵妾、三人三樣の趣、其の性情の異なるによりて種々の波瀾を起す運命の變遷を叙し、『心の闇』は人を戀すれども遂げらるべくもあらぬ身の唯其の人の常乙女にて我に情をかけんことをあだに願へる座頭佐之市のあはれを寫せる者なるが、個々の人物に注目を價すべき新性格なく、描寫の對象情痴の世界を出でずと雖、尙『三人妻』の紅梅の如く、性情寫實の筆の渾成に近きあり。脚色に於ても、『むき玉子』の如き清新にして自然な

るあり。特に筆致の輕妙に附帶せる西鶴の弊、即ち筆に同情を缺き、涙を描くも哀を寫すも、其に冷酷なる批評的筆法に陷るの缺點を擺脱し、襲には、佐太夫が涙を揮ひ盡して今は世を茶にせる氣鋒は、寒く冷くして當るべからざりしも、お藤お喜代佐の市等に至りては、涙あり情あり、讀み來りて一種の溫みを覺ゆ。紅葉の作は斯くの如くにして西鶴を脱し、漸く自家の特色を發揮し初めぬ。

以上は紅葉が此の期に於ける作の大體なり。之を通觀するに、着筆概ね平淡の境に於てし、脚色に斬新なる者なく、人物に奇趣ある者なく、極めて平凡に極めて自然なる人情の妙用を寫せり。而して其の主人公を求むるや概ね女性に於てし、其の社會を描くや多く局部に偏す。舞臺は東京に於ける中流以下の社會を出でず。而も筆に上る所は殆ど人間の煩惱界に限らる。其の一生の艷筆を傾倒せし所は、即ち此の小範圍に於ける女性の種々相を描き、性情の自然なる發展を寫すに在り。思ふに紅葉は社會よりは寧ろ人間を觀察し、人間よりも寧ろ女性を觀察し、女子の性格よりも寧ろ其

の心理變化を觀察せり。故に當時に於ける紅葉の女性は、一として特異の性格を有するなく、一として時代の眞相を表すべき性格を備ふるなし。此の點よりすれば、紅葉は寫實家と稱せんには狹隘に過ぎたり。唯其の心理解剖を試るや、彩筆縱横、情緒自然の發展を窮め盡さずんば止まず。特に女性の弱點を描いて精緻を極めたり。紅葉は乃ち斯の弱點をお銀姉妹に描き、お藤お喜代に描き、お才紅梅お艶に描きぬ。就中後三者に就ての此の點の描寫は、委曲にして痛切を極め、張と意地とに名を賣つて、思ふ一人に情を立て拔く白金才藏も、此の弱點の爲に脆くも葛城の巧計に陷り、大家に仕へて歷々に立交り、容色百人に勝れたるに思ひ上りし鹽煎餅屋の娘紅梅が、遂に身を葛城に任するに至りしは亦此の弱點の致す所、況して彼の浮きたる世上の緣組とやらを嫌うて運命を琴の一技に托したりしお艶が、葛城の口車に乘せられておぞくも容姿を大都會に輝さん心驕りを起し、以て夫婦といふ事人の身にせずば濟まぬ契と思ひなし、更に色魔葛城に對する終天の恨を吞んで之に從ふに至りしが如きは、此の弱點の最剴切に表さ

れたる者といふべし。然り、作者の筆は此の方面に於て成功の域に達せり。然れども、此の弱點や個性の發現にあらで婦人通有の情緒なり。人情自然の歩趨を追うて女性心理の解剖をなさん者の必ず到達すべき結論なり。故に此等の作は、女性を描けりといふよりも寧ろ女性の情感を寫せりといふべく、情感の種々相を寫せりといふよりも寧ろ其の通有性を描き出でたりといふべし。

斯くの如きは、當時文壇の梁山泊たる硯友社を率ゐたりし紅葉の概觀なり。顧みて該社の諸豪を歷觀するに、概ね社中一流の艶筆を以て少からぬ述作をなせりと雖、未だ大名を世に馳するに至らず、未だ自家の特色を構成するに至らず。然れども其の二三子既に紅葉と雁行せんとする者なきに非ず。巖谷漣山人、石橋思案外史、廣津柳浪、川上眉山人の如き即ち是なり。

漣山人は東京の人、又大江小波と號し、瀟洒輕妙の筆、善く可憐なる年少男女を描き、概ね純潔淸秀の趣を帶ぶ。二十二年『新著百種』に出でし

「妹脊貝」を始として『片糸』『友禪染』等、當時の作皆此の類なり。山人の特色爰に在るを以て、適する所は小説よりも寧ろ少年文學に在り。されば二十四年『こがね丸』を作りし以來、自家の本領に向つて歩を進め、小説の筆を措いて御伽文學の方面に染め、或は少年雜誌に執筆し、或は古來の昔噺を編輯し、或は內外東西の御伽噺を紹介し、輕妙流麗の筆を以て此の方面に貢献する所少からず。遂に少年文學の壇上に獨尊の名を擅にしたりき。然れども山人の製作は、少年文學として決して上乘の者に非ず。蓋し少年文學は其の情趣清高にして溫き同情の溢るゝ者無かるべからず。然るに山人の作、輕妙餘りありて浮薄に陷り、瀟洒餘りありて眞面目を缺き、所謂江戸式恬淡の氣象横溢して熱烈なる情味に乏し。且作者が好んで用ふる滑稽は、往々駄洒落落語の域に入ることあり。故によく少年をして笑はしむるを得べきも、よく樂ましめ、よく淸からしめ、よく高からしむるに至りては未だ完璧を望むべからず。唯少年文學の先達として明治文壇の異彩たるに至つては、特筆して傳ふべきなり。

思案外史は同く東京の人、前者と等しく言文一致體を以て小說の作をなし、又滑稽文を善くして屢〻駄洒落を交へたる批評文諷刺文をものしき。「新著百種」に收めたる「乙女心」「小說群芳」に收めたる「京鹿子」等は創作中の佳篇と稱せらる。惜い哉秀才遂に伸びず。一時『我樂多文庫』に盛名を博せしのみにて彼れの時代は去り、爾後唯筆路の輕妙を讃美せらるゝのみなりき。

柳浪も亦東京の人、其の小說を公にせしは、蓋し二十一年自己の經營にかゝる雜誌『大和錦』に掲げたりし「二おもて」に始まる。次いで『新著百種』に「殘菊」をものし、爾來『いとし子』『糸の亂れ』「五枚繪姿」等數篇を出しゝが、未だ大なる成功を見ざりき。されど「殘菊」の如き、人情の極めて深刻なる一面を描き、煩悶あり苦鬪ある境遇に於ける情緒の活動を寫して、美妙紅葉以外に觀察着筆の新なるを出し、以て後來大に發達すべき作者の特色を萠し初めたり。「五枚繪姿」亦此の系統を引いて、生ひ先の有望なるを示せり。

眉山人は亦東京の人、二十三年大學を退きて專ら文筆に從事し、夙に筆力の雅健なるを以て著はれ、『我樂多文庫』以來、也有許六の俳文に學びて、瀟洒艶麗の中一種の澁味ある文章をものし、以て紅葉と併稱せられたり。然れども二十二三年の頃、『黄菊白菊』『雪折竹』『墨染櫻』等より二十八年に至るまでの小說には、未だ名作として傳ふべきなし。玆に唯其の筆力を稱へて發達を後日に見ん。

以上四家の外、尙江見水蔭、丸岡九華、岡田虛心亭、渡邊乙羽、中村花瘦等あり。『我樂多文庫』及び其の改題『文庫』を始め、『新著百種』『都の花』『文學世界』『小說百家選』等に多少の創作を出せり。

露伴

紅葉が硯友社を率ゐ、雅俗折衷體を採りて寫實の大旆を飜すや、美妙齋は『胡蝶』以來の作亦往時の觀無く、紅葉獨り群作家の上に立ちて小說界を指導したりき。此の時に方りて、同じく西鶴の文體を學びし一作家の起りて紅葉と馳騁せるあり。幸田露伴即ち是なり。

明治文壇の將星として文學史上に卓立する露伴は亦東京の人、二十二年の初、其の處女作「露團々」を『都の花』に連載し、續いて「一刹那」を『文庫』に掲げ、夙く一種の異彩を帶べる筆力を以て世人の注意を喚起したりしが、同年秋「風流佛」を『新著百種』に出すや、超邁の想と絢爛の筆と、二つながら時流を拔き、盛名一時に世に布きぬ。爾來「奇男兒」「對髑髏」(縁外縁とも題す)「眞美人」を經て、二十三年「國民の友」夏期附錄に「一口劍」を出し、二十四年『新葉末集』を公にし、二十五年新聞「國會」に「五重塔」を出すに及び、彩光益〻發揮して當代並ぶ者なき小說壇の飾りとなれり。

露伴の文章は言ふまでもなく西鶴に出でたり。彼が西鶴に私淑せるは、夙く『國民の友』に同情ある筆法を以て西鶴を紹介せるにても知らるべく、其の初期の作に在りては、作意文體共に元祿の面影を傳へたる者少からず。特に『一刹那』の如き、一刹那の中、心機一轉するを主題として人情の或一面を寫さんと試みたる小篇三を合せ、全然西鶴の作風を紹げり。奇男兒

『新葉末集』亦よく元祿の神を傳へ、『風流佛』に至りては更に靈動の妙を極め、「臨終正念違はず、安らかなる大往生、南無阿彌陀佛は嬌喉に粹の果を送り三重、鳥部野一片の煙となつて御法の風に舞扇、極樂に歌舞の女菩薩一員増したる事疑なしと、樣子知りたる和尚樣隨喜の涙を落されし」(第三回)と結ぶあたり、消化し盡せりといふべし。此の點に於ては露伴の筆は紅葉の『新色懺悔』『伽羅枕』と等しなみに元祿の模倣と稱するを得べし。然れども彼も亦紅葉の如く、永く模倣の域に止まらず、出でて一家を成し、自己の特色を發揮して雄を一代に稱へたり。而も其の文や紅葉と相距る雲泥、紅葉の妖艷に對して豪健、優麗に對して絢爛、兩々相照して限なき興趣を具ふ。而して其の筆力に至りては、情景並び寫して微に入り幽を闡き、警句屢〻口を銜て出づる所、美妙紅葉も之に及ばず。『風流佛』第九回、一向專念佛を刻む條、特に佛體を飾りし種々の花を削り去る所、續いては第十回、幻に現に戀人と語り、在りし昔を思ひ出でて無我夢中の境に入るあたり、若くは『五重塔』三十二回、夜叉王一齊に暴れ出す狀態を描いて凄壯毛髮

を堅たしむる條の如き、洵に渾成の美術たるを得べし。

斯くの如く露件は共の文章に於て旣に西鶴を離れたり。然らば共の內容は如何。紅葉は前述の如く形式と共に內容をも模倣し、後出でて一家をなしゝ時に至りても、尙所謂「女物語」の連續に元祿作家の面影を存したりしが、露件の構想は全然共の趣を異にし、世態人情の種々相を觀察して之を活寫せし西鶴紅葉の寫實の筆を學ばずして、常に作者の意志より出でたる一定の觀念を以て貫き、又情海に浮沈する所謂浮世女の生活を描ける西鶴紅葉の艶筆に學ばずして、好んで意氣あり情あり、總ての障害を燒き盡すべき熱烈の一念を懷ける男子を描けり。『風流佛』『一口劍』『五重塔』の如きは此の點に於ける好箇の代表者にして、技藝に對する無上の信仰と無限の熱愛とは全篇を支配する精髓たり。就中『五重塔』一篇最も世に喧傳せらる。江都の棟梁に川越源太とて江戶子の生粹名うての番匠あり。谷中感應寺の塔の建立を受負ひしが、爰に大工十兵衛、技倆は人に劣るべしと覺えねど、才氣足らねば、馬鹿よのつそりよと蔑まれ、名玉空しく源太の役

に服して光を潛むる者あり。之を聞きて執着の念止まず。濟まぬと知りながら意を決して恩ある親方の向に廻り、棟梁を已に引受けんと計りぬ。源太は江戸子腹の淸くさばけて讓歩又讓歩、遂に一切を擧げて十兵衞に委し、尙も從來の計畫調査の書類を贈りて助成せんと申出でぬ。然るに自己の技倆を確信せる一刻者、斷乎として其の親切を拒み、怒れる源太が意趣返しの宣言にも恐ぢず、源太が子分の暗擊に創を負ひしも屈せず、のつそりと嘲る數多の工人を督勵して遂に「金剛力士が魔軍を睨んで十六丈の姿を現じ、坤軸動かず足踏して巖上に立つたる如き」五重塔を造り出でぬ。落成の式近くなつて何事ぞや。「夜半の鐘の音、曇つて平日に似つかず耳きたなく」、滿天夜叉の一時に荒れ出し、暴風暴雨、天地晦冥、塔は搖ぎ、軋り、又撓む。十兵衞は立てり。やをれ彼の塔、倒るゝは愚か、釘一本拔け板一枚動く事あらば生きて居ようかと、生雲塔の頂に上りて勾欄を握み血眼開きて暗黑を睥睨せる樣凄じく、手には六分鑿今にも之を含みて十六丈を眞倒に飛び下りなんとす。而も風雨は止みぬ。生雲五層の巨塔は昂然として

屹立せり。江戸中の堂塔破れざるは無かりしを目にせる萬衆は、驚異の眼を以て十兵衞の技倆と熱中とを讃歎し、川越の源太も遂に屈しぬ。是れ五重塔』の梗概なり。一篇女物語を含まず父戀愛譚を帶びず。其の中心思想を構成する者は、技術家が其の技術に對する無限の愛着と牢固たる自信なり。其の精神的製作の自然界及び人間界に對する至大の權威なり。實に此の思想は、啻に『五重塔』の中心を形作るのみならず、廣く露伴の小説に入りて隨所其の中心となれり。試みに筆を復して『五重塔』以前の作を檢せん。

露伴の小說に現はれたる思想を知らんとする者は、先づ小說中の人物を見るべし。『新葉末集』の西村道也が多才多藝多情多欲の諸質を具へ、所謂粹道の神たる觀あるは、是れ恰も紅葉の『伽羅枕』に於けるが如く、元祿模倣の勢力が、文章のみならず、人物の性格にまで及びし者にして、むしろ露伴の眞面目に非ずと雖、尚心機靈活の妖物として、一片の意氣地沒すべからざる者あるは、即ち西鶴以外、此の作者の一特質なるべし。げに此

の意氣や、露伴の作を通じて存する人物の特性の一にして、『一刹那』の風流より『五重塔』の源太に至るまで、皆同一轍に出づ。一世武士の遊惰を憤りて、村政の一刀、朱鞘に黑漆もて、何時にても死に申候と記せし『奇男兒』の喜劍は、やがて針程も心に面白き事あらば命さへ奥れてやる男、人を救うて恩に着せるは犬の嫌なる『風流佛』の珠運なり。世に捨てられて世を捨てて、神を罵り佛を憤り、今世に若し正體在さば針の先で衝てやりたきまで心逼りたる『對髑髏』のお妙は、やがて釋迦を大詩人と稱へて世の短見者流を罵殺せる『毒朱唇』の女なり。三十二相具足の美人を需めて得ずんば天帝に決鬪を申込まんといきまく『眞美人』の主人公は、やがて無上の美詩を需めて世にすね我儘を盡せる『血紅星』の皆非居士なり。露伴の作中かくの如き意氣あり張あり、侠氣と奇氣とを併せ有する人物を見ざること稀なり。然れどもかゝる類型的性格は、ようせずば一種の性癖若くは傾向に陷り、一歩を誤れば單調なる任侠一式の人物とならんとす。當代の批評家『奇男兒』に讃歎する者ありきと雖、今日より之を見るに、

斯かる性格は決して露伴の價値を高うする所以に非ず。作者の中心思想を形作る人物に至りては、全然別種の性格に求めざるべからず。

別種の性格とは何ぞや。藝術に對する非常の熱愛を有する者即ち是なり。露伴が作に特有なる氣象は、即ち此の一技一藝に達せし人若くは之に憧るる人が、無限の執着と洪大なる同情とを以て其の技藝に對し、意力と情緒と二つながら高調に達して一身を之に抛つ所に存す　試みに見よ「眞美人」は一場の落語に過ぎずと雖、其の主人公は眞美に對する愛慕者なり。「風流佛」の珠運は自家の藝術たる彫刻に對する執著の念止み難き者なり。「毒朱脣」の女主人公は大詩人に對する深甚の同情を體現せる者なり。「一口劍」の主人公は鍛刀に對する狂熱的愛着を懷く者なり。「五重塔」の十兵衛は木の匠術に對し献身の執着動かすべからざる者なり。「血紅星」の皆非は唯、專念に詩を思ふ一個の畸人なり。「新葉末集」は元祿模倣の頂點ながら、尚脫俗の釜師淨珠老を點出するを見る。思ふに此等は總べて是れ一個奇嬌の性格、現實の社會に於ける普遍的の者に非ずして、其の一角に存する特殊の

氣質なり。而も其の描寫たるや、此等性格の忠實なる寫實的筆路に出でずして、悉く理想の熱火を以て陶冶醇化し、多少超世間的の色彩を有する者として描出する理想的筆致を取れり。此の性格や實に露伴の小說の中心思想を形作る重要なる者にして、彼の前條に述べし意氣俠氣の如きは畢竟一の屬性たるに過ぎず。然れども作者の想髓は、斯かる性格が現はす藝術家の自信と、自家の藝術に對する無限の愛着とのみにして止まざるなり。

作者が其の高調の詩筆を驅つて寫し出でし所は、進んで是等藝術家の精神的製作が永遠の生命を有する事と、其の作物の自然界乃至人間界に對して至大の權威を有する事との熱烈なる信仰に及べり。實にや吾生は須臾なり。蜉蝣に等しき人間が、斯の轉瞬の生涯に經營する所の者、孰れか亦須臾ならざるべき。人の力に出づる者一として不壞不滅なる者なきなり。一代の功業久しからずして跡方もなきは、恰も結びては消ゆる泡沫にも似たり。唯〻彼の藝術家の手に成り出づる精神的作物のみは、所有破壞の力に抗して永劫の世に活く。之を作り出でし人間其の者も之を破滅する力無く、

人力を超越したる大自然の力も之を破滅する能はず。露伴の小說が描ける究竟事象は即ち斯の信仰に外ならず。他の作家に在りては往々究竟事象として作中重きをなす戀愛の描寫の如きは、露伴に在りては決して其の要部に非ず。『風流佛』に見えたる熾烈なる戀愛は、其の描寫の妙、直ちに人の肺腑を衝く者ありと雖、畢竟永劫普遍の一靈作風流佛の一軀を得んが爲の所緣に過ぎずして、戀愛其の物の轉瞬の性質に對照して、益〻藝術品の永劫的性質を明瞭ならしむるを得るなり。

斯くの如きは即ち露伴の小說に現はれたる思想なり。『風流佛』『一口劍』『五重塔』は、皆此の思想を體現せる者にして、特に『五重塔』の十兵衞は上述性格の好箇の標本たるべく、彼の篇中の絕唱と稱せらるゝ暴風雨の一段には、作者が人天の關係に於ける信仰の明かに現はるゝを看取すべし。人は到底天に勝たず。而も往々天を瀆す者あり。飛天夜叉王一度怒つて是等瀆天の人間を膺懲す。當る者破壞せざる無く、人の經營せる者一として全きなし。唯〻高尙なる心靈より出でたる卓越の藝術のみ、獨り昂然として

之に動ぜず、天の威力も之に加ふる能はず、直立十六丈の生雲塔は長へに動かざりき。斯くの如きは固と是れ抒情詩の畛域に入るべき者、現實界の事象を醇化して高く理想の仙界に至る。等しく新小説の流を汲むと雖、硯友社一流の寫實小說とは相距ること頗る遠し。

是に於てか、吾人は彼の硯友社一派の代表者たる紅葉と比較するの甚だ興味あるを思ふ。夫れ紅葉は都市生活の寫實小說家なり。其の觀察の及ぶ所頗る狹隘にして、人物や舞臺や、常に作者主觀の限界を出でず。到底彼の人生の種々相を包括し、千狀萬態の社會人物を驅使する客觀的寫實の大筆力を望むべからずと雖、描寫の方法は頗る客觀的に近し。故に其の假作の人物は、假令作者の性格に似、其の主觀に入り易き範圍に限らると雖、悉く現實の社會に見らるべき性格にして、決して作者の意志を以て創り出でたる者に非ず。露伴に至りては全然趣を異にし、其の想を構ふるや常に一個の觀念の上に立ち、其の人物を描くや常に一個の理想の上に寄す。故に其の弊流れて脚色の單調となり、人物の一律となり、作者其の人の面影

至る所に光芒を閃出す。蓋し作者、學博く識高く、篤く藝術を愛し深く佛典に參す。されば人情を寫すや闡明詳に過ぎ剖析細に入り、作中の人物悉く酸いも甘いも嚙み別けたる悟道の人たらんとす。人情の僞多きを知りては一旦の恨に神を憤り佛を憤りし者も、飜然悟り來つて「浮世を見れば皆面白き人樣々、慘かりし昔時の胸の氷碎けて、東風吹く空に糸遊のあるかなきかの身も面白く、佛も可愛く凡夫も可愛く、天地に一つも憎き者なく」なりしは、獨り「對髑髏」のお妙のみに非ず、多くは諦め過ぎ悟り過ぎ、一度仙に入りて復俗に返りし聖者の如く、動もすれば世と相關するなき超絕界に入らんとす。是を以て當代の時尙に投ぜんには餘りに豫言的にして、又餘りに詩的なりき。知識ある讀者鑑賞家を代表すべき當代批評家すら、尙唯、筆力の妙をのみ稱へ、幽玄にして凡人の窺知すべきに非ずなど、無意義の讃辭を呈するに止まる。況や一般の讀者に於てをや。批評家は紅露二家を倂稱すと雖、之を時尙に係けて當代の中心作家を求むれば、露伴は終に紅葉の敵に非ざるなり。思ふに維新來文明史上の大事實たりし新舊思想

の衝突は、社會の外面的生活即ち政治經濟界に於て既に調和を遂げ、其の內面的生活即ち思想界文藝界に於ても亦漸く相融和せんとす。是を以て從來小說家の描寫の對象たりし新舊衝突の諷刺も、『浮雲』以來鋒鋩漸く鈍り、當時正に形成せられつゝありし明治の新生活の忠實なる描寫之に代るに至れり。紅葉及び硯友社派は恰も此の氣運を代表せるに似たり。斯くて人心漸く調和を感じ、餘裕を生じ、從て文學上の好尙粗笨を離れて精緻に趣き、諷刺のこちたきを避けて寫實の瀟洒なるを喜ぶに至りぬ。然れども其の調和や、未だ思を形而上に馳する程の安靜に到らず。其の餘裕や未だ藝術の權威を認むる程の深厚に達せず。露伴が藝術の愛慕、其の權威の信仰等の思想が、到底當時の民衆に解せられざりし所以、亦恐らくは茲に存す。

蓋し露伴の作は信念の上に立ち、道念の上に立ちて、文藝に對する熱愛を謳ひたる抒情詩なり。之を小說と言ふべくんば一個の理想小說なるべし。而も描く所は徹頭徹尾超絕的なるに非ずして、現實的事象と神秘的理想的事象との渾然融和せる者とす。斯くの如きは小說內容の一進轉步にして、

文藝鑑賞の資格ある國民が異日必ず一度味ふべき詩想に屬し、國民思想の調和一層進み、餘裕豐かなるに及べば、必ず這般深甚の意義を有する作物を要求すべきなり。畢竟是等は後來將に起らんとする小説界の一新時期に到る先驅にして、一般時尚に先つて此の詩的思想を鼓吹せし豫言的述作なり。げに此の豫言的特色こそ、露伴の作をして、時尚の如何に係らず、文壇に重きをなさしむる者なりけれ。

紅葉には硯友社一派の諸衞星ありき。露伴は恰も彗星の限なき大空を辿るが如く、孤影縈然として特異の軌道を廻り、決して露伴一派なる者を有せざりき。されば露伴に關する叙述は茲に之を終り、筆を轉じて紅露二家の圈外に立てる二三の小説家に言ひ及ばん。

其の他の作家

『書生氣質』に新小説の端緒を開きし春の屋おぼろは、此の期に於て亦二三の作を出せり。二十二年『國民の友』春期附錄に載せたる「細君」の如きは、寫實的に完璧に近き點に於ては、短篇なりと雖、遙に前者の上に在

りと言ふべし。

當時の小說界に於て、竹の舍主人饗庭篁村は、亦看過すべからざる一方の將たり。篁村は江戶の人、夙に「讀賣」に入り、後「東京朝日」に入り、小說隨筆及び劇評に筆を執る。其の小說の作、多くは短篇にして、八文字屋の戲作に近し。其の「讀賣」「新小說」等に載せたりし者、二十二年「むら竹」と題する叢書として出版し、同年尙「新著百種」に「掘出し物」を出し、「國民の友」に「良夜」を出し、單行本として「當世商人氣質」を公にし、翌年「新作十二番」に「勝鬨」をものし、其の他雜誌叢書に載する者少からず。當年の批評家、筆路の輕妙を賞し、描寫の洒脫を讃し、觀察の奇警を美し、紅葉美妙以外、明治文壇に一旗幟を樹つる者と稱へ、遂には篁村宗の日を生ずるに至れり。蓋し、篁村は世人が馬琴春水の外小說家あるを知らず、鯉丈魯文の外戲作者あるを知らざりし明治十年代の文壇に現はれ、八文字屋本を涉獵して深く元祿の昔を味ひたる才筆を以て「讀賣」を江湖に重からしめ、新泉居士太阿居士の名をして斯壇の異彩たらしめし

者なり。當時未だ元祿文學の何たるを解せざりし世人は、漫然此の異裝の文章を歡迎したりしが、幾くもなくして文壇元祿を呼ぶ聲漸く起り、美妙紅葉露伴の徒、復興の氣運を鼓吹するに方り、曩に其の眞趣を闡明せられざりし篁村の文章、茲に其の由る所を明にせられて益其の聲價を增し、遂に盛名を一時に馳するに至れり。然り、篁村の價値は是のみ。八文字屋一流の諷刺文を模倣せりといふに止まる。之を稱揚すべくんば模倣の筆の巧妙を稱せんのみ。明治の文壇を飾る作物たるに至つては與り知らざるなり。此の點に於ては『當世商人氣質』は蓋し其の傑作たるべし。總べて商人は地道に稼がん者成功すべしといふ平凡なる思想を八文字屋ぶりに述べたる所、模倣の上乘なり。故に篁村は飽くまで八文字屋ぶりを以て立つべき者にして、決して明治風を試むべきに非ず。若し世潮に連れて寫實小說の筆を執らんとする時は失敗踵を旋さず。彼の『掘出物』の如き、或は篁村の傑作と稱し、或は紅葉の『色懺悔』に勝ると褒する者ありと雖、其の趣向の平凡なる、其の人物の舊型を出でざる、到底新時代の描寫たるに堪へず。

加ふるに文章亦平素の輕妙を缺きて著しく稚氣を帶び、總體の調子其碩風の清楚を棄てて馬琴風の繫縛に陷る。畢竟篁村は舊思想の人、過去を知れる頭腦を以て舊思想の支配せる社會を觀察すべき戲作者にして、現在及び未來を知る眼光を以て新思想の支配せる社會を觀察すべき小說家に非ず。其の諷刺の筆を向くる所は、『浮雲』の如く新舊分子の衝突又は明治の新人物に在らずして、明治の御代に殘存する舊時代の遺物遺習に在り。而して此の特色を最も明瞭に發揮せる者を『むら竹』に收めたる百餘の短篇となす。要するに篁村は、舊文學の殿將、元祿時代諷刺家の面影を今日に示したる者に過ぎず。之を文壇の一異彩とするは可なり。然れども之を激賞して舊文學の筆致よく新時代を寫せりと言ひ、或は美妙紅葉に多く讓らざる小說家なりとなすが如きは、蓋し其の眞を失ふといふべし。

舊文學の系統を引ける作家の中、正直正太夫即ち齋藤綠雨は著しき特色を有する者なり。正太夫、文才早熟、十三四歲の頃既に戲文を草し、俳諧を作りて新聞に投書せしが、當時盛名ありし魯文の滑稽と諷刺とを歎美し、

其の門に入りて後日諷刺家たるべき素地を養へり。十七年『都新聞』の前身たる『今日新聞』起るや、魯文に從うて入社し、いたく社主小西義敬の愛する所となりき。此の時より綠雨は豪華を喜び、瀟洒を尙ぶ都人士となり、江東みどりの號を以て單純なる人情話を綴り、四六騈儷、詩歌發句を綯ひ交ぜ、濃艷華麗、七五の馬琴調を恣にせり。後二十三四年の比に至り、正直正太夫の名を以て諷刺家として現はれ『讀賣』などを舞臺として特色ある批評諷刺の奇才を遺憾なく發揮し、同時に小說作家として現はれ『かくれんぼ』『門三味線』『油地獄』の傑作を出し、盛名一時に世に布けり。前者は二十四年頃『文學世界』の第六卷として出で、一小篇に過ぎずと雖、簡淨流麗、精練の致を極め、綠雨作中の代表的逸品なり。中者亦苦心の作にして、最成熟せる感想と筆力とを見るべく、後者は同じく二十四年の作にして、比較的苦心を經ずして成り、而も世評最嘖々たりし者なり。總じて之を見るに、これらの內容は必しも大なる價値ある者に非ず、描寫の對象は下層社會に限られ、取材範圍は江戶の町家東京の狹斜に限られ、人物

は若且那雛妓等に限られ、總べて狹隘にして一種の特色ある部分にのみ共の鋭利なる觀察眼を向けたり。是を以て概ね同工異曲、舊文學の習氣を脫せず。共の精髓は上述何れか一篇に盡きたりといふべし。唯形體卽ち文章に至つては、綠雨の價値の主なる部分にして、或は巧緻烹煉の限を盡し、或は進んで淸淡瀟洒の境に入り、機鋒潑剌として才氣溢るゝが如き、亦一代の文章家たり。

吾人は又森鷗外漁史の名を忘るべからず。鷗外は固と飜譯家又は評論家として重要なる地位を占むべき者なるも、創作家として亦棄つべからず。二十三年『國民の友』に揭げたる「舞姬」『柵草紙』に載せたる「うたかたの記」及び翌年『新著百種』に載せたる「文使」の如きは、着想文章、共に作者が精通する獨逸文學の面影を移して、淸新幽高の趣致に富む。三篇共に天涯客寓の日本青年と、薄命可憐の獨逸少女との關係を描き、同情に富める本邦青年が少女の困厄を救ふに端を發し、熱烈なる愛情を懷ける少女が衷心の感謝を表はすに局を結ぶ。特に『舞姬』『うたかたの記』の二篇

は、青年が留學生なる事、少女が藝術に關係ある逆境の兒なる事、少女が青年に對する感謝の念終に發して熱烈なる戀愛に變ずる事等、殆ど其の軌を一にす。脚色斯の如く變化なしと雖、着想は純然たる新時代の者にして、確に明治思想の一面を傳ふるに足る。唯『うたかたの記』『文使』聊か本邦青年の思想生活に緣遠く、寧ろ西洋短篇の飜譯を見るの思あり、且小說よりも寧ろ抒情詩的趣致に富めりと雖、『舞姬』は全く之を擺脫し、心理描寫、性格發揮の一點など、當年寫實小說の間に伍して十分重きをなすに足る。憾むらくは、其の文章、品位餘ありて情熱足らず、委曲餘ありて勢力足らず。然れども情景並び至りて淸楚比ひなき所、一新文體を斯壇に寄與して、後來流行の源泉となりし功、亦沒すべからざる者あり。

　上述諸家の成人らしきに對し、矢崎嵯峨の舍（おむろ）は青春の情感漲り溢れたり。二十一年『大和錦』に小篇「薄命のすゞ子」を掲げ、次いで『都の花』に「初戀」の佳作を出しゝより、既に美しき夢の如き幼時の追想に無限の美感を懷き、可憐純眞の情趣を描きて幽玄の境に入る者あり。其

の好んで描寫せる女性は、無垢稚嬌、天女の如く、之に配せる男性は陰欝にして一種の悲觀を抱ける狷介の人なりき。彼の北邨散士の名を以て「國民の友」に掲げたる「流轉」の如きも亦此の陰欝なる觀念と純眞なる情緒との發露せる者、當年の傑作として「初戀」と共に懊惱の詩人たる彼れの面目を遺憾なく表せり。其の他『涙の谷』及び『都の花』所載の「腐玉子」「婿選み」等より二十四年『國民の友』に掲げし「夢現境」に至るまで、獨得の作あるに非ず、篇什の豐富なる者あるに非ずと雖、筆意一脈の情熱を帶び、高潔なる觀念を含みて、明晰直截、能く青年の肺腑を刺す。類を以て分たば、露伴と同じく理想小說と呼ぶべく、寫實の野に生じたる一異草として、性格世相の忠實なる描寫以外、情緒發動の一部を描いて、天眞流露、殆ど抒情詩の境に入る。而も其の抒情詩的色彩は、露伴の如く高遠にして理想的なる者に非ずして、熱烈にして哀觀を湛ふる者なり。露伴を以て、陽春白雪の詩を歌ふ者とすれば、彼は即ち月下相思の詩を賦する者なり。彼は又新體詩抒情文の作家として當時に重きをなせるを併せ見れば、

斯かる詩的情緒の特色の由來甚だ遠きを知るべし。

當年の文壇に多少の作を出しゝ小說家には、尙『藪の鶯』の作者、田邊花圃女史、『露子姬』の作者、石橋忍月、其の他宮崎三昧、須藤南翠、前田香雪、高橋太華、堀紫山人、渡邊霞亭等あり。或は『國民の友』『都の花』『新小說』『柵草紙』『日本の文華』等の雜誌に、或は『新著百種』『小說群芳』『新作十二番』『聚芳十種』『文學世界』等の叢書に、或は諸新聞に、或は單行本に、皆多少の創作を出せり。又滑稽趣味を以て現はれたる作家には南新二、幸堂得知等あり。戲作者の滑稽方面を傳承して多少共の品格を高めたり。明治の滑稽文學を導く先驅として必しも棄つべきに非ず。

鷗外(飜譯家としての)

終に臨みて飜譯小說の概觀を述ぶべし。曩に新文學の曙光を論ずるや、思軒の英文飜譯と二葉亭の露文飜譯とを以て之に擬しぬ。爾來小說の飜譯は、詩歌戲曲等、他の方面の飜譯と共に徐々として現はれ、森鷗外、內田不知庵、原抱一庵、小金井喜美子、若松賤子等の飜譯家を見るに至れり。

就中鷗外、獨逸文學の紹介者を以て立ち、二十二年以來の飜譯壇を双肩に荷うて二葉亭の後繼となりぬ。

鷗外素と醫家の出、其の獨逸語學に於ける、因る所有るなり。彼は語學の知識を媒介として深く獨文學の精髓に參し、兼て彼の國美學並に文藝批評の精神方法を學び、翫賞の餘、進んで評論に從ひ、更に又筆を飜譯に染めたり。而して譯する所、小說を始として劇詩抒情詩に及び、多くは「國民の友」及び『柵草紙』によりて世に出せり。劇詩抒情詩は之を後節に讓り、特に小說に就て觀察するに、其の原作を選ぶや、リットン、ユーゴー、ツルゲネーフ等一二作家に限らるゝことなく、比較的廣く諸國諸種の作家を採れり。今二十六年の比に至るまでの譯筆を列擧すれば、『戰僧』『みくづ』『綠葉歎』は佛のドーデーより、『黃綬章』『二夜』は獨のハックレンデルより、『惡因緣』『地震』は同クライストより、『浮世の波』は同ステルンより、『瑞西館』は露のトルストイより、『該撒』は同ツルゲネーフより、『新浦島』は米國アルキングより、『洪水』は同ブレットハアトより、『玉を抱いて罪あり』は

獨のホッフマンより、『埋れ木』は同シュピンより、『女丈夫』は同フレンチェルより、『ぬけうり』は露のレルモントルフより來りし者にして、悉く收めて二十五年出版の『水沫集』と三十年出版の『かげ草』との中に在り」集中の作、『埋れ木』を除くの外、皆短篇小品たるに過ぎずと雖、『二夜』『地震』『該撒』等、尺幅尙寶惜すべき者なきに非ず。『埋木』に至りては、藝術家を題材とせる幽趣限なき名作にして、天才煥發、ヰオリンの精藝時人を驚かしたる二十四歲の靑年樂手ゲザ・ファン・ザイレンを主人公となし、之を周に落魄の記者デリレオ、之が子なる可憐の少女アンネット、身天才あるに非ずして好運よく名利の俗念を滿足するを得たりしピヤノ彈きステルニイ、及び巴里モンマルトル街に住める數多浮浪の伶人文士を以てし、斯くして、かの空想ありて實行なく、自家の才能を過信して生涯何事をもえ遂げざる一種の性格を名殘なく寫し出でぬ。主人公ゲザ誠に斯道の天才、自負自信の念强烈にして、美しき空想を未來に馳せ、胸中滿幅の妙譜、紙に寫さば手に從つて成るべく、不朽の名忽ち一世に高かるべしと思ひ上りぬ。然れ

ども藝術家に通有なる倦怠病(アンニュイ)は、彼の希望をしてはかなき妄想に終らしめたり。彼が神輿に乘じて事に從ふや、恰も熱を病める者の如く、數日の間萬事を拋つて之に凝る。されど感興の天馬一たび彼を搖り落さば、想像の糸忽ち斷絕して倦怠身を襲ひ、加ふるに瑕瑾百出、嫌厭の情堪ふべからざるに至る。斯くて此の天才の作は、僅にダンテが『地獄篇』の譜に面影を止めて、他は悉く倦怠病の墓穴に烟の如く消え入りぬ。而も此の曲は彼れの戀人、許嫁、所有寶にも代へ難きアンネットと共に、陋劣なるステルニイに奪はれたれば、傷心の極遂に癡狂となり、空しく行末の成功を夢みながら、一代の天才、あはれ埋れ木の花咲く時に遭はずして老い朽ちぬ。斯くの如きは近代歐洲に於ける著しき現象にして、所謂世紀末の病的期間には、特に其の勢を逞うする者なり。鷗外が閑雅の筆、譯し來りて感興深く、正に是れ、本邦藝苑に起らんとするウェルテリズムの豫言とも見らるべし。

鷗外の譯文は其の得失共に彼が創作の文に似たり。否創作の文體却つて飜譯の筆に出でたり。思ふに彼れの創作は思想形式共に外國文學に學べる

を以て、之を二葉亭に比するに、二葉亭は飜譯も猶創作の如く見ゆるに反し、鷗外は創作も猶飜譯なるが如き感あり。運筆悠々として迫らず、悲壯を描くも優麗を寫すも、等しく高雅なる擬古調を以てし、溫藉ありて激越に缺くる處、曩に創作に就て述べし所以の者、又移して茲に言ふべし。然れども鷗外固と深遠の學識を具へ、一定の審美見を抱くを以て、落想着筆一に其の典據に依り、決して一點一畫を濫にせず、立案愼密、注意周到、彼の多作濫作の輩をして走り且僵れしむるの概あり。

當時の飜譯小說には、尙二十六年の『世界文庫』あり。田山花袋はトルストイの『コサアク兵』を、內田不知庵は同「めをと」を、松居松葉はセルバンテスの『鈍機翁』を譯せり。されど槪ね抄譯又は梗槪譯に過ぎず、特に重きを置くに足らず。

第三節　傳奇小說の興廢

春の屋二葉亭以來、寫實小說の潮流天下に瀰漫し、二十年より二十六年

頃に至るまで、一代の文壇を被うて其の全盛を誇りぬ。特に二十二、二十三兩年は斯界無前の盛觀を呈し、名家の輩出、名作の出版、前後相望み、中にも『色懺悔』『胡蝶』『細君』を始め、『むら竹』『當世商人氣質』『露子姫』『掘出物』『風流佛』『殘菊』『墨染櫻』『流轉』『舞姫』『一口劍』『新作十二番』『葉末集』『うたかたの記』『夏痩』『伽羅枕』等、此の一期間に於ける名篇の殆ど全部を産出しぬ。勿論是等は、今日より之を見れば、其の質に於て必しも優等なる者に非ずと雖、少くも歴史的價値に於て輕からざる地位を有する者なり。げにや此の二箇年は啻に寫實小説の一類のみならず、傳奇小説、韻文、各種の飜譯、亦競うて起り、雜誌叢書も連りに刊行せられ、特に評壇の花新に咲き出でて高等批評の端緒開かれ、總べて文學界の所有方面に於ける活動頗る目覺しき年なりき。寫實小説は、實に此の文壇の順潮に乘じて進歩の先頭に立ち、以て一代の文運を支配せるなり。

斯かる間に本邦小説の他の一種たる傳奇小説は如何に成行きしか。曩に馬琴の勢力失墜して元祿文學復興せるより、傳奇的趣味を帶べる總べての

小説は、新に勃興し來れる寫實的小説に壓倒せられて、一時其の聲息を潜め、僅に前期の政治小説の系統を引ける鐵腸龍溪南翠等の作、歴史小説の作者たる學海篁村三昧等の作によりて其の命脈を繋ぎたりき。南翠は巧に時と推移し、或は政治小説を作り、或は歴史小説をものし、更に進んで寫實小説に指を染め、探偵物に手を下さんとす。前期以來『改進新聞』に據りて俗流に愛讀せられ、此の期に入りて『朧月夜』『照日葵』『雛黄鸝』『こぼれ松葉』等を出して一部讀者に迎へられたり。鐵腸は專門の文學者に非ずと雖、此の期に於て又『南洋の大波瀾』等を出して政治家の空想を小説に寓したりき。龍溪は政治家中の學者にして、既に前期に於て政治思想の發達せんとするを見るや、『經國美談』を作りて之を鼓吹し、此の期に至りて學術思想弘布の必要を見るや、科學應用の冒險小説たる『浮城物語』を著して科學者の空想を小説に寓したりき。依田學海は漢學者より出でて、小説の批評、演劇の評判に筆を執り、兼て小説脚本の創作を試みし者にして、小説は『楠木』『十津川』等、主として南北朝時代の事蹟を綴りたる歴史小

說なりき。篁村は八文字屋風を本領とするも、時に又歷史物の作『勝鬨』の如きあり。されど筆路の輕妙を見る外取り出でて言ふべきなし。三昧の『桂姬』『塙團右衞門』等、亦世話物作者の手に成りし時代物たるを免れず。要するに當代の傳奇小說は事件の爲に人物を作る弊に陷り、其の人物は悉く無理なる結構に操らるゝ傀儡の如き者、其の量に於て到底寫實小說に及ばざると共に、其の質に於ても亦紅葉露伴の作に匹すべき者あらざりき。唯一篇の長短に至つては、寫實小說の槪ね短小なるに反し、傳奇小說に屬する者は、比較的長大なるが故に、傳奇を揚ぐる者、往々其の雄大の風姿遙に寫實小說の規模狹小なるに勝ると稱す。然れども傳奇物の雄大は、少くも馬琴の域に進まざれば、以て識者を動かすに足らず。內容空虛にして何等人生と相關することなき者、徒に外形の大を以て誇るも、到底寫實小說に加ふる能はざるなり。故に敎養ある社會の同情は大抵後者に注がれ、重なる評論家、即ち逍遙、鷗外、忍月、不知庵、美妙等、連りに心理的小說を鼓吹せり。勿論是等評家は、皆一方にては寫實小說の作家なりと雖、

以て當代敎養ある讀者社會を代表せしむるに故障なきなり。天下は依然寫實小說の天下たるを失はず。

然れども勢窮まれば則ち返る。世の好尙は移りぬ、紅葉一派の寫實小說は漸く倦厭せらるゝに至りぬ。全盛は二十三年に止めて、翌年よりは著しく衰へ、『聚芳十種』『文學世界』『小說百家選』の諸什は片々たる小品に過ぎず。紅露二家さすがに『二人女房』『三人妻』『五重塔』等の名作ありて、斯派の爲に光焰を揚げたりと雖、知名の作家、或は隨筆に隱れ、或は諷刺文に遁れ、或は評論に移り、創作寥々、一般の風潮は遂に前年の繁榮を持續すること能はざりき。思ふに新奇を追ふ性質は、獨り物質界に存するのみならず、藝術界に於ても亦著しき者あり。曩に逍遙が模寫小說を唱へ出でてより、斯派の流行かくの如く盛なりしは、馬琴春水の末輩、一九三馬の末流の陋猥なる戲作に比して、遂に卓越せる品格と價値とを有するに因ること論を俟たずと雖、一には又、舊時代千篇一律の勸懲乃至駄洒落に嫌きて、明治小說の新奇なる色彩を喜べりしならずや。且文學の讀者は、必し

も教養ある識者ならず、彼等の好尙必しも識者の共れと一致するを保せず。勿論識者の指導よく一般讀者の趣味を左右すること少からずと雖、當代の評論家が寫實小說に謳歌せるを見て、直ちに一般讀者が之に對する嗜好を斷ずるは少しく輕卒に過ぎたり。されば當年の批評家即ち教養ある讀者を代表すべき人々が、尙、寫實小說を捨てざるに際し、既に共の盛運を經過し去りしを見れば、一般讀者の之に對する倦厭漸く起りしを知るべし。

人心既に罅隙あり、新奇の作物に對する翹望爰に起り、乃ち此の罅隙を充し、此の翹望に應ずる小說界の新潮は、從來屛息したる傳奇的方面に起りぬ。好奇の念に投じ寫實小說に嫌きたる人目を一洗せんは、唯傳奇物のみ之を能くすべかりしなり。村上浪六の遊俠小說、黑岩涙香の探偵小說は即ち此の要求に應じて現れし者なりき。蓋し當時の寫實小說は假令敎養ある讀者に捨てられざりきと雖、共の裡おのづから凋落の素因を藏せざるに非ず。夫れ寫實小說は、固と自然を宗とし、一切の私心を去り、自我を解脫して世相の眞を寫す者なり。されば共の究竟は、實世間を觀察して褒貶

なく黜陟なく、所有作者の主觀を排して逍遙が所謂沒理想の域に入り、以て世態人情の眞相を披瀝するに在り。故に其の至れるや、自然を尺幅に縮め、造化を壺中に收めて、渾成無瑕、之を探れば愈〻深く、之を索むれば愈〻杳かに、恰も彼の逍遙が寓言に見えたる「底知らずの湖」にも似たり。然れども、かくの如きは總ての作家に望むべきに非ず。假令觀察に私なしと雖、觀察力其の物の鋭鈍、其の力の及ぶ範圍の廣狹は固と天分に出づ。故に其の眼睛に映ずる世相は自己に親しき世相なり。觀察に上る人情は自己に近き人情なり。捉へ得たる材料の上には敢て褒貶の私見を挾まずと雖、材料其の物は既に主觀的選擇を經たるを如何せん。要するに意識的には沒理想純客觀の描寫を試み得べきも、無意識的には其の根本に於て主觀の影、即ち作者の釆丰を帶びざるを得ず。故に其の下れるや、自己の管見に出でたる一種の世態人情を寫し出づるに止まる。且寫實の手法や、眞を得んとするの極、巧拙共に、往々美の約束を破り、描寫の對象動もすれば其の埒外に逸することあり。斯くの如きは寫實小説の凋落する素因となるべき者

にして、其の傾向の强弱は直ちに作物の價値を高下するに足るべし。當時の寫實小說は正に此の則を以て律せらるべかりしなり。

二十三年逍遙は『讀賣』紙上に「小說三派」を論じて、主事派(固有派)、性情派(折衷派)、人間派の目を設け、當時の小說を評して悉く性情派の初步なる者となし、主事派なる舊作家以外に新旗幟を樹てたるも、性情を活寫するを主としながら、尙之を寫すに方りて偏に事件に依らんとする所、未だ性情派の境を出でずと稱し、人間派に至りては當今の文壇絕て無しと言へり。『柵草紙』の鷗外之を批判して、ハルトマンの類想、個想、小天地想を配當し、性情派を以て正しく個想派なりとせり。げに當代の新作家は、性情派個想派に屬して而も未だ至らざる者なりき。性情の活寫や、世相の觀察や、固より主事派の如く類型的ならずと雖、因て來る根本が狹隘なる小主觀に存するを以て、其の弊や同一範圍內の世相人物を描寫するに止まる。故に當時の小說を讀んで彷彿し得べきは、唯東京の中流乃至下流社會の中、特に作者周圍の一部分に於ける世態人情のみ。加ふるに元祿文學復

興の結果、利弊共に之を承け、形より入りて遂に神をも傳へ、動もすれば妖艶なる色慾界を寫して其の實相を得んとし、野の花の如く美しく且自然なる人情の發動を斥けて、一向に彼の魔界の趣味に養はれつゝ、粋よいきよと曲りくねりたる人情の發動を描き、其の極往々美の域を脱して醜猥に陷らんとす。斯かる作物の社會に於ける壽命は決して長かる能はず。寫實小説を擁護し助長したりし識者社會と雖、爰に至りて嫌焉たらざる者幾何ぞ。茲に於てか小説の理想を問ひ觀念を論じ、當代小説の今少し深く且廣からん事を求むる傾向批評家の間に盛に起り、作者に在りても、從來辭句の鍛錬文體の選擇に苦心し、狹隘なる主觀に限られたる小説を以て能事畢れりとなせる者、反省し考慮して恣りに製作に逸らず。既に名を成せる者、將に名を成さんとする者、齊しく默想の裡に沈みて、茲に一般小説界の不振を來しぬ。此の趨勢は彼の恒心なき俗衆の倦み易く厭き易きと相扶けて、大勢遂に寫實小説を見捨てぬ。

此の時に方りて浪六が遊俠小説世に現れぬ。浪六は思軒の下に「報知新

鬧」に在り、共の「叢談」に原抱一庵村井弦齋遲塚麗水等と執筆せし後進作家にして、二十四年『三日月』を出版するや、奇矯の筆、善く市井の遊俠三日月次郎吉を寫し、『俠客傳』にも見るべからざる生采の奕々たる者ありしかば、一代の讀書社會は翕然として之に就きぬ。次で「井筒女之助」『奴の小萬』出で、皆愛すべき、遊俠を描きて成功したりしかば、後進の浪六一躍して大家の列に入り、先進作家をして一時後へに瞠若たらしめたり。爾來三十六七年の交に至るまで、『鬼奴』『破太鼓』「夜嵐」『深見笠』『髯の自休』『安田作兵衞』等、作る所、皆過去の歴史に於ける三日月一流の人物を描いて、江戸時代中流以下の社會に於ける粹と俠との理想を發揮し、共の主人公は、宛ら此の思想の權化の如く、脚色事件、總べて傳奇的色彩を帶び、以て寫實に倦みたる一般の時好に投じぬ。是に於てか、傳奇小說の反動的流行を小說界に見るに至れり。

げに此の反動は、寫實小說の失勢と民心の倦怠とに根ざし、新奇を好む一般傾向に出でたりと雖、特に浪六に至りて共の盛を極めしは別に故あり。

蓋し浪六の作は主事派類想派に屬する點に於て南翠龍溪等の作品に異なる無しと雖、讀者を動かすべき一種の魔力を有する點に於て大に趣を異にす。而して其の魔力たるや、一に小說の主人公の性格と國民性との契合、及び之を描くに恰好なる奇矯の筆致に存す。夫れ三日月等の性格を形作る俠と粹との二特質は、江戶時代國民の間に醞釀し來りし一種の氣象にして、假令往々笑ふべき不自然沒人情の屈曲ありきとするも、既に三百年間中流以下の理想となり、明治の今日に傳へて尙其の胸奧を充せる者なれば、任俠風流の行動直に讀者の肺腑を衝き、加ふるに描寫の筆力亦之に添ふ所ありしかば、讀書社會は茲に新なる形式を以て復活したる俠客傳を得て、歡喜措く能はざりしなり。

然れども浪六に取るべき所唯是のみ。題材と筆力と共に、『三日月』『女之助』に盡きて、爾來唯千篇一律、奇構も奇に慣れては興なく、索然として情味共に失ふ。文章亦舞文弄筆に流れ、蘊蓄なく研究なきの致す所、時に杜撰に過ぎ孟浪に失し、到底紅露一流の精練なる文章に儔すべきに非ず。

內容の空虛は之にも勝り、彼の管見的人生觀を寓せりと非難せられし寫實小說に較ぶるも、尙數等の下に在らんとす。是を以て觀衆の隨喜讚歎するに係らず、識者夙に之を却け、撥髮小說の名を與へて小說界墮落の一現象とせり。要するに撥髮小說は主事派類想派の劣等なる者なれば、性情派個想派たる從來の寫實小說を壓して獨り隆盛の域に上る事あらば、小說界は明に後退せるなり。斯かる間に、倦み易き看衆は、內容形式共に變化なきに嫌きて、復浪六に同情せざるに至りぬ。

物滯れば必ず腐る。西南の妖雲去りて國家事なき、最早二十年に垂んとし、十七年朝鮮の變亂は深く國民を刺擊するに足らず、二十三年國會開設の事一時人の耳目を側てしめきと雖、尙太平の氣象海內に充ちたりしかば、民心茲に倦怠の色を現せり。倦怠は延て文壇に及び、文學思潮革新の活動ありてより十年の今日、斯界の意氣又當初の如くならず。罅隙百出、撥髮小說を喚起して茲に墮落の端を發き、幾もなくして之を棄つるや、停滯又停滯、墮落は進んで探偵小說の流行を來すに至りぬ。探偵小說は恰も當時

劇壇に起りし壯士芝居の如く、疑獄の始末を以て骨子となし之に人情の糸を搦みたる者、欺騙、邪淫、殺人、强盜等、所有犯罪の秘密と、之を偵知する探偵社會の苦心の秘密とを描いて好奇の俗衆に投ずるなり。多くは西洋物の抄譯又は飜案にして、一時の盛榮に乘じ、出づる者甚だ多く、遂に其の叢書すら見るに至りぬ。涙香小史は實に是等作家の代表者なり。

涙香は通俗新聞文學者として成功せる者の一にして、西洋探偵小説を飜するや、唯其の意を取りて自家藥籠中の者となし、俗衆の知識本邦の事情を以て了解し得べき範圍に於て、之を平易精細の文章に綴り出せり。『鐵假面』『非小説』『大金塊』『死美人』『人耶鬼耶』等は、一時讀書界を風靡したる者にして、其の探偵的興味は、讀む者をして卷を措く能はざらしめぬ。然れども其の興味たるや、畢竟探偵的にして、高級なる文學的畛域に甚だ遠き者なるは言を俟たず。

彼も一時此も一時、操守なき俗衆の嗜好は、推移すること走馬燈にも似たり。二十四五年以來不振に陷りし小説界は、卑俗なる浪六涙香の小説に

よりて漸く命脈を維ぎしも、二十六七年に及びては其も亦廢れて今や不振の極に達しぬ。小說不振の我文壇は如何なる者を要求せしか。抑も讀書社會に如何なる好伴侶在りて小說を捨てたりしか。逍遙は當時小說不振の因緣を尋ねて、史傳の流行宗教熱の昂上等を數へたり。げに當年文壇に起りし人物評傳歷史評論と哲學宗教の問題とは、人心をして小說を離れしむるに力ありしと共に、又小說を離れし人心を收めて此が好伴侶なるに適したりしなり。宗教界の活動は、かの國粹運動勃興の際に萠し　二十五年宗教教育衝突の大問題起るに及んで狂騷を極め、且哲學及び神學の研究漸く盛にして、思想界多事なりき。然れども純文學に對する此の事象の影響は必しも重大なる者に非ず。吾人の注目すべきは即ち史論評傳の側に在り。思ふに史傳の流行は、二十二三年頃既に其の萠芽を發し、民友社博文館等の書肆が連りに內外豪傑の傳記を出しゝより始めて、二十四年田口鼎軒が雜誌『史海』を發行せし頃に及んで、斯界の活氣大に加はり、人物の評傳史實の評論相次で出で、論爭一時の問題たりし者少からず。續いて二十六年

民友社の諸文士が『十二文豪』を發行せし頃に至り、文壇の嗜好は一轉して、之に向ひ、小說に嫌らざりし讀書界は相率ゐて之に歸しぬ。

史傳流行の勢力は一方に於て小說の讀者を奪ひ、作者を屛息せしめつゝある間、他の一方に於ては小說其の者に影響して、爰に新なる小說を喚起しぬ。讀書社會に於ける過去顧望の情感は、新奇を追ふに疲れたる社會の現狀と相緣りて爰に歷史小說の渴望となりぬ。『小說神髓』以來一切の過去を拋つて革新を唱道したる識者社會は、國民文物に對する過去の歷程、即ち歷史の權威を感じ、劇部に於ける時代物と團菊の演技との遂に除くべからざるが如く、歷史小說亦捨つべきに非ざるを知り、且其の師表とする泰西騷壇に於ても、歷史小說の一派、優に世話小說に對立するを見て茲に自覺を生じ、今更に馬琴の精力に驚き、其の荒唐の過、勸懲の失以外、別に歷史小說家としての價値を認め、更に進んで斯かる過失なき優秀なる歷史小說を現今の文界に得て、以て墮落の極に達したる斯壇を廓淸せんとするに至りぬ。二十六年『讀賣』新聞が賞を懸けて歷史小說を募集せしは、即

ち此の渴望の一端を表はす者にして、高山樗牛の『瀧口入道』は之に應じて出でし者なりき。其の他遲塚麗水、村井弦齋、塚原澁柿園（後の蓼洲）等の作家は、皆此の氣運に乘じて世に用ひられたり。

然れども當時歷史小說に對する渴望は、唯渴望に止まりて遂に充さるゝに至らざりき。上述諸作家の篇什、唯勸懲の臭味荒唐の弊套を脫せるのみにて、別に從來の主事派的時代物に優る所なく、其の分量を以てするも、成功の度を以てするも、到底紅露一派の敵に非ず。唯澁柿園の筆力稍望を屬するに足る者ありきと雖、麗水弦齋漸次に方向を轉じ、歷史小說勃興の氣運遂に去りぬ。斯壇に於ける成功は暫く之を後の世の大才に俟たざるべからず。

第四節　新體詩及戲曲

新體詩

『新體詩抄』が詩界革新の運動を起してより既に五年の星霜を閱したりと

雖、斯界之に續く勇者なくして空しく十五年の故態に停りぬ。小說界の革新を遂げたる『小說神髓』は後れて起りしかども、硯友社一派差し次ぎて崛起し、寫實小說の大旆文壇を風靡し、詩界の寂寥を餘所に見て獨り進步の道程に上りぬ。思ふに『新體詩抄』の諸篇は、文學史上の位置を以てすれば、正に小說界の『書生氣質』に相當すれども、其の內容實質に至りては、恰も織田純一郎等の飜譯小說政治小說と相若くの觀あり、嚴格に言へば新體詩界の『書生氣質』は未だ起らざりしなり。況んや『浮雲』をや。況んや『夏木立』『二人女房』『風流佛』をや。蓋し『詩抄』の詩篇は、聲調新なりと雖低きを免れず、用語自由なりと雖蕪雜なるを避け難く、思想の廣濶は可なれども爲に散文的に陷り、表現の法明瞭なるは可なれども爲に露骨に過ぎたり。されば格調用語の雅醇ならん事にのみ熱中する歌人乃至國學者等の之を嗤笑せしは勿論、一般文藝界に於ても亦其の崇拜者甚多からざりき。曙光を十五年に發して今に其の繼續者なく、唯徒に學童の傳唱して軍歌の代りとするに任せたるは、斯かる事情に基く事少からざるなり。

然れども新時代の思想感情は、到底在來の形式を以て表現する能はざるを以て、新體詩は遂に沒すべからず。果然、此の圓融自在なる形式に充用するに比較的雅醇なる詩語を以てし、一面には、勉めて卑野と蕪雜と散漫と露骨とを避けんと試みたる一派の詩人を輩出せり。

落英たる詩界は、二十年美妙紅葉九華が『新體詞選』を刊行し、湯淺半月（吉郎）が時々小品を『國民の友』に掲げ、二十一年落合直文「孝女白菊の歌」を『東洋學藝雜誌』に出し、二十二年鷗外等新聲社の人々が譯詩「於母影」を『國民の友』に載するに及んで漸く面目を改めたり。就中、美妙齋の軍歌は今も兒童の口に謠はれ、「白菊の歌」は井上巽軒の漢詩を飜せる長篇、當時の呼物として忽ち數箇の雜誌に轉載せられ、「於母影」は鷗外喜美子直文器堂等が、獨英諸家及び明の高青邱の詩を和譯若くは漢譯し、或は原意のみを取り、或は字句韻法をも迫りて譯出せる長短十二篇を集めたる者にて、獨のゲーテ、シェッフェル、ハイネ、ホフマン、レナウ、英のバイロンを主として、其の他二三作家の小篇を交へたり。爾來飜譯創作爾な

がら起り、二十三年に入りて作家の輩出少からざりき。

此の方面に於ても『國民の友』は隱然たる保護者なりき。「於母影」と同年、既に可行懷鄕淺水疎影詳鄕等の名を以て、ゲーテ、シルレル等獨逸諸名家の短章を譯せる者、及び美妙齋の創作小篇を收め、翌年更に矢崎北邙散士(嵯峨の舍)、宮崎湖處子、中西梅花道人等の作を收め、斯壇の中心となれり。是より大西操山、戶川殘花、磯貝雲峰等の新作家を出し、『日本評論』『文庫』等の文學雜誌、皆新體詩を以て誌上の飾りとするに至れり。就中美妙湖處子梅花の三者最勉め、恰も當時の詩壇を代表する觀ありき。

美妙は創始の才ある人なり。新小說の作家として、言文一致體の研究家として、又文界評論家として、既に其の才名を成しゝが、今又新體詩の作者、韻文の研究家として現はれたり。二十三年『國民の友』に掲げし「醉沈香」を始め、長短の創作及び飜譯を同誌に出しゝ者少からず。或は瀟洒或は妖艶なる小說的の詩想を詠出し、且つ深く詩形に留意して洗錬の語句を行りき。湖處子は小說を作り、又美文をものし、常に純潔天眞なる抒情詩

の思想を表せり。二十三年世に問ひし『歸省』の如きは、作者が一夏歸省の二週日間の感想錄に過ぎずと雖、理想の清高、情感の純潔、共に青春の氣象を帶びて、恰も萌え出でたる若草の如く、文章亦英文の脈調を以て和漢の語句を驅使し、想と形と相俟つて優に新散文詩の境に入る。されば新體詩の如きは最力を用ゐ、同年以後『國民の友』誌上に其の什を見ざる事稀なり。而して其の作風は勿論『歸省』に類似し、詩材亦田園の趣を帶び、自然の描寫に富み、美妙が寧ろ人事を謳へるに對し、好箇の對照をなせり。梅花道人は樂天詩人なり。飄逸にして奇氣を負ひ、性情流露して天眞覆ふべからざる趣あり。二十四年『國民の友』に出でたる「九十九の嫗」等、前年よりの作夥しく、遂に同年『新體梅花詩集』を刊行するに至れり。此の集固より片々たる小冊子なりと雖『新體詩抄』以來の好詩集にして、且つ一作家の創作をのみ集めたる新體詩集の嚆矢なり。其の他嵯峨の舍は其の小說に於けるが如く、情感の激越を以て優る。西詩飜譯の如きは、口語を用ひて能く詩趣の饒なるを得たり。

上述新作家の用ひし詩形は概ね『新體詩抄』の採りし所に從へりと雖、用語は『詩抄』の詩人が漢語俗語併せ用ひて覊束する所なく、其の弊や蕪雜に陷り乾燥に失し、詩の成立の要素たる言語美を沒却して顧みざらんとせるに反し、著しく雅醇の度を增し、用語を古文學に取り、句調を和歌に學びたりき。勿論嵯峨の舍の如き、言文一致體を詩に試みし者無きに非ざるも、美妙齋の如き散文に於ける言文一致の勇將も、韻文に於ては雅語雅調を主張せる程なれば、一般の風潮は『詩抄』の用意と方向を異にせりき。是れ一は當時復興の勢凄じかりし古文學の影響にも因るなり。

此の時に方りて、一般評論界の活動につれて、新體詩も亦斯壇の問題となり、韻文論詩論は、小說論と共に評家論爭の好題目となりき。而して之に活氣を與へたりし者は亦美妙齋なりき。二十三年末より翌年に亘り、一篇の長論文を『國民の友』に連載し、題して「日本韻文論」といふ。此の論の主とする所は、勿論新韻文の形式に在りて、未だ其の內容に及ばざりきと雖、詩歌硏究の端緖之より開け、不知庵忍月鷗外等交々之を論じ、辯

雜應酬甚盛なりき。此の論爭や、當時の新體詩に直接影響する所、さまで大ならざりしかども、從來詩歌に對する蹈襲的習慣を破り、大に研究的精神を養ひし一條は沒すべからざる功績なり。

前記作家に引續き、國文家歌人の徒が、世潮につれて筆を新詩形に染めし者少からず。『白菊の歌』の作者落合直文は二十六年『騎馬旅行』の長篇をものし、其の他中村秋香、大和田建樹、佐々木信綱、小中村義象、黑川眞頼等あり。然れども此等皆擬古體長歌體を取り、詞章雅醇を極むれども、詩想格調共に陳腐にして、美妙等が清新に比ぶべくもあらず。

斯かる間に美妙梅花の統を引き、清新の思想聲調を謳ひ出でたる一團の詩人現はれたり。『女學雜誌』及び『文學界』の同人是なり。北村透谷は之が首領にして『透谷全集』收むる所の數篇、概ね二十六年の作に屬す。透谷夙に詩に志あり、二十二年既に『楚囚の詩』といふ長篇をものし、强て七五調に依らざる變調を以て國事犯の新囚を詠じたりしが、事によりて世に出さざりきと雖、詩界に未だ存せざりし新體の者にて、創始の詩才頗る

見るべし。爾來『文學界』等に出しゝ者少からざりし中に、「行きたをれ」、「螢」、「双蝶の別れ」、「眠れる蝶」等、片々たる短章に過ぎずと雖、一種の幽韻當代の珍とすべき者あり。若夫れ、長篇『蓬萊曲』に至つては、泰西劇詩の體裁を借りて奔放の詩想を披瀝せし者、三齣八場より成り、長句短句錯綜して必しも七五五七等の節奏に依らず。世を憤り戀人を捨て、尚足らずして己の滅びを顧ふ憐れの塵の子が、內界に於ける神人二性の戰に惱みて蓬萊原にあくがれ步き、危巖削立雪崩大地を動かす靈山の絕巓に攀ぢて大魔王に遭遇し、其の嘲罵に反抗して物皆滅びよと叫び、憤悶遂に死滅を呼び、巖頭身を踴らして千仭の壑に投ず。是れ此の曲の脚色なり。章句散漫にして渾成の詩體に遠く、間、甚しく散文的にして全體の詩調を破ることありと雖、其の內容に至りては、想像奔逸情緒熱烈、透谷が多恨の一生と心裡の煩悶とを最もよく代表し、二十七歲の夏に於ける悲慘の最期を豫言するものの如し。思ふに斯かる人生問題の煩悶を懷く者、啻に透谷一人のみに非ず。所謂世紀末の思想界、往々かゝる神經質的煩悶を滿ふ。特に當代青

年の一部に於て、泰西哲學思想の傳播と、其の文學思潮の浸潤との結果、從來實利の一方に偏倚せる國民の間に到底見るを得ざりし一種悲痛の觀念を養成したりき。勿論其の苦悶懊惱や、決して深刻偉大なる者に非ずと雖、兎に角從來行はれたる厭世觀と著しく趣を異にせり。『蓬萊曲』は即ち此の思潮に觸れたる好箇の記念にして、透谷は正しく當代思潮の一部を代表し、將に來るべき横流の先聲をなしゝ者といふべし。『文學界』の詩人には尙、戶川殘花島崎藤村あり。作多からずと雖多望なる前途ほの見えたり。

以上諸家の詩、之を今日に見れば深く言ふに足らずと雖、詩界草創の當時、『詩抄』の後を承け、擬古派者流の間に介し、清新の詩想を歌ひ、幽韻ある趣味を皷吹したるは、假令其の聲調に於て擬古派に劣る所あるも、詩想發展の上に沒すべからざる功績を殘し、斯壇第二の革新を遂げたりといふべし。此の點に於ては美妙湖處子梅花及び透谷の如きは正に新體詩界の『浮雲』『夏木立』たり。然れども國語の知識猶不十分にして、語格措辭の完きを望み難く、思想に於ても、猶器局狹小、思索に乏しく觀察に粗にして、

未だ明治詩壇に誇るべき創作を見ず。飜譯の如きも片々たる斷章のみにて、到底泰西詩宗の面影を偲ぶに足らず。詩界の紅葉露伴未だ出でず。總ての發展を擧げて次期に委ねたり。

戯曲

戯曲の發達は新體詩に比して一層後れ、未だ明治新戯曲の曙光すら見ることを得ざるなり。此の期に於ける斯壇は、將に新曙光を見んとする時代にして、之を新文學の條下に序るは少しく儔を失ふの感あれども、年代の順序上、暫く劇界の遷轉期に在る戯曲を檢せん。

混沌たる當時の戯曲界に一道の光明を與へ、後年起るべき新戯曲の先驅をなしゝは、即ち坪内逍遙なりき。十六年逍遙はシェークスピヤの『ジュリアス・シイザア』を淨瑠璃體に飜譯し、『該撒奇談自由太刀餘波鋭鋒』と題して世に出しぬ。是れ實に西洋戯曲の面影の我文壇に紹介せられし嚆矢にして、明治の戯曲界は此の時を以て過渡時代に入りにき。是より先、依田學海小永井少舟等の『新評戯曲十種』等ありしも、皆單に文章の評釋にして、戯

曲としての研究に非ず。『歌舞伎新報』の如き劇部雜誌出でしも、梨園の消息演技の筋書を載するのみなりき。『該撒奇談』出でし頃、劇壇の刷新及び改良の事朝野の注目する所となり、演劇の改良を唱ふる者漸く多く、遂に十九年演劇改良會の成立を見るに至れり。改良論や固より劇の全部に關し、劇場俳優技術等を議する事少からざるも、特に脚本改良に重きを置けるを以て、將來の戲曲脚本に影響する所頗る夥しかりき。

維新の變動は社會組織を一新すると共に、演劇の觀客と嗜好とに著しき變化を與へたり。從來の觀客は專ら中流以下に屬し、從て劇其の物の社會的地位甚低かりき。然るに維新以來、從前の觀客たりし中流以下の士分の人は、風雲に際會して顯官に上り、紳士となり、一躍上流の列に入りしより、演劇も亦上流社會の娛樂となり上りぬ。且泰西交通の結果、彼國に於ける劇部の消息のいたく我國と異なるを知りしかば、當時比較的進歩せる思想を有せる彼等新觀劇家は、在來の演劇に不滿の點少からず。茲に於てか改良論は先づ是等新觀劇家の口より唱へられぬ。然らば則ち彼等は如何

に改良せんと欲したりしか。思ふに彼等は維新當初の思潮を形作りし社會の有力分子にて、從て概ね實利思想を以て滿ちたる人士なりしかば、自然の傾向より、荒唐を斥けて實歷を尙び、夢を喜ばずして現を重んずるを以て、演劇に對する嗜好も著しく實歷的となり、夢幻的なる在來の劇の如きは、最好まざる所なりき。而も彼等は社會の上に大勢力を有する人士なりしを以て、忽に社會の嗜好を一變し、爲に從來中流以下の好尙にのみ媚び來りし座主俳優及び作者をして、營業の必要より其の改良論に聽くに至らしめぬ。劇壇の改良刷新是に始まる。

改良は總ての方面に亘り、劇場の構造より始め、百般の機械的設備は勿論、技藝の上にも及びぬ。就中脚本に關しては、座主守田勘彌、俳優市川團十郎、作者河竹默阿彌、相提携して先づ寫實的傾向を史劇に加へ、特に默阿彌、團十郎の長所を看、時流の赴く所を察し、從來得意の世話物を棄てて、一種の考古的史劇を作しぬ。所謂活歷物是なり。當時改良論者の說く所は、舊劇脚色の滅裂、趣向の陋猥なるを難ずるに在りしは勿論、殊に

時代物の荒唐無稽、甚しく史上の事實に戻れるを非とするに在りしかば、活歴物は最よく此の嗜好に投じ、二十一二年の比盛りに行はれたりき。而して、此等改良論者の中最有力なる者は、紳士社會の學者派とも言ふべき人人にして、就中末松青萍、藤田鳴鶴、外山丶山等は具體的の改良意見を公にし、作者にては依田學海、川尻寶岑最熱心に此の運動に與りぬ。今當時の改良意見を綜合して其の主張を檢するに、大約次の二條に攝するを得。一は即ち舊劇の陋猥と殘忍とを除きて高尚優雅となさんとする一種の理想論にして、他は即ち脚色人物の本より衣裳臺詞の末に至るまで、勉めて事實に模せんとする一種の寫實論なり。前者は舊劇一面の弊を說き得て中れり。然れども論者往々極端に走せて、道德と美術との交涉につきての見解を誤る。後者も亦舊劇の他面の弊を衝いて妥當なり。然れども是亦極端に馳せて往々國劇特有の美點を閑却し、總べての樂劇的要素を除き、脚色事件の空想に出づる者をも斥けんとするに至れり。

改良論には斯かる缺點あるを免れざりきと雖、兎に角上述二面より着手

せんとし、青萍主唱の下に前に記しゝ演劇改良會を組織せり。會員には前揭二三子の外、矢田部尙今、矢野龍溪、福地櫻痴等、其の他洋行歸りの學者連を網羅し、賛成員には朝野の名士を集め、會の目的として舊來の陋習を改良し好劇を實演せしむる事、脚本著作を榮譽ある事業たらしむる事、構造完全なる一演技場を建築する事の三條を標榜したりき。次で岡野紫水等新に演藝矯風會を設け、二十二年日本演藝協會と改名し、文藝委員には學海半峰逍遙美妙默阿彌篁村思軒鷗外紅葉寶岑南翠等、文壇の名士を網羅し、技藝委員には俳優樂家等百般の技藝家の優者を收め、以て新脚本を創作又は選擇し、之を場に上せて演劇の品位を高うせんとし、創作は篁村南翠主として是に當り、篁村は『朝日』に南翠は『改進』に揭げたり。

此の時に方り、森鷗外評論家として立ち、一定の審美見を以て演劇を談じ、併せて當時の改良論を評しぬ。彼は『柵草紙』に於て、或は演藝協會の演說に於て、其の意見を發表し、改良論者が劇場構造の末に走り極端なる模實の弊に陷らんとするを警め、從來の作者が座主俳優に迎合し、俗衆

の嗜好に阿附するを難じて、戯曲は本演技は末なる所以を說き、深く戯曲演藝の根本問題に論及せり。此等の論議は、逍遙が劇に向つて人情描寫の自然ならん事を要求せしと等しく、當代斯壇に對する好箇の警醒にして、後來必ず實現せらるべき新思想の萠芽なりき。惜いかな、當時の好尚を距ること餘りに遠かりき。

改良論の聲大にして呼ぶこと疾き、上述の如かりしも、其の實効は遂に擧らざりき。協會の規模徒に大に、名聲徒に高きも、選んで以て場に上すを得し新作は僅に宮崎三昧の作一篇に止まり、劇部と新學者との間に於ける鴻溝は容易に除くべからず。會合遂に中絶して、贏ち得たる結果は、劇の社會的地位の向上と活歴の流行と劇場の改良との瑣末事に過ぎざりき。されば歌舞伎座の大劇場は、歐風を參酌して宏壯なる建築新に成り、團十郎之に據りて頻りに活歴を演じ、且つ俳優の社會的地位は劇其の物の地位と共に進み、川原乞食一躍して演藝家と稱せらるゝに至りしかども、根本的重大事は依然舊態を存せりき。

斯の不振の作劇界に在りて、最も新作に勉めたりしは學海なり。學海は學者派の評論家にして且つ作家たる者、夙に舊劇の卑猥殘忍背實を厭ひ、嘗て『吉野拾遺名歌譽』を作りて粉本を示し、卷尾に附記して曰く、此の戯曲は、男女の情態を描きて情義二ながら得しむるを主となし、傍ら弓馬衣冠の故實を示し、又言語を述ぶるに、雅にして耳に遠からず、俗にして野鄙猥褻に入らざるを旨とす。又殺伐殘刻なる形を示さず、又悲痛哀歎に過ぎて衰弱狼狽の狀を現さず、哀むと雖勇壯奮烈の意を寓し、武勇を示すと雖酷薄粗暴の所爲を見する事なしと。當時遍く行はれし理想論と寫實論との奇しき混和なりと言ふべし。彼は此の主義を以て、二十二年又『文覺上人勸進帳』と『拾遺後日連枝楠』とを作れり。共に寶岑との合作にして、前者は全篇盛衰記に據り、特に勸進帳と院宣との二齣は純然たる正史なり。此の年場に上り、座附作者に非ずして作を場に入れたるを以て稱讃せられたり。されど尚外題を『那智瀧誓文覺』と改め、竹柴其水作と署せざるべからざりき。後者は『名歌譽』の後日にして、史實を重んずる事前者に等

し。學海と寶𠮷との外、尙二三の新作を出しゝ者あれども、皆注目に價せず。各劇場は依然舊作者の似而非脚本を演じ、東京の河竹默阿彌、竹柴其水、大阪の勝能進、同諺造等、古院本新小說或は講釋種の一節を取りて飣餖補綴せるのみにて、毫も劇曲の約束に從はざる陋作のみ行はれたり。

二十四年の比、學海の說益〻極端なる考古主義に傾き、團十郎亦默阿彌の史劇に活歷を標幟せし時、櫻痴居士往年政論の筆を止めて梨園に投じ、團十郎と協力して史劇の創作と之が上場に勉めぬ。是より先き、團十郎と學海とは、所見の骨髓に於て一致せしも、學海の直截急激なる、實行の上に於て遂に藝壇に容れられざりしが、櫻痴は急激なる改革の到底行はれ難きを見て漸進の穩なるに從ひ、一旦團十郎と意氣相投ずるや、能く梨園の關門を破り、歌舞伎座の立作者として其の所見を實行するに至りぬ。是實に明治の演劇脚本史上に於ける一變動にして、文壇と藝壇との調和に一步を進めし功績沒すべからず。且其の史劇や、新作にても改作にても、舊來の不自然背實を除き、多少泰西史劇の趣を參酌し、以て默阿彌の史劇に一轉

進を與へたり。爾來二十六七年に至るまで、劇界は宛ら櫻痴團十郎の史劇時代たるの觀あり。新作改作多かる中に、『春日局』『關原譽凱歌』『大久保彥左衛門』『日蓮記』『大森彥七』等最名を得たり。然れども櫻痴が劇場內部に容れられしは、彼れの革新意見の全部が行はれしによるに非ずして、新脚本を舊劇に調和するに勉め、團十郎の活歷的腹藝的趣味に迎合せんことを計りしに因るなり。されば一方に於て不自然背實の名の下に舊劇の夢幻的妙所を除き、他の一方に於ては未だ十分なる性情劇的新脚本を上場すること能はず。爰に一種の沒趣味なる折衷劇を生じたり。是に於てか障害は二方面より起りて、櫻痴の努力と團十郎の活歷とを失敗に歸せしめぬ。

二方面よりの障害とは、即ち舊劇に慣れたる觀客の不評と、新思想を抱ける評論家の非難と是なり。當時猶觀客の多大數を占めたる俗衆は、舊劇の夢幻的美觀に慣れて、いたく櫻痴の改作を喜ばず、彼等歡樂の中心を奪はれしを見て、團十郎の活歷を斥けぬ。又彼の識者社會の櫻痴に期待する所甚大なりしも、其の爲す所未だ新劇の美を發揮するに足らず、新作も改

作も往々默阿彌に若かざらんとするを見て、いたく失望しぬ。即ち觀衆は彼が破壞的方面に、評論家は其の建設的方面に、各少からざる不滿を懷けるなり。果然舊劇崇拜の潮流は社會を動かして、折衷史劇に對する反動をなし、二十年以來の改良論の精神も全く行はれざるに至りぬ。是に於てか、文壇の先覺坪內逍遙夢幻劇論を『早稻田文學』に揭げ、性格劇の新標準によりて史劇を論じ、評壇新に波瀾を揚げたり。時恰も二十六年以後二年間に當る。此の論は劇界の『小說神髓』といふべく、曩日の改良論以外、一新思潮を文壇に導きし者なれば、其の內容及び之に伴うて起れる新脚本は、之を次期に說かんとす。

終に臨みて此の期に於ける戯曲の飜譯を記さゞるべからず。此の方面に於ける活動は、固より小說に於けるが如くならざるも、猶二三の西劇の、鷗外と其の弟にして劇評家たる三木竹二との手に譯せられたる者ありき。二十二年『讀賣』に出でし「調高矣洋絃一曲」と、同年『柵草紙』に出でし「折薔薇」と是なり。共に『水沫集』に收む。前者はカルデロンの『ザ

ラメヤ村長』後者はレッシングの『エミリヤ、ガロチイ』にして、飜譯に取りし用意は、原文に忠實ならんよりは寧ろ邦語の調に近からんことを求め、其の語句の如きは勉めて劇曲慣用の語勢語彙に從はんと試みたり。然れども是等譯筆の劇壇に殘しゝ影響は、小說の飜譯の如く大ならず。舞臺に上ることと固より是なく、之に續く飜譯も亦出づることなかりき。

第三期の文學

明治二十八年——同三十七年

第五章　新文學の勃興（其の二）

第一節　文運興隆の因縁

思想界の進運につれ、文學思潮革新の事成り、茲に新文學の活動を起してより殆ど十年、明治二十七八年の交に至りて思想界は再び一大轉進をなすべき時機に際會せり。勿論思想界の事は一晨一夕忽然面目を改むべき者に非ず。其の由て來る所甚遠く、其の根ざす所甚深し。十年の間、冥々の裡、徐に發展し來りし斯界の芳蕾、會〻二十七八年に於ける國家的大事件に遭遇して茲に煥然たる美觀を現じたるなり。

日清戰爭は本邦文明史上の一大現象なり。思想界に第二の革新を促したる動機、國民の自覺を普遍ならしめ信念を確固ならしめたる勢力なり。げにや自覺は國民思想の至寶にして、精神的活動の生氣は常に其の裡より湧く。蓋し第二期初頭の盛觀は、專ら國粹主義の勃興に伴へる國民自覺の賜

なりき。而も當時國粹思想の影響せる所は社會の全般に非ず。從て其の自覺も亦範圍の狹きを免れざりき。然るに日清戰爭の影響は、殆ど社會の隅より隅に亘り、津々浦々、貴きも賤きもおしなべて新なる自覺を喚起したり。且つ自覺に作ふ國民の信念は、前期に在りてはなほ多少不安なりしに反し、今や確固不動の者となれり。自覺の賚賜なるべき精神界活動の、前期に比して一層の隆盛を來したるは亦宜ならずや。

而して此の精神的活動の根柢は、言ふまでもなく一般學術界の進歩に在り。二十年以來、博物窮理の諸科學より地理歴史宗教哲學に至るまで、日に月に面目を改め、研究的精神は學界の全般に亘り、不斷の飛躍長足の進歩、精神的生活の狀態を一新せり。斯くして醞釀し來りし斯界の盛運、一朝國民の大自覺に遭ふ。華彩燦たる發展を遂げざらんと欲するも得べからざるなり。

明治思想界の國家思想の發動によりて動かされしこと前後二回なり。而も第一期なるは、國內に於ける歐化思想に反動して起りし者なりしが、新

に起りし第二回のは、國外に對して國民の存在を自覺するに起りしなり。前者は理論又は主義よりして起りしが、後者は國家の運命に關する嚴肅なる事實と、國民の力量を證明せる嚴格なる實驗とよりして起りき。是に於てか從來海内に跼蹐したりし眼を轉じて廣く世界に注ぎ、世界に於ける我大日本の地位を觀察し、此の國に賦與せられたる至高至大の天職を意識し初めたり。斯の自覺斯の自信は所有方面の活動を促し、思想界に空前の偉觀を與へたり。元良外山諸學者が國家的色彩を帶べる宗敎上の新信仰を提出したるが如き、井上元良高山木村等同志の士が新神道或は日本主義を唱道し、國家至上主義現世主義を標榜したるが如き、皆此の國民的意識の發現の一端なり。されば等しく國家主義と言ふとも、二十年代の國粹主義とは大に其の面目を異にし、悉く世界的觀察より出でて、將に飛躍せんとする國民の意氣を表示せる者なりき。

思想界の活動既に斯くの如くなれば、社會萬般の事象一として進歩せざるなき、固より言ふを俟たず。況んや精神的活動の一として、思想界の消

息に密接なる關係を有する文藝界の現象に於てをや。且つ文藝評論の進步と共に、之が根據たるべき美學美論の發達を來し、曩に鷗外等二三の評家がハルトマン等に立脚して評論の筆を執りし頃は、文壇未だ普く此の知識を享受するに至らず、唯彼等評家が論爭に資するのみにて、未だ一般作品に影響するに及ばざりしが、二十七年の比に至りては、新知識を有する作家評家相續いで現れ、嚴正なる美學の規矩を應用して詩歌小說の批評を試る者漸く多く、從て作家の間に思索的傾向を生じたり。是に於てか戰勝後の文壇は著しく活氣を呈し、二十八年より二十九年に亘る斯界の盛觀は、前期二十二年より二十三年に亘る其れにも增して花々しかりき。

今や筆を新にして戰後文學の盛況を詳說せんとするに方り、前期末葉の衰へたる文壇を承けし戰爭當時の文學を一瞥するの要を見る。所謂戰時の文學は此の兩期の推移する中間に在ればなり。夫れ戰爭の文學に及ぼす直接影響は、由來悲觀的の者なり。されば二十四五年頃より漸次衰へ來りし創作界は、茲に至りて其の衰を極め、小說界に在りては、紅葉の『隣の女』

『冷熱』、露伴の『有福詩人』、浪六の『安田作兵衞』、樗牛の『瀧口入道』、脚本に在りては櫻痴の『日蓮記』等の外、見るに足るべき者殆ど無かりき。之に反して戰爭を題目とせる新體詩小說脚本、及び戰記畫報等踵を接して起り、小說には鏡花、天外、水蔭、篁村、松葉、南翠を始め、弦齋、湖處子、漣、柿、櫻痴等の諸作、脚本には松葉の『昇旭朝鮮太平記』等、新體詩には外山ゝ山の『我海軍』『旅順口のヒロー可兒大尉』、殘花の『靈鷹高千穗』を始め、佐々木信綱、湖處子、半月等の諸作、數へ來れば枚擧に暇あらず。然れども是等の文學は果して戰時の文學として誇るに足る者なりしか。あらず。當時の戰爭文學は悉く一場の際物に過ぎざりき。戰爭熱の昂上する所、鬱結して詩歌小說となりたる者なれば、描寫諷詠する所、天眞流露、往々至情の聲をなす。然れども戰爭文學は固と其の性質に於て優秀なる文學たり難き要素を具ふ。戰爭文學は歲時と方處とに狹隘なる制限を有する特殊差別の文學にして、彼の古今東西に通じて謬らず悖らざる平等普遍の文學に非ず。一時の好尙に投ずるのみにして、長く其の價値を保つこと難

し。況んや二十七八年の戰爭文學の如き、强ひて時好に迎合せんとする膚淺沒趣味の者むしろ多きを占めたるに於てをや。評壇之に命ずるに際物の名を以てしたるは極めて恰當の稱呼なりき。

然れども斯くの如き大戰爭の思想界に及ぼす影響を考察すれば、國民の精神的活動の一時に雲蒸し來るに伴ひ、文學界の新旗幟亦動かんとするを看取すべし。即ち思想界を通じて文學界に及ぼせる戰爭の間接影響は、其の直接影響の悲觀的なるに反し、甚だ樂觀的なり。戰後文壇の現象は、啻に特殊文學の繁榮のみに非ずして、普く諸般の文學の興隆なり。思ふに二十七年の沈衰は、落滅に近き共れに非ずして、將に大に起らんとする前の共れなりき。戰捷の報連りに至るや、膨脹的國民、世界の日本、東洋の經綸、淸韓の輔導等の言辭は、天啓の如く國民の胸裡に閃き、二十年この方蓄積し來りし潛勢一時に勃發して、或は繪畫協會を組織せる新進畫家の出現となり、白馬會を開ける洋畫新派の運動となり、或は彫刻鑄金の術、陶磁染織の技の進歩となり、或は洋樂の振興演奏會の成功となり、更に進ん

で文學の興隆となりぬ。小說は一轉進をなし、新體詩戲曲は全く面目を新にし、俳句と和歌とは維新以來の舊風を打破して明治の新風を起し、紅紫燦爛無前の盛觀を呈したりき。以下次を追うて其の詳細を述べん。

第二節　俳句の革新

新文學思潮の革新運動は今や本邦文壇の最短詩に及びぬ。新思潮の赴く所、あらゆる舊文學を革新せずんば止まず。既に小說を一新し、新體詩を起し、戲曲の面目を改め、今や進んで舊俳諧と舊和歌とを打破せんと試み初めぬ。就中俳壇の運動特に目覺しく、一時文學界を聳動したりき。然れども斯界の革新は洵に後れたり。小說新體詩等は、十年以前既に革新の緒に就きしに係らず、俳諧に在りては今日始めて其の氣運に向へるなり。其の根本に於て相一致する二者の運動が、其の發現の年代を異にすること十年に及べるは何の故ぞや。之を解かんには、革新の原動力たる新文學思潮其の物の性質と俳諧其の物の特性とを検せざるべからず。

思ふに新思潮の根本は明に泰西の文學思潮、否寧ろ泰西文學其の物に在り。革新の運動に與りし詩人文士は、一として泰西の文學を味はざるなく、其の創作せる文學は一として泰西文學玩味の餘に出でざるなし。故に本邦文學の中、先づ革新の鋭鋒にかけられたる者は、模範の泰西に存する者、即ち我邦と泰西とに共存する種類なりき。逍遙四迷が小說に目を注げる、演劇改良の主張者が脚本に手を下せる、外山丶山等が新體詩を起して從來の和歌に代へんとしたる、何れか泰西の粉本に其の革新思想の萠芽を養はれしに非ざる。是を以て俳句の如き、泰西諸國に其の類例を見るべからざる一種の短詩は、範を取るべき者固より存せず、西洋審美學の尺度も之に適用すべき方法を解せられざりしかば、革新家の勢力範圍外として長く取殘され、或は短小取るに足らずとして一概に斥けられたり。

而已ならず、俳句其の物の性質にも亦彼等革新家の手を下すべからざる者あり。蓋し俳句は世界に於ける最小の詩形にして、其の含める意義と其の現す趣味とは全く特異の者なり。勿論用語は平易なり。吟咏の對象は卑

近なり。平民文學の名洵に空しからずと雖、滔々たる非文學的駄俳句を棄てて、眞に文學の稱を價すべき佳作を取れば、十七音の小篇よく深大の意義を湛へて、間々寸鐵人の詩想を穿つ者あり。且其の着想に於て、詩材の配合に於て、詩想表示の方法に於て、はた語格修辭に於て、他の諸種文學に決して見るべからざる一種の特徴あり。殊に其の全體に磅礴する趣味は俳句獨得の者にして、門外漢のたやすく窺ふべきに非ず。蕉門の寂しをりの如きは其の一例たるべく、此の傾向一歩を進むれば宗教的の色彩を帶び、俳道に遊ぶ者は此の趣味の門に入るによりて解脱の境に至るを得べし。此の點に於ては、泰西の如何なる文學も之に比ぶべき者あらず。又泰西の如何なる詩人評家〻之が詩想と趣味とを正當に解する事難し。故に輓近本邦の短詩を味うて之を譯出する泰西詩文の士少からずと雖、手を俳句に下せる者に至りては失敗せざる者稀なり。或は句を解して意を誤り、或は意を解して趣を失ふ。思ふに俳句の趣味は恰も禪宗の如く又文人畫の如く、純東洋的にして、西洋美學の則を以て律すべからざる一種の東洋詩美なり。

啻に西人のみならず、本邦文藝の士と雖、或は鑑識を謬り或は謎語として之を斥く。されば明治二十年頃の革新家が遂に指を此の方面に染むるに至らざりしは、其の思想の泰西より得たりしよりすれば寧ろ當然なりといふべきか。

然らば舊俳の内部より之が革新を計る者あらざりしか。彼等宗匠商賈の門流にも亦二三新知識を有する者なきに非ずと雖、一度其の門に入るや、依然舊俳の渦中に陷り、遂には皆純然たる宗匠商賈の繼承者となりにき。故に當時の俳句は依然第一章に述べたる狀態に在り、永機幹雄等所謂宗匠商賈の輩、徒に正風の虛名を呼號して祖翁の精神蕩然と空しく、穿ちを求めて理窟に陷り、風情を求めて晦澁に流れ、要するに詩の何たるを知らず、詩境と非詩境の別を悟らず。相率ゐて非文學の畛域に赴けり。而も其の流を追うて俗俳を弄ぶ者、三都を始め諸國に滿ち、宗匠の門に集りて社中を成し、月に幾卷の集を作り、發句聯句に點を乞ひ、謝禮馳走をなし、入花景物を置き、圍棋雙六同樣なる消閑の遊藝となす者、所として存せざるな

し。俳諧の墮落殆ど極れり。『俳諧古選』總論に、「作者年々に多く風格日々に乖き、門戶競ひ開けて多岐羊を失す、所謂盛極つて衰兆す」といへるは、明和以前の俳壇を評せし言葉ながら、移して以て明治の舊俳を評すべし、

俳諧の革新は二十年頃の文學革新家に望むべからざると共に、舊俳の門にも亦望むべからず。斯界若し革新すべくんば、之を別種の新人物に望まざるべからず。果然革新の曉鐘は、夙に泰西の文學思潮に浴し、而も自國文學を研鑚して俳諧固有の趣味を解し、且つ舊俳以外に立ちて其の門に入らざりし新俳人によりて撞き出されたり。正岡子規、尾崎紅葉の徒、即ち之が巨擘なり。

既に述べし如く、俳諧革新の標準は之を泰西に求むべからず、而も一代俳諧の墮落救ふべからざる者ありきとすれば、新俳人の取るべき道、唯標準を過去に求め、現代非文學的傾向を打破して之を文學の地位に進むるに在るのみ。されば當時舊俳の門を避けて新風を起さんとし、或は文學として價値ある俳諧を創めんとせる新作家は、期せずして古人の作に就き、其

の批判の標準など、從來俗俳の徒が稱ふる傳說的の其れを取らず、自己の新見識を以て之が妍醜を分ち、新に妙句名吟を其の間に求めて、之を研究の材、創作の師となせり。或は談林を採り、或は蕉風を採り、或は蕪翁を取り、其の宗とする所にこそ差あれ、天保以後の俗俳を斥けて天明以前の古俳に活眼を開きしは蓋し一なり。

古俳復活の先鋒たる子規と紅葉とは、其の年齡を同くし、其の學校を同くし、共に大學國文科に入り、共に半途退學し、而も等しく俳諧に指を染めたり。且つ子規が其の著『獺祭書屋俳句帖抄』に言ふ所によれば、彼が俳事を始めたるは十八年の頃なるが如く、硯友社員の紅葉追憶談によれば、紅葉の俳諧も亦子規と同年『我樂多文庫』と共に始まりしが如く、而も二者共に、舊俳と何等門流の關係なくして直に古俳の趣致を得んとしたりき。然れども二人相互の間には何等の交通なくして、各〻獨立の發展をなし、其の俳に入るの動機と師宗とする作家とを異にす。『俳句帖抄』に依れば、子規が身を俳句に投ずるに至りしは全く『俳句分類』の編纂に因す。曰く『俳

句分類』の研究が、昔の連歌時代より始つて、貞徳派の無趣味なる滑稽時代を過ぎ、宗因の談林に至つて僅に一點の活氣を見とめながら、尚五里霧中に迷うて居る有樣であつたが、春の日曠野など漸く佳境に入り始めて、猿蓑を繙いた時には一句一句皆面白いやうに思はれた。これが俳句に於ける進歩の第一歩であつた」と。時に二十四年なり。知るべし、子規の俳に入りしは古俳句の歷史的研究に基し、其の宗とせし所は『猿蓑』を中心とする蕉風の一派に在るを。紅葉は即ち之に異なり、其の俳句は素と文才の餘技にして、狂句川柳に近き諧謔の調を弄するに止りしが、既にして小說に於ける西鶴崇拜は延いて俳諧に及び、遂には西鶴の屬する梅翁一派を宗として之に趣き、未だ『猿蓑』以下に及ばざりき。時正に二十二年なり。知るべし、紅葉の俳諧は西鶴模倣に始り、宗とする所は談林の一派に在るを。斯くて同時に起りし二作家、一は直ちに談林に復歸し、他は一步進んで蕉風に適從しぬ。

爾來紅葉は硯友社一派を率ゐて紫吟社を結び、子規は所謂日本派を率ゐ

て新聞『日本』に據り、兩々步武を進めて流風世に布けり。此の間紅葉は談林の奇調より漸く平淡の調に入り、子規は元祿より一進して天明の俳風を追ひ、以て二十八年の盛時に及べり。兩派の赴く所同じからずと雖　之を復興俳諧といふ大旆の下に一團と見るを得べくんば、吾等は江戸時代文學史に於ける梅翁以來蕪村に至る前後百年間の俳諧史が、さながら最近五六年の間に縮寫せられたるを覺ゆるなり。されば兩派時を同うして立てりと雖、之を歷史的發達の跡に見ば、紅葉派は即ち俳諧復興の先驅にして、子規派は即ち之が主力なりといふべし。

紅葉が俳諧は諧謔の奇調を以て始り、小波（漣山人）思案、眉山、水蔭等、紫吟社の一派、頻りに談林風又は虛栗集風の發句を吐きぬ。時恰も小說勃興の機運に際會し、硯友社の聲望江湖に布ける折なりしかば、其の俳風も亦青年文客を動かして一時の流行を作りぬ。舊派は驚いて之を排斥し、書生俳諧と冷罵しぬ。既にして文學の進運、小說をして戲作の境を脫せしめ、紅葉が作風亦滑稽諧謔の戲作者風を擺脫するに及んで、其の俳諧もお

のづから楮餘の戲筆たる境界より出でて眞面目なる文學作品に入り、華麗より一轉して平淡に移り、想も調も漸く談林を離れぬ。時に二十七八年の交なり。然れども新に起せる俳調は、談林の其れの如く青年俳客を動かすに足らざりき。凝り性なる江戸氣質に、洒脫を求むる餘り、平淡盛、平淡となりて、遂に主觀的醇化の極に達し、從て其の趣味著しく個人的となりしかば、文壇多數に容れられて一世の流行をなすべき性質を失ひ了んぬ。蓋し紅葉が俳諧は決して明治文壇を飾るに足るべき者に非ず。之を創作せし事實は決して文學者としての紅葉の價値を增す所以に非ず。彼が『太陽』『秋の聲』等の雜誌、及び紀行文『煙霞療養』の中に收めたる吟什の如きは、決して小說の手を停めて之に從事すべき程の者に非ざるなり。

紅葉に次ぐ紫吟社中の作家を大江小波即ち漣山人となす。紅葉門下にては鏡花風葉最優る。此の派作家の特徵を擧ぐれば、趣向に時間と事件とを含める小說的のものを喜び、多少複雜なる人事を取らんとする傾向ありといふべし。

排壇革新の先驅たりし談林復興の一派は、普遍的傳播をなすに至らずして其の勢力を失ひしに際し、蕉風復活の子規一派、革新の主力として文壇に現れたり。正岡子規は伊豫松山の人、若うして東都に遊學し、高等中學に在る頃、恰も紅葉が同窓の人々と文社を結びしが如く、同鄕の內藤鳴雪、竹村黃塔、五百木瓢亭、新海非風、藤野古白等と文會を組み文集を編めり。二十四年大學國文科に在り、始めて俳句分類に志し、古來の俳諧を歷史的に研究して元祿の絕調に及び、茲に斯道に於ける活眼を開きて爾來一身を俳事に委ねたり。翌年の初「燈火十二ヶ月」「男女句合十二ヶ月」を始め、連りに一題十二ヶ月の俳句を作りしは即ち此の頃の事にて、調未だ整はず、句尚幼しと雖、縱橫の俳才欝勃の活氣おのづから其の裡に現はる。同年又俳論を『日本』に投じ、遂に大學の業を抛つて日本新聞社に入り、文苑の一隅に俳欄を設けて同人の句を載するに至りしかば、新聲始めて斯壇に上りぬ。爾來東西に旅して句作に耽り、遂に『猿蓑』に私淑して俳句の寂を悟り、蕉翁が自然觀察に眼を開きて古池の吟を得たりし如く、客觀寫生の

一門を立てて、俳句の領域を擴張したりき。『はて知らずの記』『高尾紀行』等に出でたる者は即ち當時の作にして、以て其の格調を窺ふべし。

斯かる格調は當代の俳壇に見るべからざりき。舊俳の俗調は勿論、談林復興の一派と雖、此の清新に遭ひては一籌を輸せざるを得ず。而して子規と歩調を一にせる者には前記鳴雪瓢亭等あり、之に加はりし者には佐藤肋骨、藤井紫影、夏目漱石等あり、來り學べる者には高濱虛子、河東碧梧桐、佐藤紅綠等ありて、新俳風漸く起り、二十七年『小日本』を發兊して句を江湖に募るや、應募者連りに出で、勢力愈〻張る。加之一方にては、子規俳話俳論を公にして益〻此の運動を進めたり。されば今、新派の句品を詳論するに先ち、暫く子規が俳論の主旨を畧述せん。

曩に硯友社の俳家は非文學の極に達せる當代俗俳を斥けて談林を取りしが、子規は談林の格調思想を以て尙非文學的なりとなし、『虛栗集』を以て尙幼稚なりとなし、『曠野』『猿蓑』に至りて始めて文學として推稱すべき俳諧を認めたり。彼の俳話は此の論を以て始まり、爾來論述する所少からず。

就中新俳宣傳の上に最力ありしは、即ち二十六年に出でたる『芭蕉雜談』を以て始となす。こは實に明治の新思想を以て俳諧を論じたる嚆矢といふべく、芭蕉を藉り來りて宗匠者流の沒詩眼を指摘し、進んで新詩眼の標準を示したる者なり。曰く、芭蕉の人格は偉大なり。五十年の短生涯、能く一代の崇拜を博して俳道の宗と仰がれ、恰も宗敎の祖師の如く後世に神視せられたり。然れども人格の偉大は直ちに文學者としての偉大を證する料とならず。其の俳諧を以て完全無缺超批評の靈物となしゝは、即ち憐むべき舊俳者流の無識に出づと。乃ち斷案を下して曰く、彼が俳句一千餘首、過半は惡句駄句にして、古來靈句として傳へられたるが中にも、宗匠者流が金科玉條とせる「古池や」「道のべの」「枯枝に」等は、一として凡句惡句ならざるはなし。彼等が此等の句を尊ぶは、批評眼の明なるありてするに非ず、唯文學上何等の價値なき傳說によりて之を神視するのみと。例句を擧げて縱横に批判し、以て二百年來の盲目的信仰を破りぬ。次に新に芭蕉の眞價を闡明せんとし、新審美見を以て集中の名句を精查し、芭蕉の芭蕉

たる所以を發揮せり。曰く、本邦詩歌に雄渾豪宕の致を缺けるや久し。此の間に介し、獨り豪壯の氣を藏め、雄渾の筆を揮ひ、天地の大觀を賦し、山水の勝概を叙し、直ちに萬葉を追ひ實朝に及かんとせる者は即ち芭蕉なり。試に「夏草」「最上川」「荒海」「大井川」「野分」等の諸吟を見るに、老健雄邁、殆ど空前絶後なり。而も彼れの技倆は之に止まらず、或は自然或は纖巧、或は華麗或は幽玄、其の他奇拔滑稽蘊雅、行く所として可ならざるなく、格調亦必しも一格に拘せず、凡百の姿態普く包容して滯るなし。芭蕉の偉大なる所は即ち爰に存すと。是れ子規の芭蕉論の概畧なり。

芭蕉論は當時に在りては實に空谷の跫音破天荒の論評なりき。其の直接の目的は千載誤られたる芭蕉の眞價を發揮するに在りきと雖、其の結果は舊俳折伏と新俳顯揚との二者となりて現れたり。勿論子規の說は多く獨斷に傾き、且つ連俳の第一句たる發句を評するに獨立せる一個の文學に對する標準を以てし、而も其の批評は彼自らの趣味見識に依據して疑はざる嫌ありと雖、彼れの趣味は明治の新趣味に養はれ、彼れの見識は明治の新思

潮に養はれたる者なり。『芭蕉雜談』一篇、小なりと雖、俳壇革新の曉鐘として長へに耳傾けらるべし。此の點に於て之が俳史に於ける地位は『小說神髓』の小說史に於けるに似たり。子規が宗匠者流の神聖視せる幽玄主義寂栞主義を打破して寫生風を發揚せし態度は、即ち逍遙が馬琴一流の勸懲主義を排斥して心理主義を鼓吹せし態度なりき。『雜談』及び其の他の俳論を收めたる『獺祭書屋俳話』一部、永く明治文壇の珍たるべし。

子規の古俳研究は、歩を進めて安永天明の中興俳傑に及び、『猿蓑』の高古を喜んで他を知らざりし彼は、是に於てか蕪村等豐麗の趣味を解するに至りぬ。二十七年より翌年に亘る彼が俳論と創作とは、即ち此の間遷移の消息を表す者にして、作句に著しく妖艷雄健等積極的趣味を帶び來れり。當時蕪村の俳壇に於ける價値未だ世に知られず、畫人の名のみ獨り高うして、其の句集の如き、殆ど坊間に存せざりしが、子規等類題集中蕪村の句の散在せるを見て其の異彩に驚き、乃ち故紙堆裡に一寫本を搜索し得て始めて其の全豹を窺ひ、之を研究する益〻深うして之を評價する益〻高く、遂に

漢語を含める一種詰屈の異調はいたく『日本』の俳句に影響を與へたり。此の變遷は子規一人に止まらず、延いては普く彼の一派に及び、『小日本』の募集に應ずる者、『小日本』廢刊して『日本』の俳欄に投稿する者、亦悉く之に倣ひ、相率ゐて夜半亭の格調を追へり。此の時に方りて、斯派の俳風天下に布き、新思潮に養はれたる青年、競うて子規の麾下に趨りぬ。世に稱して日本派と言ふ。『日本』に據りて立てるを以てなり。

日本派俳句の內容は爾來、又多少の變遷をなしたりき。『俳句帖抄』に依れば、子規が蕪村の眞相を解して眞の蕪村調を創り出でしは、二十九年『新花摘』を讀めるよりなりきと。然り、子規及び日本派の俳人は、蕪村に得る所多かり。然れども、思想と聲調と、必しも蕪村の模倣に終らず。思想に明治の特色を帶び、聲調に長短拘る所なき異格を加ふ。此の傾向の極端に發達して宛然當時の風潮を代表する者を虛子碧梧桐の二人となす。二人は鄉貫を同うし、修學の徑路を同うし、俳句に入りて其の步武を一にし、各特色ある思想聲調を以て斯壇の急先鋒となりにき。思ふに碧梧桐は冷靜

に事物を觀察し、虛子は熱情を以て事物に同感す。從て前者は客觀に傾き、後者は主觀に傾き、一は寫實的、他は理想的なり。碧梧桐は寫實に傾くを以て常に印象の明瞭ならんことを求む。十七字の短詩形の中に印象の明瞭なる詩想を盛らんとするが故に、其の描寫の對象は範圍極めて小なり。虛子は然らず。彼は理想に傾くを以て、或は主觀を詠じ或は複雜なる人事時間を含める事物を描く。故に彼の句は印象の明瞭碧梧桐に及ばずと雖、餘韻あり、時間の延長あり、間〻大景臺を描かんと試みぬ。

斯くの如きは子規が認めて以て古人以外の新調となし、蕪村に出でて一步を進めたりとなせる者なり。蓋し二人の爲せし所、悉く粉本を蕪村に求むべく、蕪村の企畫を紹ぎ來りて之を極度に發展せしめたるなりき。而して此の事實は、思想よりも意匠よりも、句法聲調に於て一層甚しきを見る。彼等は先づ五七五の格を破り、十九字二十一字の句を敢てし、漢語漢文の句法を用ひ、虛字を省きて實字を充てたり。且つ句切れに於て從來見るべからざる新工夫あり。極端に走るや、虛栗集にも求むべからざる奔放自在

の異調を取り、一時評壇の物議を招けり。斯かる詰屈の調破壞の調は、動もすれば韻文の美を失うて散漫無味の語句とならんとす。要するに永續すべからざる一時の變象なり。

是等の黠に於て鳴雪の俳風は虚碧二人と反對に立てり。鳴雪は弱冠の青年のみなる日本派に於ける唯一の老俳人にして、子規に取りては同鄕の先輩たり。彼は思想に於ては純客觀の事物にして餘韻の長きを喜び、形式に於ては五七五の正調を固守して虚碧の變調を斥く。彼は又用語は雅言を好みて虚碧の漢語を取らず、詩材は過去社會の事物を用ひ、總べて優美典麗若くは幽寂清雅の趣を愛す。

其の他當時日本派に重きをなしゝ者には、東京に佐藤紅綠石井露月あり。伊豫に村上霽月柳原極堂あり。熊本に夏目漱石あり。就中、紅綠は碧梧桐に似て、而も變化の才あり、露月は漢語調を好むこと虚碧に同じくして而も藻思多面なり。霽月夙に蕪村調の眞を得、極堂は巧緻清新の作をものし、漱石は斬新警拔の句を吐く。共に一方の雄なり。以下、下村牛伴福田把栗

坂本四方太等數ふるに暇あらず。
此の時に方りて俳運大に起り、舊俳家角田竹冷は戸川殘花と共に秋聲會を起し（二十八年）紫吟社雪人派を包容して新俳の一部と舊俳の一角との大連合を企て、雜誌『俳諧秋の聲』を發刊して機關となし、帝國文學會の佐々醒雪大野洒竹等、筑波會を立てて（二十九年）俳句を『帝國文學』に掲げたり。筑波會の俳人は、論評の精透なるに比して作句未だ熟せず。秋聲會は數十の會員を擁し、新舊調和の標榜を掲げたれども、新派の粹と舊派の粹とを招致すること能はずして、唯准新派准舊派の多少趣味を同うする者のみを集むるに止まりぬ。何れにしても俳社俳人の增加夥しく、俳書俳誌の發刊亦盛に、新聞雜誌は競うて俳句を載せたり。當時都下新聞十六種の中、之を載せざる者六種に過ぎず、雜誌にては、苟も文學にたづさはる者、一として之を收錄せざるなし。
然れども日本派以外の俳人俳社は、其の活動常に受動的に出づ。彼等は日本派が一切の異趣味一切の異色を拒否して、只管自派擁護に勉むる反撥

的排他的態度に、其の競爭心を激發せられて是に至りしのみ。故に其の活動や概ね末賴もしからず。加ふるに彼等が俳句研究に於ける熱心は到底日本派に及ばず。彼等が俳句を作るは、閑人の閑事業の如く、日本派の之に於ける、純然たる文學者の態度を以てし、研鑽擁護至らざる所なし。是を以て二者が斯壇に於ける進歩は、頃刻にして著しく懸絕し、日本派獨り其の進歩を續けたり。三十年に入りては紫吟社振はず、雪人派濳み、秋聲會亦衰へて『秋の聲』も倒れたり。之に反して日本派の傳播、各地方に亘り、極堂松山に俳誌『ほとゝぎす』を發刊し、爾來俳會の起る者各地相次ぎ、根岸子規庵の會衆益〻多きを加へ、翌年遂に一派の選集『新俳句』を刊行し、次で『ほとゝぎす』を東京に移して虛子之に當るに至り、斯派の勢力牢として拔くべからざるに至りぬ。

斯かる間に日本派の俳句は、內容に於ても少からざる進步をなし、二十九年に於ける變調漸く捨てられて平正の常調に復し、奇想を弄すること少くして着眼を平淡の境に求め、絢爛の趣致減じて淡泊の情趣加はらんとす。

而して蕪村の研究益〻歩武を進め、子規は「俳人蕪村」を『日本』に連載して、縱横剖析、俳人としての蕪村を天下に紹介し、更に鳴雪等と『蕪村句集』を研鑽講評して、之を『ほとゝぎす』に連載したりき。是に於てか、斯派俳句の趣致傾向、格調句法、乃至文學上の地位、社會の批判、大體に一定の境に達し、俳壇の優者として一般に認めらるゝに至れり。故に吾人は『新俳句』の刊行『ほとゝぎす』の東遷を以て、俳句革新の事業の略完成せる時期と見做し、乃ち筆を三十一年以後に進むるを停め、顧みて明治俳句の高潮たる日本派の作を檢し、古人以外明治の特色の如何なる者を含めるかを究めんとす。

三十二年の初、子規『ほとゝぎす』に論じて曰く、文明が簡單より複雜に、粗大より精緻に、散漫より緊密に趣くと共に、美術も亦同一の傾向を取りて進み、俳句亦從つて此の迹を追ふ。多樣と變化とは進歩の階段なり。明治俳句の進歩も亦此の中に攝せらる。明治俳句に古人以外の特色ありとすれば、其は即ち古人より一層複雜精緻緊密なるに在り。元祿は天明に進

めり。天明は更に進みて明治となる。新興の特色は、常に純粹なる新分子を含む所に存せずして、槪ね複雜精緻緊密の度を增す所に在り。碧梧桐の「强力の淸水濁して去りにけり」は、蕪村の「二人して掬べば濁る淸水かな」に比し、虛子の「繪踏して生殘りたる女かな」は、蕪村の「御手討の夫婦なりしを更衣」に比して一層時間的複雜を加へ、印象の明瞭ならんことを勉めたる碧梧桐等の句は、槪ね描寫の精緻を見るべく、一句充實勉めて冗漫の嫌なからん事を期せる虛子等の句は、句調の緊密遠く古人の外に出でたり。若し夫れ明治俳句の新趣味に至りては、當時小說界にも現はれし如く、濃厚に非ず高遠に非ず、むしろ淡泊平易、元祿天明に發達するを得ざりし一種の新俳味なり。此の俳味や、實に三十年以後の發達に屬し、虛子の「宿借さぬ蠶の村や行き過ぎし」の句に見ゆる如く、蕪村の「牡丹ある寺行き過ぎし恨かな」と辭りしに似ず、又「宿借さぬ火影や雪の家續き」とて其の光景を述べしに異なり、唯前村後村の間、中途に在りて步むを言ふのみ。此の間の趣味は新俳人にして始めて味ふを得べし。

俳句革新の運動は一段落を告げぬ。乃ち顧みて其の主唱者たる子規に就て再說する所あらしめよ。子規既に蕪村調に入りしより、其の作句絢爛の域を過ぎて平淡の境に入り、彼れの所謂新趣味は最早く彼れ其の人の句に現れたり。『俳句帖抄』に曰く、『新花摘』を讀むに、蕪村の頭を惱まして修正したる句は概ね好句ならず。又自慢の意を洩せる句も餘り好き句に非ず。最感服する句は多く一題七八句の中に在る極めて無造作に成りきと思はるる句なり。蕪村の大才を以て尙且かくの如くなるを見て、俳句の如何なる者なるかを始めて悟りぬと。子規の句が平易淡泊の趣を得たりしは、蓋し之より後なりしならん。「大凧に近よる鳶もなかりけり」「夏川や中流にして顧る」「椎の木を切り倒しけり秋の空」「夕烏一羽後れてしぐれけり」「水仙の莟に星の露を孕む」などの如きは此の期に屬するものか。然れども子規の俳才は一格に拘泥するが如き小なる者に非ず。一派の俳人、虛碧を始め、一として一時の僻調に走らざるなき中に立ちて、總べての格調を容れて餘裕綽々、常に進歩の先頭に立ちて一派を指導したるは即ち子規なりき。彼

は多様の變化を一身に集め、思想聲調行く所として可ならざるなし。二十六年『日本』に掲げし「古人調十二ヶ月」、及び二十九年同紙に出しゝ「俳句二十四體」の如き、子規自身も其の杜撰なるを言へりと雖、とにかく變化の才を見るべし。思ふに、多數を率ゐて一派の指導者たらん者は、常に此の種の才なかるべからず。而も其の蕪村に悟入するに方つてや、變化の裡おのづから子規獨得の俳風を生じ、遂に獨立して其の新趣味を宣傳するに至れり。而して彼の俳才は啻に俳句に止まらず、聯句にも現はれ、夙く二十五年以來時々試みし者少からず。然れども是れ固と彼れの餘技、深く究むるの要なし。

子規は又小說に指を染め、夙に「月の都」を草して『小日本』に掲げ、三十年又新小說に「花枕」を出し、又新體詩を試み、二十九年以來『日本人』『ほとゝぎす』等に載せたり。然れども是亦楮餘のすさび、鬱勃たる詩想の十七字詩の中に收むべからざる者あるに方りて是等の長詩を試みしに過ぎず。唯短歌に至りては、三十一年『日本』紙上之が革新に着手せし者

にて、子規に取りて甚だ眞面目の事業なれば、重ねて後節に説くべし。

文學者としての子規はかくの如く多方面なり。而も其の事業の最赫灼たるは、言ふまでもなく俳句復興の一事に在り。彼は俳句を墮落の深淵に救うて文學の境域に引き上げたり。詩歌の何たるを解せざる非文學者の輩に弄ばれし俳句をして、學識ある文學者、趣味卓越なる詩人の手に移らしめたり。此の點に於て、彼の事業は頗る小説界に於ける逍遙紅葉等の事業に似たり。若し古今俳史の上に其の儔を求むべくんば蓋し蕪村か。蕉翁後百年にして其の遺業を起しゝ者は蕪村にて、蕪村以後百年にして俳句を暗黑の中に救ひし者は即ち子規なり。然れども一派の俳人を率ゐ、一流の俳風を以て世を動かしゝを以てすれば、孤獨なる蕪村の如きに比すべきに非ずして、むしろ蕉翁其の人に比すべし。其の俳才の大なる其の俳徒の普遍なる、はた多數の子弟をして各〻其の才を盡さしめたる、畧其の面目を寫せり。加ふるに子規が梅室蒼虬等俗俳の勢力を排斥して審美眼を發句の上に開きしは、頗る芭蕉が貞門檀林の勢力を打破して自然美の上に活眼を開きしに

相似たり。然れども是は俳史上の位置、俳人としての彼等を比較せしのみ。其の性格に於ては必しも相同じからず。子規は熱烈の人なり。俳壇の革新に着手して以來、之を畢生の事業として身命を献じて悔いず。斯壇擁護の爲には如何なる外敵も排撃殲滅せずんば已まず。常に陣頭に立ちて一派の爲に長城となれり。師弟の道全く共の面目を改めたる今日に方り、文壇稀有の佳話を殘せる者、主として彼れの性格に出づ。子規の句集は『俳句帖抄』と題し、三十五年に至りて上卷を公にせり。二十五年より二十九年までの作を收む。續卷は之を公にするに至らずして止みにき。

第三節　和歌の革新

歌壇革新の思潮は夙く國學復興の際に萠し、國文教育家落合直文等の運動に共の泉源を有す。彼は二十五年淺香社を結びて文章和歌及新體詩を研究し、門下教を受くる者少からざりしが、特に盛なるは即ち和歌の研究なりき。然れども彼れの歌は固と御歌所一派の孱弱に反抗し、桂園末流の卑

俗を排斥して起りし者にて、即ち純乎たる復古なり。勿論彼れの創作は必しも議論に伴はず、歌格常に古調たるを得ざりきと雖、とにかく純日本想を以て古歌の粹を明治聖代に發揮せんと志したりき。彼は猶紅葉の元祿小說に於けるが如く、子規の元祿俳句に於けるが如く、近代俗惡の文學を捨てて直ちに古文學の靈泉に汲まんとする者、門流を率ゐて能く後進を導きたるも亦二家と蹟を同うす。而も復興の文學は常に多少の新采あり。淺香社の和歌亦然らざるべからず。假令萩の家其の人は泰西詩歌の思想に緣遠き人なりとするも、新思潮の文學界に於ける勢力至らぬ隈もなく、四圍の物象皆新思想によりて進める今日に方り、鷗外等『柵草紙』の徒と交り、紅葉子規等の目覺しき革新運動を目にするに及んでは、其の和歌に對する態度も亦漸く變ぜざるべからず。彼れが門下を敎ふるに、和歌は時代の進運に伴ふべしとの主義を以てするに至りしは、即ち此の時に在り。

當時歌壇を支配せる潮流は言ふまでもなく舊派の其れなりき。俳諧の宗匠が天下に遍きが如く、歌の師匠も亦津々浦々到る所に存し、詩歌の何た

るを知らず、詩美の何たるを解せず、漫然「心に思ふ事を見る物聞く物につけて言ひ出せる」者即ち和歌なりと考ふる固陋無識の徒が、恣りに子弟を取り詠草を集め、賻を收めて點を加へ、其の俗了せる事、點取俳諧者流と擇ぶ所なかりき。是を以て所謂歌人なる者、多士濟々、其の多きに堪へず。所有國學者は即ち歌人なり。所有公卿は悉く歌人なり。廟堂の有司亦多く歌人なり。而して皆流を競ひ派を立て、或は會を組み社を結び、各〻類を以て集り、門を開きて風を布く。當時斯界の中心たる御歌所には、高崎正風、小出粲、植松有經、大口鯛二等あり。其の他鈴木重嶺、阪正臣、黒川眞頼、税所敦子、本居豐穎等、或は某園或は何廼舍と稱する者頗る多かりき。然れども彼等は、其の流派の如何に係らず、畢竟桂園の末輩に非ざれば則ち四大人の糟粕に止り、想形共に陳套相襲ひ、千年の舊型を墨守して詩歌に對する根本的誤謬を悟らず、歌詞を制し、嫌忌を定め、範裡に籠居して井蛙の見を固持したりき。獨り海上胤平の和歌は、一種の異彩を此の間に放ち、其の萬葉模倣の作、頗る豪健の趣を帶べり。然れども彼れの

議論と製作とは、萬葉集の外に一步も出づる能はず、唯賀茂眞淵が百年以前になしたりし驚歎を再びせしに過ぎずして、其の製作の如きも固より橘曙覽に比ぶべくもあらざりき。特に詩歌に對する根本思想に至りては、依然傳來の誤謬を繼承し、從つて當代歌壇に何等の事蹟を殘さゞりき。

新思潮を餘所に見て、歌界の狀態が今日に至るまで其の舊樣を存する事斯くの如くなりしは何故ぞ。和歌革新の獨り大に後れたりしは何故ぞ。思ふに和歌は三千年の傳統を有する本邦最古の文學にして、前代以來小說以下の平民文學に對し、貴族文學堂上文學として立ち、因襲の久しき、革新を以て破壞と考ふる傾あり、新思潮の奔流も之に加ふるに由なかりき。否之に加ふる能はざりしに非ず、革新の手を下す價値なしとて之を拋棄せるなりき。蓋し新體詩の創始者は、其の精神に於ては即ち和歌の革新家なり。彼等は泰西詩歌の精神を本邦詩歌に加へんとするに方り、和歌なる者は到底複雜淸新なる新詩想を容るゝ能はずとなし、乃ち去つて新體詩を起しゝなり。故に斯道の先覺は夙く十年前に存し、詩歌に對する觀念の更新も亦

既に成就せられたりき。然れども之を和歌其の物に及ぼし、短詩としての發達を促し丶者未だ之あらず。即ち和歌は長く新思潮に見捨てられたるなりき。されば御歌所一派の歌は依然斯壇の牛耳を取り、『國光』『明治會叢誌』等、保守主義の雜誌に其の吟咏を載せ、堂上的の和歌尙跋扈せり。淺香社は實に斯かる時に現はれたるなり。

淺香社は歌壇革新の先驅をなせり。萩の家の歌を敎ふるや、舊型に依らず、舊樣を追はず、歌題の如きも新を取り陳を避け、其の新しきも唯大體の着想の方向を示すのみにて、極めて自由なる態度を取り、學弟をして各其の才を盡さしむ。『萩の家遺稿』收むる所の日課歌題を見るに、從來の月並の題と其の趣を異にし、着眼斬新にして題目奇拔、材料豐富にして吟咏の對境甚しく廣濶となれり。是を以て創作も亦おのづから舊套を脫して、清新掬すべき者少からず。而も彼れの和歌に對する愛著は無限にして、其の熱心や殆ど獻身的なり。「我が歌をあはれと思ふ人ひとり見出でゝ後に死なんとぞ思ふ」と述べしは、實に彼が素懷なるべし。彼は猶紅葉子規等の

如く、自己の文學を以て其の生命となしたりしなり。彼が斯界革新の先驅となり、其の事業を果すべき幾多靑年の歌人を養成し得たる、洵に故なきに非ず。然れども萩の家の思想は其の根柢に固有思想の牢乎たる者あり。飽くまで新思想を容れて着想聲調に大膽なる更新を加ふるに至らざりき。かの「夢に見し女神の跡を慕ひ來てけさ我見たり白百合の花」の如き作は、蓋し、彼れの本領に非ず。萩の家の歌は、猶其の新體詩「孝女白菊歌」等の、動もすれば七五調の長歌たらんとする形跡あるが如く、全然舊様を擺脫する能はざりき。彼はげに最妥當なる意義に於て過渡の歌人と稱すべく、革新の事業は渾て之を其の門下に附囑しけり。

今や文運興隆の機熟し、各種の文學競うて其の面目を改め、俳諧革新の事業も亦着々成功しぬ。和歌界のみ豈獨り舊態を存すべけんや。曩に和歌を以て改良するに足らずとなし、之を捨てて新體詩を創めたりしも、詩人の胸裡に存する詩想は必しも長大の詩形を俟つて發露すべき者と限らず。或は三十一字詩に表はすを以て最適切なりとし、或は十七字詩に表はすを

以て最妥當なりとなす。詩想は無限なり。豈和歌に盛るべき恰好の者無からんや。況や新詩想の興起、詩材の增加、詩語の擴張特に著しき今日に於てをや。是を以て新體詩起るも和歌は爲に倒るべきに非ず、兩々相並びて別個の發達をなすべき充分の餘地あるなり。

淺香社中の青年歌人は、萩の家の鼓吹の下に斯壇に新風を導かんと努力しぬ。與謝野鐵幹、金子薰園の徒、即ち是なり。就中鐵幹、年少の鋭氣を以て新調を皷し、革新の先頭に立ちて健鬪最力めたり。

鐵幹は京都の人、萩の家に學びて和歌新體詩に一新調を出し、覇氣旺にして常に豪健の風を喜べり。二十八年征淸の役中、韓國京城に在り。病んで重きや、歌うて曰く、「韓にしていかでか死なん我死なばをのこの歌ぞ復すたれなむ」と。以て從來の孱弱なる和歌に反抗し、男子の歌を以て任ぜる彼が意氣を想見すべし。二十九年長短各種の詩歌を集めて『東西南北』を出し、續いて三十年『天地玄黃』を刊行するや、一種の特調を帶べる短歌及び新體詩は、其の想形の粗放癡拙にして圓熟渾成に至らざるに係らず、

いたく文壇の注意を惹き、佐々木信綱と共に最有望なる青年歌人と目せられたり。彼れの新體詩は別に之を論ずべし。今特に短歌に就て之を見るに、萩の家の詩風を承けて、溫藉の情、淸新の致、掬すべき者亦なきに非ざれども、是等はむしろ其の特調に非ず。所謂鐵幹調は、年少の客氣、世を憤り俗を恨める慷慨の歌、若くは、太刀、虎、鷲等の語を連ねて豪快の情景を叙べし作に於て最善く現る。蓋し鐵幹、古今集以後の纖弱と優美とを嫌ひ、萬葉集の雄壯と剛健とを喜び、乃ち粗豪の一風を立てて斯壇の沈靜を破り、從來新體詩に壓倒せられて評論界の問題とならざりし和歌をして、復好箇研究の對境たらしむるに至れり。然れども彼れの萬葉を學べるは、雅樸高古の詩想、莊重なる五七の詩形に非ずして、單に其の雄壯の姿致のみ。唯夫れ雄壯ならんとす。故に往々衒氣あり、强ひて粗豪の語を連ねて佚宕を粧ひ、眞情の流露却て見るべからず。之を要するに、鐵幹の和歌は、革新の急先鋒たりし歷史的價値に於て重ずべき者にして、之に取るべき所は、即ち才氣縱橫、大膽なる詩風を試みたる點に存するのみ。

鐵幹と流派を異にし、詩風を異にしながら、同時に新作家として評壇の注意を惹きし青年歌人を竹柏園主人佐々木信綱となす。二十一年大學古典科を出で、爾來竹柏會を立てて和歌を門生に教へ、『日本歌學全書』『歌の栞』等、斯道に關する編纂出版をなして其の弘布に益する事少からず。二十九年其の詠草を『めざまし草』に出すや、漸く世の注目を惹き、聲調の流麗なるを以て稱せられたりき。彼れの和歌は鐵幹の覇氣なき代りに其の俗氣なく、鐵幹の衒氣なき代りに其の意氣なし。唯かの舊時代の發達に屬する和歌を以て新時代の事物に調和せんとし、多少清新の趣致を得んと勉むるに至つては、亦新歌人たるを失はず。試みに『めざまし草』所載の歌を撿するに、

星一つみ空に高くきらめきて空しき谷に木枯の吹く。
鐘の聲さ霧に消えて天地に到りわたれる夜の色かな。
藥賣る家の門べをたゝく子が髮ふきみだすさ夜嵐かな。

等、從來歌人に比して想像の範圍廣く、彼等に見るべからざる清新の趣致

あり。其の調の流麗暢達なるは、十年來專門の宗匠としての竹柏園が獨得の壇場にして、鐵幹の遠く及ばざる所なり。然れども、竹柏園は用語に於て保守的の主張を有し、新事物新思想を詠ずるに、總べて雅語を以てせんとするが故に、弊や流れて牽强となり、往々笑ふべき滑稽に陷る。思ふに彼れの長所は宛轉たる聲調と千篇立ろに成る達腕とに在り。而も短所亦茲に存し、動もすれば平弱無力の凡調を出し、詩趣索然として空しきあり。歌壇革新に對する態度も、頗る穩和にして、新派と言はんよりむしろ新舊調和派と稱するの妥當なるを見る。從て新文學界に於ける勢力も、亦おのづから鐵幹等の下に在るを免れず。

此の時に方りて、正岡子規は俳句革新の餘勢を振うて和歌革新に着手しぬ。三十一年の初『日本』に掲げし「歌人に與ふる書」は、即ち子規が斯壇に討つて出でたる名乘の聲にして、續いて「百中十首」の創作を同紙に掲げ、爾來竹の里人の名を以て一種の新調を詠み出でぬ。

緣先に玉卷く芭蕉玉解けて五尺の綠手水鉢を掩ふ。

病みて臥す窻の橘花咲きて散りて實になりて尙病みて臥す。

立並ぶ榛も槻も若葉して日の照る朝を四十雀鳴く。

の如きは、當時の歌壇に見るべからざる異彩を帶べり。而も其の異彩は鐵幹信綱と趣を異にし、調子歌題の上よりもむしろ一首に磅礴する趣味の上に存す。思ふに子規の和歌を讀みて先づ感ずるは、俳趣味の掩ふべからざるに在り。本邦の文壇短歌ありてより、歴代の歌人によりて養成せられたる和歌の趣味は、遂に特立して一種固有の者となり、漸々發展して茲に文壇一方の趣味を代表するに至れり。竹の里人の短歌は、即ち之に加味するに俳句の趣味を以てせるなり。此の特色や、漢語を含めるを指して言ふに非ず。漢語は鐵幹も之を用ひたりき。又間々萬葉の古調を交ふるを言ふに非ず。萬葉調は海上胤平も之を用ひたりき。用語句法の末に在らずして根本の趣味に於て存するなり。げに此の事は俳人にして和歌にたづさはらん者の、必ず然るべき傾向にして、芭蕉蕪村の徒が指を之に染めたりしならんには、夙に斯の風體を得たりしならん。而も前人之を成さず、竹の里人

乃ち本邦文壇に於ける和歌趣味と俳句趣味との調和者として之が創始の譽を負うたり。

俳趣味はげに竹の里人の異彩なり。而も尚第二の特色として、調のしまりて一點のたるみなきを擧ぐべし。彼は從來の和歌の一大通弊として調のたるめるを指摘し、斯かる歌を以て調とゝのはぬ歌となし、語の配置、句の連續に於て冗漫弛廢の病なく、飽くまで緊張勁健なるを尙ぶ。竹の里人は此の點より古來の和歌を通觀して萬葉集の卓逸せるを喜び、其の以後に於ては源實朝を推し、田安宗武を擧げ、井手曙覽を稱し、更に備前の歌人平賀元義を暗黑の中に救へり。斯くして彼は從來歌人の纖弱にして弛廢せる聲調、陳腐蹈襲の思想を排斥し、溯つて萬葉集の剛健にして緊張せる聲調を取り、自然及び人事に對する新しき著眼より得來れる詩想、若くは彼れの旣に得たる俳想より形作れる新歌想を詠み出でたりき。

三十二年以後の作歌も、大體に於て前條所說に異ならずと雖、唯萬葉崇拜の度の益〻加はり、啻に剛健の趣緊張の調のみならず。延いて句法用語を

模し、更に長歌旋頭歌等の形體を模し、進んで思想をも學ばんとするに至れり。然れども之旣に賀茂眞淵等に見たりし如く、萬葉崇拜の極、皮相に走りし一時の變象にして、直ちに以て竹の里人の本領となし難し。其の歌想漸く神に入れる頃の作『曇』五首、『雨中庭前の松を見て作る』十首、『風』八首、『星』九首等の如き、重厚勁健の古萬葉調を以て明治の新詩想を詠じ、詩味津々として淸新の氣盡きざる者あり。且つ一題數首乃至數十首をものして各其の趣を得たるは、固と俳句にて養ひし手腕なるべしと雖、亦彼れの詩想の富贍なるを見るに足る。唯事彼れが晩年に屬し、一臥起たざりし病牀の執筆なるが故に、其の詩材題目概ね病室乃至庭前の小範圍に限られ、動もすれば同一の歌想を繰り返さんとする嫌あるを恨とす。

竹の里人が『日本』紙上歌論創作を載せしより、麾下に集まりし者に、香取秀眞、伊藤左千夫、長塚節等あり。三十二年春根岸短歌會を起し、作歌は常に『日本』『ほとゝぎす』『心の花』等に載せ、歌論亦之に伴ひ、頻りに革新の説を稱へたり。

竹の里人の期する所は、蓋し短歌革新の事業を成就するに在りしならん。然れども其の運動の文壇に及ぼしゝ影響は、到底俳句に於けるが如く雄大なる能はざりき。思ふに是れ、當時和歌界の革新は、既に萩の家竹柏園の徒によりて其の幾分をなされ、加ふるに革新の大勢力たるべき青年好文の徒は、多少貴族的女流的なる和歌よりも、平民的男子的なる俳句に趣く傾向ありしを以てなるべし。況んや竹の里人の病漸く篤く、意氣復當年の如くならず、論壇筆を振ふ事既に絶えたるをや。

三十三年、鐵幹新詩社を結びて雜誌『明星』を發刊し、和歌を主として新體詩俳句其の他一般文學を收錄し、以て自家一流の和歌を弘布するに勉め、遂に所謂明星派の一團を形作りぬ。次に根岸派は、又機關雜誌『馬醉木』を發刊して斯派宣傳に勉めしが、其の青年の間に於ける勢力は、遂に『明星』に及ばざりき。

茲に暫く和歌に關する筆を擱き、趣つて上述の運動が文壇に殘せる結果を列擧すれば、從來單に志を述ぶる要具となし、又は風を移し俗を推す方

便となされし和歌を、一箇の美術品として取扱ふに至りし事、其の一なり。花鳥風月に限られし歌想著しく擴張せられ、蘆庵景樹等が夢想だも及ばざりし無數の題材新に入り來りし事、其の二なり。古來歌人の最得意となしし枕詞掛詞及び緣語の類、漸く其の跡を隱し、勉めて虛字を去りて實字を充つる傾向の生じたる事、其の三なり。古來制定せられたる歌詞の小範圍を脫して、新思想を述ぶるに足るべき總ての言語を用ふるに至りし事、其の四なり。從來の和歌を評する者、概ね作者の感想の仔細に表現せられたるか否かに標準を置きしに反し、藝術の本義よりして該作物が讀者に與ふる詩的効果に就て論ずるに至りし事、其の五なり。其の他新現象一にして足らずと雖、とにかく、一時新文學界に顧られざりし和歌が、再び新文人の手に保育せらるゝに至りしは、複雜なる詩想中、又此の可憐なる小詩形に寓すべき恰當の者存するが故なるべし。然れども、革新の事業は今尚試驗の際に屬し、當時の斯壇未だ明治の特調を見る能はざりき。

第六章　文學の轉進

第一節　小說　其の一

一　觀念小說

前期末葉に方り甚しく沈衰せる小說界は、文運興隆の機に乘じ、俄然として頭角を揚げぬ。累年蓄積し來りし潛勢力、爰に勃發して桃李一時に花咲き、而も前期の小說に比して一段の進步をなしぬ。小說專門の雜誌『文藝俱樂部』は二十八年新に發刊せられ、創刊の『太陽』亦小說に盡し、『國民の友』の小說に對する推挽も從前に劣らず、其の他諸新聞殊に『讀賣』『國會』『朝日』等、競うて小說を載せ、單行本の新刊益〻多きを加へたり。翻つて作家を見れば、紅葉露伴等前期の大家復び振ひ、柳浪眉山等、未だ大名をなさゞりし者著しく發達し、加ふるに鏡花一葉宙外天外等、新進の作家踵を接して起り、各特有の詩想を鼓して斯壇の一方に雄視せり。二十

九年に入りては、此の傾向益〻甚しく、專門雜誌『新小說』新に發刊せられ、創作出づる者愈〻盛なりき。而して此の間最早く其の萠芽を露し、小說界大轉進の陣頭に立ちし者は、卽ち觀念小說の一派なりき。

義に論ぜし如く、第二期に於ける淺薄なる寫實小說は長く文壇の聲譽を繫ぐ能はず、代つて起りし歷史小說は成功の域に至らずして衰へ、撥鬢小說は粗笨淺薄、在來の寫實小說にも過ぎたり。小說內容の進步は、二十五年以來全然停止せりと言ふべかりき。是に於てか意義內容の一層深刻なるを求むる傾向文壇に生じ、之に應ずる新進作家相次いで寫實小說の部內に出でぬ。彼等の作たるや、之を在來の寫實小說に較ぶれば、結構單純にして篇章亦短小なりと雖、其の心理描寫の精緻なる、其の性格表出の刻劃なるに至つては、遙に從來の者に勝り、而も槪ね一定の觀念若しくは傾向の上に立ち、人物の性格心理の發展、主として之に出づ。故に是等の人物の性格及び心理は、從來の小說に於けるよりも更に複雜、更に微妙にして、其の發展の如きも因果關係一層確然たり。作家が斯かる描寫を試みんとす

るや、特殊の人物を取り、特殊の舞臺を取り、以て特殊の思想觀念を寓し特殊の心理現象を描き、所謂寫實以外に或物を捉へんとせり。事二十八年に起り、世に稱して觀念小說といふ。眉山の『裏表』鏡花の『夜行巡査』『外科室』等の如きは、即ち此の種の小說の代表的製作なり。

川上眉山は硯友社中の才筆と稱へられしも、前期に於て未だ名をなす能はざりしが、二十八年に至りて、從來の纖麗妖冶の筆に加ふるに一種深刻の觀察着想を以てし、いたく在來の寫實と趣を異にし初めぬ。「太陽」に出せる「書記官」は、實に此の傾向の萠芽にして、『國民の友』附錄に掲げたる「うらおもて」は即ち之が精華なり。「書記官」は、純潔の處女が父の名利の爲に一身の貞操を犧牲に供する一種悲慘なる社會現象に着想せし者にして、世間往々存する、名利の繫累を利用して處女の純潔を弄ぶ惡むべき行爲を提げ來り、之を描くに一箇淸新なる具象的作品の形を以てせるなり。次に「うらおもて」は、同じく社會の罪惡に着想し、德行家として知られし者が冷酷なる世人に其の慈善心を飜弄せられ、遂に財產を蕩盡し、はて

は社會に突き放さるゝに至りて始めて社會の無情なるに驚き、熟々世相を觀察して我利私慾の世となし、遂に自らも盜賊となれる順序を描き、以て社會を痛罵せるなり。斯くの如き趣向は從來の小說に見るべからざりき。大詩才にして筆を此の方面に向け、複雜なる心理變化の剖析を試みる事あらば、沈痛深刻人の肺腑を穿つべき異彩出色の作を得べし。然れども作者、理想を表すに專にして事件甚だ自然に遠く、社會觀を體現するに急にして心理變化の順序甚だ分明ならず。僅かに其の一端に觸れしのみにて、未だ優秀なる藝術となし得ざりしを憾とす。唯小說題材を一新せし功績小ならずといふべし。

斯くして眉山は觀念小說作家の一代表者となりぬ。然れども此の作風を文壇に捲き起して之が陣頭に花々しく戰ひし者は、即ち紅葉門下の新進作家泉鏡花なりき。眉山の如きはむしろ後れて此の風を學びしが如し。鏡花は二十六年紅葉の門に入り、夙に峻峭の筆を以て『讀賣』に異彩を放ちしが、二十八年春、先づ「夜行巡査」續いて「外科室」を『文藝倶樂部』に

掲ぐるに及び、彼れの名は俄然として評壇の論題となりにき。

帝都の夜を守る一巡査あり、職務に忠實なる事類なく、夜行巡査の職務を行ふに一點の懈怠なく、又一點の假借なく、宛然たる職務の權化なりき。然れども彼も亦木石の無情漢ならず。熱情を傾けたる一箇の愛婦を有せり。其の冷々氷の如くなるは、職務の觀念强烈にして凡百の私情暫く屏息するのみ。偶〻愛婦の父泥醉し、彼の女に扶けられて夜を歸り、彼を嘲罵誹議して兩者の愛を割かんとす。巡査は默々として醉漢の後に從へり。忽然醉漢誤つて濠に陷りぬ。巡査は身を躍らして續いて濠に入りぬ。彼は人民保護の職掌を行はんが爲に、惡むべき戀の妨害者をも救はんとするなり。憫むべし、氷の如き濠水は此の職務の權化をして長へに逝かしめぬ。斯くの如きは「夜行巡査」の大旨なり。蓋し鏡花義務の觀念を寫さんと慾し、戀愛の私情に對する此の觀念の勝利を描き、以て人生悲劇的の一方面を深刻に體現せんとす。故に巡査が職務に忠なれば忠なるだけ、其の情熱の高ければ高きだけ、戀愛の妨害の大なれば大なるだけ、作者の成功は其れだけ光

榮ある者となりぬべし。此の篇固より渾成の名什に非ざれども、其の題材着想、全然創始に出で、筆致亦幽峭にして詩趣に富み、詢に小說一轉の機を示せりといふべし。「外科室」の醫學士と伯爵婦人との間、亦這般斷腸悲慘の趣を盡し、遂にわりなき戀に一身を献ずるに至る所、更に人生の恨事を體現せり。

二小說出でて鏡花の名文壇に普く、奇峭の想、俊爽の氣、沈痛の筆、相俟つて人生の或物を描出せんとする彼れの作は、教養ある讀書社會に多大の歡迎を受けたり。同年の「鐘聲夜半錄」、二十九年の「琵琶傳」「化銀杏」「海城發電」の如きは、皆此の系統を引ける者、構想益〻慘憺、筆法益〻瑰奇、「化銀杏」に至りて特に此の傾向を示せり。然れども物一度新傾向を帶ぶるや、往々極端に走り、從て其の弊に陷る。鏡花亦此の弊竇を承け、着想奇に過ぎて怪に流れ、筆力玄に過ぎて趣を失ひ、其の極不自然背人情の域に落ち、人物の如き、往々常識を超え常情を離れたる奇癖の怪物となる。故に其の事の悲慘なる、讀者の胸を刳る者あるに係らず、惻々として人を動

かす事なく、特に主人公の悲劇的沒落以外、屢々殺人の慘事を仕組みたれば、中には却て不快の感を起す事なきにあらず。

吾人は鏡花眉山の二人を以て小說界に於ける新傾向の唱首となせり。爾來或は社會の罪を寫さんとし、或は人生の目的としての戀を描かんとし、其の他の倫理上心理上の種々の觀念或は概念を捉へ來りて之を作品の上に體現せんと試みたる小說續々出で來れり。批評家は概ね之を觀念小說と呼べども、尙時には概念小說と稱し、或は其の傾向より名けて深刻小說悲慘小說とも言ひ、又は心理描寫を主とする點よりして漠然心理小說とも言へり。然れども心理小說は觀念小說深刻小說などよりも範圍廣く、所謂觀念小說は小說全體の心理的傾向の一部なり。一部先づ起りて種々の部類之に繼ぎ、遂に各種の心理小說競ひ起るに至る。此の現象は獨り小說界に存するのみならず、文藝界の全部を通じて現はれたり。國民の自覺、學術の進步と共に、從來比較的淺薄なりし思想界の比較的深厚となるや、文藝界に於ても一種深刻幽玄の新思潮起り、世態人情の幾微を捉へて直ちに人の靈

界に觸れんとす。特に小說に於ては、或は作者自ら泰西小說に接し、或は小說の理想觀念などを論ぜる批評家の論議に鑑み、從來の小說の輕浮單調に對して漸く不滿足を感ぜるが上に、社會生活の現狀は人をして人生の嚴肅なる方面を經驗せしめたりしかば、愈〻益〻此の傾向を助長せるなり。

觀念小說に次いで現れたるは、即ち廣津柳浪の深刻小說悲慘小說なり。彼は前期に在りて、既に人生の幾微を寫すに長じたりしが、今や新興の氣運に乘じ、二十八年「黑蜥蜴」「變目傳」を出し、其の他翌年に亘りて「白百合」「龜さん」等を出し、愈〻其の本領を發揮し來れり。就中「黑蜥蜴」は、隻眼痘面の醜婦にして而も貞實至孝なる大工の嫁が、貞操の爲に無慈悲酒亂の舅を黑蜥蜴にて毒殺し、己亦自殺すといふ悲慘なる脚色、「變目傳」は、侏儒變目の醜貌に生れて而も心尋常の情を解する心身不調和の男が、性格境遇の否なるに激成せられて遂に殺人の大罪を犯すに至る淒慘の事象を描き、其の他概ね、之に類せる病的人物の憫むべき忌むべき運命を敘せり。此等の作出でて柳浪の名大に揚り、鏡花等と共に新派と稱せられたり。

柳浪は概ね筆を人生の暗黒面に着け、性格と肉體と境遇との關係より凄絶なる破綻を來すに至る徑路をば、極めて痛切に寫し出さんとせり。其の主人公が常に肉體上精神上の不具者、若くは强度の神經質なるが如き、はた其の大破綻の結末が概ね殺人自殺等鮮血を以て染めなされしが如きは、即ち此の目的を達せんが爲に外ならず。鏡花を以て之に比するに、彼に在りては觀念或は概念といふべき者全篇を支配するも、此に在りては必しも然らず、唯世相の悲慘なる一面を深刻に描き出さんとするを見るのみ。彼は又理想に馳せて超人間の不自然界に入ることありと雖、此は決して然らず、人生一部の寫實として特殊の場合に於ける心理自然の徑路を寫せり。而も人の靈界に觸れて其の消息を描き出でんとせるは、二者等しく新派の小說家たるを失はず。唯惜む、柳浪の小說往々殘酷に流れて不快の感を惹起するを。

觀念小說深刻小說一たび出でて文壇爲に活氣を生じ、讀書社會は其の新奇の色彩に眩して頻りに之を謳歌せり。然れども、少しく思慮ある批評家

は、潑剌たる新彩の裡に潜める幾多の缺點を見て屢〻之を難ぜり。蓋し是等小說の失とすべきは、主に、規模小にして觀察概ね主觀に偏し、從て不自然病的に陷ること多きに在り。是を以て一時の革命的現象として心理的傾向を小說界に殘しつゝも、漸次勢力を文壇に失へり。

吾人は叙述の順序として當時續々起りし心理小說の新進作家を擧げ、觀念小說悲慘小說以外如何なる發展をなしゝかを論ずべき場合に立向へり。されど上述三作家の作風も、亦之と同時に、多少の推移發展をなせるを以て、便宜上暫く他を差措いて三作家共の後の作を見ん。

眉山が「裏表」以後の作にありては、二十九年作「松風」翌年作「朧富士」と「絃聲」と、稍見るに足る。「松風」は詩人は狂に類すといふ思想を體現せる者と見るべく、「朧富士」は葛藤ある戀愛と悲慘なる運命とを叙して、女子心理狀態の一方面を描き、「絃聲」は人心の奥妙を寫すに夜半おのづから起る絃聲を以てせる幽玄の作なり。是等の作、聲譽固より前年の作に及ばずと雖、觀念小說の矯激なくして心理小說の自然的なる分子著しく

加はり、作風の推移鮮少に非ず。唯其の筆力未だ眉山の名を高うするに足らざるを恨となす。

鏡花は怪奇に過ぐると人情に遠きとの故を以て、一時評壇の非難を受け、爲に二十九年の主たる作「一の卷」より「六の卷」に亘る長篇を「文藝倶樂部」に掲げし時も、苦心の作なるに係らず、世の視聽を惹くこと少かりき。然れども鏡花の鏡花たる所は、幽玄神秘の詩的風韻に在りて、寫實的筆力の精細に存せず。鬼才益幻怪を逞うして「龍潭譚」となり、「照葉狂言」となり、「風流蝶花形」となり、「化鳥」となり、「清心庵」となり、「蒋題目」となり、三十一年に入りて更に「辰巳巷談」「笈草紙」「梟物語」等となり、一方より性に違ふ情に悖るとの貶評、邪路に入れりとの警策を受けながら、兎に角才筆斥くべからざる者ありき。

「龍潭譚」は薄暮一幼童の魔に魅せられて夢幻に入るを描き、「風流蝶花形」は怪蝶を材として遊女の咀死を寫し、共に凄婉の致に富む。「化鳥」は落魄の佳人半狂して夫の形見の一塊肉を抱き、世を恨み人を罵りて已れ獨り天

女なりと言ふに至れる悲痛の物語、「清心庵」は貴人に嫁せし美女が幼馴染の少年に邂逅して共の零落に同情し、遂に相共に一草廬に止りて家に歸らずといふ奇矯の筋、共に幽玄の詩趣を認むべし。「髯題目」と「辰巳巷談」とは、一は藝人の末路、他は女郎の末路を描きて斬新又凄涼、「梟物語」は眞宗寺院の內部を寫して怪奇なる人物性格を集め、幽玄蒼涼人をして悚然たらしむ。而して作家が是等の趣向を筆にするや、獨得の省筆法を以て含蓄餘韻あらんことを求め、隱約の消息を讀者の想像に一任す。是を以て彼れの小說を讀むや、先づ神秘的の想髓と脚色とに魅せられ、文字の怪奇と詞章の凄愴とは、之を助けて恰も幽界に赴くが如き思あらしめ、次いで此の省筆に遭ふや、益〻想像を逞うして夢幻の怪境に走せしめらる。蓋し鏡花は人情世態の幾微を寫す作家に非ずして、神秘界の消息を穿たんとする作家なり。彼れの立脚地は正に茲に在りといふべし。

然れども斯る特色を發揮して渾成の域に至らんには非常の修養を要す。鏡花の筆力惜むらくは未だ圓熟せず、堂に上りて未だ室に入らず。其の人

物と事件とは、一面に於て現實を超えて幽怪の畛に入ると共に、他面に於て未だ超自然の神秘界に觸れず、徒に結構の不可思議と詞章の幽玄とを弄して思想の神秘を裝はんとす。故に形式に於て多少の成功を見ると雖、內容に於て意外の空虛に驚く。彼れの讀者を魅する所以の者は、主として脚色の不可思議なるによりて催起せらるゝ探偵的の好奇心と、詩味津々たる描寫の往々幽玄の高調に達する箇處あるが爲に惹起せらるゝ感情の昂上との二者に在るべし。思ふに鏡花の作、全體としては散漫の失あると共に、局部に於て緊密周匝、及ぶべからざる者あり。是に於てか作者の名復び揚り、模倣する者少からず。盛名當年の如くならざれども、筆力の發展決して尠少に非ず。又以て後進作家の冠冕たるを失はず。

悲慘小說の名家柳浪は、其の深刻の筆鋒を以て心中物を作り初めぬ。二十九年『文藝俱樂部』に出でし「今戶心中」「新小說」に出でし「河內屋」、『小說六佳選』に出でし「淺瀨の波」の如き是なり。皆情海に浮沈する男女の複雜なる關係と葛藤ある戀愛とを描き、結ぶに悲慘なる情死の現象を

以てし、即ち元祿の昔、巣林子の靈筆に詩化せられし心中を取り來りて一篇の主眼となし、之に戯曲的結構と心理の解剖とを經緯せりき。就中「河内屋」は當年の傑作にして、所有柳浪の長所を集めたりと稱せらる。げに寫實小說心理小說在りてより、此の作程人情世態の自然なる現象を描ける者少く、人物の氣稟性質に應じ、其の境遇の上に凡百の色彩を與ふる狀況も明瞭に描かれ、特に對話の如きは作者獨得の筆力巧妙を極む。げに此の作は啻に柳浪をして名を當代に高からしめしのみならず、明治の文壇に重きを爲すに至らしめし傑作なり。

爾來柳浪は「信濃屋」「段々染」「異り種」等、創作少からず、皆深刻の觀察を恣にし、陰森の氣に滿つ。げに柳浪獨得の壇場は、即ち人の思ひ至らぬ疾痛すべき人生問題を捉へ、一種の深刻なる詩題を自然界より擇み出して、之を讀者に提供する手腕に在り。此の特質は『殘菊』以來の者にして、慘憺の境遇と悲痛の運命とに飜弄せらるゝ情的人物を描いて、其の心理の苦悶を叙する所、人の腸を九回せしむ。唯描寫の筆力惜むらくは之に伴は

ず。對話を行るの巧妙なる、當代を曠うするに係らず、心情流動の迹を寫すや、往々說明の疎筆を以て匆々叙し去らんとす。讀者が斯かる文章を讀みて、尙無限の妙味と一種の魔力とを感ずるは、詩題結構共の物が極めて奇拔にして、讀者の想像をして、文筆の形似を脫して直ちに事象の中心に突入せしむるが故なり。彼れの長所は結構の戲曲的發展に在ると共に、對話を以て始終すべき戲曲的形體に在り。此の點に於て三十年「太陽」に揭げし「畜生腹」の如きは、最もよく作者の特色を現せる者といふべし。「畜生腹」は「河內屋」と共に柳浪一代の傑作にして、畜生腹の一婦人、苦惱の餘、惡婆の勸誘に應じて一兒を暗に送りしより、悔恨と恐怖とに身を悶え心を勞し、夫の疑惑と惡婆の强迫とに挾まれて、懊惱憂苦、遂に夫婦の間長へに疎隔するに至りし始末を寫し、通篇讀者の感興を緊張して一點の弛みを與へず、凄慘の氣人に迫りて卒讀に堪へ難し。作者嘗て曰く、深夜燈下に非ざれば小說の作をなす能はずと。其の能く凄婉なる脚色と筆致とを得來るは、孤燈暗影の下に思を凝せばか。然れども事利あれば必ず弊を伴

ふ。柳浪の如きも往々慘酷に過ぎ殘忍に流れ、刺激强烈に過ぎて聞く不快の感を起す。此の傾向は彼を驅りて精神上肉體上の不具者を寫さしめ、然らざるも下流の社會に想を構へ、延いて殺人自殺心中等、衝動の强烈なる結末を取らしめたり。之を以て彼れの作には詩想の高尙脫俗なる者なく、寫す所の戀愛概ね汚濁の中の者たり。

同年の作の可なる者には、尙「あにき」「靑大將」「七騎落」あり。手腕漸く熟して强ひて悲慘を求めず、作風漸く中正に赴き、步一步老成の領域に近きつゝあり。三十一年「羽拔鳥」(『新著月刊』)「女仕入」(『新小說』)等を出すに及んで益〻此の步趨を取り、前者は從來の悲慘小說に比して、結構性格の自然なる、結末の光明的なる點に於て大なる差異を現し、後者は多少悲慘小說當年の面影を存すと雖、心理自然の徑路を描いて一糸亂れず、好箇戲曲的發展をなせり。此の種の心理小說は、當時の小說界を風靡せる者にして、柳浪實に此の間に重きをなし、多作縱橫、彫琢を用ひずして直ちに稿を脫する所、亦異才なりといふべし。

斯くの如く新潮流の弘布に最力ありし三子者の作風は、一時極端に走りて其の反動を受くるに至りしかば、飜つて多少の變更推移を其の間になし、概ね中正折衷の風に赴けり。獨り鏡花は寫實を離れて幻怪の境に入りしも、柳浪は其の心理小說益〻自然的となり、比年大に奮ふ。而して三子者皆明治寫實小說の祖門たる硯友社に出でしを見れば、斯壇の進步に對する該社の因緣蓋し淺からず。況んや江見水蔭大に振ひ、小栗風葉新に起りて之に貢献する所ありしをや。此の時に方りて後進作家踵を接して起り、文壇之を歡迎するの聲高く、二十九年創刊の『新小說』『世界の日本』翌年創刊の『新著月刊』等、皆之を標榜せり。既に新進作家あり。乃ち之に對して從來の作家を先進作家又は老大家と呼び、二者是非の論喧しく、反動又反動、後進奇峭の氣は先進老熟の風に宥和せられて、極端に奔逸すること漸次少かりき。此の先後新舊融和の潮流は、夙く女作家一葉に萌し、早稻田專門學校出身の諸作家に至りて其の勢を逞うせり。以下序次を追うて是等新進作家を叙すべし。

二　心理小説

觀念小説深刻小説の天下を風靡するに方り、筆は露伴を學びて氣骨あゝ西鶴風を取り、想は心理的主觀的の最新思潮に出でたる一新作家の、忽焉として文壇に現れ、佳作連出、盛名一時に世に布けるありき。樋口一葉女史是なり。一葉は東京の人、二十五年始めて筆を小説に執り、爾來二十九年、其の病歿に至るまで、文壇に於ける生命僅に四歳、而も其の間作る處二十餘篇皆傳ふるに足る。歿後蒐輯發刊せられし『一葉全集』に就て見るに、其の處女作は「闇櫻」にして、二十五年の中に得たりし短篇總て七種ありと雖、世に公にせられしは『都の花』に出でし「埋れ木」などや嚆矢なるべき。其の後『文學界』『文藝倶樂部』等に掲げし者數篇あるも、未だ作家の名を高うするに至らざりしが、二十八年一代の傑作「たけくらべ」『文學界』に出で、續いて「行く雲」『太陽』に、「濁江」『文藝倶樂部』に、「十三夜」『閨秀小説』に出で、翌年「わかれ道」『國民の友』に、「われから」『文藝倶樂部』に出づるに及び、才筆忽ち文壇を動かすに至りぬ。

「たけくらべ」は揚臺近き大音寺前、一體の風俗餘所と變りて少年少女のませかた恐しき市井に人となり、春は櫻の賑ひ秋は仁和賀の折々に、迭にくらべ來し振分髪の間にも、情、意氣地、戀無常、種々の世相の幼きながらに見らるべき情味ある舞臺に筆を着け、全盛の華魁を姉に持てる十四の少女美登利を主人公となし、界隈種々の少年少女を之に配し、以て美登利の快活勝氣なる性格を彫浮め、此の如き氣象者のいつか物恥かしく人懐かしくなるに至れる心理變化の微妙を躍動せしめたり。「濁江」は場末新開地の銘酒屋菊の井の出女お力が、噓のありたけ串戯に其の日を送る中、怨の刄にかゝりてお寺の山の人魂と化するに至りし筋を叙し、遺傳と、境遇と、閲歴と、相倚りて成る人生の複雜なる徑路を描きて筆力甚深刻、平和快活の大海の下、奔激悲慘の暗流あるを示し、絃歌嬉笑の裡、悲壯の淚の潜むを寫して筆鋒熱烈を極む。「十三夜」は貧乏士族の娘お關が夫の虐待に堪へ兼ねて夜私に親里に趣きしに、殘し置きし一子の愛やら物堅き父が訓戒やらに思ひ返して歸る途中、十三夜の月影に、處女なりし昔思をかけたりし

男の、車夫とまでなり下りしに遇ひ、浮世に辛きは一人と思ふなとて相別れ去るといふ筋、憂きは五の世に思ふ事多き世相の一部を描破して凄婉痛惻人を動かす。其の他「行く雲」「別れ道」「われから」等、皆人情の幾微に觸れ、世相の凄慘を表せり。斯くの如くにして一葉の名は文壇賞讃の中心となり、或は誠の詩人といふ稱を贈るを惜まずと言ひ、或は當今の小説界は一葉時代なりと呼ぶに至りき。かゝる過大の讃美は、勿論才華一時に煥發せる强烈の光彩に眩惑して冷靜なる鑒識を誤りしに出でしならめど、亦是れ從來觀念小說悲慘小說の奇怪慘酷に嫌惡の情を生じたりし時に際し、自然温藉にして而も意義の深刻なるを失はざる新小說を得たりしに因らずんばあらず。尙其の全集に就きて觀察せん。

一葉の見たる社會は、冷酷無情個人の發達を抑壓する意地惡の者なりき。まゝならぬ憂世とかこつは一葉の社會觀よりすればむしろ穩和に過ぐ。社會は個人と對立して屈せざる者に非ずして、個人の上に駕して之を埋沒せんとする者なり。—「行く雲」の中に—「二葉の新芽に雪霜の降りかゝりて是で

も伸びるかと押へるやうな仕方」と言へるは、正に社會の個人に對する態度を說けるなり。社會果して斯の如しとすれば、此の間に生を享けし者、醉生夢死の徒に非ざるよりは如何で平穩無事なるを得べき。苟も一節あらん者、誰か社會の冷酷無情に萬斛の憤涙を灑ぎ、之に抗し之に逆ひ、當つて摧けざらん。一葉の小說に於ける人物は即ち是なりけり。

斯かる性格を以てこの意地惡の社會に處せんには、忽ち起るは衝突なり、葛藤なり熱涙なり。續いて起るは悲むべき大破綻、恐るべき大破壞なり。然らば則ち之に繼いで來るべき結末は何ぞや。正に是れ一葉の小說の主眼とする所、全集二十餘篇は即ち此の間の消息を描かんと試みたるものに外ならず。思ふに古來の文學にして此の消息に觸るゝ者、概ね自殺若しくは遁世を以て其の結末となせり。然れども是等は、一葉の小說の結末たらんには餘りに淺薄、餘りに古風なり。深刻の思潮文界に横溢せし當時に在りては、一種沈痛なる人生觀を生じ、萬斛の憤涙を揮ひ盡せる後に於ける異常の諦めを生ぜり。一葉が甚深の同情を以て氣骨ある筆を揮ひしは、即ち

此の恐ろしき諦めを生ずるに至る消息にして、詩人として成功せし所亦茲に在り。而して男女人物の中、全幅の同情を傾倒せしは勿論女性に在りとす。蓋し弱きにつれなき冷酷の社會は、人の中の最弱き女性に向つて特に其の横暴を逞うす。持つて生れし一ふしあらん女の、涙を揮ひ盡して所有强情我慢に恐しき決心を示すに至るはむしろ憫むべからずや。一葉は即ち是等無告の女性の爲に萬丈の氣焔を吐ける者、明治文壇に在りて、當代の女性を描くことかくの如く痛切なるあらず。紅葉等の寫實家が創れる女性の如きは、之に比すれば尙未だ淺薄なるを免れず。

吾人は一葉の小說を通觀して畧其の特質を盡しぬ。顧みて之を思ふ、全集二十餘篇悉く同一人生觀の上に立ち、同一性格を描けり。女史の小說は大自然を描かんが爲に人生の種々相を寫せるに非ずして、一家の人生觀を表現せんが爲に其の特殊相を寫せるかの觀あり。換言すれば各篇其の結構を異にするに係らず、畢竟同一問題に就ての實例の蒐集に過ぎず。是を以て主觀の甚彩は全作品に亘り、篇中の人物動もすれば作者其の人の影子た

らんとし、而も其の影子や、作者の人生觀の明晰直截なるだけ、所謂寫實派の其れに比して甚しく明瞭著大なり。故に其の筆に上る所、狹隘なる社會に限らるゝ代りに、描寫の深さ、奥底に徹し、單調なる性格に限らるゝ代りに、刻劃の生采、躍動の妙を極む。此の點に於て一葉の思想筆意は所謂深刻小說に似て其の奇怪と慘酷と無く、却て同情の人を動す者あり。且夫れ一葉の自然を重んじ背實を忌むこと必しも所謂寫實家に劣らず。女史は即ち寫實家の心を以て深刻小說を作る者、從來の寫實派と觀念小說一派との最善き調和者折衷家なり。

一葉は小說に師事する所なかりしかど、私淑せるは蓋し露伴に在りき。人物の性格の如きは頗る露伴のに類似し、特に「埋木」の主人公の如きは全く露伴固有の人物なり。從て文章亦露伴を學べる者少からず。蓋し一葉の文、初め西鶴を師としたりしが、西鶴を脫して一家をなせる露伴を見るに及び、更に之に私淑するに至りしなり。「埋木」の如きは元祿の大家を模倣せる跡沒すべからざると共に、頗る露伴の初期の文章に類す。然れども

「濁江」「十三夜」に至つては既に獨立して一新體を創始し、精練にして才氣縱横、雅俗の言語句法を驅使するの妙一世に秀づ。特に「たけくらべ」の一篇は、文情清婉文氣練熟、洵に渾成の名什たり。且つ從來等閑視せられし小說中の敍景分子著しく增加し、特に「行く雲」の末段「たけくらべ」十回に於ける情景雙敍の一節の如きは、清新簡淨にして趣味溢るゝが如し。不幸にして詩想文章共の才を盡すに至らずして病に伏し、一臥遂に立たざりき。年僅かに二十五歲。大橋乙羽齋藤綠雨等『一葉全集』を編纂發行し、以て記念となす。

一葉文壇に出でし比、女流文學者の筆を小說に染むる者一時に輩出しぬ。從來女流文學とし言へば、和歌に限られたりしが、文運の興隆以來、往々小說飜譯新體詩等に及べり。三宅花圃の小說に於ける、若松賤子、小金井喜美子の飜譯に於ける、夙に才筆の目ありしが、是に至りて一葉を出し、北田薄氷を出し、田澤稻舟を出し、大塚楠緒子を出し、二十八年末遂に一部『閨秀小說』の出版を見るに至れり。收むる所の作家は上揭數人を合せ

て總べて十二、就中花圃は曩に「露のよすが」を『太陽』に、今は「萩桔梗」を『閨秀小說』に出し、共に無垢の娘心、可憐なる處女の情を寫して溫藉の姿致を極む。作者は當時に於ても、又其の前後に於ても、作品多からずと雖、さすが女流小說家の先輩として、老練の筆ぶり一葉と共に當代閨秀の首班たるに足り、一葉の悲觀的厭世的なるに對し、樂觀的光明的の觀察に富めり。げに二人の特質は好箇の對照にして、一葉の社會の缺陷を指摘するや、秋霜烈日の嚴しさを以て之を冷罵し、花圃は其の缺陷を認むるも、裡に又一點の調和を求め、春風滋雨の溫さを以て之を謳歌せんとす。一は人生の暗側を寫し、他は其の明側を描き、一は文章の奇抜を以て勝り、他は其の溫和を以て優る。故に二者の觀たる社會は等しく不調和缺陷の集合なりきと雖、人物の性格は大に差あり、從て個人對社會の葛藤は、其の終結に於て甚しき相違あり。「露のよすが」の露子姬、何一つ不足なき身ながら、與はらぬ容色に赤繩結び難く、千行の紅淚强ひて抑へて唯醜草の疾く枯れよと祈るは、好箇人生の悲劇、一葉をして材を此に取らしめば、正

に一個世のすね者を描き出でしならん。而も花圃の露子姫は無情なる子爵の筆意に倣うて靜に富士を書く餘裕と和平とあり、末段一點の光明を示して慰藉する所少からず。「萩桔梗」の浪子亦失戀の恨を懷いて、傷まず狂はず、疇昔一時の夢を忘れて和平の局を結べり。斯くの如く二作家の人生觀は根柢より異なりと雖、各〻人生の一面を寫して雙璧の價値ありといふべし。薄氷と稻舟とは之に次ぐ作家にして、前者の作は、「鬼千疋」「黑眼鏡」等あり。結構着想共に人生の悲觀に出で、而も這裡女作家の溫藉を見る。後者は「白薔薇」等の作あり。筆熟せずと雖、才氣おのづから現る。山田美妙齋に配して二三の合作ありしが、二十九年一葉に先ちて歿しぬ。大塚楠緒子亦才筆の名ありき。

心理描寫の潮流は、一方に於て江見水蔭と田山花袋との散文詩的小說を出しぬ。二人は共に深刻なる寫實、高遠なる理想の筆を缺けりと雖、其の代りに津々たる詩趣に富み、縹渺たる詩韻を藏すること群作家に超え、鏡花の怪奇柳浪の悲慘一葉の沈痛以外、別に一異彩を新作家の間に放てり。

水蔭は漣山人と同じく獨逸協會學校に出で、硯友社初期以來の社中たり。所作概ね小說なれども、夙に脚本に指を染め、且つ艶筆を以て鳴れる社中、比較的氣骨ある文章を作し、同人間の異色と稱せらる。早く『中央新聞』に入りて小說をものし、戰爭酣なるや、數多の軍事小說を出しぬ。然れども第二期に在りては特に注目すべき作なかりしが、二十八年、短篇集『水車』を刊し、「女房殺し」を『文藝倶樂部』に出し、二十九年「炭燒の煙」「泥水淸水」「絕壁」等を出すに及び、詩想の頗る見べき者ありて忽ち文壇の注目を惹き、就中『水車』の中なる「兜の星影」「斷橋」「溫泉」「狂詩人」等、及び「女房殺し」「炭燒の烟」の二篇は其の傑作と稱せられたり。而して彼れの文章は多樣多變、或は雅俗折衷、或は言文一致、或は對話體、或は獨語體、行く處として可ならざるなしと雖、其の長所は蓋し言文一致の談話體に在るべし。

水蔭の小說は、世相を描き人情を寫す小說としては成功の域に遠き者なりと雖、之を詩篇として見る時は、優に散文詩の境に入る。彼は硯友社中

獨り理想小說を以て任じ、從て其の詩題は多く理想界に生活する人物、卽ち藝術家に關し、然らざるも之に類似せる抒情詩的題目を選べり。彼れの好める人物は畫師詩人巡禮漁夫山樵旅客等にして、從て都門塵俗の風よりもむしろ山海林野の趣を愛す。「炭燒の烟」に於ける炭燒男の愚直にして一圖なる性格及び行爲、「絕壁」の主人公たる詩人が身世の不遇と戀愛の失敗との爲に破壞し盡されたる半生の生活の如き、共に作者が着想の傾向を覗ふに足る好例といふべし。「女房殺し」は當時一葉の「濁江」と並稱せられ、可憐の賤女に同情して所謂社會の罪を鳴らし、人生の迂餘曲折を盡して深刻小說の畛域に入り、文章亦精練にして緊張せる所、以て當代傑作の一に數ふべきも、是實に水蔭作中の異色にして、以て他の篇を推すべからず。彼は飽くまで理想界に遊ぶ人物を描くを特長となす。而も共の藝術家を描くや、必しも露伴と趣を一にせず。露伴の藝術家は一向專念にして、意志强健道念高潔なり。水蔭のは之に反し、信念堅固ならずして世間の毀譽に惑ひ、道念確固ならずして或は墮落の淵に陷る。斯くの如きは水蔭が理想

として描き出し丶詩人に非ずして、正に世間の詩人に粉本を取りて其の憫むべき運命を寫さんと試みたるなるべしと雖、要するに理想派の小說家として未だ至らざる所少からざるなり。

飜つて之を詞藻の方面より見るに、水蔭は詩人としても亦未だ至れる者に非ず。其の文辭精練を缺き、其の章句推敲を缺き、速筆一過復顧みざる趣あり。「女房殺し」はさすがに淸婉の氣難ずべき所少しと雖、其の他の諸什可惜詩想を傳ふるに足るべき十分の詩筆なきを憾となす。

花袋は二十七年頃に現はれし新進にして、二十八年作「山家水」「水車小屋」「小桃源」翌年の「無名草」「忘れ水」等、皆幽婉純淸、無韻の抒情詩なり。描く所概ね靑春の純潔なる戀愛にして、之を織りなすに優美なる山色水光を以てし、之を行るに詩趣饒き雅俗折衷體の文章を以てし、情景錯綜する所限なき韻致を含む。花袋の戀を描くや、其の成立の因緣順序を細寫せんとはせず。直ちに成立以後の心狀に及び、思内に溢れて而も言ひがてにする年少初戀の情、又は獨り片戀を胸に懷きて人知れず煩悶する狀を寫

せり。之を嵯峨の舍が描ける青春の戀に比するに、其の純潔なる點相似たり。其の煩悶の態相似たり。其の人物の性情相似たり。然れども、情感の熱烈なるに於ては花袋到底嵯峨の舍に及ばざると共に、着想の自然にして描寫の妥當なるは花袋固より嵯峨の舍に超えたり。蓋し花袋に取るべき所は、一篇を掩ふ詩的情緒に在り。之を外にしては彼れの小說は稚氣滿幅、脚色單純にして篇章概ね短く、從つて世相描寫の小說たるに尙甚だ遠し。「忘れ水」の如きは、彼れの所有特色を代表すべき好作例といふべし。要するに花袋の作より大なる敎訓を得、深き戀愛を味ふこと難しと雖、淸く美しき戀を味うて靑春の慰藉となすに足るべし。

硯友社の後進作家として鏡花に接踵して起りし者を小栗風葉となす。風葉は紅葉の門人にして、二十九年「寢白粉」「龜甲鶴」を出すに及んで、忽ち評壇の注目を惹きぬ。「寢白粉」は人情自然の徑路を描いて着筆亦輕妙、紅葉の面影を模し得て才藻見るべき者あり。唯着想奇矯、强ひて人生特殊の一方面を描き出でんとせしが爲め、一時評壇の非難を招きたりき。思ふ

に斯かる紛糾せる逆境の戀を描きしは、從來の趣向の單調を破らんが爲に葛藤烈しき者を求めたると、葛藤を個人と人倫との衝突に取りて悲劇の効果を大ならしめんと企てたるとに由る。かくの如きは、企畫必しも非ならずと雖、取材の奇を弄するに過ぐるを誡むべしとなす。「龜甲鶴」の著想、かゝる弊なくして、詩趣に富み、才氣を見るべし。然れども彼れの發展は尙未來に在り、後章に說くべし。

紅葉門下にして當時世に出でし者には、尙柳川春葉、德田秋聲等ありと雖、未だ特に說くべき者なし。飜つて硯友社作家の全體に就きて其の作風を見るに、概ね逸氣奔放所有試驗企畫を敢行して常に小說界新潮の先頭となりにき。かの中和自然なる折衷的手腕は、遂に早稻田派作家に俟たざるべからざりき。

新作家勃興の氣運熟するや、坪內逍遙の指導せる早稻田專門學校文學部は、多數の創作家を輩出せり。就中小說の作家としては後藤宙外、水谷不倒、島村抱月、三木天遊、繁野天來、伊原靑々園等あり。『早稻田文學』を

始め『文藝倶樂部』『新小說』等に其の作を掲げ、遂に三十年自家の經營に成る小說雜誌『新著月刊』を發刊するに至り、新進の鋭氣旺盛なること、恰も前期初頭に於ける硯友社の如くなりき。是に於てか評壇此の二者を對比論評する者多く、所謂早稻田派は小說界に於ける一大勢力となり、硯友社と角逐して新進の文壇を二分するの觀ありき。且彼等は概ね相當の學識素養ありて、一方に於て批評家たる能力を有したりければ、硯友社の才人等が默々として語らざるに反し、『早稻田文學』を中堅として諸種の刊行物に、逍遙流の記實的論評又は精到平正の議論を掲げ、以て重きを評壇になせり。

批評家としての彼等を論ぜんは暫く措き、創作家としての方面より見れば、彼等の先頭は宙外不倒の二人なるべし。宙外の現れしは、蓋し二十八年作「ありのすさび」の『早稻田文學』に掲げられし時に始まる。落魄の實業家、家庭の圓滿を破りて懊惱遂に發狂し、妻亦煩悶病を發して死すといふ筋を叙し、煩瑣に流れ說明に過ぐるの弊ありと雖、人情分析の筆幾微

に入り、心理變化の描寫精緻を極む。次いで「闇のうつゝ」を『新小說』に掲げぬ。敎育もなく節操も辨へぬ勝氣一方の孤女が、零落せる家道を恢復せんとする努力と、之が手段を否認する世間の道德との衝突の爲に蹉跌相次ぎ、遂に飜然志を世に絕ち山に遁るといふを脚色となし、心理の描寫前者に劣る所あるも、文章精練、情景並び至れりと稱せらる。次いで三十一年「思ひざめ」「亂れ心」「白露」等の佳作を出し、多く心理の精微なる消息に描き入る。

宙外の作、概して平正淡雅、春野分け行く流水の如し。心理の幾微を捉へんとして、好んで神經質の人物を描き、又好んで自殺や情死などの結末を取ること、或は柳浪の如く、或は鏡花の如くなるも、心理を描いては柳浪一葉の如く刻劃ならず。神經質の人物を寫しては鏡花柳浪の如く甚しからず。自殺情死を筆にしては柳浪の如く悲慘ならず。然れども人情の委曲を盡して精緻老熟群を抜き、所謂心理小說の陣頭に立ちて一葉柳浪に接踵し、新作家としては、鏡花の觀念小說と共に斯界の二潮流を代表せり。唯

其の缺點は、描寫精細に過ぎて煩瑣冗漫に流るゝに在り。蓋し宙外、一方に於ては戯謔滑脱と注意周到との資質を逍遙より受け、他の一方に於ては深刻悲慘と葛藤煩悶との趣味を新思潮より受け、二者融合して此の折衷の風を生ぜしなり。故に彼れの作は客觀的寫實の門より出でて而も純然たる其の者にあらず。むしろ主觀的心理的ならんとす。是彼が特質の第一なり。次に宙外の特質と認むべきは田園的色彩と家庭的趣味と是なり。田園的色彩は當時の小說にはむしろ缺乏せるところ、知名の作家概ね東京の人たるを以て、取材の範圍都會を出でず。會〻田園を寫すも觀察皮相に止まりて情景眞に入らず。宙外は此の點に於て確に孤尊の價あり。此の事實に附帶して考ふべきは叙景の筆力なり。そも〻小說中の自然の描寫は、逍遙紅葉等より甚しく疎外せられ、露伴一葉に至りて稍注目せられしも、未だ宙外入神の筆に及ばず。「ありのすさび」の萩の湖の曉色を叙せる條、「闇のうつゝ」の末段野中の荒祠を寫せるあたり、妙趣眞に掬すべし。家庭的趣味の饒多なるは彼れの特徴として總べての作に亘り、從て教訓的なる點少からず。

思ふに彼や青年新進と稱せらるゝも、年齡既に長ず。其の作の平淡にして老熟せる、啻に共の資質と敎育とのみに因るに非ざるが如し。

不倒の現れしは少しく後れたり。二十九年「枯野の眞葛」等を『早稻田文學』に載せ、『新小說』發刊に際し、第一號に「鑄刀」「薄唇」二篇を揭ぐるに及び、作家としての目定まり、續いて『新著月刊』等に數篇の作品を揭げたり。總じて之を言へば、共の想に神韻なく、共の筆に精彩なく、爲に往々陳腐平凡などの酷評を受くと雖、平淡自然の境地に一脈人生の幾微を寓せる所、亦趣なしとせず。蓋し不倒素と江戶文學の硏鑽家にして、深く巢林子八文字屋に私淑し、逍遙よりも長ぜる齒を以て始めて小說壇に現はれ、後進作家なれども、もはや青年に非ず。故に共の趣向往々江戶文學の面影を存し、「鑄刀」の如きは多少近松の戲曲を想起せらるゝ所あり。共の文章の深刻なる事象を寫すに適せずして、むしろ輕快諧謔の作に宜しきは、亦私淑する所に出づるか。かの青春激越の調に乏しきが如きは、思ふに宙外と轍を同じうする者なるべし。

二子に踵を接して起りしを抱月となす。三十年作「女をと浪」、翌年作「月暈日暈」、共に哀深き夫婦心中の物語なり。着想筆力特に目を側てしむる者なしと雖、布置整然、細心なる注意全篇に行き亘りて弛廢する所なきを取るべしとなす。同年の「罣繪草紙」も亦此の特長を發揮して佳作ならずとせず。蓋し抱月は同門作家中最學識ある者、特に美學及び修辭學を以て本領となし、最理論的の頭腦を有し、從て批評家としては夙に儕輩に拔んで、穩健中正を以て名あり。是を以て彼が創作おのづから此の事實を反映し、甚しき光なき代りに甚しき瑕なく、哀れに情深き所ありて、奔放激越の趣なし。

天遊と天來とはむしろ新體詩家として知られ、小說の作は甚だ多からずと雖、共に詩的空想に富めるを珍となす。青々園は滑稽の作に富む。而して滑稽の存する所、言語形式の皮相に非ずして、意義內容の裡に立入り、おのづから大人を笑はしむるに足り、文章亦圓熟せり。

要するに彼等の創作は、概ね着想穩健、筆意平淡にして、共の長所は細

心周到なるに在り。短所は熱烈なる情緒を缺くに在り。之を硯友社の新作家に比するに、同じく寫實の海に生ひ立ち、新潮流に養はれし者ながら、硯友社派は宛も逆捲く瀧津瀬の如く、逸氣奔放想像の馳するに從ひ、情熱の之くに任すの趣あり。早稻田派は淀みなき野川水の如く、溫雅自然の姿態を盡さんとす。而も一身を創作に献じ、終生小說家として立たんとするに至つては、早稻田派は遂に硯友派に一步を輸せざるべからず。思ふに後者は批評家たり學者たる能はざる人々なるに反し、前者は兩方面を兼ぬるを以て、會〻一方に專なるを得ざりしか。果然抱月美學者となり、宙外『新小說』の批評家となり、不倒江戶時代文學史家となり、靑々園劇評家となり、他諸人亦漸く創作壇に遠ざかりぬ。

新進の心理小說家は略之を說き盡しぬ。乃ち去りて先進作家の心理小說を述べんとするに當り、新進中の別味たる小杉天外の諷刺小說を附記せんとす。而も天外を說かんには、先づ其の前續者にして且師たる綠雨より叙ぶるを便となす。

前期の批評家諷刺家として、「小說評註」「荆鞭」の筆者として、其の名高かりし正直正太夫は、此の期に入りて綠雨の名を以て諷刺の才を小說に試みたり。二十八年『國民の友』に出しゝ「覿面」、翌年『太陽』に出しゝ「雨蛙」の如き即是なり。前者は意志薄弱の書生、世間の所謂女房等を譏刺し、後者は自惚と沒常識との化身ともいふべき所謂文學者輩を嘲罵せる者にして、諷世嘲俗、冷笑骨を穿ち、熱罵髓に入り、筆鋒銳利、警句應酬に暇あらず。其の文章も亦奇絕妙絕、特に前者の如きは一氣奔放の走り書、文體修辭共に珍奇類なく、而も辭句洗鍊、當代に卓越せり。げに此の二篇は、綠雨の特質を最よく表せる者にして、諷刺小說中の珍品たり。

天外は綠雨の門に入り、鬼才が諷諧の筆を傳へて夙に文壇に現はれたり。二十四年『國會』新聞に「改良若旦那」の短篇を掲げし以來、二十八年「奇病」二十九年「卒都婆記」「改良若殿」三十年「ひとり者」「珈琲店」其の他數多の創作を出し、宙外等と共に新作家の名を恣にせり。就中「奇病」は國會議員を刺り、「卒都婆記」は所謂社會主義論者を諷し、「改良若殿」は痴

愚の華族を中心として世上百般の俗物を罵倒し、總べて筆路輕妙、諷刺奇峭にして、共に當代の佳作たり。

げに天外の作は、深刻沈痛の域に遠く、性格心理の描寫亦其の能に非ず。加ふるに筆意頗る同情を缺く。然れども從來諷刺といへば、魯文一流の淺薄幼稚なる者のみ行はれしに方り、事象を平坦自然の境に取り、人物と社會との所有缺陷に向つて鋭利なる諷嘲を投ずる所、靈犀奇警、人を魅するあるが如きは、洵に斯壇の進歩といふべし。げに彼が滑稽は、動もすれば審美上何等の價値なき所謂落ちに近からんとす。然れども、從來滑稽といへば、瓜生政和南新二等の如く、强ひて笑を求め、道化を盡し、以て匹夫匹婦を笑はしむるに過ぎざるに方り、社會や人物を觀察するに常に皮一重の裏に及び、美しく賢しき外觀の裏に潛める汚く愚かなる好笑的材料を求め、之を暴露し來りて乃ち哄然大笑するが如きは、以て識者の願を解くに足り、多少諷滑の體を得たりといふべし。彼は文才の縱横なると諷嘲の奇辣なるとの點に於て、到底綠雨の敵に非ず。然れども天外の筆、綠雨の神

經質なるに比して甚だ膺揚に、緑雨の腥氣毒焰を吹くが如くなるに反して温藉輕妙の致あり、緑雨の世上一切の者を嘲り盡さんとするに反し、專ら諷刺の筆鋒を虚僞と醜陋と愚劣とに向けたり。要するに天外は新文壇寫實の園に生ひ立ちし一種の異草にして、滑稽諷刺の花は此の時始めて新粧を凝し出でたりといふべく、緑雨の尙舊文學の面影を存して過渡の地位に立てるに異なり、全く明治の新時代に入れりといふべきなり。

當時の作家には、尙ほ遲塚麗水、三宅靑軒、松居松葉、前田曙山、太田玉茗、藤本藤蔭、黑田天外等あり。多少の新作ありといへども、特に擧ぐべきものなし。

紅葉門下の才筆濟々たるに對し、露伴門下は甚だ多からず。中谷無涯は二十九年始めて現はれ、少しく後れて田村松魚、藤本夕颸の二人現はれ、多少狂熱を帶べる彩筆を揮ひしも、惜いかな、鏡花風葉の如き發展をなさざりき。

三　先進作家の心理小說

曩に後進作家の勃興するや、其の直接の刺撃に勵まされ、又評壇後進を揚げて先進を抑ふる者あるに激せられ、前期に名を爲しゝ先進作家復び奮ひ起てり。而も其の作風大に前期と面目を異にし、悉く心理的寫實小說の新彩を帶びて現れたり。露伴以下紅葉に至るまで、一として然らざるはなし。

『五重塔』以來暫く雌伏したりし露伴は、二十六年『風流微塵藏』の大篇に着手し、初篇「笹舟」を『國會』に揭げ初め、爾來連載二十九年に及び、「菊の濱松」「獨寐」及び「雲の袖」の諸篇を出し、無前の大篇として文壇の呼物となりぬ。然れども『微塵藏』は未だ其の局を結ばず、且つ局面廣大事象複雜なれども、既出の分のみを以てすれば、各篇唯一二人物の連鎖あるのみにて、全く別の舞臺を現じ、其の間に有機的結合の見るべきなきを以て、大局の歸趣茫として知るべからず。唯其の部分的に現はれたる巧妙なる描寫に至りては、さすがに天來の趣あり、人事の表裏を寫して痛切に、人情の秘奥を描破して靈犀なりといふべし。

此の篇出でて褒貶の聲交々起りたりと雖、大體に於て『五重塔』以來、現實の觀察に入りて一段の進歩をなせりといふに一致せるが如し。思ふに露作の作風は明かに一變せり。然れども彼が本領たる散文抒情詩の幽玄を離れて現實描寫の精緻に入りし者、果して彼れが爲に慶すべきか。之を人物に見るに、人それ〴〵の性格を描いて躍動の趣あり、心理變化洵に自然的發展の妙を盡せり。然れども是等の人物、詮ずれば皆同一性格にして、悉く作者自身に粉本を取れる者なるに似たり。彼等は概ね酸いも甘いも噛み分け、人情世態を洞觀するに過ぎ、動ゝすれば作者の人生觀を時所に應じて述出すべき傀儡とならんとす。されば人生の奧秘、人情の幾微、多くは說明に過ぎて讀者想像の餘地を奪ふ。作中人物が滔々數千言、人情哲學を講ずる所、此の作者に非ざれば望むこと能はざるも、其の間又讀者をして嫌厭せしむる者なきに非ず。蓋し此の篇或は作者胸中の蘊蓄を披瀝せる人生哲學たるを得べしと雖、美術品としての成功は、かの抒情詩的高調に達せる『五重塔』等に比して、未だ優れりと言ふを得ず。故に本期に於て

露伴の露伴たる所以の作を求むべくんば、『微塵藏』よりはむしろ「新浦島」を取らんのみ。

「新浦島」は二十八年「國會」に連載せる者にして、浦島傳説の上に想を搆へたる一部の抒情詩的小説なり。後纏めて三十五年刊の『露伴叢書』に收む。浦島太郎龍宮に趣きてより、其の家を承けし同次郎の子孫相傳へて百世、明治の聖代に至りて一個俊秀の詩才浦島次郎を生じぬ。少時郷を去りて京に遊び、天成の詩才忽に當世の寵兒となり、邊海の漁子榮華と戀愛とに身を沒して郷を忘るゝこと數十年。偶〻戀に敗れ榮華に敗れて茲に悵然望郷の念を生じ、飜然として悟れば漁夫の生活なつかしく、二十五歳の壯年復父母の膝下に歸りぬ。歸れば老親世を讓らんとて傳來の玉手箱を渡ししに、異寶奇瑞を現じて父母一夜に登仙せしかば、次郎始めて仙緣あるを知り、天界俄にゆかしく、九轉の大丹を煉りて仙道を得んとの大願を起しぬ。而も仙道成らず、憤りて魔道を修し、一向專念大地震動して遂に通力を得、或は驪山の靈泉に浴し、或は蘭陵の美酒を味ひ、飛行自在の身とな

りしが、一夜終に化石して靜に生死の外にありきといふ。是れ「新浦島」の梗槪なり。通觀すれば前半は現實の分子多きを占むるも、後半は全然超絕界に入り、詩情段一段昂進して最後の大發揚に至る。此の結構は「對髑髏」以來作者常套の手法なり。

此の篇の骨子は、浦島傳說に唐土神仙譚の附會して構成せられたる悟道の寓話より得來りし者にて、斯道に入るべき三階段を示せる寓話を取りて、直ちに理想的生活に進むべき四階段を表せしに似たり。物質的榮華の生活は淸淡自然の生活に若かず。淸淡自然の生活は超絕的神仙の生活に若かざるを說けるは、かの寓意的仙譚なり。學と詩と富と戀とは未だ以て人を解脫せしむるに足らず。一切世間の欲を絕ちて身を一竿に托するも亦然り。凡界を離れて神仙の間に遊ぶも亦然り。生死の外なる寂靜の境に入るに至つて始めて眞の解脫を得べしとなせるは即ち露伴の「新浦島」なり。兩者の間多少傳說の發展あり、形式に大差なきも意義は全く更新して時代の色彩を帶べり。思ふに浦島傳說は、本邦の傳說中最發展せる者の一にして、

萬葉集風土記の古より「新浦島」に至るまでの發展は、他の傳說に見ざる所なり。

之を小說として見るに、其の超絕的なるは遂に從來の作に過ぎ、理想的なるは更に甚し。されど其は現實を超絕せる一場の仙譚的空想に出で、若しく冷靜の調を帶びたり。『五重塔』以前の作を以て之に比するに、彼には人生に執着する熱情あり。此には人生を達觀せる理性あり。現實以外奔放なる空想の行く所を恣にせる態度、兩者其の軌を一にすと雖、通篇の趣味傾向に著しき差あり。此の新傾向は疑もなく『微塵藏』以來の變象にして、篇中各人物の人生觀、人情觀、女性觀、はた社會觀等、滔々揮灑し去る所、一に作者が凡百の人事に對する平生の達觀悟入に出でたり。

「新浦島」を以て作者の本色を現はしゝ者とすれば、二十九年『讀賣』に揭げし「髯男」は、彼が作中の異色として注目するに足るべし。武田勝賴の家臣笠井高英といへる髯男が覆滅せる主家を擁護せんとする苦衷を描き、義あり情ある甲州武士の面目を發揮せる歷史小說にして、文章瑰麗奔放、

『風流佛』以後の名文と稱せられたり。

既に述べしが如く、露伴の作には常に作家の影を宿せり。彼れの小說を讀む每に其の人格の這裡に躍動するを覺ゆ。蓋し露伴は江戶兒の粹。覇氣稜々たると共に又よく物に凝る。而も藝術に對する熱愛未だ曾て衰ふることなく、從つて讀書の嗜好極めて高く、其の造詣蘊蓄常に創作に表はる。此の點に於ては其の風尙頗る紅葉と相似たり。然れども露伴は固と深く人生を洞觀し、冥想沈思其の眞諦に觸れんとする人なり。此の性格は彼を驅つて深く佛典に參せしめ、老莊に入らしめ、延いて悟道の人たらしめんとす。且つ彼は神祕を認め、神仙を究め、佛力を信じ、神籤易卜を拒まず。總べて信念の固き、道念の高き、當代作家に多く見る能はず。淺薄なる寫實の風天下を吹き荒める時、獨り高遠なる詩的哲學的情想を小說に寓せたりしは、一に此の性格より來る。此の點に於てはいたく紅葉と趣を異にす。且つ露伴の文を行る、逸氣奔放千言立ろに成り、而も絢爛瑰麗の致を極むること頗る紅葉の遲筆に反す。彼が作は忠實なる實世間の描寫、乃至奇警

深刻なる實社會の觀察に出づるよりも、むしろ人生に對する沈思冥想より來る。されば露伴の如きは、景仰すべき人にして模倣すべき人に非ず。時流に超然たるべき人にして門下を養ふべき人に非ず。是れ紅葉門下の多士濟々たるに反し、露伴の門遂に俊髦を見る能はざる所以なり。

言文一致體の主唱者として、「夏木立」「胡蝶」の作者として、盛名一時に鳴りし美妙齋は、二十四年以來消息を小說壇に立ち、新體詩の作家としてのみ聞えたりしが、此の頃に至り再び起つて小說壇に現はれ、前の盛名固とより望むべからずと雖、尙健筆多作、當年の意氣を存し、文界をして此の才人の健在を慶せしめぬ。

二十八年の「お千代」「鰻旦那」翌年の「若白髮」は、趣向の平凡なるに係らず、獨得の言文一致、當年の嫌味を脫して瀟洒圓熟の境に入る。此の三篇は、共に評壇の一問題たりし狹斜小說にして、寫實の手腕益精妙に、進んで心理の細寫に及べり。此の點に於て美妙齋亦新潮流の影響を受け、柳浪の深刻なしと雖、精細或は之に過ぎたり。爾來數篇の歷史小說及び狹

斜小說を經て、三十年「閻魔地藏」「可憐狂」を出すに及んで、或は寫實の筆力を以て、或は文章の妙を以て多少文壇を動かし、特に「可憐狂」は、律義一徹の老父が至誠、自墮落の娘を悔悟せしむる筋を描き、評壇佳作の目ありき。

げに美妙齋の作は筆力を以て優る。惜むらくは同情を缺き、小說家として願はしき熱血を具へず。故に筆鋒愈〻銳利にして觀察愈〻皮相に走り、描寫益〻巧にして讀者の肺腑に入ること益〻少し。好んで狹斜の巷を描き、特殊の通と穿ちとを衒うて、脂粉の氣輕佻の風厭ふべき者あるは、彼が第一の缺點にして、所謂內容のいや味は總べての作物に滿ちたり。加ふるに當時多作に過ぎしかば、筆漸く荒み、想亦漸く型に入り、好作家遂に唯文章家の名を止めしのみ。

硯友社の小說家にして少年文學に名を得たりし漣山人は『日本昔噺』『日本御伽噺』『幼年讀本』等を編し、雜誌「幼年世界」『少年世界』等を發行して、益〻其の本領を進むる傍、時に小說を出して特長たる輕快の筆を揮へり。

二十八年、小說界の潮流が人生の深刻なる方面に向ふや、山人『昭君怨』を作し、清淨無垢の華族の處女が、破產せる父子爵の犧牲となりて高利貸の新平民に嫁ぐ悲慘の運命を寫し、續いて出でし『燒火箸』等も亦現社會に對する諷刺的筆致を見るべし。然れども山人の本色は徇くまで平易圓熟なる文藻を以て無邪氣なる情緖を描くに在り。二十八年『國民の友』に出しゝ「董日記」の如きは、正に其の代表的作物なるべし。「董日記」は鷗外の「舞姬」に似て、獨逸留學中の一學生と薄命可憐なる金髮少女との情事に關する詩趣橫溢の着想を自叙日記體にものせる短篇にして、文情淸高、塵俗の氣なく、詞章亦言文一致の妙を盡せり。

前期の寫實小說家にして、文學一轉の今日、多少の述作を出して世人の記憶を新にせる者には、嵯峨の舍、抱一庵、篁村、採菊、思案、忍月、湖處子、三昧、雪後（花瘦）、乙羽等あり。就中嵯峨の舍は例の言文一致益圓熟し、短篇集『文の庫』『古反古』を始め、各雜誌に揭げし作少からず。抱一庵は思軒と共に『報知新聞』に在り、露國文學の飜譯に名ありしが、創

作に於ても多少の績を殘せり。篁村は老練妥平の筆致例の如く、三昧は傳奇小說の外世話物に筆を染め、文章は漢文流の奇氣を帶びたり。雪後と乙羽とは硯友社員にして、共に短篇を諸雜誌に揭げ、才筆の譽ありしが不幸にして早世せり。

上來先進作家を列敍して今や紅葉を除すのみとなりぬ。紅葉は今期に入りて連りに外國文學の飜案物を出し、創作に用ひし圓熟渾成の彩筆を以て之を飜案に試みたり。之より先、紅葉は「朧舟」「夏小袖」等、既に此の種の者に指を染めたりしが、二十七年以後に至りて著しく之に傾き、創作却て兩三篇に止まるに至りぬ。即ち二十七年の『隣の女』、二十八年の『不言不語』、二十九年の『冷熱』の如き、當時有名の作は、皆飜案に屬せり。

就中「不言不語」は紅葉が傑作の一にして、又是等飜案の代表たる者なり。『讀賣』に出づ。新參の小間使環が、目見えの當時より疑團晴れざりし笠原夫人の憔悴煩悶嗟嘆の原因、不言不語の胸中を探求せんと苦慮する筋を經となし、主人の弟民之介が環に對する戀語りを緯となし、遂に事變の

偶發より一家に潜める秘密が隱約の間に推測せらるゝに至る始末を、環の自叙體に描ける小說にして、一篇の生命は、讀者が此の秘密の伏在せる家庭に對する不安の念と探求の心とを繋いで最後の大破綻に導く所に存す。されば其の秘密の闡明せらるゝに及びて感興頓に去るは、亦免れ難き缺點なるべし。唯末段、夫人が懺悔の爲、罪滅しの爲、病児を救うて自ら犧牲となる所、慘憺たる悲劇的結局ながら尚一道の光明を見る。民之介環の情話は素と一揷話に過ぎずと雖、陰森の氣充滿ちたる大筋に對照して、其の凄慘に過ぐるを調節し、兩々步趨を共にして大團圓に向ひ、悲劇の終結を彩るに愛の成立を以てするなど、有機的結合の頗る周密なる者あり。然れども、全體の趣向及び人物は、到底本邦の者に非ず。又紅葉の筆致に適應せる者に非ず。而も尚多數の愛讀者を有ちしは、其の探偵的趣向の人の好奇心を繫げると、其の文章の洗錬完璧に近きとの致す所なり。

然れども文運興隆文學一轉の盛時に際し、紅葉の製作はかゝる飜案物に止まり、然らざるも『四の緒』の如き飜譯物、『片盤』『名曲クレーツエロ

ウ」『笛吹川』等の合作物に過ぎざりしかば、批評家は漸く彼が健在を疑ひ、中には想泉涸れたりとまで罵る者あるに至りぬ。偶〻『讀賣』に載せし創作「青葡萄」は、門人某が青葡萄を味うて不測の大病に罹りし一夜の出來事を叙べしに過ぎざりしかば、悲觀的批評益〻其の度を高めたり。是に於てか紅葉奮然と立ち、二十九年「多情多恨」を『讀賣』に載するに方り、宣して曰く、是れ俳諧に非ず、雜報に非ず、飜案に非ず、合作に非ず。實に快腕一揮の創作なりと。乃ち連載數月に亘り、前後兩篇五百五十頁の長篇をものせり。

「多情多恨」は、甚しき神經質の男が最愛の妻を失ひて追慕の情に堪へず、懊惱日を重ねて薄らがず、寂寥の感屢〻身を襲ふ狀態を描き、以て失戀者の情緒を委曲に精寫せし者にて、打見たる所波瀾なく奇巧なく變化なし。其の人物を以てすれば、主なるは主人公鷲見と、親友葉山、其の妻お種との三人に止まり、舞臺を以てすれば鷲見葉山二家の間を出でず。事件を以てすれば鷲見が悲歎懊惱を反覆するに過ぎず、時日を以てすれば百五十日に

だも滿たず。人物の寡少と脚色の單純とは、明治小說の新傾向なりと雖、かくの如く甚しき者未だ多からず。而も四十六回五百頁の長篇をなせるなれば、從來の小說の刺激强烈なるに慣れたる人をして、或は冗漫と感ぜしめ、或は無趣味と感ぜしめ、或は鷲見の如き性格は我國民に存せずとさへ斷ぜしめぬ。然れども「多情多恨」の描かんとする所は、依戀の情緒其の物なり。寫さんとする所は、此の情緒の最微妙なる作用なり。粗大なる想像、淺薄なる同情を以てしては、往々看過せらるべき最微極細の消息をも限なく具象化するは、即ち此の小說の極意なり。吾人は既に粗大なる感情の描寫、强烈なるそれ、及び深刻なるそれを見たり。未だ此の小說が描ける如き平淡微妙なる者を見ざるなり。又人物の性格に就ても、吾人は既に幾多の英雄を見、幾多の才子佳人を見、はた夥多の片輪者を見たり。未だ此の小說の人物の如く平凡にして而も面目躍如たる者を見ざるなり。變人と言はれし理化教師鷲見の性格固より善く、溫良貞淑の家婦お種も亦よく、洒脫にして俠氣あり怜悧にして情理具はる實業家葉山最善し。若し夫れ一

篇の結末の何等段落を劃すべき事件なく、唯快々の思を殘して之を閉づるが如きは、新傾向の一要素にして、其の妙趣を解せんには多少の新教養あるを要す。之を要するに、「多情多恨」は平淡自然、寫實小說家としての紅葉の特質を最明瞭に發揮せる者なり。觀念小說以來、新進作家競うて深刻の想を凝し、先進諸家亦之に動かさるゝに際し、獨り平淡の境地を選びしは、頗る彼が立脚地を見るに足る。彼が此の小說を草するや、曰く、「世間の小說は珍味なり、我家の小說は米の飯なり」と。斯の間の消息を道破して餘ありといふべし。

斯の小說は精練なる言文一致體にて書かれたり。是より先、美妙齋が盛に此の體を用ひし頃は未だ之に倣はざりしが、一たび「隣の女」に成功するや、「青葡萄」「冷熱」等にも之を取り、遂に「多情多恨」の大篇に之を用ひぬ。さすがは詞章の大家、一たび振へば優に美妙齋嵯峨の舍の諸先輩を凌駕し、恰も雅俗折衷體に一流を出しゝが如く、言文一致の最醇化せられたる一體を創め、洗錬平淡、よく斯文の儀表となり、第一期以來の言文一

致體も茲に始めて稚氣を脱し、衒氣を離れたる新文章となりぬ。

「多情多恨」の終を告ぐるや、紅葉は更に他の雄篇「金色夜叉」に着手し、三十年一月より「讀賣」に連載せり。高等中學の秀才間貫一、己が寄寓せる鴫澤家の一女お宮に婿たるべく定められ、相愛して歡樂の未來を夢想せしに、美色に誇り富貴を冀ふ婦女通有の缺點は、お宮をして富貴の奴隷となりて貫一を棄てしめぬ。貫一、憤怨深く骨髓に徹し、決然宮と袂を分つ。之を此の小説の序幕たる前編の梗概となす。斯くて傷心の貫一は絶望の餘りに自殺すべきか、はた白刃を宮の胸に擬すべきか。あらず。彼が金に見易へられたる無念は、空しく自殺せんには餘りに强烈なり。彼が怨恨は平凡なる復讐を敢てせんには餘りに深刻なり。彼は人の頼むべからず世の依るべからざるを悟り、乃ち總身の欲を金に集めて世と戰はんと思ひ定め、遂にかの極惡非道の高利貸と爲り了りぬ。かくて貫一は男らしき復讐を加へ、前の失望と怨恨とを霽し得て、然る後正に死ぬべしと慰めたりしも、其の情を矯め己を枉げて魔道を行ふ痛苦と、之よりも遂に大なる失戀の痛

苦とは交々身を責めて、肉瘦せ色疲れ、形神共に破れて面を蔽へる陰日に黯きを加へぬ。中編は即ち此の始末を叙す。宮は貫一に別れてより始めて心の奥に潛める切なる戀を覺りぬ。げに宮は胸中最奥の眞要求を知らざりき。其の心裡には二個の要求ありき。愛と富と是なり。而して二者の一致せざるに臨みてや、一時盲進して富に就きぬ。而も其の富を得了りし時、始めて自己の眞要求は戀人と共に此の富を樂しむに在りしを悟りぬ。今にして悔いぬ。二者共に得んこと難き時、其の孰れを取るべきかを知るの晩かりしを。別れて四年、會〻貫一に邂逅して心火洞然と燃え上り、赤繩一度斷ぜしも又繫かるべき時のなからずやはと感じ、遂には彼の人の恨解くべくんば此の富棄つるに惜しからずと思ひなりぬ。斯かる間に貫一は蝟集せる所有誘惑を却け、初一念を徹せずんば止まじと決せり。是後編の大概なり。顧みれば起稿以來正に三年を經、三編四百五十頁に上り、而も尙完結に遠し。貫一の痛苦と宮の煩悶とは如何に發展せんとすらん。

吾人をして紀年の都合上茲に暫く梗概叙述を中止し、顧みて之が評論に

移らしめよ。「金色夜叉」の出づるや、着想に空前の異彩あると、脚色の劇的變化と活動とを具ふると、主人公が教養と地位とありて而も青春の情に滿ちたると、詞章の精練絢爛なる時文體なるとは、教育ある中等社會に於ける青年男女の讀者をして悉く之に心醉せしめぬ。先づ著想に就て言はんか。新思潮起りてより露伴鏡花等の作世に行はれしも、露伴の理想小說は膏粱の美味却て重ぬるに厭き、鏡花柳浪等は事物を極端の場合、暗黑の一面に取れるを以て、好奇一時の念を釣り得べきも、永く同情を繫ぎ難かりき。況んやかの狹斜小說に於てをや。是に於てか、小說の內容は益〻深かれ、理想は實の上に立てる者なれ、取材は中等社會に於てせよ、舞臺と人物とは尙少しく高潔なれとの要求は、讀書社會に普かりき。「金色夜叉」は即ちこの幾分を滿さんと試みし者なりき。貫一と宮との戀愛、淸き事花袋の小說に見るが如くにして、而も斯くの如く幼稚ならず。貫一が痛憤と無念との反動として夜叉の家業に身を墮しゝは、多少一葉の「われから」に似たりと雖、而もかくの如く單純ならず。特に宮が罪の自覺によりて激烈なる

煩悶に陷るが如きは從來の小説に多く見ざる所なり。思ふに紅葉の才藻よく世運と推移し、泰西小説に於ける造詣亦漸く深く、其の影響の創作に現はるゝこと少からず。罪の自覺に懊む宮と、之を宥恕せざる貫一とは「不言不語」の笠原夫婦に淵源を求むべく、貫一が境遇の大變化は正しく泰西大家の作に其の粉本を求むべきなり。

次に脚色を見んか、この小説は啻に情緒を描けるのみならず、尙事件を寫せり。「多情多恨」の徹頭徹尾情緒の小説なりしに反し、頗る劇的變化と活動とに富み、波瀾の起伏遙に從來の作品に超えたり。後年小説の戯曲化の流行するや、紅葉の小説にして舞臺に上りしは、實に之を以て嚆矢とす。進んで其の文章を見んか、前期以來の西鶴流雅俗折衷體に非ず、「多情多恨」に光彩を放ちし言文一致體に非ず、推敲烹煉の餘に成りたる時文體にして、細寫委曲を極む。

斯くの如きは「金色夜叉」が新教育の下に立てる青年男女にもてはやされし所以なり。之を「多情多恨」に比するに、總ての點に於て著しき對照

を見る。瀟洒に對する濃艶、平淡に對する絢爛、單調に對する變化　沈靜に對する活動、皆是全體に亘る差異なり。二者各得る所あり、軒輊容易にすべきに非ざれども、苦心の度を以てすれば「多情多恨」恐らくは「金色夜叉」の上にあらん。蓋し前者にありて成功の域に達せんは、凡筆の能くすべきに非ずと雖、紅葉の才筆を以てすれば、後者の成功難きに非ざるべし。前者を以て紅葉の所謂米の飯とすれば、後者は所謂滋味なるを免れず。作者自身も亦後者は快心の作に非ずと稱す。且つ其の文章に於ても、作者自身之を『穎才新誌』的なりとして擯け、言文一致を尙んで之を理想的の地位に進めんと企てたりといふ。要するに「金色夜叉」は紅葉の傑作なりと雖、決して其の本領に非ず。得意の作はむしろ「多情多恨」にあらん。

第二節　新體詩

『國民の友』及び『文學界』の詩人が、七五調の短篇を以て新體詩界を領せし時に方りては、斯道の發展は小說界に比して甚しく遜色ありしが、明

治二十八年以來、俄然として長足の進歩をなし、面目頓に一變するに至れり。

是より先、國家的大戰爭ありしや、事に文筆に從ふ者競うて之を謳ひ、『拔刀隊の歌』以來絕えて久しき軍歌再び世に出で、戰爭中の事物を詠める新體詩は、斯道にたづさはる所有文人に試みられたり。然れども、是等戰爭詩歌は、例の如く一時的傾向を帶び、逸作亦遂に出づることなく、影響從つて殘ることなくして其の跡を絕ち、七五調の擬古的短詩再び詩界を領しぬ。思ふに此の潮流の來るや實に久し。遠くは新聲社の詩人より、『國民の友』の詩人を經て『文學界』の諸詩人に至るまで、古語の智識の深淺、之を驅使するの巧拙、措辭の手腕の熟否に多少の等差ありと雖、概して用語聲調に於ける擬古派たるを失はざりき。今や此の作風益〻發展して詩壇の大勢力となり、遂に『帝國文學』に現はれたる文科大學の詩人に繼承せられ、詩想の淸新を加へ、詩形の長大を致すと共に、用語の雅醇なる、聲調の流麗なる、遂に湖處子殘花等從來詩人の作に拙んでたり。

此の時に方り、十四年前新體詩創始の運動をなしゝ外山ヽ山仙士は、再び一新體を提出して一世の耳目を聳動しぬ。二十八年二月『帝國文學』に掲げし「旅順口の英雄可兒大尉」は、實に此の新運動の第一着手にして、續いて「輸卒」「忘るゝな此日を」「我は喇叭手なり」等を出し、尙之に關する意見及び其の朗讀法をも發表せり。而して是等の詩篇たるや、いたく從來のと趣を異にし、先づ七五又は五七一聯の詩形を打破して最も自由なる無律沒韻の散文的句節を採り、次に典雅流麗にのみ傾ける古語を棄てて漢語と現代語とを交へたる日常普通の言語を用ひ、次に作者の創意に出でし獨得の表情的朗讀法を試みて其の詩形と用語との散文的渣滓を除かんと勉め、名けて朗讀體と言へり。

「開闢以來未嘗て今日の如く我邦人の名譽の高大なるはなし。良運なり。幸福なり。此の時期に遭遇せるの日本人は」。(『可兒大尉』)

右は唯冒頭の二行を出しゝのみなりと雖、以て其の一般を推すに足るべし。此の體一たび出でて評壇の排擊盛なりしも、作者は之に屈せず、意見を同

じうする人々と共に『新體詩歌集』を編み、同年秋之を世に問へり。收むる所、ゝ山仙士作十一篇上田萬年中村秋香阪正臣作長短七十九篇。中數首を除けば、悉く七五の舊調を脫し、而も大多數は「可兒大尉」の型式に依る。

此に於てか、評壇詩形論の沸騰を來し、律語詩非律語詩の論議甚だ盛なりき。然れども、此の論爭は遂に何等の效果を殘すことなく、創作界は依然として律語詩に適き、七五調に歸しぬ。されば彼の井上巽軒が長詩「比沼山の歌」を出すや、亦七五の舊調を襲ひ、革新の範圍を用語の種類と思想の規模とに限れり。「比沼山の歌」は二十九年初『帝國文學』及び『太陽』に掲げたる叙事詩にして、丹後風土記なる羽衣傳說を骨子となし、竹取物語を血肉となし、天人の志は信を本とすといへる思想を一篇の理想となしたる者、完結を見ずして止みしも、篇章節句、形式整齊、空前の長詩なり。作者の詩論を見るに、大體「可兒大尉」の作者に同じと雖、未だ一言七五調の非難に及ばず、又律語拘束の害を說かず。唯用語の豐富適勁なると旨

意の明瞭なるとを以て、擬古派に對する優勝の理由とせるのみ。
外山井上二家の運動は、詮ずる所、擬古派に對する反動なりき。而して其の成果を見るに、前者の朗讀體ははやく失敗に歸し、後者の古語漢語俗語の混用も、著しき不調和の爲に、同じく失敗に終りぬ。蓋し、前者は廣義の詩即ち科學に對立する詩の意義を取り來りて、直ちに新體詩に附屬し、以て散文詩と韻文詩との差別を棄却したりき。否、口演法の如何によりて諧調おのづから生ずと信じ、一定の律語種々に結合して萬人の心律に共鳴する者即ち詩の韻律なりとはせざりき。此を以て、世の律語詩を主張する人、七五律を以て邦語韻律の主なる者となす人、詩歌は必しも謠ひ物に非ざればおのづから格律を形體に求めざるべからずとなす人、萬邦の詩歌皆一定の韻律と句節とを有するを思ふ人等、總べて此の體を取らず。次に後者は、結構の壯大なる、洵に文壇の珍たりと雖、長詩の價値たる內容の優秀と詞章の精美とに至りては缺陥なきを得ず。和漢雅俗の言語を混用するが如きは、選擇なく醇化なくして成功すること難し。

然らば其の內容即ち詩想は如何。前者題材の狹隘なる、常に現實の事件に拘泥し、而も概ね戰爭中の事象に屬するを以て、多く恒久の價値なし。彼は人事及び自然の種々相を諷詠せず。幽遠の情感高邁の冥想等に至りては全然之を缺く。後者の著想はむしろ奇拔なり。神話を題材とするは、本邦詩人に取りては好箇の暗示なり。唯其の構想理に偏し、且其の根本思想を倫理的功利主義に置けるを憾むべしとす。

要するに二家の作品は、遂に大なる成功なかりき。唯彼の長大の詩形を推稱せると、用語に勁健の分子を加へ、聲調に剛强の風趣を添ふるに至りしとは、此の運動が齎しゝ二個の賜なり。

斯かる間に擬古派の詩は、用語の古雅なると、題材の概ね抒情的なると、作風の餘韻を尙べるとよりして。評壇に朦朧體の名を得たりしも、其の詩想は深く主觀界にも入り、詩形は整齊、詩語は醇粹、加ふるに泰西詩歌の趣を帶び、總べて詩的非散文的なること前の二家に超え、擬古派其の物の爲に、大に光焔を擧げたり。武島羽衣は是等詩人の白眉にして、二十八年

初「翠染櫻」の一篇を『帝國文學』に掲げて始めて斯壇に現はれ、同年「小夜砧」を出すに及んで、新詩人としての價値、文壇に認められたり。「小夜砧」は西詩飜案の叙事的抒情詩にして、秋夜征人を思ふ少婦の心、惱亂して夢幻の境に入り、既に戰歿せる夫の靈に伴はれて廢寺の塚中に陷るを叙して、幽婉幻怪の趣に富む。此の類の思想は本邦從來の詩歌には絶えて有るなく、寧ろ國民の情想に遠き者なりと雖、清新溫藉縹渺として幽韻掬すべく、從來の擬古者流が、徒に詞藻の富麗を以て內容の空虛を飾る者に比較して、其の間超ゆべからざる畛域あるを覺ゆ。加ふるに、詞章の典雅精練にして雅言を驅使するの自在なるは、詩壇稀に見る所にして、七五四句一節をなせる者、總べて四十三を以て成る長詩、讀み去りて些の澁滯を見ず、泰西語脈の混用も自然にして調和を失はず。總べて新詩壇に寄與せる一新作風として推稱せらるべき者たり。爾來「詩神」「草刈笛」「月」「人生」等數多の創作、皆溫藉の詩思を發揮して悠容の姿致を凝らし、時に渾然として天衣無縫の概ある者あり。此の如きは羽衣の獨壇にして、當代及ぶ者

無かりきと雖、長所はやがて短所の潜む所、彼れの詩は情感の激越なる者、情熱の强烈なる者なく、其の調往々散文的の弊に陥り、單調の失を免れざらんとす。

鹽井雨江は、二十七年スコットの長篇『湖上の美人』を飜譯し、二十八年『帝國文學』の初刊に、「深山の美人」と題する抒情的叙事の長詩を出して名を江湖に馳せ、其より「深山の花」「故郷の花」「磯の笛竹」等長短數篇の創作あり。之を羽衣に比するに、吟什の少きだけ題材も少く、詩想亦純古典的にして、西詩の面影を傳ふる所少し。形式に於ても古語古格の分量多きに過ぎ、粉飾の痕少からずして、高雅悠容の姿致に乏し。唯詩形の散文的ならんとするを避くるところに其の苦心と成功とあり。「磯の笛竹」の如き、句節の配置、措辭の選擇に於て、各種の修辭的技巧を用ひ、荒磯岩の松蔭に夜毎に憧れ出でて思を笛竹に吹きすます海人が子を詠じて、情緒の昂揚遙に羽衣等に超え。想髓の舊きに係はらず、一種清新の詩調に入る。雨江の特長茲に在り。大町桂月次いで現はる。彼は寧ろ文章家と稱すべけ

れど、新體詩に於ても、純主觀の短篇、情感の激越、詩調の昂揚を以て勝る。桂月の特長は詩形に非ずして、詩思の純眞情熱の强烈に在り。其の他杉烏山等二三の作家あり。皆擬古調を取りて王朝の麗藻を學べり。

以上は『帝國文學』の詩人の主たる者なり。顧みて之を概觀するに、純主觀の作甚だ稀にして、概ね敍事的色彩を帶び、小說的趣向を取りて之を律語に述べしが如き者少からず。地の文と詞とを分ち、詞は對白獨白並に之を用ふるが如き手法は、最も普通なりき。蓋し彼等が專ら用ひし雅語の性質として、最近の思潮に觸れたる主觀界を表現するに足らず。事を敍し景を描くには大なる缺陷を感ぜずと雖、一旦內觀の深きに入り冥想の幽なるに至らば、到底適切明快なる表現を得ること能はず、從つて卓逸なる抒情詩を見ること難し。かくの如きは擬古派の發展に對する致命的缺點なれば、羽衣雨江を頂點として其の發展は長へに阻止せられぬ。

然れども擬古派の努力は、非律語論に對する律語論の勝利を確實ならしめ、爾來崛起せる新詩人は悉く律語の門に出でぬ。二十八年より三十一年

に至る四年間、特に二十九年は斯道勃興の機にして、新詩人は輩出し舊詩人は奮起し、各種の文學雜誌に現はるゝ創作甚だ盛なりき。以下次を追うて之を列叙せん。

用語及び聲調に於て擬古派に反對の態度を取る者を歌人與謝野鐵幹となす。鐵幹は二十九年短歌と共に『東西南北』の一集を公にして、始めて詩壇に上りぬ。集中の作は韓山羈旅に關する者多ければ、概して風雲の氣ありて神往の詩趣なし。三十年再び詩集『天地玄黃』を出し、豪語奇句一段の進境を示しぬ。「山中の石」「乾坤寥廓」「海嘯」「人鬼」等集中の主たる者、概ね理想的怪奇を弄す。就中「山中の石」は、深山の白雲に獨り寢ねたる太古の石の述懷に托して、「星の都に在りと聞く、一百五絃の玉の琴、嵐の神の音につれて、一時に裂くの概あらむ」詩人の胸懷を詠出す。總じて彼れの詩、勁健を求め豪壯を好み、客氣橫溢して却て淺俗に陷ること共の和歌に同じ。所謂男子の歌なるべけれど、固より高遠の詩想あるに非ざれば、擬古派の未だ開拓せざる抒情の好詩境に足を入れながら、世上一時の事象

に拘して永遠の姿致に乏し。唯漢語を交へ漢語脈を採りし一事は、尙生硬を免れずと雖、擬古派の平弱單調を救ふに多大の効果ありき。

歌人鐵幹に續きて、俳人子規も亦新體詩に指を染め、二十九年竹の里人と名のりて「日本人」に現はれぬ。「鹿笛」「父の墓」「小蟲」「四季」「洪水」等、獨得の俳想を長詩に托し、中には全く俳句を新體詩にしたるが如きあり。されば詩人としての子規の得喪は一に此の點に歸す。總じて彼れの作、意洒脱にして語緊密、措辭弛廢なくして聲調常に張り、好んで自然を詠じ、多く客觀叙法を採り、觀察微にして且新なり。故に想に陳套なる少く、形に散文的なる弊なし。然れども規模狹小なる者多く、着想即興的に偏し、最も冥想を缺く。三十年に入りて押韻論を唱へ、其の作例をも示したりしが、其は十五年の昔、「新體詩抄』に試みられし阿行五音の脚韻に過ぎざりしかば、幾もなくして事止みぬ。

前期以來の作家にして餘勢を今日に振ふ者を美妙齋及び「國民の友」の詩人となす。美妙齋は「韻文論」以來逸作なかりしが、二十九年雜誌「大

和琴』に現れ、翌年「魔界天女」を連載して詩壇に異彩を放ちぬ。數回に亘る長篇、精練の措辭、凄婉の情思、當年の意氣を偲ばしむ。『國民の友』の諸詩人は湖處子を始として、湯淺半月、嵯峨の舍等、前期に比して進歩著しからず。抒情の短篇、平淡にして規模小に、情感女性的にして想像亦稚氣を脫せず。詩形に於ても優雅の辭を操れども『帝國文學』一派の絢爛に及ぶべくも非ず。詩調平弱散文的の弊最も甚し。唯可憐の感情を和平の言辭に寫すを以て其の特長となす。三十年夏、湖處子嵯峨の舍は、國木田獨歩、松岡國男、田山花袋、太田玉茗と共に詩集『抒情詩』を出しぬ。

詩風に於て『國民の友』一派と正反對に立つ者を『早稻田文學』の詩人、即ち三木天遊及び繁野天來となす。共に小說家として二三の作ありし者。夙く新體詩に入り、二十八年以來、天來は「笛の音」「雨聲鳥語錄」等を、天遊は「紫姬」「月の國」等を出し、三十年夏合集『鈴虫松蟲』を公にせり。收むる所、天遊十九章、天來二十章。概して詩思情熱に富み、青春の客氣に滿ちたり。初は當時の流風に從ひ、抒情的敍事の長詩に傾きしが、後漸

く主觀抒情を主とするに至れり。詩形は五七の韻律を好み、渾成の詩品に遠けれども、概ね調强くして弛廢なし。用語に於ては最も自由なる意見を有し、漢語俗語併せ之を用ひんとすること鐵幹に似たり。

『文學界』の詩人は、由來詩風の淸高を以て知らる。情操淸婉、詩品高潔、地の濁穢に在りて天の淨界を憧憬するが如きは、即ち其の特色なり。星野天知、島崎藤村、平田禿木、戶川秋骨、樋口一葉、田山花袋、松岡國男、馬場孤蝶、太田玉茗等、皆悲痛哀絕の調を以て自然を語り、聖愛を歌ふ。就中詩人として知られし者は、藤村花袋國男孤蝶玉茗等にして、花袋國男玉茗は『國民の友』にも出で『抒情詩』に收めらる。其の中にも國男は詞藻穩健にして想像亦溫藉、『抒情詩』の白眉なり。孤蝶は未だ特筆すべき無く、藤村此の間に立ちて恰も鷄群の孤鶴たり。

藤村の詩を『文學界』に試みしは、當期初頭以來の事なれども、其の名を斯壇に現せしは、二十九年後半に屬し、「一葉舟」「秋の夢」と題せる數篇の抒情詩に、一新聲調を出して時人を驚かしゝよりなり。就中詩人中野道

遙を悼める「哀歌」、朝と暮とを詠じたる「二つの聲」、戀さま〴〵の姿を歌ひし「こひぐさ」、星影水の如き夏の朝、匂ふあやめの邊りに、妻鳥を得んと鬪ふ二の雄雞を詠じたる「鷄」の如きは、詩壇骨て見しことなき清新の格調思想なりき。爾來「薄氷」等の諸篇を經て、三十年春「天馬」の傑作を「文學界」に出しぬ。「天馬」は序、雄馬、雌馬の三章、二百三十句に亘る長詩にして、星影夜な〳〵動き、奇瑞箱根の山に現はれて、蘆の湖の邊り村の南北に賤が屋の片廂をかりて人の世に生れ出でし雌雄の天馬を詠ぜる者。序に於て此の由來を叙し、「雄馬」の章にては、朝に富士の雪を蹈み夕に御嶽の岩を超え、青雲に嘶きて電影を追ふべき天馬の身を以て、暫く槽櫪に委して主人に伴はれ、今し箱根を下りて遠く近江の湖畔花橋の蔭を行くを詠じ、次に「雌馬」の章にては、青毛優しき牝馬が蘆の湖を去りて遠く陸奥の野に下り、四時の勞役、冷く情なき人間に驅使せられて、頻りに天の靈泉を戀ひわぶるあはれの姿を歌ふ。想像雄偉、詞章清新、當代詩界の通弊たる纖弱弛廢の想調を擺脱し、理想幽遠、詩境高潔、抒情詩壇の

一大進運を劃せり。しかも彼は更に進んで「深林の逍遙」を「帝國文學」に寄せたり。陽春花深く霞かをる頃、斧鉞未だ入らざる深林の綠を分け、悠遊自適、靜に自然懷裡に同化し去るが如き詩境を寫す。深林の中山精と木精とありて相呼び相應へ、到る處春の德を頌し、春の意を語る。一誦先づ幽韻人を襲ふ。

花のむらさき葉の綠、うら若草の野べの糸、工を盡す大機の梭の林に來れかし。

古き落葉を柔き青葉の蔭に葬れよ、冬の夢路を覺め出でて、春の林に來れかし。

山風一たび渡れば、簫管おのづから鳴り、白妙の雲峯を分れて樹々に棚引く。巖を攀づれば脚下忽ち激湍噬嗑の聲あり。既にして彩雲見る〳〵色褪る夕まぐれ、林中の湖邊に出づれば、春日水に沈みて殘紅紫に变り、遊子自ら暮色一様の彩りに沫し去らる。斯くの如きは詩の大要にして、總べて二百餘句、自然を描きて悉く生命を賦與し、高韻淸致、人をして神往せし

む。「天馬」の奔放と崇高と無けれども、沈靜と幽遠とは遙に之に優り、詞章の圓熟亦遠く之に過ぐ。蓋し新體詩創始以來の名篇にして、詩人としての藤村の名嶄然として卓出しぬ。同年秋一集を結びて「若菜集」と題し、長短五十一篇を收む。形式多樣にして句節の構成單調ならず。用語は概ね雅醇なるを選びしも、特に平易なるを用ひて耳遠きを取らず。但し其の修辭に新工夫あるを以て、清新の聲調獨得の妙あり。歌ふ所の題材は自然と戀愛との二方面ありて、自然を詠ぜる者は、「深林の逍遙」を初として、「秋風の歌」「明星」等、最も誦すべく、特に「明星」は、清高無比、短詩中の珠玉にして渾成の詩域に近し。戀愛を詠ぜる者は、熱情熾烈、從來の詩人の如く怠慢なる戀に非ず。「おくめ」「四つの袖」等は其の代表と見るべく、總べて英國近代のラファエル前派の面影を傳ふ。思ふに藤村の作は、詩境最も西洋趣味に富める者なるべし。

藤村起りて幾くもなく、又一個の藤村現はれぬ。三十年『新著月刊』に「花密藏難見」と題して短詩數篇を公にし、清婉の調を以て可憐の情操を

歌ひ出でたる薄田泣菫是なり。其の特色は「紅絹袖」「夕」等に見ゆる如く、自然懐裡に戀愛の慰藉を求むるに在り。此の點に於て確に藤村の一面を傳ふ。唯夫れ泣菫は藤村に比して情緒一層可憐なるだけ熱烈の度低く、形式の變化措辭の技巧を求むること多きだけ神韻に乏しく、斬新の譬喩を用ひ各種の語彙を取らんとするだけ聲調を傷くること多かりき。獨り彼が試みに成りし八六の調は一種蒼凉の趣を具へて幽婉の詩思を傳ふる所なしとせず。尙後の發達に徴すべし。

之と相前後して出でしは土井晩翠なり。二十九年の末、「紅葉青山水急流」及び「枯柳」を『帝國文學』に揭げて、夙に一種の新調を示しゝが、三十年より三十一年にかけて「希望」「造化妙工」「破鐘の響」「山おろし」「萬有と詩人」「羌笛餘韻」等、頻りに冥想的抒情詩を出し、世評嘖々たりき。是より先き『帝國文學』の詩人相次いで潜み、羽衣等二三の作家、僅に擬古派の名殘を留むるのみなりしが、茲に又新作家を興し、而も其の作風全く異にして、前者の擬古的にして動もすれば朦朧の嫌あるに反し、後者は泰西

詩想を咀嚼して之を淸高の大和文字に寫し、思想用語共に明晰爽亮なり。又前者の抒情は淺近平板にして、深刻の煩悶も向上の憧憬も無かりしに反し、後者の抒情は高く理想界に入り、常に憧憬の眼を天の一方に注ぎ、進んで冥想思索の哲學的風趣を求む。且つ漢語漢文脈を操つること頗る巧妙にして、詩調爲めに遒勁、前者の女性的なるに反して男性的光彩を帶ぶ。蓋し晩翠深く泰西文學を愛し、日夕名家の詩篇に親しみ、而も又漢詩國歌を誦するを怠らず。冥想思索の結果を詩篇に構成するに當りて、要する所の抽象語は、概ね漢語に求め、更に洋語を以て之を補ふ。斯くの如きは啻に『帝國文學』の詩人の中の異彩なるのみならず。所有新體詩人の雋逸たり。

晩翠の特色は冥想思索に在り。矚目萬象の中、常に一種神秘の意を觀ぜずんば止まず。彼れ自然を詠じ、人生を歌ふ。而も其の描寫に止らずして或意義を其の後景に探る。彼は美神を謳歌せんよりは寧ろ造花の幽を闡かんとするなり。「希望」「造化妙工」「雲の歌」「星と花」「夏の夜」「墓上の花」「登高」「鷲」等に見えたる自然觀、「夕の思」「光」等に見えたる人生觀、及び「詩

人」「萬有と詩人」に見えたる詩人觀を窺はん者、何人も晩翠の理想的傾向の一斑を知了すべし。若し夫れ「暮鐘」の一篇に至りては、詩人としての作者の特色を名殘なく發揮せる者、落想文辭聲調、一として具はらざるなく、沈痛雄渾、晩翠が作中の絶唱なり。此の詩は三十一年春、帝國文學に揭げし長篇にして、十七節百三十句に及ぶ。暮色降り來りて世上千萬の思を一樣の暗に包まんとする時、一打の鐘聲に群がり起る詩人の思は何ぞ。鯨音一過、餘韻浮世の耳に絶ゆるとも、「知るや無象の天の外、下界の夢のうは言を、名殘の鐘に聞きとらん、高き尊き靈ありと」。靈よはた何とか之を聞く、「下界の暗は厚うして、聖者の憂絶えずとか、浮世の花は脆うして、詩人の涙涸れずとか」。げに此の鐘聲は、濁世の福音、靈鷹橄欖の法の聲なり。願くは理想實現の曉に至るまで、絶えずも響け長へに、天籟地籟身に兼ねたる夕入相の鐘の聲よ。斯くの如きは「暮鐘」の神髓にして、又晩翠の詩想の精粹なり。思ふに彼れの詩、底を敲けば必ず厭世の響あり。曰く「自然は笑ひ人は泣く」。曰く「人は死と疑との子のみ」。而も詩人の向上的

憧憬は茲に起るなり。思へらく、かゝる人生を厭離して何所に適くべき。戀愛の花園に逍遙せんか。世に不變の戀なきを如何せん。現實以外永劫不變の大理想に向つて精進せんか。其の容易に企及すべからざるを如何せん。賴に人に想像の力あり。想像に成り出でし詩歌あり。即ち之を以て理想實現の機至るまでの慰藉となし、暫く想像の翼を張つて光明の天國に神往し、美妙の詩歌を玩賞して永劫の樂土に逍遙せんと。是れ晩翠の作品に通ずる根本思想なるに似たり。

以上晩翠の詩想を說きて其の明側を盡しぬ。然れども暗側の之に伴ふ者亦少からず。夫れ晩翠の詩は勉めて哲學的宗教的ならんことを求めたるが故に、多くは理知に走り、描寫せずして說明し、謳歌せずして論述す。されば其の調常に冷靜にして情火の熱烈なる者絕えて無し。而も彼れの思索は單純なるを以て、究竟詩想一たび定まるや、千篇唯同一の著想を繰り返すに過ぎず。且其の文辭も、明澄の極、餘韻を缺き、聲調も奇拔の利あると共に圓熟を缺くの害あり。然れども新體詩有つて以來始めて得たる冥

想詩人なるを以て、彼が詩壇に於ける地位甚だ輕からずと言ふべし。

顧みれば我が新體詩も、三年が間に長足の進歩をなしけり。湖處子殘花より藤村晩翠に至るまでの想形の進歩洵に驚くべし。而も其の間輩出せし詩人、概して壽命長からず。自然淘汰の鐵鞭に驅られて相次いで斯壇の外に逸し去り、殘る所は健闘の勇士藤村晩翠の二家となりぬ。今や二家の詩風江湖に布き、青年輩の文學雜誌たる『文庫』『青年文』及び『新聲』等に見えたる年少詩人の作品は、曩に羽衣の麗藻を揮ふや、靡然として之に赴きしも、今は即ち藤村調晩翠調となるに至りぬ。要するに、新體詩は草創日尚淺く、正に試驗時代に屬し、從て試み、從て驗す。一として恒久の威力あるものなし。唯藤晩二家のみ望を未來に屬せしむる者あり。請ふ。其の後の發達を見ん。

藤村が三十年以後の作は、纂めて翌年刊行の『一葉舟』と『夏草』とに在り。彼れの詩想は『若菜集』に比して著しく面目を改めぬ。『一葉舟』卷頭の『白磁花瓶の賦』は、失戀の恨綿々として盡きざる若き藝術家が、萬

餅の悲涙を一抜にこめて作り出でし純白の花瓶を詠じ、情緒清婉楚々として人を動かす者なるが、一方失戀の恨を抒べて他方藝術の歎美に及ぶ所、頗る從來と趣を異にす。從來の藤村は戀を謳ひ愛に憧るゝ者なりしが、茲に至りて戀の破れ易きを恨み、却つて永劫の美常世の歡たる藝術に憧る。爾來彼は藝術愛慕の詩人となり、歌ふ所常に其の風韻を帶ぶ。勿論「鷲の歌」の如きは、千里の蒼溟、忽ち黑雲湧き疾風起り、怒濤紫瀾を捲いて白沫四散する所、磯際の岩角に暫し身を寄する老若二羽の鷲が、健翼一搏烈風に逆うて萬里の雲を追ふ光景を叙して、崇高雄渾、「天馬」と併び立つて圓熟は之に勝り、晩翠の諸什と拮抗して迂餘曲折は之に優り、其の風趣を察すれば、正に『若菜集』の遺韻を傳ふ。然れども、「晩春の別離」「曉の誕生」「月光」等に至りては、何れも藝術に對する無限の愛慕を表はして一種の特色を帶ぶ。試みに「晩春の別離」に詠ぜる詩人を以て晩翠の「萬有と詩人」に於ける詩人に比し、「曉の誕生」に於ける嬰兒を以て晩翠の「小兒」に比すれば、藤村の面目愈明かなるべし。かの皎月千里の清光を歌ふ

にも、一樣の彩りを以て萬物を理想化する神秘の色を諷はずして、百代易らぬ月影に藝術の永劫を觀じ、深夜の月光に藝術國の靜寂を思へるが如き、以て其の本色を見るに足るべし。

此の時に方りて彼れの詩風は再び轉じ初め、空想的藝術的の世界より出でて實際的自然的の生活に入りぬ。『夏草』收むる所の「新潮」と「農夫」とは明かに之を示す。「新潮」は漁夫の生活に托して人生の行路を描き、最後に處生の方針を示せる者。幼稚なりと雖、作者の新傾向を見るに足る。「農夫」は序、及び上下二卷、八章より成り、一千句に垂んとする叙事的抒情詩にして、新詩壇空前の長篇なり。利根河畔の農夫鍛工の女と相思ひ、征清の役に召されて征途に上り、三年軍終へて歸れば、少女が離恨に悶死せしを聞き、絕望の餘り、身を雲水に托せんと決せしが、會〻鍛工が愛子を失へる悲愁を勞働に慰めて奮勵するを見て、飜然昨非を悔ひ、再び利根川邊に己が生業を勵まんと思ひなるを叙し、前者より更らに一步を進めたり。時恰も『文學界』の倒るゝに際し、藤村亦信州に入りて實際的生活を營む

に至りしかば、其の『新小說』に寄せし吟詠彷實際的自然的となり、『文學界』時代の面影復見るべからず。當時の詩集たる『落梅集』を見るに、感情生活よりも意志生活を尙び、藝術戀愛を歌はずして汗額の事業を說き、空想の敍述よりも現實の描寫を取り、仰いで翹望せずして俯して慰藉す。總べて感興の湧くがまゝに任せずして、考察反省するを其の特徵となし、通篇著しく沈靜の調を帶ぶ。「壯年の歌」及び「勞働雜詠」は此の集の代表と見るべし。されば偶〻戀愛を歌へる「胸より胸に」の如きありと雖、戀愛其の物は、もはや『若菜集』の其れに非ずして、人生の戰線に立てる者の唯一の慰藉となれり。玆に至りて藤村の詩想の中心は事業の謳歌となり、生命の戰鬪は其の套語となり、明澄透徹、昔日の朦朧なく、靜平なる觀察頗る客觀的に入る。從つて其の文辭の如きも、靑春の心情を躍らしむる詩的魅力なく、絢爛の賦彩既に見るべからず。唯彼が胸奧に潛める沈靜の詩思を抒べし者は、淡彩の中、大雅の光あり。「小諸なる古城のほとり」及び「寂寥」など、淸楚の賦彩奕々たるを見る。三十四年秋『落梅集』を公に

して後、復歌はず。

晩翠は三十二年春、詩集『天地有情』を刊しぬ。收むる所、長短四十篇、『帝國文學』『反省雜誌』等に掲げし從來の作の全部なり。中に、「馬前の夢」「星落秋風五丈原」の二長篇あり。彼れの主題及び作風の一變せんとするを示すこと、藤村の「新潮」と「農夫」との如し。「馬前の夢」は、不能の文字を笑ひし蓋世の英雄も「玉樓の春短くて、魚龍淋しき秋の水」「其の常勝の劍折れて、獨り小島の波枕」、疾風暴雨の夜更けて、終焉の床に横はる拿破崙を歌ひ、「星落秋風五丈原」は集中の最長篇、六章三百五十句に上り、南陽の臥龍草盧を出で、天下を三分して王者の師を學びしも、成敗遂に天の命、一代の希望未だ成らずして、祁山の陣營、大星俄に落ちし諸葛亮を詠じ、共に偉人の歎美と運命の哀傷とを抒べて、悲壯沈痛を極む。其の形式に於ても共に三段に分れ、最初終焉の床に在る偉人を描き、中段作者得意の叙事的技巧を以て一代の功業を叙べ、結ぶに詠歎と憑弔とを以てす。結構雄偉、詞藻壯麗、抒情叙事併せ得て手腕頗る見るべし。之を從前の作

に比するに、厭世懷疑の遺韻尙響きて、而も理想を戀ひ光明に憧れし面影、復見るべからず。彼は理想の實にし難く、不朽の求むべからざるを史上の事實に見て、俯仰今昔、遂に感傷の悲音を洩せり。爾來晚翠は破られたる理想を悼む詩人となり、第二詩集『曉鐘』（三十四年刊）の各篇、概ね哀絕の調を帶ぶ。「萬里長城の歌」「秋興八首」「惆悵吟」「黑龍江上の悲劇」等、是が代表者たるべし。「萬里長城の歌」は秦皇の覇圖空しく消えて獨り史上の名を殘すのみなるを傷み、二十朝の興廢を閱せる古壁、今既に淸室の運命を語るを哀しみ、「秋興八首」は悲風蕭殺の夕、詩人自身を歎き、故鄕を偲び、母國の詩運を愁へ、海外の詩國を慕ひ、友を惜み、昔を戀ひて、痛切なる哀傷の聲を放ち、「黑龍江上の悲劇」は、三十三年北淸戰役中、滿州國境に於て演ぜられたる悲劇に憤を發し、文明の理想の爲に泣き、人道の大義の爲に悼みて熱烈奔放を極む。共に集中の長詩にして、措辭益〻圓熟に、詩形益〻整齊、修辭上の進步著しと雖、青春の翹望を披瀝したる頃の如き豪華の風調なし。

「弔吉國樟堂歌」「富嶽の歌」「登高賦」は集中の絶唱なり。前者は、芳蘭花脆く、運命の神に嫉まれて萬古の恨を殘せる故友を弔ひ、孤燈の下、「靜寂」と「暗」との中に、冥想の眼を閉ぢし一夜の思を叙し、清怨綿々、至情切切、加ふるに詞藻の富贍を以てし、洵に好哀歌なり。「富嶽の歌」は渾沌の世に湧き出でて太古の雪の膚淸く暗を照して立てる姿不變の富士の高嶺に、天上の星永遠の光を迭りて露と凝らしめ、其の星の精銀漢と共に下りて嶺上の明水となり、餘滴靜かに谷あひに流れて花を誘ひ香を浮け、幽泉細流集りて大河となり、滔々東海の波に注ぎ、南溟の風北溟の雲、群がる友を呼びて靈山に集る處、詩神降りて不朽の調を奏づるを叙し、玲瓏の想像、崇高の風趣、壯麗の詞藻、集中に異彩を放つ。「登高賦」は吹き去り吹き來る無限の秋風に對して、十九世紀の禍惡悉く吹き拂ひ、新に來らん二十世紀の世をして光と愛と詩との世ならしめんことを祈りし者にして、沈靜の想、莊嚴の辭、老熟の域に入る。而して「弔吉國樟堂歌」は、流轉の相を觀じて懷疑に陷り、哲學を彈じ宗敎を劾する所、依然として感傷の詩なり

と雖、末段に至りて、靈の光を蓋ふ僧俗の聲を棄てて沈思冥想すれば、有象世界の遙あなた、美妙圓滿の無象世界ありと說いて、從來脊て有らざる慰藉を含めり。爾來理想實現の時あるべきを信ずるに至り、「富嶽の歌」にては、靈山の曙光を見て萬邦比類なき理想國を我邦に現出せんことを信じ、「登高賦」にては、更に進んで理想界の實現を渾球上に見んことを無窮の靈に祈り、「愛の神、進化の神、詩人の神、……願くは爾の呼吸、天の果てより地の隅に吹き來る無限の風となりて禍惡盡く吹き拂ひ、光と愛と詩とをして永く此の地を掩はしめよ」。と呼べり。卽ち昔日理想の惱みは化して現實の惱みとなり、無象淨土の希望は變じて現象淨土の希望となりぬ。

上述諸篇は何れも『曉鐘』集中の長詩にして、其の短詩は思想修辭共に比較的精彩なし。詩形に於ては、七五二句を連ねて一行をなせる一體を始め、種々苦心の痕を止め、「萬里長城」以下勉めて變化ある詩調を得んと試みぬ。七五二句一行の詩形は、夙く二十八年羽衣の「月」に現はれ、藤村亦「鷲の歌」に之を試みし者なれば、晩翠の新案に非ざれども。最も多く

之を用ひしは彼なり。「登高賦」に至りては全く七五の單調を脱出し、前條抽出の斷片に見えしが如き新形式を試み、以て一種蒼凉の調を出せり。而も藤村の『落梅集』に於けるが如く、『曉鐘』以後暫く高遠の聲を收めぬ。

二家の盛なるや、「花密藏難見」の作者泣菫も、亦『新著月刊』誌上、一種の聲調を以て可憐の情緒を歌ひ、頗る江湖の囑目を得、三十二年末、遂に一集を公にして『暮笛集』と言へり。試みに其の詩想を覗ふに、彼も亦他の詩人の如く、最初に、現世に對する不滿、俗人に對する嫌厭より、懊惱懷疑の雲に閉されて茲に一種の翹望を生じぬ。晩翠は斯かる時、仰いで天上雲のあなたに無窮を戀ひ、未來の世に樂土を夢想して心を遣りぬ。然れども泣菫に在りては、所謂現世とは趣味なき世、所謂俗人とは趣味なき人にして。彼れの懊惱は主として趣味なき人生に對する嫌惡の情より起るに過ぎず。されば彼れの翹望は甚だ簡素にして、單に趣味ある人生を實現せんと冀ふに止まる。然らば即ち人生の趣味とは何ぞや。愛と詩と、是のみ。彼が憧憬の歸着點は即ち此の二者に外ならず。卷頭「詩のなやみ」既

に此の思想を體現し、次いでは「星」「鐘」「蟋蟀」等に詩の憧れを示し、「琥珀」「玉腕」「紅絹袖」「夕」等に戀の憧れを示し、更に其の後の什に於て此の思想を明白ならしめたり。就中「兄と妹」一篇、詩歌の人なる兄と才敏く情切なる妹とを描きて、最もよく彼れの詩想を代表す。「尼が紅」は四行節百五を疊ねたる集中の最長篇にして、浮世ゆかしと思ひそめし若き沙尼が寺を遁れて若き戀に惱む綿々の恨を叙して精細を極め、少しく冗漫の弊ありと雖、想形共に集中一方の代表者たり。

泣菫の戀を語るや、熱情時に奔逸して頗る藤村の『若菜集』に似たり。かのさはれ、彼れの特徴は熱烈なる感情に非ずして可憐なる情緒に在り。かの「村娘」「鷦鷯」などに現はれし同情、「古鏡賦」「盃賦」などに現はれし想像、「秋の歌」「燕の賦」に見ゆる自然感情等、其の著しき者なり。就中「燕賦」は、此の點に於ける代表作品にして「圓き頭は薬隱れに、かゝる葡萄を見る如く、胸の和毛の白妙は、女子の恥づる肌に似て、瞳の色のらうたさは、湖に澄める一つ星、上毛の艶の紫は、朱冠に彫れる雲母」の如く、やがて

八重の潮路を越えぬべき力ある翼を打ち、霞める青柳に新月を呼び出づる清き音に歌ひ出でたる燕子に寄懐せし者、姿態文辭最もよく整ひ、集中の佳作なり。

『新著月刊』倒れて泣菫は『新小說』『明星』『小天地』等に其の詩を掲げしが、『落梅集』『曉鐘』の刊行と同じ年に第二詩集『行く春』を出しぬ。詩想は前集と大差なしと雖、其の懊惱は空想より來ること少くして、現實の上に存すること多くなりしは、『暮笛集』に見ざる所、頗る晩藤二家の傾向に似たり。特に時事問題に憤を發して「遺憤」と「あゝ杜國」とを作りしは、彼れの現實的傾向の極端に走りし者なるべし。爾來作者の翹望せる「新たなる日」は、愛と詩との滿足せられたる華やかなる若々しき趣味の世より、轉じて平和の世特に平和の田園生活となれり。「牧笛」より始めて、「夕暮海邊に立ちて」「夕の歌」「小鼠に與ふ」「郭公賦」「金絲鳥を放つ歌」等は、即ち平和の理想を謳ひし者。「野に立ちて」及び「南畝の人」に至りては、全然農民生活の讃美にして、藤村の「勞働雜詠」と歸趣を一にす。

以上述ぶる所を通覽するに、泣菫の詩風は、大體に於て藤村の後影を追ふに似たり。而も其の可憐なる情緒を抒ぶる一面のみを傳へて、「天馬」「鷲の歌」「深林の逍遙」の高渾なる情調に及ばず。唯「石彫獅子の賦」の一篇長鬣背に卷き、廣胸强く張りて、夏の日盛り、光を浴びて立ち、威風百獸を慴伏すべき石彫獅子の雄姿を寫し、進んで藝術の不死無窮を叙べて、雄偉壯麗、彼れの作に始めて見る所、宛然藤村が『一葉舟』の詩想なり。

詩形に關して、作者は諸般の試みをなし、『暮笛集』の八六調以外、種々變化ある格律を用ひぬ。但し一句一行概ね短く　晩翠の漸く長からんとするに反し、漸々短からんとする傾あり。之を學ぶ者、靑年の間に少からざりき。

當代の詩壇、三家を除けば他は皆振はず。從來の作家にては、鐵幹新詩社を起し『明星』を發刊して短歌及び新體詩に勉むるあり。三十四年詩歌合集『紫』を公にせり。後進にては、高安月郊、蒲原有明、兒玉花外、岩野泡鳴、今村敬天等あり。月郊は、三十三年小說詩歌合集『金字塔』及び

『夜濤集』を出し、特有の聲調を以て勁健の詩想を歌ひ、有明は、『帝國文學』『明星』『文庫』等に現はれしが、三十四年『片袖』に掲げし「高潮」最も稱せらる。花外は集『風月萬象』(三十二年)を出し、泡鳴は『露霜』(三十四年)を公にし、敬天は同じ頃『短笛長鞭』を出せり。又かの『文庫』の詩人河井醉茗は『無弦弓』を刊行せり。三十四年には詩集の出づること盛なりしも、皆前年の作を編みし者に過ぎず。實際に於ては、詩壇沈降、新興の氣運一段落を告ぐるに至れり。

第三節　戲曲

明治二十年前後に方り、文學界の新潮として其の勢を逞うしたる寫實主義が、戲曲演劇界に入りて誤つて邪徑に走り、性格寫實精神寫實の旨を離れて、徒に事件寫實衣裳道具の寫實に流れたりし由は既に述べぬ。又かの歐化主義の反動として起りし國粹運動と同樣の原因より來れる保守主義の運動が、從來の夢幻史劇を推奬して斯界の前途を妨碍せることをも說きぬ。

二十六七年に至る劇壇の形勢は、要するに此の二流の消長に外ならざりしなり。然れども少數の識者は、之に滿足する能はず、去つて新戲曲を求むるの念甚だ切なりき。前期劇界を叙し終るに方り、一言云ひ及ぼし坪內逍遙の評論は、即ち此の少數者を代表する者と言ふべし。

二十六年秋逍遙は『早稻田文學』の論壇に立ちて「我國の史劇」を論じ初めぬ。彼は先づ本邦古來の史劇作者を擧げて其の作品を批判し、併せて自家の史劇に對する見解を述べたり。曰く、巢林子の史劇は一種の夢幻劇にして、單に眼に愬る技術としては、巧妙驚くべきも、嚴密に言ふ史劇としては、事件荒唐、人物單純、到底今の觀客をして歷史的幻影を起さしむるを得ず。唯、人情を描寫せんが爲に、時所と人名を過去歷史に藉りしに過ぎず。默阿彌の史劇は其の作意過去の事相人物の再現に在るを以て、多少歷史的寫實に近づけりと雖、彼や素と天稟の世話物作者にして、其の學殖識見、共に時代物英雄物作者たるに足らず。彼は僅かに野史俗說を典據として史實人物を思想し、而も其の直覺は現在以外に及ばざるを以て、時

勢境遇地位器度人情及び風俗を異にせる過去の事相人物を寫して正鵠を得んこと、到底望むべからず。況んや治亂興亡の理を繹ねて英雄の心事を描出するをや。學海の史劇に至りては、過去再現の主義を極端に解釋して、單に正史の事實を其の儘に取り、道具衣裳臺詞等盡く之に依り、言はば非劇的非詩的の考古博覽會なり。蓋し脚本の精髓は個々人物の性格を因となし、境遇を緣となし、此の因緣によりて成れる著大なる業果を描き、以て人事の眞相を現はすに在り。從つて史劇は件の人物を過去の特殊なる境遇の中に立たしめ、以て人事の眞相を過去事實の中に表現せんと力むる者のみ。されはかの史上の事相と人物とを寫實的に舞臺上に現はすが如きは抑も末なり。史劇の過去相は普通の觀者をして過去の幻影を起さしむれば即ち足る。學海の如きは此の本末を顚倒せる者なり。櫻痴の改作史劇は言ふに足らず、其の新作史劇は唯史的人物を取り來りて、之に當代俳優の個性を與へたるのみ。作者の筆に上りし史上幾多の英雄は、盡く之を演ずる一俳優の儀型になり了らずんば止まず。加ふるに作者自身の影子を帶びて、

俗智世間智に長け、明察幾微に通ずる人物ならざるなし。彼等は現在を洞觀し、未來を先見し、奇禍偶福、忽ち其の由來を察し、他人心事の隱微忽ち之を忖度し、事の成敗は一に此の世間智の優劣によりて決すとなす。斯くの如きは獨り史上の人物と異なるのみならず、所有人間の通有性を失ふと。次に逍遙は新史劇に反動して起りし夢幻劇崇拜の潮勢を摧かんと勉め、夢幻劇の形式美は近松當時の時勢に在りて始めて發揮すべき者なりと論じ、最後に將來の改良策に及び、從來の劇の根本的缺點は、第一敍事詩の體と劇詩の體との混淆、第二性格を無視して事件を主とせる事に存するを以て、先づ此の點に改良を加ふべしと說き、大に泰西式の性格劇を主張せり。

逍遙が史劇論は、げに斯壇の新聲にして、性格劇科白劇を鼓吹せる點に於ては、全然斯道の『小說神髓』なり。文學革新の著手せられて茲に十年、演劇革新の合理的に近き論議は始めて世に出でぬ。是より先き『梱草紙の鷗外、穩健の思想と妥當の見解とを以て斯界を警醒せしも、彼れの態度は學者的批評的にして、逍遙の如く主張的鼓吹的に非ず。從つて其の江湖

に對する影響遂に此の如くなる能はざりき。逍遙は、其の著眼の卓拔斬新なる、其の行動の華やかにして皷吹的なる、假令多少の缺陷誤謬あるを免れずと雖、文壇の先覺評界の明星として、卒先の功著しき者あり。

然れども、史劇論の評壇に與へし影響の大なりしに反し、作劇乃至劇場文人に及ぼしゝ感化は、不幸にして甚だ小なりき。『小說神髓』ありて小說界の作風一變せしが如くなる能はざりき。蓋し劇界の革新は、脚本劇場俳優の革新以外、觀客の思想を一新するに非ざれば、得て望むべからず。而も當時の觀客は概ね教養なき舊世界の遺物なり。新七其水の徒、尙よく梨園作者として其の餘喘を保つは、即ち此の惰力の恩のみ。斯くて爛熟せる舊劇、模倣陋劣の新作は、依然として活氣なき劇界を支配し、活歷流行以來、兎に角舊劇の範裡を脫せんとせし寫實史劇すら、櫻痴一たび蹉跌して、復起らずなりぬ。

此の時に方りて、日淸戰爭起り、戰爭文學の流行は所有方面を侵して演劇界にも入りぬ。此の勢に乘じ、戰爭劇を標榜し、俄然として頭を擡げし

者を所謂壯士芝居となす。壯士芝居は二十四年西鳥越中村座に始めて政治的世話物を演ぜし川上音次郎一派の劇を指す。此の粗放露骨なる芝居も、二十七年『又意外』等の新作を演ずるに及びて、不思議にも江湖の喝采を博し、『戰地見聞記』以下の戰爭劇を出すや、一時舊劇の壘を摩し、眇たる貧書生の一團、都下の大劇場に據り、積年の大勢力たる歌舞伎俳優をして後に瞠若たらしむるに至り、劇評家は驚きて劇界革新の機運と稱し、之を呼ぶに新演劇を以てし、彼等を名づくるに新俳優を以てしたり。此の影響は延いて各地に及び、多數の壯士役者團の興起を見るに至れり。

此の運動は總べての點に於て藝術の域に遠きに係らず、演劇史上甚だ重要なる事件なるべし。然れども之を詳說するは本書の主旨に非ず。茲には唯脚本の方面より觀察するを以て足れりとなす。抑も劇界革新の事あるや、其の鋒先は先づ史劇に向けられ、世話物の天地は風靜なる別世界なりき。思ふに世話物に在りては、稀世の名作家默阿彌の存するありて、寫實的世話劇必しも貧少ならず。然るに、二十六年默阿彌歿して、凡庸作者獨り存

し、且其の作る處、明治の假面を著けたる舊幕物に過ぎざりしかば、新時代の新世話物としての價値終に空し。新演劇の勃興は、即ち此の虚を衝けるに外ならず。彼等の脚本は拙劣を極むれども、其水新七よりは明治の現實に近し。即ち此の運動の功果は、曩きに史劇に施されし寫實主義を新に世話物に導きし點に存す。換言すれば、世話物に於ける活歴主義の擴充に在り。

然れども、是れ史上の價値のみ。之を脚本の側より見れば、筋の支離滅裂なる、寫實の皮相なる、學海櫻痴の作よりも甚しく、明治の世話物としての價値は全然缺けたりといふべし。顧みて劇壇の狀態を見れば、舊夢幻劇の精粹復びもて離され、活歴物、川上物の總べてを壓倒しつゝ無前の繁榮を致し、斯壇の刷新、脚本の改良は、前途亡羊の歎なき能はざりき。或は敢て新作をものして梨園の關門を打破せんと試みし者なきに非ざりしも、時運は未だ至らず。新作家にして上場するを得る者、依然櫻痴居士に止まり、其れすら改作の俗劇のみ用ひられたりき。

此の時に方りて史劇論の記者逍遥は奮つて創作壇に立ち、二十七年末より、春の屋主人の名を以て史劇「桐一葉」を『早稻田文學』に連載し、二十九年の初より同「牧の方」を同誌に連載し、完結するや、共に之を刊行して廣く世に問へり。蓋し是れ著者が理想となせる脚本に非ざるべきも、亦以て多年の所論の具體的發表の第一着歩と見るを得べし。

「桐一葉」は豐臣家遺托の重任を負へる片桐市正且元を主人公とする悲劇にして、且元が駿府に使して大御所の難題を受け、已むを得ず淀君關東下向の儀を承諾なし、別に苦計を胸に秘めて大阪に歸りしに、讒者の爲に關東に內通せりと稱せられ、烈しく淀殿の不興を蒙るに端を發し、奸臣の阻拵偶發の錯誤の爲に、胸中の秘計遂に施すべからず、乃ち望を大阪に絕ち、居城攝州茨木へ退かんとして、曉霧の中長良堤の上に木村長門守と訣別し、後事を托して悄々と落ち行くに至りて終結す。之を本筋として、且元の一女蜻蛉が長門守に對する戀物語を織り込み、淀君が神經質的なる狂態を以て之を彩り、總べて七幕十五場に分る。其の材料は概ね正史に取りたるも、

作者は素と、正史の事實が單に段幕に按排せられたる者を以て劇と見なさざるが故に、事件の進行を助け、人物の性格を描出すべき幾多の醇化を加へたりき。作者は此の悲劇の葛藤は、一時關東に屈して大御所百年の後を待たんとする且元の秘計を知らざる淀君の猜疑憤怨と、且元を退けんとする大野父子の野心と、相依り相助けて且元の苦忠を破却し去らんとする所に存すとなし、遂に且元をして退身の已むを得ざるに至らしめたり。故に其の終結は、普通の悲劇の如く悲壯の死に非ずして慘苦の生なり。事件の取捨按排は總べて此の著想より來る。作者は又、筋の統一を求むるが故に、插話の爲に離裂する弊を避けて、一道の本流全篇を貫かしめぬ。作者は又、人物に作家の影子を宿し、劇に作家の觀念を寓するを忌むが故に、個々の人物各〻特殊の性格を具へて、其の間に褒貶を挿まず、學海櫻痴の弊套を擺脫して、最も自然的なる描寫をなし、特に且元淀君に於て其の著しきを見る。作者は又俳優の爲に人物を作るの非を知るが故に、舞臺上の注意周到なるを期しながら、强ひて當時の梨園に媚びて團菊輩の藝風に迎合せんこ

とを勉めず。而して其の文章に於ては、從來戲曲の修辭たる七五調、掛詞、緣語等を用ひたる敍事詩的分子尙少からずと雖、概して精練暢達、一代の才筆沒すべからざる者あり。

曙光は暗黑を破れり。曉鐘は寂寞を破りぬ。默阿彌以下過渡時代の史劇を超出して近代思想に成りたる新戲曲は、其の頭角を露はしぬ。百千の群議は一人の實行に若かず。脚本改良の聲起りて、所謂評論家の囂々は其の聲徒に大にして、功果一物をも殘さざること數年、茲に至りて、漸く劇壇渴望の一端を充たしぬ。

然れども、此の劇を讀む者、主人公の苦忠に同情を表すると共に、其の性格の明確を缺けるを覺ゆ。思ふに且元は主君の面前に奸臣と激爭し、乾坤一擲悲壯の最期を遂ぐるが如き快男子に非ず。遠謀深慮、內忠奸を操縱し、外老猾を控御し、以て主家百年の安寧を致すが如き智者に非ず。壯烈の意氣は重成に及ばず、老熟の智畧は家康に若かず。謀りて誤り、誤りて斷せず。因循姑息、一日を緩うせる者。斯かる概括的性格は稍明かなりと

雖、共の云爲常に含糊にして直截ならず。或は故主の恩に感じて孤忠盡瘁するが如く、或は首鼠兩端、自家の安きを計るが如く、悲劇的境遇に處して煩悶の痛烈なる者表はれず。壯烈なる大破綻なくして、早く身を退くなど、往々吾人の同情を冷却せしむるものあり。要するに性格悲劇に非ずして境遇悲劇なるべし。蓋し「桐一葉」は、完結せる戯曲に非ず。且元の悲劇的最期は、別に續篇ありて之を詳悉すべかりしなり。作者は三十年「沓手鳥孤城落月」を『新小説』に掲げ、以て此の脚本の局を結べり。

「沓手鳥孤城落月（ほととぎすこじやうのらくげつ）」は大阪落城の一刹那を舞臺として、且元の最期を描ける悲曲にして、落城の早朝、生命旦夕に逼れる重病を推して家康の陣營に赴き、秀頼母子助命と共に、禮を以て出城を迎へんことを請ひ、且自ら其の使節たらんことを求め、十年の苦心、鬢髮霜の如き老武士、籠を急がせて城に向ふに始まり、本多正信の計略に阻まれ、自己の重病に時機を失ひ、遺恨千秋、本丸炎上して母子生害となり、乃ち悲憤の涙を揮つて城門の前に瞑目するに終る。總べて三幕七場を以て成る。通篇悲愴の調を以て被は

れ、糯庫階上淀君の狂亂秀頼の愁歎人の腸を斷たしむるは勿論、末段且元落命の一場、卷を掩うて痛憤せしむ。而して曩に模稜含糊の趣ありし且元の面目此の一場に至りて漸く明かにせられぬ。彼は素と、石田三成の所業を以て猿才覺となし、機の熟するに時方ありと、中心竊に戰を期しながら大御所存命の中は平和を陽に一時を欺き、徐に計を運らすを以て唯一の希望、畢生の事業となせる者。彼の苦心經營せるも、卑怯と罵られ不忠と認められしも、總べて此に出づ。彼をして悲劇的最期を遂げしめしものは、主として、大勢を達觀すべき神智なく、因循姑息一時の小策を弄して幾微の動くを悟らざる彼自身の性格なりといふべし。「孤城落月」を「桐一葉」と共に二部曲と見るを得ば、始めて新悲劇の面影を彷彿すべきなり。

此の曲は幾多の瑕瑾ありと雖、とにかく明治文學の一記念にして、戲曲史上期を劃すべき著作なり。小說史上空前の事業を成しゝ春の屋主人は、茲に再び戲曲史上の大業を成せるなりき。而も其の活動は之に止まらず、更に『牧の方』を創作せり。『牧の方』は、鎌倉執權北條時政の後妻牧の方

を主人公とする悲劇にして、牧の方が所出政範の愛に溺れ、之を將軍職に就かしめて尼御臺の榮華を學ばんとし、乃ち千幡將軍尼御臺及び義時を除かん大陰謀を企て、事現はれて義時の前に自盡するに至る筋、總べて六段十七節、北條時代初頭の罪惡史中、特に著しき一女丈夫の末路を描けり。然れども、此の曲は之を以て完結せるに非ず。續きて出づべき『源實朝』及び『右京兆』と共に三部曲の形式をなし、以て義時を主人公とする一大史劇を爲すべかりしなり。故に此の曲は牧の方を主人公とする獨立の曲に非ず。陰謀家牧の方を中心として、更に大なる陰謀家義時の前半生を描けるなり。されば單獨に之を評論せんは、頗る當を失すと雖、試みに其の脚色を窺ふに、政範を擁して簾中の權を振はんとする牧の方、牧の方を擁して全權を握らんとする稻毛父子、稻毛父子を使嗾して政範に代らんと巧らむ平賀朝雅、是等總べてを自滅せしめ、將軍を擁して執權の天下を謳はんとする義時、巴の如く相追うて、一起一伏、野心は野心と戰ひ、陰謀は陰謀と相衝き、所有罪惡を盡す。故に場面變化に富み、事件參差として常に

讀者の注意力を緊張せしむ。然れども、一部の主動たるべき牧の方の陰謀が、常に黑幕に潜める義時の爲に操縱せらるゝ傀儡に過ぎざる趣あるが故に、時々之に對する感興を破らる。且此の曲には、幾多の豫想せられたる事實を含み、讀者の歷史上の知識に委ねて其の叙述を省略せる者多きを以て、讀者をして、此の曲は甚だ大なる史劇の中間に位する一小部に過ぎざる感を起さしむ。牧の方の性格の如きも、直截明晰なるに係はらず、悲劇の勇者として讀者の注意を一身に集むべき偉大の資質を缺く。其の陰謀もおのづから所動的にして、所有外敵と戰ひて壯烈なる沒落を遂ぐるが如き大觀は遂に見ること能はず。

之を『桐一葉』に比するに、其の目的が、史上の事件の隱微なる消息を描破するに在ること兩者相同じ。『桐一葉』は豐臣家滅亡史の裏面に潜める隱微を描くを主とせし如く、『牧の方』は鎌倉三代將軍時代の罪惡史の隱微を寫すを主とせるに似たり。唯取材の時代及び史料の選擇に於ては、『牧の方』の取りし所は、古今罪惡史の頂點にして、史的研究の鋤未だ入らざる

荒野なれば、作劇家が想像を逞うして一大悲劇を編み出すべき餘地を存する點に於て、大に『桐一葉』に優れたり。蓋し作者は先づこの神秘なる罪悪史に著眼し、其の黒幕の陰に立てる義時を認め、之を中心として此の時代の史實を網羅せる三部曲を作らんと企てしなるべし。然れども、局面宏濶、事端繁瑣に過ぎて、劇の進行に餘裕なく、且事件の全部が陰謀の連續なれば、總べて秋霜逼促の趣ありて、詩興おのづから乏しきを免れず。此の點に於ては『桐一葉』に一籌を輸せざるを得ざるなり。

逍遙は上揭三曲の外、尙「二葉楠」の一篇を『新著月刊』に揭げたり。小楠公を主人公とせる抒情詩的小戲曲なり。三十一年「孤城落月」と共に『菊と桐』と題して出版せり。

逍遙が作は何れも場に上らざりき。然れども評壇の大部分は嘖々之を稱揚し、新作劇家の之に倣ふ者漸く現はれぬ。高安月郊は、二十九年「重盛」をものし、翌年「眞田幸村」を『早稻田文學』に揭げ、其の他麿田綠堂、土居春曙、松居松葉、及び水蔭漣山人柳浪等、各戲曲の才を一二の創作に

試みたりき。

三十年夏、櫻痴居士、俳優團十郎、芝居師森田勘彌の應援を得、從來の立作者たる舊劇の作家に代りて、自ら歌舞伎座の立作者となりぬ。是より先き櫻痴の新作の實演せられし者少からざりしも、舊慣の關門固うして未だ立作者たるを得ざりしなり。されば此の事あるや、江湖の囑望一方ならず、往々斯界の形勢一變して新作大に行はるゝに至らんと夢想する者さへありき。然れども、彼が入座以來の作は、『俠客春雨傘』を始め、舞臺面の變化面白く、役々善く俳優に適ふのみにて、材料着想に些の新彩なく、脚色主旨に何等の統一なくして、全然舊劇の後塵を拜するが如き者なれば、到底新時代の要求に應ずべき者に非ず。要するに新舊過渡の作家たるを免れざりき。純乎たる新文士にして梨園の關門を打破せるは、蓋し松居松葉を嚆矢となす。三十二年松葉、史劇『惡源太』を草し、左團次に附して上場す。俳優を標的として人物を作りし舊式の者なるが上に、脚本としても失敗の作なりと雖、幼稚なる梨園は、先づ此の種の新作を以て啓發せらる

べきなり

右の事件を一小波瀾として、劇壇の狀況は不活潑を極めたり。往年の脚本改良會の再興とも見るべき靑葉會起りしも、何等の功なく、新演劇は一敗地に塗れてより、僅かに、知名の小說、例へば思軒譯の『瞽使者』紅葉作の『心の闇』『冷熱』等を脚色上場して、一時の人氣に投ぜんと試るのみ。元來小說の脚本化は、大阪の劇壇にては通例の事なれども、脚本化共の事既に不合理なるが上に、脚色者概ね無識の輩なれば、脚本としての價値問ふに足らず。總べて劇界の進步は、いたく小說界に後れ、唯一の機關雜誌『歌舞伎新報』も一たび倒れ、三十三年に至りて、漸く復興して『歌舞伎』となれるものあるに止まる。

飜つて作劇界を通觀するに、史劇の盛行に比して世話劇は甚だ貧しく、悲劇の發達に較べて喜劇（滑稽劇）は皆無に近し。前期の末、紅葉がモリエールを飜案せる『夏小袖』『戀の病』に似たる者すら、當時の喜劇界に現はれざりき。

戯曲の飜譯は、二十九年の初『早稻田文學』に掲げし逍遙の「ハムレット」最も注目すべく、三十二年『太陽』に出でし戸澤姑射の「オセロ」亦當時出色の譯あり。三十四年月郊が譯出せる「イブセン作社會劇」は、北歐近代の名家の作「社會の敵」「人形の家」二篇を收め、獨得の詩筆を以て、最新思潮に觸れたる傑作を紹介せり。其の他二三の譯述特に擧ぐべきなし。

第四節 小說 其の二

心理解剖、性格描寫、乃至情緒細叙の小說が文壇を風靡するに方り、其の傾向の極端に赴かんとするに不滿を懷き、實世間と密接なる交渉を旨とする傾向の盛ならんことを望む者漸く多く、實業小說、宗教小說、諷刺小說、政治小說、家庭小說、社會小說等、種々の形式を以て其の新要求を表せり。此の風潮は、夙く二十九年に其の萠芽を發し、二三の論者が、或は活動を叙せる實業小說、或は道念高き宗教小說を求めたりしが、民友社が社會小說の名を掲げて之を募集するに及び、此の論漸く盛なり。然れども、

社會小說の意義に至りては、頗る不明にして、或は所謂社會主義の小說となし、或は戀愛を以て唯一の材料とせる從來の小說に對し、政治宗教等社會の所有部面に廣く材を取る小說に附せる名稱となし、或は個人を描き心理を寫せる小說に對し、社會を描き其の實相を寫せる小說を指して言ふとなし、造語解釋區々たりき。而も實世間に觸れよ。社會に相涉る作を出せと勸むるに至りては即ち一なり。

論壇の風潮斯くの如くなるに際し、創作壇に於ても一新潮を揚げたり、社會的諷刺小說の續出即ち是なり。風葉の「失戀詩人」柳浪の「非國民」は、共に當世文壇の一部を諷刺し、思案外史が「五濁惡世」は宗教界の葛藤を諷し、漣山人が「從五位」は華族を刺り、美妙齋が飛影の名にて出しゝ「白日鬼」は元老排斥の鋒鋩を見はし、何れも實世間の現象に向つて諷嘲の矢を放てり。斯かる一時的性質を帶べる作品は、小說の理想より見て決して推奬すべきに非ざれど、其の觀察及び諷刺の著しく實世間に密接し來りしは、注目すべき現象ならずとせず。

抑も此の社會的ならんことを求むる主義は、藝術獨立主義と共に、文藝に於ける二大主義にして、其の消長は小說史上悠久の事實に屬す。前者は之を人生相關主義と稱すべく、教訓主義道德主義諷刺主義等を包括し、後者は文藝獨立主義と稱すべく、性格主義心理主義寫實主義等を包括す。前者は人生と密接なる交渉を有するを利となし、實用主義差別主義に流れて永遠の生命を失ふに至るを弊となし、後者は平等無私、百世に通じて誤らざるを利となし、出世間主義非國民主義に流れて人生と相關するなきに至るを弊となす。曲亭馬琴、勸懲の旗幟を飜して教訓小說を出すや、人生相關主義は一大潮流をなして明治以前の文學を貫流し、末流弊を生じて世益主義實用主義に走りぬ。此に於てか藝術獨立主義の反動は、逍遙の「小說神髓」となりて現はれ、寫實の大旆を擁して勸懲の舊主義を打破し、明治の新小說は此の間に生れて赫々たる功績を文學史に殘しぬ。然れども末流遂に實世間と離れ、國民の性情に遠ざかり、偏に小主觀に出でたる情緒小說、異邦民性に出でたる飜案小說を作るに至る。此に於てか、反動は再び

人生相關主義の側より起らざるべからず。上述の新傾向は即ち是なり。三十一年に入りては、更に此の事實は、既に社會的諷刺小說に現れぬ。更に内田魯庵の宗敎小說となりて現れたり。抑も江戸時代、儒敎及び武士道の人心を支配せしより以來、宗敎思想が文學の根本思想となること共の跡を絕ちぬ。明治の作家に在りて佛敎思想の片影を小說に寄せしは、獨り露伴あるのみ。基敎の如きは、未だ文學の思想となるべき地位に達せざりき。魯庵は即ち此の棄てられたる基敎の思想を取り來りて之を小說に寄せしなり。魯庵は不知庵の名を以て前期の批評家たり。後專ら力を飜譯に注ぎしが、此の年轉じて筆を創作に染め、先づ「暮の二十八日」を出し、大望を抱き事業に憧るゝ青年が、事志と違ひ、煩悶遣る方なきに際し、宗敎的光明に接して迷夢忽ち覺め、終に靜平なる家庭生活に適歸すといふ筋を描いて、一種清高の趣を帶び、從來陰慘の小說の間に一新面目を開けり。爾來、『太陽』『新小說』『文藝俱樂部』等に揭げし短篇皆宗敎趣味を帶ぶると共に、社會の諷刺を含む。就中「今様厭世男」は執拗優柔なる自稱薄命詩

人を描き、「浮き枕」は上流社會が權勢と富みとを濫用して横暴を逞うする當世の社會現象を寫し、「片鶉」は失戀の令孃が悲慘の運命を辯りて、官吏と商人との間の情弊を暗刺し、其の他の作概ね之に類す。

此の時に方りて、時代精神の論、文壇に起り、時代の精神を顧みず、之と相關ることとなき文學は價値なき者なり、大文學は常に時代精神を代表し、當代國民の感情に最も明瞭なる發聲を與ふる者なりと唱へて、益〻文學の社會的傾向を鼓吹する者ありき。『太陽』の高山樗牛先づ之を唱へ、此の精神を表はせる文學を稱して近代主義の文學と言ひ、近代主義の文學は藝術獨立主義の文學に非ずして、十九世紀末の日本文明社會の眞精神を描破せる文學なりと言へり。『新小說』の魯庵次いで之を說き、方今の小說、徒に戀愛に狂して社會と相關するなきは、是れ作家が明治思想の眞相を解せざるが爲ならずやと言へり。就中魯庵は、啻に論議するのみならず、創作界に立ちて之を實現せんと勉め、三十二年「落紅」「霜くづれ」「血櫻」「電影」「靑理想」等を連出せり。不幸にして筆力其の抱負に伴はず、描寫冗漫に流れ

此の種の作物の成功の要素たるべき沈痛の風趣を缺き、其の着想に至りても、新舊思想、信仰、道德の衝突に關する觀察、必しも神に入らず。然れども、其の諷刺や批評や眞摯切實にして從來作家の如く冷嘲的ならず。勉めて時代の實相に觸れんと試みたる態度は、亦以て異彩とすべきなり。

此の氣運は延いて新進作家の間にめぐり、宙外の「腐肉團」(『時事新報』)風葉の「政黨」(『新小說』)、秋聲の「情けもの」(同)等、社會的傾向の者少からず。三者は共に當今の政黨員を主題とせる政治小說にして、就中「政黨」に、政黨員の家庭を寫せる所最も讀むべし。然れども、是等も亦魯庵の如く、觀察の皮相にして、時代政治界の神に入らざるの弊を免れず。却つて作家從前の作なる心理小說に劣れり。其の他前田曙山は「東京朝日」に「濁り水」「千枚張」「腕くらべ」等を連載し、當世の暗黑面、社會の裏面に於ける種々の現象を暴露せしも、固より社會的小說の成功せる者に非ず。斯くして、三十二年の社會小說は、何等の著しき痕跡を殘さずして止み、爾後復發展せざりき。

さはれ、實世間に觸接せよとの要求は、磨すべからざる眞理を含み、理想派の泰斗として知られたる露伴すら尙之を唱ふるに至り、心理小說の作家も、人を精寫するを主眼とする從來の着想以外、社會を寫さんと試みる者漸く多く、個人の研究以外社會に近接せんとする傾向漸次現はれたり。所謂新寫實的傾向是なり。

＊　＊　＊　＊　＊

小說の新寫實的傾向とは、從來の寫實よりは一層廣濶なる意義を有し、個人より進んで、個人對社會の實相に入らんとする者なり。卽ち從來の心理的傾向が新に興れる社會的傾向の影響を受けて成立せる一變形に外ならず。此の傾向は夙く『多情多恨』より『金色夜叉』に移りし場合に現れしが、三十二年頃より宙外、柳浪、天外、風葉等の新作家の製作、概ね此の流風を追ふに至れり。宙外の「新機軸」「緣不緣」先づ彼が以前の作に對して新彩を加へしが、論壇に文士生活問題起るや、田園生活論を主唱して、悲觀說を寬和せんと勉めしより此のかた、其の論旨は製作の上にも現はれ、

三十五年の「遺る光」「乳母が家」(『新小說』)を始め、總べて精細穩健の筆、田園の情景を寫し來つて獨壇の妙あり。「ありのすさび」以後の作者の特徵は、最もよく此の和平自然波瀾なく奇巧なき田園小說に發揮せられたり。

柳浪は多作第一の目あれども、佳作多からず。「羽拔鳥」以後三十五年迄の間に、擧ぐべきは「縺れ糸」「骨ぬすみ」「紫被布」「二人やもめ」「亂菊物語」「雨」等の數篇に止まる。「縺れ糸」と「骨ぬすみ」とは、三十二年初に、『新小說』と『文藝俱樂部』とに出で、前後連關せる者、「紫被布」と「二人やもめ」とは、亦同年『文藝俱樂部』に分載せし前後連續の小說、「亂菊物語」は長篇の新聞物、「雨」は可憐の小品なり。何れも機智縱橫、地の文は粗笨なるも、對話の巧妙なるを以て之を補ひ、優に戯曲的活動を示すに足る。一篇の情趣、讀者を恍惚たらしむるが如き美感を催起するなきも、痛切人の肺腑を衝くの實感を誘起す。總べて曩日の特徵依然として存すれども、唯其の着想、往年の如き陰慘の事相、病的戀愛はた畸畸の人物に向ふことなくして、事相人物自然に出で、戀愛亦純眞となり、「紫被布」の如きは、

多少當年の俤を存すと雖、尙「二人やもめ」に於て之を調節せり。特に「縺れ糸」「骨ぬすみ」は、着想筆力共に新發展の先頭に立ち、「河内屋」以後の佳作と稱せらる。惜むらくは作者の達筆、一氣呵成に過ぎ、從つて濫作の弊あり、量に於て一世に超出するに係らず、明治文學の傑作として傳ふべき者甚だ多からず。

新寫實主義は、風葉天外に至りて自然主義的傾向を取るに至れり。抑も此の主義は近代思想界の一潮流にして、文藝に在りては、美の極致を發揮するよりは、むしろ實際生活を描寫せんことを求め、總べての思辨冥想を排して、唯自然のまゝを體現せんとするなり。故に此の主義に成れる文學は、美醜を識別して詩材を選擇するを要とせず、世上百般の人事を其の儘に寫せるもの、やがて詩篇たるべしとなす。されば罪惡必しも避けず、卑猥必しも去らず、悲慘必しも卻けずして、社會に存する程の事相は一毫の微も之を網羅せんとす。是素より其の極端なる者に就て言へるなれども、風葉天外の作風多少之に類する所あり。

風葉は曩に「寢白粉」を作り、社會の暗黑面に筆を着けて評壇の問題となりしが、三十一年より次年に亘りて、「戀慕流」「鬘下地」等を出して再び注目を惹きぬ。前者は『讀賣』に連載せし者にて、一管の吹奏斯界の天才と囑目せられし青年樂師と、洋樂界多望の秀才と稱せられし少女とが、近親を棄て名譽を棄てて多感の情焰に殉せしが、彼等が藝術の誇りと共に、懷しき未來の空想、夢の如く破れ、情に脆く意に弱き彼等は、社會の劣敗者となりて暗黑の裡に葬られ、はては辱められ、汚され、赤繩遂に完きを得ずして、『埋れ木』(鷗外譯)の樂師と少女との如き結末を告げし薄倖の譚を叙し、尙此の本筋に編み込むに暗黑界裡の消息を少からず綴れる傍筋を以てしたり。此の篇實に風葉の名を重からしめし傑作にして、又當時の彼を代表すべき總べての性質を具備す。後者も亦薄倖の藝人を主人公となし、繼と子の愛と絡み縺れて遂に狂ひ初むるに至れるを寫し、文章の雅文を學べるを瑕とすべきも、前者と同じく葛藤の深刻なる戀物語を綴り、當時社會の一部に存する思想と煩悶とを描き出でて妙趣なきに非ず。凡そ作者の

文辭、凄艶にして滑脫、精緻にして婉曲、紅葉門下の中最もよく師の衣鉢を傳ふと稱せらる。其の詩趣饒かにして一種の光彩あるは、柳浪天外の遠く及ばざる所、獨り鏡花に一籌を輸するのみ。且其の結構の緊密にして戲曲的開闔に富むことと眞に柳浪に接踵すべし。然れども、其の着想の現實的なるや、時に不倫の行爲を寫して顧みず。絢爛なる詩筆も遂に其の醜を蔽ふこと能はず。三十四年以後に於ける「醒めたる女」「黑裝束」「心中くらべ」「沼の女」等は皆此の作風にして、就中「醒めたる女」は、所謂本能滿足主義乃至個人主義の思想を含み、當代思潮に關聯する者あり。

天外は此の風潮の最も極端なる代表者と見るを得べし。彼は從來諷刺小說家として知られしが、三十三年『初姿』を公にするや、揚言して曰く、少說作家は唯實世間に在るが如き人物を描き、其の人物の當然爲すべき行爲を正直に丁寧に筆記するを勉むべし。小說は其の事相の如何を問はず、作家の空想せる世界に讀者の空想を遊ばしむれば足る。要は、讀者をして實世間の事に感ずるが如く感ぜしむるに在りと。即ちかの十九世紀後半の

佛國自然派の主張を以て信條となすに似たり。爾來公にせし幾多の小說、必ず寫實小說の標榜を冠し、勉めて叙事を省き獨語を斥け、對話と動作とのみを以て一切を描き去らんとす。蓋し此の傾向は突然『初姿』に始まりしに非ず。既に三十二年の作「肱枕」「亂れ髮」「娘心」（後に「左繩」と改む）等、皆作意なく、結構なく、日常矚目の人情世態を實寫するを主として、其の由つて來る因果の關係を追求することをなさず、概ね斷片的にして有機的の一個體を形成せざりき。『初姿』は此の傾向の益〻明かに益〻意識的になれるに過ぎず。之を其の後篇「戀と戀」及び後れて出でたる續篇「にせ紫」と併せ見るに、人物事件の出入偶發的にして、讀者の同情を集中し、其の感興を昂上せしむべき中心の人物事件なく、唯或る性格の人が或る境遇の下に正に爲すべき行動を實寫せる者なれば、之を斷片的に見るに、個個自然の姿を寫して美醜共に嫌ふ所なし。爾來「女夫星」「新學士」等の作、皆此の作風に從ひ、客觀寫實の筆淡々として他奇なく、唯事件の變化進行に興味を感ずるのみ。

天外が自然主義は『はやり唄』に至りて代表的製作を出せり。啻に寫實の筆力漸く蔗境に入り、巧妙ならざりし對話も漸く圓熟し來りしのみならず、佛國自然派の好題目たる遺傳と境遇とを以て總べての行爲を說明せんと擬し、且つ其の題材を現實の社會に取りて不倫の醜事をも避けざりし事など、所有方面に作者の特質を發揮したりしなり。筋は淫亂の血統を享けし女性が、夫に他の女あるを知りて嫉妬の末不和となり、報復的に姦通をなし、「狂ふ仇花親の種」と流行唄に唄はるゝに至る始末を寫し、自然の模寫を以て藝術の要義と觀じ、善惡美醜の取捨又は醇化理想化を加ふるを欲せざる作者の實驗小說の標本と見るべく、此の見地よりすれば、彼が一代の傑作なり。大體に就て言へば、女主人公の行爲の因て來る所、第一遺傳、第二境遇に存する事、おぼろげながら認められ、總べての動作をば是より演繹し得べきに似たり。然れども、各個に就て見れば、云爲唐突に失して因果の關係模稜に過ぐ。蓋し作者は其の主義よりして叙事の細きを望まず、心理描寫の主觀的筆法を用ひず、只管外面に現はれたる對話と動作とによ

りて其の進行を示さんとす。斯かる客觀的描法は、常に感覺を本とするを以て、時としては冷々淡々、同情の溫きを缺き、想像の貧少と詩趣の缺乏と、亦之に作ふ。特に下層社會の病的現象を寫すや、風葉と同一對境を取りながら、詩筆遙かに及ばざるを以て、益〻感覺的に流れんとす。

＊　＊　＊　＊

自然主義的傾向に對立してロマンチック傾向を代表する作家を鏡花となす。彼は現實界よりも虛靈界を重んじ、自然界よりも神秘界に傾き、其の空想は人間寰を超越して夢幻境に入り、其の空想を載せたる詩筆は、幽玄の高調を帶びて空靈の域に上る。彼は現實自然の境地を描きて寫實小說と呼ぶべき者を作らざるに非ず。然れども、之を作るに方り、常に一種の神秘なる着想と幽玄なる筆致とを交へ、或は實世間の裡に超自然超人間の或物を覓め、然らざれば、現實界と神靈界との間に或交涉を發見せんとす。唯其の想像の幻怪なる、往々常軌の外に顯脫するを以て、世或は妖怪小說の名を以て其の神秘的美點をも沒し去らんとす。然れども、人生何の時か神怪

を絶えたる。社會に光明的半面と暗黑的半面とあるが如く、人間に凡と聖とあるが如く、人生亦尋常知見の及ぶ半面に、不可思議なる神秘界を藏せずんばあらず。天外は即ちかの平凡なる人生の半面に就き、其の暗黑界を寫せる者にして、鏡花は即ちその神秘なる人生の他の半面に就き、其の暗黑界を描ける者なり。

『梟物語』以後、三十二年に入りて益々幽怪を逞うし、「錦帶記」「通夜物語」「黑百合」「湯島詣」「五の君」より、「三枚續」「高野聖」「註文帳」「袖屏風」等を經て、三十五年「女仙前記」「起誓文」等に至るまで、一として瑰奇の想を凝さざるなし。中に往々材を尋常の境地に取りし所謂寫實小說に近き者、例へば「通夜物語」「湯島詣」「三枚續」等の如きもあれども、其は神秘的分子の量の多寡によりて分るゝ皮相的差異にして、根本的性質に至りては即ち一なり。故に其の構想概ね或特徵を帶べる人物、或特種の神秘的事實を中心として、全篇の動作之に向つて集中するが如き型式を取る。例へば、「錦帶記」は月夜五色の彩暈の出現に、妖女お禮の運命を附會し、「通夜物

語」は吉原のお職丁山といふ傳法肌の女性を中心とし、「湯島詣」は憂世に辛酸を嘗め盡したる勝氣の少女蝶吉を中心となし、「三枚續」は我儘育ちの氣象者の柳屋お夏を中心となして、三者共に數奇の運命を叙し、「黑百合」は古來人跡至らず魑魅魍魎の巣窟と傳へられし石瀧の奥深く、稀世の珍草黑百合の咲けりといふ事實を中心となし、之を採取せんとて此の神秘境に足を入れたる花賣少女と、之を救はんが爲に怪窟を搜りし少年華族とを點出し來つて一篇幽玄の曲を作り、「女仙前記」は轉生といふ靈界の現象を取りて貴族の奥方の前身を描きしが如き、即ち是なり。就中「湯島詣」「黑百合」「高野聖」等は當時の傑作として傳ふべく、前者は神秘的分子の少き方の作を代表すべく、後二者は神秘的幻境を寫せる好標本とすべし。

鏡花は人生の下層暗黑の一面に詩眼を注げり。社會凡俗の間に薄遇せられ壓伏せられて、孤弱伸ぶる處なく、而も天稟の意氣鬱結して反抗の氣焰を揚げ、進んで凡俗界を飜弄せんとする者、即ち彼が創作せる人物なり。其の凡俗反抗の一面より見れば、飽くまで意力の人の如くなれども、底を

叩けば熱情の暗涙を湛ふ。故に其の敵に對するや猛然として破壞の暴腕を振ふと雖、其の知己の懷に在りては赤子の如く可憐に、半生の薄命を混々たる涕涙に渾ひ盡さんとす。斯かる境界に同情せる作家は、曩に一葉女史あり。然れども一葉の人物は飽くまで人間なりしに異なり、鏡花の人物は、常に一種神秘の色に包まれて獨得の怪氣を現はし、遂には縹渺として超人間の幻境に入らんとするなり。若し夫れ彼れの文章に至ては、洵に當代の雋逸にして、詩韻饒かに幽味掬すべく、省筆一過すれば簡淨警拔、餘情言外に在り、精描細寫すれば愼密委曲、錙銖を分つ、二方面を兼具して何れも短句短文錯落して變化の妙を極む。其の一たび怪奇の想像を載せて奔逸するや、或は深山晝寂かなる「高野聖」の夢幻境となり、或は天麗かに氣澄み深林幽水咽んで滿地のうつぎ花雪の如く、闃として一鳥鳴くなき「黑百合」の別乾坤となり、其の對話の形を以て人物の口を出づるや、熱罵怒嘲、紙面に躍動する所、紅葉風葉が濃艷妖冶の方面に於けると同じく、斯壇之に接踵する者を見ざるなり。

以上は明側より見し鏡花の一斑なり。然れども彼れの作品は必しも至醇の藝術に非ず。其の傾向の極端に走するや、暗側乃ち現れずんば止まず。彼れの缺點は怪奇を弄び怪奇を衒ふに在り。筆端の凄愴脚色の幻怪を以て想髓の淺薄を蔽はんとするに在り。彼が多數の作、此の弊に陷らざる者甚だ多からざるなり。

＊　＊　＊　＊　＊

文學轉進の運に乘じて發達せし小說は畧之を說きぬ。飜つて小說界の他の半面、即ち歷史小說傳奇小說の消息を覗ふに、時運の影響極めて少く、又新進の名手出づるなく、依然として舊態を存せり。蓋し斯道の大家は、數百年にして僅に存する者、學識筆力準備、共に尋常にして足らず。馬琴の大才を以てして、共の歷史小說は、事件と人物とを史上に求むるのみにて、內部生命は純乎たる江戶時代の者たるを免れず。況んや過渡の空氣中に呼吸する明治文壇に於てをや。今の世に在りて歷史小說の逸作を得んは殆ど不可能に屬す。されば前期以來、唯新聞物に生命を維ぎ　俗衆に投じ

て文壇の一隅を占有するのみ。但し讀者の數を以てすれば、必しも心理小說に劣らず。茲に少しく此の種の作家を取り、總べて寫實小說、心理小說、はた社會的小說等の範圍に入らざる小說類を叙せんとす。皆文學の進運に洩れし者なり。

浪六は、二十八年『たそや行燈』を出し、次いで『大阪城』『當世五人男』『原田甲斐』等をものし、皆例の遊俠氣質を寫せり。就中『五人男』は二十九年より『朝日新聞』に連載せし長篇にして、一屋の破窻に苦學を共にせし五人の書生が風雲を見て世に立つに至れる消息を描ける者、舞臺は明治なるも精神は依然として水滸傳的なり。弦齋は、世話小說をも作れども、觀念的心理的傾向は全く之を缺き、唯新聞紙上其の日〳〵を面白く讀ませ、間々婦幼の教訓を含めたるに過ぎず。『衣笠城』『日出島』『小猫』『深山の美人』等、作甚だ多く、當時健筆第一と稱す。就中『日出島』は、其の量を以てすれば、類なき大作にして、二十九年より三十五年に亘りて『報知』に連載し、卷を重ねて十二に至る。百般の社會事象を取りて悉く材料となし、

總べて之を作中人物の閲歷として表出す。以て明治世態の皮相をも知るべく、無學者の學問にもなるべし。涙香は、近時連りに西洋通俗小說の飜譯又は飜案を『萬朝報』に掲げて依然時好を維ぎつゝあり。以上三者は當時の通俗小說家、新聞小說家として知られ、文章平易、取材多面、最も俗耳に入り易し。大阪にては『朝日』の南翠、此の時好小說を代表す。二十八年頃の『荒海貫一』最も世に知らる。

澁柿園の歷史小說は多少の進歩を見る。二十八年の『最上川』『北條早雲』等より、『伊達政宗』『島左近』『五月女阪』『脫走兵』に至るまで、或は浪六を模せる痕ある者もありしが、後おのづから一家をなし、主に戰國時代の戰爭譚を綴り、美人勇士を點出して因果應報の結末を描けり。大體に於て依然舊様を脫せざれども、文章豪健にして內容に適應せるは、讀みて心地よし。多くは『日々新聞』に出で、新聞小說家として讀者の多き、弦齋浪六に次ぐ。麗水は美文家なり。「不二の高根」「首陽山一帶の風光」等、紀行文に在りては麗藻美辭有數の地位を占むるも、小說に在りては內容貧弱にし

て文辭詩張の弊に陷る。二十八年の『半月城』を始め、『さんざ時雨』『照日松』等、皆此の類にて、總べて漣栁園の後影を踏めり。其の他松葉、青軒、「大阪朝日』の加藤紫芳、渡邊霞亭等、皆多少の作あり。就中紫芳の『臺灣陣』(二十八年)は鄭成功の事蹟を描いて當時に名ありき。

* * * * *

終に臨んで、殘存せる舊作家中、諷刺滑稽の一面を記さん。南新二は舊文學戲作界が殘しゝ最も巧妙なる滑稽作者にして、前期中、『新作十二番』に出しゝ「鎌倉武士」及び此の期に入りて『太陽』に掲げし「滑稽道中雙六」の如きは、輕妙洒脫、現代の傑作と稱せられしが、二十八年末遂に歿しぬ。幸堂得知は、黄表紙の系統を引ける戲作者にして、亦輕妙なる滑稽の筆を弄し、篁村と共に斯道の殿たり。元來滑稽の名作は、明治の文壇に乏しく、僅かに是等舊時代作家の什を以て其の面影を偲ぶのみ。

* * * * *

吾人は既に此の期の小說を說き了りぬ。繙つて飜譯界の趨勢を窺ふに、

其の進步亦著しき者あり。抑も明治文學の一進轉步をなせしは、一般學術の進步と文藝趣味の發達とに因ること論を俟たずと雖　之が原動力となりし文學者評論家を練成して此の事業を爲すに至らしめし者は、即ち泰西の思想及び文學ならずんばあらず。今や國民の外國語を解する力亦往時の比に非ず、新著新作の舶來する者、古來の名著傑作と共に日に多きを加ふ。されば我が文學者は、啻に之を玩味して自家の著作に資するのみならず、之を飜譯して江湖に紹介する者益〻盛になれり。此に於てか、飜譯文學は文壇の一勢力となりて絕えず創作壇を刺擊し、兼て國民をして泰西文學の面影を偲ばしめぬ。而も此の活動は小說に於て最も著しきを見る。

曩に思軒鷗外等の飜譯界に立つや、飜譯家未だ多からず、紹介せらるゝ泰西作家作品の範圍甚だ狹く、且つ其の譯出紹介、多くは抄譯梗概譯若くは飜案に過ぎずして、謹嚴忠實なる譯述は極めて寥々たりき　然るに今期初頭に入りては、文科大學、早稻田專門學校、明治學院等は、數多の新進飜譯家を出し、從つて飜譯紹介の範圍も、リットン、ユーゴーに限らずして、

古今東西に亘り、且つ其の技倆精力も著しく進みて、飜案に非ず抄譯にも非ざる全譯を出すに及べり。今次を追うて少しく之を述べん。

思軒居士は、初め『報知新聞』に據り、其の「報知叢談」に抱一庵等を率ゐて譯筆を揮ひしが、後轉じて『國會』に入り『萬朝報』に移り、老熟の手腕を以てユーゴー、ポー、ベルヌ等を譯し、三十年末歿するに至るまで、斯壇を啓發して怠らざりき。不知庵も亦斯界の先輩にして、二十九年以後に於ては、ゾラを譯せる「戰塵」、コンウェイを譯せる「彫像師」を始め、譯述少からず。文辭暢達を缺くと雖、譯風誠實の稱あり。彼が創作壇に活動せし素地をなせりと見ゆ。鷗外は前期に引きかへて譯筆寥々たりと雖、妹女史喜美子、レルモントフの「浴泉記」（二十七年）ビンデルマンの「名譽夫人」（二十八年）ハイゼの「浮世のさが」（同年）等數篇の譯あり。皆幽婉なる雅文を以て之を綴り、活動の趣なき代りに氣品高尙なるは鷗外に似たり。三十年二人の譯稿を集めて『かげ草』を公にしぬ。若松賤子は亦女流飜譯家にして、英語の素養文藻の才力、斯壇の異彩と目せらる『女學雜

誌』及び『閨秀小說』に收めし「忘れ形見は」ミス・プロクトルの韻文を散文に譯せる者、三十年（歿後）遺稿として出版せられたる『小公子』は、バーネット女史の作を譯せる者、共に明治飜譯界の珍として永く滅びざるべき名作なり。其の他飯田旗軒、卯花庵、抱一庵、嵯峨の舍等、皆二三の譯あり。斯壇繁榮の序幕は開かれぬ。

三十年に入りて、飜譯界は局面を開展しぬ。『第二閨秀小說』なる喜美子の「心づくし」桂香の「初戀」故賤子の「ローレンス」、小品なりと雖、函味掬すべく、今野愚公がコッヾルを譯せし「結婚」及び「小說家」、共に筆力見るべし。此の時に方り、文壇に跡を晦す事十年なりし二葉亭四迷は、再び當年の詩筆を揮うて斯界の進運を鼓舞しぬ。二十九年末『片戀』を出してより、「肖像畫」「浮草」を『太陽』に、「夢語」「親心」「腐れ緣」「酒袋」を『文藝倶樂部』に掲げ、獨得の言文一致を以て暢達渾熟の逸品を作せり。就中『片戀』はツルゲネーフの原作にして、ライン河畔の自然美を背景として詩情清婉の片戀物語を編める者。「浮草」「親心」亦同作家の名品にして、前

者は思索家ルーヂンの半生を描き、後者は母親の至情に感激して墮落娘の悔悟する筋を叙す。共に長大ならずと雖、內容の異色に富めると譯筆の精嚴なるとにより、嶄然として當代に傑出し、二葉亭をして斯壇の第一流として鷗外と對峙するに至らしめぬ。其の他『文學界』の星野天知、馬場孤蝶、戸川秋骨等、連りに南歐文學を唱へ、飄逸優婉の詩想を鼓吹して、其の斷片を紹介するに勉め、『帝國文學』の上田柳村、之に呼應して近代佛英のロマンチック派文學を說き、主として小品の飜譯に力を用ひぬ。長田秋濤は、梗概抄譯なれども『浮かれ蝶』『戀のナポレオン』『王冠』等、比較的長篇を出したりき。

斯かる間に譯風漸く謹嚴に赴き、抄譯飜案の外全譯も出で、小品短篇のみならず長篇大作をも譯出する風漸く盛になりぬ。先づ淺野憑虛は、三十四年『スケッチ・ブック』を公にして以來、翌年には『クリスマス・カロル』、翌々年には『ヴイカー物語』を出し、皆譯文の淸爽、譯風の着實を以て知られたり。次に從來飜案物を以て名ありし『萬朝報』の淚香も、亦眞面目

の態度を以て『レ・ミゼラブル』を抄譯し、「噫無情」と題して、三十五年の紙上に連載せり。此の時に方り、曩に、二十五年の頃『柵草紙』に譯載し初め、一時草紙の中絶と共に中止し、三十年再び『めざまし草』に稿を續けし鷗外の『即興詩人』は、起稿以來八年を經て完結刊行せられぬ。原著はアンデルセンの傑作、『インプロヴィザルトル』にして、カムパニヤ生れの即興詩人がローマの歌妓と相愛して而も相悟らず、流浪落魄、幾多の轉變を經て中心の愛嘗て渝らず、遂に歌妓が邊陬に窮死するに及び、其の遺書を得て始めて濃情熱愛十年衰へざりし眞相を知り、感謝と追悼との悲涙を尼院の新墓に濺ぐと言ふ筋を、詩人が自叙の體にものし、ローマ及び其の附近の自然と人事とを背景として清婉の戀物語を綴りし者なり。想像饒かに叙述微に入り、詩趣縹渺として清楚の情掬すべく、譯筆亦優雅圓熟、例の擬古文ながら、『埋れ木』に比して一層の洗錬を加へたり。且此の篇、從來紹介せられざりし北歐文學の一名什なるを珍とすべきのみならず、堅實の意志不斷の精進を以て完成せし譯者の意氣を貴むべしとなす。

三十六年に至りては、飜譯文學の機運頓に動きぬ。是より先き、歐洲近代の文學者、特に現代新思潮を代表すべき作家の思想製作連りに我が文壇に入り、或はニイチエを鼓吹し、ハウプトマン、ズーデルマンを紹介し、ワグネルを論じ、シエンキーウイッチを說き、或はゴルキーの浮浪思想を唱へ、マーテルリンクの神秘思想を道ひ、一代の思潮將に一變せんとする兆あり。從つて紹介飜譯雜然として群起し、小說に在りても、富永蕃江の『緋文字』（ホーソーン）、吉田狄洲の『走馬燈』（ドーデー）、本多增次郎の『驢語』（セウエル）抱一庵の『聖人歟盜賊歟』（リットン）『巴里の秘密』（シユー）秋濤の『椿姬』（デューマ）、紅葉の『鐘樓守』（ユーゴー）等を始め、長短各種の作甚だ多く、韻文戲曲の譯と共に無前の盛觀を呈しぬ。就中抱一庵は、一時文壇に忘れられし者、再び往年の譯筆を揮ひ、絢爛の致なしと雖、瘦勁にして一種の趣あり。『椿姬』は二十八年の頃、雜誌『白百合』に揭げ初められしまゝ久しく中止せられ、八年後の今日一部完結して出でし者なり。原作は所謂十九世紀五大作の一にして、愛すべき人にして世に愛せられざりし薄命

の人に洪大なる同情を濺ぎ、愛すべき人を愛せざる社會に攻擊の矢を放ちし者。譯筆は此の同情を傳へんには華飾に過ぎ、妖艶の中純淸の韻ある一篇の風趣を失へりと雖、五百頁の長篇、暢達なる口語體を以て揮灑せる所、亦斯界の珍となすに足る。『鐘樓守』に至りては、五大作の隨一、『ノートル・ダム・ド・パリ』の譯にして、秋濤の草稿によりて紅葉が書綴りたるものなり。此の小說は、巴里城内赫耀たる文明の花と、共の裏面に潜む暗澹たる魑魅の風とを背景となし、ノートル・ダム鐘樓守を主人公とし、薄命の少美女を之に配して綴りなせる史的小說にして、中世の大遺物たるノートル・ダムの大伽藍を叙せるあたり、精微神に入り、之を中心にして百般の事象を編み出し、十五世紀文明の首都巴里の面目を躍如たらしめし不朽の名作なり。

第七章　文學一轉の機

明治文學も齡漸く長けて今や三十に餘れり。顧みれば二十年前後、文學革新の事ありて以來、思潮變遷文運進歩の急速なる、宛ら走馬燈の囘るが如く、昨の新は今の陳、今の新は又明の舊たらんとす。所謂過渡文學といふ名稱は、獨り十年代の文學に與ふべきに非ず。大局の上より見ば、三十年間の文學は畢竟過渡文學の連續たるの觀あらん。十八九年の交、文壇を聳動せし春の屋及び其の他の小說家の述作は、二十八九年に至りては、夙く陳套に屬し、之に代りて起りし觀念小說、心理小說、社會小說の新作家が滔天の勢を以て其の淸新を誇りし述作も、三十五六年の交に至りては、是亦新時代の人心を維ぐに足らずなりぬ。獨り小說のみならんや。二十七八年に起りし和歌俳句の新彩も、茲に至りては沈滯して進まず。新體詩も亦晩翠藤村に底止して後久しく、戲曲は逍遙の試驗的述作の外、又論壇を驚かす者なし。而も之を刺衝し鞭韃して新文學を起す大動力となり來れる

世界の思潮は、駸々として進むこと暫くも止まず。國民の之に參すると日に月に密接の度を增したれば、文壇永く現狀に安んずべきに非ず。早晩一轉して更に新しき大文學を生ぜざるべからざる機運に際會せり。

當時の文學は恰も五里霧中に彷徨するが如し。舊に慊らず、新を得ず。曩昔謳歌熱中せし文學も今日既に興趣を感ぜず。今日興趣を感ぜざる文學を後來如何に變ずべきかを知らず。懊惱煩悶の容文界に普く、二十九年より三十一年に亘れる活氣疾く去りて沈滯の空氣斯壇を覆へり。此の時に方り二十年以來の文學者にして時勢の犧牲となりて影を潛め姿を隱す者漸く多く、或は筆を燒きて池に轉じ、或は轗軻落魄世に埋もれ、或は筆を案じて病に仆る。矢田部尚今外山ゝ山相次いで歿し、井上巽軒復歌はず。逍遙身を教育に抛ち、四迷復び隱れ、賤子、稻舟、一葉、薄氷相續いて仆れ、思軒及び硯友社の二三子同じく世を辭し、美妙齋嵯峨の舍遂に當年の勇なく、湖處子忍月各他方面に轉じ、鷗外稀に筆を取ると雖、雜誌『萬年草』は、遂に『めざまし草』の如く盛なる能はず。露伴は江畔の悠遊に龍蛇の

氣を沒了し、紅葉は硯友社の諸傑と共に俳道に耽らんとす。三十五年より六年にかけては、文星落つる者連りに、子規楞牛先づ歿し、紅葉萩の家之に次ぎ、綠雨抱一庵少しく遲れて三十七年亦之を追ふ。斯くの如きは皆時勢の一大旋轉をなすべき現象にして、正に新陳代謝の樞軸に當れる者なり。今次を追うて此の時代の狀勢を觀はん。

第一節　俳句和歌及び新體詩

俳句界の形勢は既に三十一年に定まり、日本派の趣味作風全國に瀰漫して、新教養あり新趣味を懷ける青年俳家皆之に赴き、競うて俳會を結び俳誌を起し、日に月に隆盛に向うて又蹉跌することなかりき。然れども內容の進步は到底勃興當時の如く目覺しきを得ず、其の變化も亦當時の如く根本的なるを得ず。概して簡單より複雜に赴き、瑰奇より平淡に向ひ、天然より人事に進み、叙景より抒情に移り、純客觀より主觀に及ばんとするに過ぎず。三十四年の句集『春夏秋冬』を以て「新俳句』に比する時は、容

易に此の間の消息を窺ふを得べし。されば此の前後の俳句は、日本派創業時代に播種せし所の者を收穫したるものにて、三十五年に於ける『獺祭書屋俳句帖抄』『增補獺祭書屋俳話』の出版、及び子規の病歿は恰も此の事業の大成を告ぐる標章の如くなりき。

和歌壇に於ては、『明星』に據れる新詩社一派、『心の花』に據れる竹柏園の門流、『馬醉木』を刊行せる根岸の一派、新詩社より別れて『白百合』(三十六年)を發刊せる靑年歌人の一團、及び萩の家の門流、金子薰園、尾上柴舟等、作家益多きを加へ、作品の數量遙に前年に超ゆ。然れども其の思想聲調の一代文運の進步に伴ふに至りては、俳句と等しく未だ容易に許すべからず。獨り『明星』に於ける女作家鳳晶子、放縱なる感情を歌ひ富贍なる想像を逞うして一種の詩調を出し、詰屈奇峭、措辭は大膽に句法は奇拔に、複雜斬新なる譬喩擬人を敢てして、歌壇の面目を一新しぬ。假令其の極端に走る所、或は嶮怪の譏り晦澁の嫌ひなきに非ざりきと雖、詩才の縱橫情熱の熾盛、斯界希に見る所なりき。詩題は概ね當時の新體詩と趣を

同じうし、主として戀愛を歌ひ、然らずんば小說的趣向の人事、神秘的空想を逞うせる情景を詠ず。而も其の思想に當時青年の間を流れたるロマンチック傾向を帶べるものあり、能く青年一部の感情を表出して最新の思潮に觸れたり。これを以て此の作風一時青年歌人を風靡し、「明星」一派の特色となりて斯壇に重きをなせり。晶子の歌集『亂れ髮』(三十四年)『小扇』(三十七年)は嘗に此の作家を說明する好箇の標本たるのみならず、當代歌壇の新潮を窺ふべき代表的歌集なり。明治の和歌が思想形式共に舊觀を改めしは、直文鐵幹の時に非ずして、實に晶子等の當時に在るなり。爾來晶子の歌漸く圓熟を加へ、當年の純主觀的傾向を離れて著しく客觀的事象の吟詠を增し、一誦すれば自然の風物が人間に對して渾然融合するを感ずる者あり。『舞姬』(三十九年)『夢の華』(同年)二集は正に其の高潮に達せる者にして、『亂れ髮』に比ぶれば跌宕博大の別趣を加へたり。然れども盛觀茲に底止して又展開の餘地なきが如く、短歌革新の事業は既に其の終を告げたるに似たり。

轉じて新體詩界に移らんに、三十五年以後の形勢は俳歌兩界に比して遙かに活氣に富めり。藤村筆を此の方面に絶ちて小說界に移りしも、晚翠、泣菫、月郊、有明、花外、泡鳴、醉茗の徒、『帝國文學』『明星』『新小說』『太陽』『文庫』等に奮ひ、平木白星、前田林外、相馬御風、山崎紫紅等亦次いで起り、『小天地』『白百合』等に據りて一時斯壇に光焰を擧げたり。

今次初頭の新體詩は一般に懷古的色彩の著しきものあり。二十九年以後の可憐なる戀愛詩に倦み、卅四年前後の所謂星菫戀愛詩に饜きたる讀詩社會は、新なる詩材を覓めて端なく過去の生活に眼を集め、回顧憑弔の意は一たび現はれて古典的詩歌集の刊行となり、『半月集』(半月)『霓裳微吟』(羽衣)『藤村詩集』(藤村)新に世に行はれ、二たび現はれて古蹟古詩人の憑弔過去藝術の讚美を試みたる晚翠の『東海遊子吟』(三十九年刊)月郊の『春雪集』(三十六年刊)となり、三たび現はれて古英雄を賦したる鐵幹等『明星』の史詩叙事詩となり、四たび現はれて古語復活神話傳說の復現を試みたる泣菫の譚歌となり、五たび現はれて史實傳說等を脚色したる白星等の

劇詩となり、以て四十年に至り、斯界別味の一系をなせり。

晩翠の吟詠は多く泰西羈旅の作にして、仰いで過去の藝術を想ひ俯して現代の文明を觀たる詩人が感傷の聲なり。正に是れ『チャイルドハロルド』の流風遺韻を汲める者、歴史の國藝術の國なる南歐の風物を歌ふに於て特に精采を見る。嘗て『曉鐘』に現れし淨樂界の翹望益〻著しく、遂に此の理想實現の世を我日東帝國の未來に求め、新文明新文藝の出現を望んで國民新に歌あれと祝福するに至りぬ。泣菫の神話的譚歌は斯壇に一新生面を開きたるものにして、三十六年の「雷神の賦」(『明星』)「天馳使の歌」(『新小說』)三十九年の「葛城の神」(『早稻田文學』)等、陳套の傳說を復活して光彩ある一新藝術品となせる績、歎賞に價す。「雷神の賦」は朔風怒濤吹雪雷鳴を觀じて一條の神話的構想をなし、「天馳使」は伊弉諾黄泉行の神話と比治山羽衣天女の傳說とを結合し、諾册二尊長へに別れてより子孫女性の慈悲を知らざりしに、眞名井の翁、天女「慈悲」を下界に抑留してより人の世に絕えたりし女性の慈悲再び現はれ、下界之より新代の歡樂に浴するに至れり

といふを想髓として、趣味ある一篇を成せり。而して泣菫の詩語を洗錬するや苦心を極め、特に古語を復活する運用の才遙に前年の擬古派詩人に優り、紀記萬葉の語彙を驅使して窘蹙の態なし。流風延いて當時の詩界を吹靡け、鐵幹有明以下青年詩人等皆其の顰に倣ひ、爭うて耳遠き古語を羅列するに至れり。されば其の極まる所弊も亦伴ひ、晦澁に陷り無意義に終ること少しとせず。

新詩社一派の敍事詩は純然たる史詩譚歌に非ずと雖、新體詩創始以來斯界に缺如せる一面を充せる者にして、三十六年鐵幹紫紅白星泡鳴等が「源九郎義經」「日本武尊」をものして研究を試みしを始め、泡鳴は「鳴門姫」「豐太閤」を出し、紫紅は「日蓮上人」を出し、白星は「心中おさよ新七」及び劇詩「老西鄕」「耶蘇の戀」「釋迦」を出し、以て一時詩壇の單調を破りぬ。就中白星は別に『日本國歌』と題して、『曉鐘』の後半『行春』の一部に見えたる如き時事に關する感慨の詩、時事に對する主張の詩をも公にせり。

然れども此の敍事詩史詩の流行は空華一時の盛觀を殘すに止まり、文壇の中心若しくは詩界の本系に對して何等著しき影響を與へしを見ず。斯壇の中心勢力として次代の新潮に直接關係を有するは、むしろ神秘派空靈派の一流に存す。されば敍事的傾向の行くへを辿る事は暫く茲に止め、飜つて當時の神秘空靈の詩品を模索せんとす。唯筆を改むるに方り、尙一事の述べざるべからざる者あり。從來詩系の外に立てる一詩星の突如として光鋩を放ちし事即ち是なり。

三十七年小說家露伴「出盧」の一篇を『讀賣』に掲げ、連載十ヶ月、詩壇無前の長篇として一時人目を眩耀せり。其の引に曰く、「出盧」一部四篇第一篇は世の悅ぶに足らぬを言ひ、第二篇は詩の愛すべきを叙し、第三篇に至つて空想に遊ぶも亦實在の累する所となるを免れざるを述べ、第四篇に於て詩と世と共に悅び愛すべく、實在と空想と相即き相容るべきを詠じたり。こは予が將に世に出さんとする詩集『心の跡』全卷の序として看るべしと、不幸にして『心の跡』は遂に世に出でず。作者詩想の神髓如何を

知るに由なしと雖、「出盧」のみを見るに、理義透徹して情趣亦饒く、說論明晰にして詞藻亦豐麗、言はゞ作者多年の蘊蓄を傾倒して人生哲學を歌ひ出でし者、即ち人格の詩哲理の詩なり。而も此の種の詩篇は、動もすれば吟詠の境を出でて說論の界に入らんとするが故に、詩としての成功如何は直ちに表現の技巧に關す。「出盧」の結構整正に過ぎ、修辭縱橫を極めたるは、却つて此の點に於ける不利となり、渾融の致に缺くる所少からず。吾人は唯時流の外に卓立せる雋邁なる詩想聲調を得、專門詩人以外の警拔なる修辭用語を得て、斯界の爲には有力なる刺擊となりしを喜ぶ。

　飜つて思ふ。我が新體詩の本流は何所をか行ける。曩に空想的戀愛に醉ひ、中頃官能的戀愛に耽りしもの、急速なる文明の進步に伴ふ現代人の複雜なる心情に適合すること能はず。暫く理想の滿足を過去世界に求めて敍事詩史詩を試み、或は之を現在の儘の婆娑世界に求めて逍遙の「新曲浦島」露伴の「出盧」に見えし如き理想即現實の思想を歌ひしも、强烈なる自意識の壓迫に苦める現代青年、最近西洋文學の新潮に知己を見出でたる現代

讀詩社會にとりては、前者は美しき夢の世の如く、自己と相距ること餘りに遠く、後者は諦め過ぎ悟り了れる聖者の如く、自己と相背くこと餘りに甚し。是に於てか、憧憬煩悶、遂に靈を呼び神を呼び、一種の神秘的冥想的の詩風を形作るに至れり。『二十五絃』（三十八年）の作家泣菫、『獨絃哀歌』（三十六年）の作家有明、『夏花少女』（三十八年）の作家林外、『夕潮』（三十七年）『悲戀悲歌』（三十八年）の作家泡鳴の如きはこの作風を代表せる者なり。

『二十五絃』は之を彼の藝術の悠久を歌ひし『行春』に比するに著しき詩想の變化あり。多くは自然を觀照して中に一種の靈を覓め、飄逸なる想像と曲折ある譬喩と、相俟つて一脈神秘の薫りを浮動せしめたり。「虹の歌」には各種の生活と自然現象とを結合し、「公孫樹」には落葉を實在の證明と觀じ、「翡翠の賦」には小禽の生態を見て其の胸に包める秘密を思ひ、「金剛山の歌」には自然を人格化して高山の曙色を歌ひ、其の他「霜月の一日」「神無月の一夜」等、皆自然を靈化して幽玄の想像を馳せたり。次に『獨絃

哀歌』は靜思の姿冥想の趣、全篇にほのめき、前代の熱情的戀愛詩に對してよく當代の特色を現せり。例へば「靈鳥の歌」「佐太大神」等に空靈高渾の想像を凝し、「幻影」「蓮華幻境」「光の歌」等に神秘淸遠の憧憬を披瀝し、「聖菜園」「賴るは愛よ」「君も過ぎぬ」等に靈氣に滿ちたる信念を吐露し、特に「幻影」の一篇、かの心に求むる所ありて求め得ず、捉へんとする影ありて未だ其の形を確め得ざる無限の哀愁を幽婉の詞章に寓せ、總べて宗教的神秘的の色彩を帶びたり。流風正しくロセッチに出で、前代の泣菫がキーツの遺韻を汲めると相對して、詩風の變遷を適切に覺知すべし。要するに有明の詩想は、情緒の靈化せられたる淨樂界を翹望し、「永世の脈精氣滿ちて時刼の進み老いせぬ愛のとかげ」の實現を見んと冀ふ者なり。而して此の夢幻の如き幽情を傳へて晦澁ならざらしめんが爲に、修辭上多大の苦心をなし、或は譬喩を用ひ、或は抽象を具象化し、觀念を感覺化するに努めたり。

『夏花少女』に在りては「魔怨」「妖魔の泉」「沙雲雀」「妖女」「魔障」「夏の夜

の夢」等の諸篇、總べて怪奇の空想を逞うして幽魔の境に入り、陸離たる麗藻を凝して技巧の堂に上る。彼は非情を人格化せんとする事泣菫に似て魔氣に富むこと之に過ぐ。次に『夕潮』『悲戀悲歌』は同じく一味神秘的悲趣を帶び、達し難き翹望の惱みを表せり。之を他作家に比ぶるに、泡鳴の詩は理を以て優り、他の唯美的の詩篇に對して著しく哲理的に傾けり。唯其の措辭餘りに直截、語彙餘りに貧少、理路餘りに露骨なるを失とす。然れども當代詩界に缺如せる剛健重厚の作風に至りては、遂に之を泡鳴に求めざるべからず。『悲戀悲歌』の中なる戀愛詩が一様に神秘的宗教的色彩を帶べるは言ふも更なり、『夕潮』の中なる「あゝ世の歡樂」の如きは、心に求むる所ありて而も得られざる苦惱を詠じてよく當代の詩風を表せり。

詩想の傾向かくの如く變遷しつゝある間に、詩形に於ても幾多の新しき試みはなされぬ。晩翠は必ずしも七五五七によらず、時に長短句を試み、泣菫は前の八六調の外種々長短句を混用し、有明は四七六の一句八行六行の二節より成れるソネット形を試み、林外は八七調四行八行二行の三節より

成れるソネットを作し、泡鳴は八七、七六、六四、七七等、各種の詩律に指を染め、其の他苟も詩人にして詩形に關する多少の研究をなさゞるもの無かりき。

當時詩界に於ける此の新潮の由て來る所は、勿論一代人心の傾向に在りと雖、新詩人を刺擊し暗示したるものは實に泰西詩人の作品なり。三十四年以來刊行せられたる『ハイネの詩』『ゲーテの詩』『ユーゴーの詩』『キーツの詩』『ヲルヅヲルスの詩』『テニソンの詩』『セレーの詩』『バーンスの詩』等幾多の譯詩は、是等泰西詩人の作品が如何に當代人士に愛讀せられしかを證すると共に、孰れの詩人の作風が當代を動かしつゝあるかを明にせり。曩に情熱を歌ひ古典的の作風を追ひし時は、前掲の英獨詩人に影響を受くること少からざりしか、近時ロセッチ、スキンバーンに私淑して、茲に有明等に見えたる空靈神秘の詩趣を喜ぶに至れり。斯かる間に三十八年前後に至り、更に佛國象徵詩派を紹述して一種の象徵詩を我が詩壇に導き入れしにより、詩風一轉の機新に兆して、斯界頗る色めきぬ。事は次章に詳悉す

べし。

斯くの如くにして當時の形勢は藤村晩翠が一世を指導せし時に比して著しく變遷し、一代の詩人二家の境地より一步を進めんとするに方り、右往左往各〻其の好む所に從ひて上來述ぶる如き諸種の詩風を起し、其の他醉茗の如き花外の如き、亦一種の詩調を出し、或は泣菫の『白玉姬』（三十八年）の俗謠體となり、或は晚翠の律詩（同年）となり、或は露作の四行詩（同年）となり、暗中模索動搖の態所在に現れぬ。而も中に一道の本流之を貫くあり、新代の思潮に應ぜんには早晚一回旋を試みざるべからざるに至りぬ。

第二節　小說及び戲曲

三十四五年來、小說界の氣運著しく沈滯し來り、作品の量作家の數遙かに前代に超ゆるに係らず、新代の人心に添ふべき佳篇甚だ乏しく、舊作家は萎微し、新作家は未だ形を成さず、斯界暫く混沌の間に在り。其の間多

少注目を價する者は、露件の『二日物語』（三十一年）『天打つ浪』（三十六年）紅葉の『金色夜叉』續稿（三十五年）眉山の『石卷庄左衞門』（三十六年）天外の『魔風戀風』（同）風葉の『凉炎』（三十五年）鏡花の『白羽箭』（三十六年）『風流線』（同）及び新進作家春葉、秋聲、德富蘆花、菊池幽芳、中村春雨、島崎藤村、山岸荷葉、田口掬汀、永井荷風、草村北星、生田葵山、三島霜川、木下尙江等の二三の作品に過ぎずして、未だ一世を指導すべき大勢力とならん者を見ず。左に少しく這般の消息を覗はん。

『金色夜叉』未だ完結に至らずして作者宿痾に惱み、起稿以來五ヶ年を經て一臥遂に起たず、三十六年晩秋未完の大作、彫心鏤膓の迹を留めて詩魂長へに逝きぬ。文壇の先覺紅葉の文學的事業は斯くして終を告げぬ。吾人をして暫く彼を回顧せしめよ。彼は一身を以て詩神に獻じたりし天成の文學者なりき。文藝に對する趣味の廣きや、文學の所有種類を試みて倦まず。而も之が創作に從事するや、主題の硏究周匝を極め、文字の推敲慘憺を極む。其の藝術的良心の旺盛なる、文壇其の比を見ず。彼れの將に死せんと

するや、弟子を顧みて曰く、七度生れ更つて文章の爲に盡さんと。彼が生涯の事業は、一に此の抱負と覺悟とより來る。硯友社を結んで新文學興隆に盡しゝも之が爲なり。門下俊才を養うて文學教育家の典となりしも之が爲なり。文學者對社會の問題起る每に、一身を以て文學者の長城となりしも之が爲なり。十千萬堂出版社（三十六年）を起して文學者に對する出版業者の迫害を防遏せんと勉めしも亦之が爲なりき。是等の點に於ては、彼は實に明治文學者の巨頭たり。唯其の作物の傾向に至りては、紅葉は未だ文學界全般の代表者たるに足らず。彼れの代表するは其の都市的半面に止まる。彼は純乎たる都市的詩人なり。其の小說俳句は都市の情に入るの深き、人事を穿つの犀利なる、口語對話を操るの巧妙なる、殆ど天品に出で、之に反して田園の情を描き自然の景を寫せる者は、概ね皮相にして神に入らず。冥想靜思の趣致おのづから缺けたり。故に小說家にては馬琴よりも京傳を尙び、俳人にては芭蕉蕪村に赴かずして談林江戶座に往き、紀行文『煙霞療養』の如きは全然失敗に歸したり。此の對比は總べての都市文學

者と田園文學者との間に存し、觀察着想文體技巧等、兩者各其の特長を具ふと雖、殊に紅葉は都市的特長の粹を集め、宛然東京詩人の代表者たり。故に其の特質の範圍内にては、彼れの才は多面無礙、行く所として可ならざるなく、特に其の本領たる小說は、洵に明治文界の名珠にして、其の發展推移の迹を叙しなば、直ちに一部の明治小說史を成すべし。『我樂多文庫』の昔より『金色夜叉』に至るまで、二十年間の作、初は江戶戲作者の面影を帶びし者、漸く移りて泰西作家の思想聲調を傳ふるに至りし始末を見るに、彼れの小說は事實に於て新舊分子の混融する所、東西文學思潮の合流する所、敲かば何れ過渡の音を發せざるなし。思ふに三十年間の文學は、大局より見れば、畢竟過渡の產にして、異日精華を開くべき新國文學の基礎を置ける者。紅葉の如きは正に此の遷轉期の偉人たるべし。

紅葉の逝去に先つこと少時、露伴は「天打つ浪」を『讀賣』に揭げ初めぬ。爾來斷續遂に完成せざりきと雖、着想詞藻作者の特長を發揮し、小說界一般の潮流に關せず、獨り其の本來の理想的傾向を進め、人生哲學の披

漸く蘊奧に入り、且つ其の宗教的神秘的思想は新彩を帶びて益〻幽玄の致を加へたり。其の文章に至りては、雄健周匝、神來一揮の妙益〻加はり、多年の蘊蓄、傾け來りて作家の面目を躍如たらしむ。思ふに露伴は、紅葉と等しく文學的修養を舊時代に得、舊文學を鑑識せる眼光を以て泰西の文學を見る。故に創作の內容外形、共に純然たる新文學なる能はず、言はゞ過渡時代文學者の粹たるに過ぎず。然れども彼が述作に臨むや、深邃なる研究と該博なる涉獵とをなし、準備既に成り材料既に集らば、乃ち神興を藉りて一氣揮灑、詩想混々として盡きず、詞章陸離として輝く。而も內に養ふ所の氣魄精神は、文字以外作風以外に卓立して容易に他の追蹤を許さず。露伴の如きは實に新舊文學遷轉の軸頭に立ちて過渡時代の精粹を集めたる明治文學史上の一大記念なり。

斯くて過去小說界を支配せる二巨人相繼いで辭し去り、次代を形作るべき作家は各〻自家の傾く所を盡くして特種の作風を發揮しつゝ、暫く道途に迷へり。就中當時の讀者社會に比較的勢力を得て一時世に行はれしは、所謂

家庭小說の一流なりとす。蓋し前代以來痛烈なる刺撃を要求せる人心に適應せんが爲めに、深刻悲慘なる作風の行はるゝを見しが、其の弊の極まる所、茲に沈帶し、萎微し、遂に反動を起し、人心一時新なる或者を需む。此の間の消息は夙く前章に說ける柳浪が作風の變遷に表れしが、茲に至りて明に其の體を露出せしなりき。蘆花幽芳春雨春葉掬汀柳浪等の最近の作風即ち是なり。

蘆花は夙に民友社の紀傳家として知られしが、三十二年「不如歸」を「國民新聞」に掲げ、小說家としての名聲俄に揚りぬ。爾來三十四年「思出之記」、翌年「黑潮」を公にし、最も時流の歡迎を受けたり。著想結構特に秀でたるなく、描寫の技巧必しも精妙ならずと雖、一篇の骨子たるべき事象は、健全なる家庭的趣味に富み、至醇の戀愛を以て肉づけられ、深切なる同情を以て衣づけられて、一種道念の高潔なる作品を形成せり。獨り「黑潮」は明治の文明明治の社會の側面觀を具現せし社會的小說とも見るべければど、中に貫流する一道の情趣は亦前二者と同一に出づ。幽芳は新聞小說

家としてむしろ俗流の嗜好に投ぜんことを勉むるものなるのみならず、作品多く飜案に似て、本邦現代の生活と相渉る者少ければ、特に文壇に重きをなすに足らずと雖、一時讀書社會の人氣を得たるは、即ち『己が罪』『乳姉妹』等の家庭的趣味に負ふこと少からず。掬汀は其の地位傾向二つながら幽芳に似、『人の罪』『伯爵夫人』等、新聞小説として著名なりしは、皆此の潮勢に乘ぜるによる。春雨は新進の作家にして、三十四年『無花果』の作を以て知らる。着想純眞にして中に一貫の道念あり、最も宗教的色彩に富む。春葉は平靜溫藉なる家庭小説を能くし、紅葉の絢爛風葉の妖艶なき代りに清楚掬すべき旨味あり。既に『錦木』(三十四年)に其の傾向を示し、『忘水』『いさゝ川』の短篇に漸く形をなし、『母の心』(三十八年)『宿り木』(三十九年)『古驛』(同)に至りて明に家庭小説を標榜せり。柳浪は近時作風を變じて筆を家庭小説に著け、『二筋道』『繪師の戀』等、皆時尚に適應せんと努めしに似たり。

斯くて家庭小説は一時新聞小説を中心として盛に行はれしが、詳に其の

内容を省察すれば其の案外に空虛なるに驚くべし。時代の社會道德に適應せんと企てたる態度は文藝其の物の上より見て慶すべきか否かは俄に判すべからずと雖、之が爲に强ひて作爲の迹を殘すが如きは遂に高級藝術の事に非ず。不幸にして當時の家庭小說は結構描寫二つながらわざとらしき作爲の迹を存し、到底進步せる讀書社會を滿足せしむるに足らざりき。蓋し當時の家庭小說は前述の如き反動の勢に成りしもの、固より確たる根柢あるに非ざりしなり。

されば當時の小說界には依然として相反せる潮流あり。秋聲は『雲の行くへ』(三十四年)『春光』(三十五)『桎梏』(三十六)等に沈痛の筆を揮つて敗れたる人生の或問題を解釋せんとし、荷風は『地獄の花』(三十五)『夜の心』(三十六)に於て人間の獸性に著想し、遺傳と境遇とに伴ふ小說的事件の開展を敍し、風葉は『凉炎』(三十五)に官能の刺擊によりて人間の道念と獸性とが迭に消長する契點を描き出て、藤村小說界に入りて『舊主人』(三十五)『水彩畫家』(三十七)に愛情なき家庭の主人が外圍の事情に引かれて自

然に落ち行く情塊の果てを寫し、皆前章述べたりし自然主義的傾向を帶びて而も一層深痛なる内省の迹あり。而して此の方面を代表して當時最も盛名ありし者を天外の『魔風戀風』となす。三十六年春より『讀賣』に出でし長篇にして、作者が所謂寫實小說益〻現實的となり、事件人物悉く現社會に粉本を求めて敢て醇化を加へず。之を主人公の性格に見るに、感情と理性との發達に比して意志甚しく薄弱、感情の盲動は直ちに理性の反抗を受けて煩悶を極むるに係らず、意志の力を以て之を斷ずる能はず。而も主我の念盛なるが故に、强ひて自ら辯じ自ら欺いて以て心裡の煩悶を壓伏せんとす。斯かる性格は正しく現代の教育ある青年の間に存し、之より惹起せらるゝ種々の事件は正しく現世相の一端を表せり。唯其の描寫、世相の形に偏して其の神に入らず。教育ある青年學生を點出せるも、其の頭腦を支配せる最新思想に及ばざりしが故に、未だ適切に吾人が心胸に響應すること能はざりき。

述べて茲に至り、顧みて小說壇を通覽すれば、前述二潮流の外、尙ほ蘆

花の『黑潮』と略共の性質を同じうせる尙江の社會小說『火の柱』『良人の自白』あり。鏡花水蔭の如きロマンチックの作風を續くるあり。種々の試驗雜多の提唱、皆是暗中の模索ならざるはなく、混沌として大勢の何れに適歸すべきかを審にする能はざりき。

轉じて劇界に入らんか、不振の狀勢は依然たりと雖、裡に一道の暗流大變遷の前兆を爲すものあり。作劇の方面に在りては著しき活動を見ずと雖、劇場觀客俳優の方面に一新現象を呈しぬ。即ち第一、競うて新小說新脚本を演ずるに至り、第二、頻りに西洋物の飜譯飜案を歡迎するに至り、第三、新俳優は第二期の發展をなし、第四、舊俳優は屢〻新劇を取りて新俳優と競はんとするに至りき。時正に三十六年なり。

小說の戯曲化は「心の闇」「髯男」「己が罪」を始めとして、「不如歸」「金色夜叉」「高野聖」「畜生腹」「黑潮」「乳姉妹」等、小說として最も讀者に歡迎せられたりし者には相次いで行はれ、皆舞臺に上せられたり。此の現象は純粹なる文學的見地よりは、素より推奬すべきに非ずと雖、社會が舊劇に飽

きて何か新しきを求めんとする過渡期の現象として必しも斥くべきに非ず。之が爲に作劇家を刺撃して好新劇を產出するを得ば、洵に文壇の慶事なり。『桐一葉』以來久しく消息を絕ちし脚本新作の事、三十六年復び新聲を傳へしは、多少此の間の關係に因れりといふべし。松葉が左團次の爲に書きし二三の新作は暫く措くも、鷗外『玉匣兩浦島』（三十六年）及び『日蓮上人辻說法』（三十七年）を作り、月郊『大鹽平八郞』（三十六年）『江戶城明渡』（同）を公にし、風葉柳浪等、亦一二の新作あり。『兩浦島』は浦島傳說に新意匠を寓したる二幕の小劇詩にして、上篇は、浦島太郞が龍宮歡樂の夢さめて仙界平和の空想に飽き、漸く世間の事業人間の活動を懷ふに至りしを叙し、下篇は人界三百年を經たりし後の世、太郞が裔なる後の浦島、活動の事業に向つて努力せる者、仙界三年の歡樂を捨てゝ歸りし先祖の浦島に邂逅し、兩人手を執つて「思ふは祖先、行ふは子孫にこそあれ」と謳ふを大筋となす。着想に就いては批評家の見る所一ならずと雖、浦島傳說に一新生命を與へ、露伴の『新浦島』以外、一新發展を加へたるは爭

ふべからざる功績なり。全體、歌劇風の劇詩にして、白は總べて七五律を以てし、典雅平正なる雅言體にて成る。されど此の大膽なる創意は、形式の單調科白の緩漫の爲に、不幸にも舞臺上の失敗を免れざりき。『辻說法』は七五調によらず、雅言に拘せざりしが故に、此の點に於て少からぬ利益ありき。中幕物の小篇なれども、鎌倉武士をあしらひて日蓮の英姿を寫し、雅醇森嚴の趣饒し。『大鹽』と『江戶城明渡』とは共に脚本體の史劇にして、題材の選擇表現の技巧、共に『眞田幸村』の比に非ず。唯其の奇拔なる着想と雄大なる結構とに伴ふべき事件の配置、科白の練成に缺くる所あるを憾とす。

新作歡迎の氣運は、延いて飜譯飜案の悅ばるゝを致し、世俗迎合を事とする梨園は競うて此の種の劇を取れり。月郊の『闇と光』(キング・リア)、水蔭の『オセロ』、春曙の『エニスの商人』『ハムレット』、漣山人の『瑞西義民傳』(キルヘルム・テル)等、は即ち此の要求に應じて出でし者なり。されど、皆唯、輪廓を象りしに過ぎず、素より完全なる飜譯脚本に非ず。

以上各種の新劇は皆彼の新俳優によりて演ぜられし者にして、曩に舊派の夢幻劇に敗れて屛息したりし新俳優の一團は復び其の面目を起しぬ。此の時に方り、舊劇の大立物として妙技斯道の精粹を蒐め、以て其の末路に大光明を放ちし菊五郎團十郎左團次の三者は、三十六年春以來相次いで幽界に入りぬ。殘存の諸優は過去の遺物に據りて新時代の好尙を維ぐべき大手腕ある者に非ず。是に於てか相率ゐて新劇に入り、三十七年大阪の我當上京して芝翫高麗藏等と連合し、始めて『桐一葉』を演じぬ。是れ斯界の一大旋轉機なり。蓋し垂死の舊劇が命脈を今日に維ぎたりしは、主として二三名優の斯壇に有せる惰力と、新派俳優に名手なきとに因る。今や此の惰力を失ふ。舊劇の殘壘危しといふべし。新派の徒が杜撰なる脚本と未熟なる演技とを以てして、尙舊派に優る人氣を得たるは、主に舊劇の世潮に合はざるに由る。されば舊派俳優にして演技を以て世に立たんとせば、勢新劇を取らざるべからず。而も新俳優の跡を追うて小說劇飜案劇を弄ばんは、徒に彼等の後塵を拜するに止まる。茲に至りて我當等が新劇を索めて

『桐一葉』を取りしは獨り彼等の慶のみに非ざるなり。『桐一葉』は製作當時に論ぜられたりしが如く、脚本として非難無きに非ずと雖、舊型に新想を盛りたる漸進的性質は、過渡期の劇として適切なること素より飜案劇小說劇の比に非ず。況んや上場の成績に徵するに、新悲劇としての特質は大略發揮せられたるをや。『桐一葉』世に出でて八星霜、今日始めて劇壇刷新の道程に上れり。爾來三十七年には『日蓮上人辻說法』三十八年には『牧の方』三十九年には『沓手鳥孤城落月』相次いで舊派俳優に演ぜられ、作者の盛名と教育ある新觀客の同情とによりて、全然舊劇を壓倒するに足る好評を得たり。

三十七年秋久しく教育界に隱れたりし逍遙は再び起つて『新樂劇論』を草し、國劇將來の發展に關して多年研鑽の結果を公にせり。曰く今や國劇刷新の要迫れり。而も刷新の方針は國劇固有の要素の上に立てられざるべからず。飜つて想ふ、國劇は其の能たると歌舞伎たると振事たるとを問はず、悉く樂劇の要素を有す。故に刷新を計らん者は、須らく樂劇たる性質

を需要と好尙とに應じて發展し醇化し、以て二十世紀文明國の藝術たるに相當すべき一種の純樂劇たらしむべし。然らば從來の三種樂劇の中孰れを取りて將來國劇の基礎とすべきか。能劇は畢竟過去の美術にして將來の好尙に適せず。歌舞伎劇亦然り。唯常盤津長唄等の振事劇のみ醇化發展の希望あり。其の作意脚色樂曲科介扮裝等に存する缺點を除くを得ば、庶幾くは進歩せる將來の好尙を維ぐに足らんかと。斯くの如きは本論の緒言に過ぎずと雖、純劇即ち科白劇を起して泰西の糟粕を嘗むるを避け、過去の國民生活を尊重して其の特質の上に立てられたる新樂劇を得んとする識見は、略之を覗ふを得。之を著者が『桐一葉』を公にせし頃の意見と比するに、劇の形式に關しては多大の徑庭あり。蓋し當時は從來の劇を導いて泰西の科白劇に近き者たらしめんとせしも、國劇の精神は樂劇的方面に在りて科白劇的方面に在らざるを悟るに及んで其の態度を一變せるなり。

『新樂劇論』は洵に劇曲刷新の曉鐘にして、曩日の史劇論と共に著者が劇壇の先覺として常に豫言的創意を齎せる二大記念なり。而して『桐一葉』

に相當すべき一新樂劇次いで出でぬ。『新曲浦島』是なり。曲は浦島傳說に材を取り、三幕十二段に分る。序幕は丹後澄江浦に幻影を追うて心空なる浦島、父母に別れて失望自殺せんとするを乙姬に救はれ、歡喜して龍宮に赴く筋、中幕は龍宮三年の悅樂に人間を忘れたりし浦島、明月の夜遙に船歌を聞き、又父母の幻影を見て人間慕はしく、玉匣を形見に乙姬と別れて立歸る筋、詰幕は三百年後の故鄉の變遷を見て悔い恨む處、青年の男女來り慰むるあり、匣を開けば、白氣立騰りて浦島忽ち老翁となる。時に天明け旭昇り、老人青年光榮の未來を謳ふといふ筋。全部曲章と振事とにて現はし、補ふに少許の科白を以てし、曲人は歌ひ、優人は舞ひ、樂人は三絃を主として他種々の樂器、西洋のをも併せ用ひ、曲は場合によりて其の種類を異にし、從來の樂曲殆ど總べてを包容す。斯くの如き型式が新樂劇として成功すべきか否かは之を當來の試驗に徵し、茲には單に其の內容思想を見んに、『雨浦島』以外更に一新發展をなし、先づ現實と空想との交涉の上に存する過渡時代の煩悶を寫し、進んで現實の上に立つて理想を忘れざ

るは即ち新時代の新理想たるべしとの意を寓したるに似たり。

翌年逍遙は又第二の見本として「新曲赫哉姫」を作しぬ。材を竹取物語の傳說に取り、二幕十五段に分ち、莊重典麗の歌詞を以て仙女上天の一新樂劇を組立てし者にて、之を「浦島」に比すれば、傳說の取扱に於て多少の差あり。「浦島」に在りては一種の新寓意ありて傳說上の發展ありしも、此に在りては傳說其のまゝを繼承して別に新意を加へず。且つ彼には舞踊を本位とせるに此には謠唱を本位とし、彼は俗曲を主腦とせるに此は寧ろ謠曲を根幹となし、多少新樂劇論を修正せるを見る。然れども國劇の特性の上に立てる樂劇たる根本的性質は『浦島』と異なることなし。

劇界の狀態は斯くの如く動搖と變遷との渦中に在り。未だ其の間に系統ある活動の一定の針路を指すを見ず。而も其の裡、常に新しき或物を得んとする翹望と努力とあり、混沌の中一道の活氣の未來の光明を豫言するを認む。

＊　＊　＊　＊　＊

以上述ぶるが如く文壇當時の形勢は混沌なり動搖なりき。二十年來の各種の文學は新世紀の大思潮に伴ふ能はずして其の勢力を失ひ、其の間に努力せし先進の諸家亦道を後進に讓りて去りぬ。而も之に代りて新代國民の新思潮に觸るゝ者未だ是あらず。左顧右眄、所有試驗と提供とをなして懊惱煩悶の態を極む。獨り其の內容の上のみならず、形式たる文體の上に於ても作家悉く道途に迷へり。試みに小說に見んか、內容を明治世相の寫實に取り、形式を言文一致體の文章に取りしは、疑もなく明治文學史上の一大事實なりしも、今や之に一新面目を與ふるに非ざれば其の發展を望むべからず。之を新體詩に見んか、七五五七の詩律のなせる貢獻は、西詩の想形を移植せる功績と共に、過去詩壇の一大記念たりと雖、之に著しき工夫を加ふるに非ざれば將來の好尙を維ぐに足らず。更に戲曲に見んか、夢幻劇打破の運動は目覺しき限りなりきと雖、無意義なる飜案劇小說劇の外に、發達せる人心に適應する新型式を得るに非ざれば、劇の前途必しも祝すべからず。從來の文人未だ玆に想到せざりしに、今や是等の大問題、端なく

其の意識に上り、乃ち動搖煩悶して暗中模索す。天か時か。過去文學の大星續々落ちて新陳代謝の機正に迫り、一方に於て外征の大勝國民の自覺と國力の發展とを促し、我が文學は早晩一變せざるべからざる機運に際會しぬ。正に是れ山雨至らんとして風樓に滿つる時なり。

第四期の文學

明治三十八年——同四十一年

第八章　新興文學の由來

第一節　舊文藝破壞の思潮

近時文壇の趨勢を見ん者、何人も其の冥想的思索的傾向の著しきに想到すべし。所謂人生問題心靈問題は到る處に論議せられ、學者文學家の此の問題に對する態度著しく痛切嚴肅となれり。世には此の問題の解決に煩悶して自殺せし文學者あり、學生あり。然らざるも心靈上の此の消息に觸るる者、多少の懊惱を懷かざるなし。清澤滿之高山樗牛綱島梁川の如きは、正に此の氣運に鞭つて現はれたる好箇の代表者たり。其の他近藤燕處姉崎嘲風等の言說、角田劍南島村抱月等の評論、多く内觀に傾き靜思に富み、進んで心靈の堂奧に入らんとす。三十四年清澤滿之、雜誌『精神界』を刊行し、所謂精神主義を主唱して自己の主觀的充足を說き、更に歩を進めて曰く、宗教は主觀的事實なり、實なるが故に信ずるに非ず、信ずるが故に

實なりと。而して教養ある青年佛教徒翕然として之に靡く。同年又高山樗牛「太陽」の論壇に立ちて主觀の權威を說き、信仰の威力を叫びぬ。曰く人生は價値なり、而して價値は我れ自ら造る所なりと。彼れの主張は有名なる「美的生活論」と共に一代青年を動かし、彼等をして手の舞ひ足の踏む所を知らざらしめたり。翌年綱島梁川宗教的眞理を說きて、神の主觀的創造は我が本性必至の要求の然らしむる所なりと唱ふ。其の思想界に對する影響は前者の如く痛烈廣汎ならざりきと雖、爾來「新小說」誌上に連載せる「病間錄」は、眞摯なる心靈の叫びを漏して明治の思想史宗教史の上に磨すべからざる足跡を印しぬ。三十七年姉崎嘲風の「復活の曙光」に見えたる神祕論、及び同年發刊の「時代思潮」に見えたる信仰生活の鼓吹、亦同じく此の系統に入るべく、國木田獨步が作品の上に現したる主張言說亦著しく懷疑思索の色彩を帶べり。

思想界の主觀主義はかくの如くにして旺盛を極めたり。而も其の由て來る所は、洵に從來の客觀主義、啓蒙思想、科學萬能の思想に對する反動た

らずんばあらず。十九世紀物質的文明の洪波忽として絶東の海岸を侵し來るや、舊物悉く破れて茲に一新境地を拓き、發して思想界の功利說となり、唯物論となり、無神論となり、福澤翁と加藤博士とを中心とする客觀思潮は恣に斯界を橫流せりき。然れども勢窮れば則ち變ず。二十七八年戰役の前後より幾分反動の現象を生じ來りぬ。夫れ人智の精を極むるや、萬象一として明ならざる無きが如しと雖、一歩其の眞諦に入りて奧義を探ぐれば、何人かよく眞理の鍵を握り得るものぞ。維新當時の幼稚なる頭腦は、一時其の絢爛の光彩に眩惑して科學萬能を信じたりけんも、今や三十年の修養を積みて從來の思想の餘りに空虛なるに驚きぬ。眞理を疑ひ人智を疑つて深く冥想思索の境に入り、所謂懷疑の思潮漸く其の芽を萠し來りしもの、自然の徑路なりといふべし。而も懷疑の結果は虛無なり。反動の第一歩は破壞なり。思想界の所有方面に破壞運動起り、功利說を倒し唯物論を破り無神論を排し理論主義科學主義を斥け、所有舊信仰舊道德の權威を奪ひ盡さずんば已まざりき。而も之に代りて一世を指導すべき新思想確立せ

ず、各其の行かん所に行き、趣らん所に趣り、其の間に一定の歸趣を見ること難かりき。唯其の新運動の根柢にはおのづから相通ずる一道の暗流あり。理論主義に對する實行主義、知力主義に對する情意主義是なり。嚢に第五章第一節に述べたりし日本主義の運動（三十一二年）、第六章第四節に述べし文藝上の時代精神論の主張と社會小說宗教小說の推奬、（同年）哲學雜誌、等の誌上、井上元良諸學者が倫理問題を研究して倫理上宗教の必要を論じたる倫理的宗教の主張（三十二三年）、樗牛嘲風等が獨逸流の煩瑣學風に對する反抗（三十三年）等、皆是れ其の根柢に上掲の潮流の橫溢を見ざるなし。清澤高山綱島諸家の人生觀宗教觀は、即ち此の系統を辿りて正に到達すべき境地に外ならず。されば其の思想の根柢には主觀的色調を帶ぶると同時に實行的現實的の賦彩を有す。一世を擧げて倫理宗教の問題に熱中し、深く人生問題に立ち入り、進んで自己の問題に逢著し、主觀の權威に想到し、遂に走つて三十七年頃の自稱神佛の出現となり、或は三十五年以來の個人主義の活動となりし者、固より其の所なりと言ふべし。

思想界の此の傾向に附隨して必然的に起る最初の現象は、文藝に於ける主觀主義なり。抒情主義なり。詩人の冥想は概ね哲學體系の組織とならずして、却て抒情の審美境に入る。當代に於ける文藝の特徴は實に抒情的傾向にてありき。されば曩きに科學主義客觀主義の文藝界に入るや、寫實の風潮斯壇の大勢力となり、「小說神髓」の大旆一たび飜つて小說は忽ち心理學の囚ふる所となり、『柵草紙』の鋭鋒一たび閃いて文藝作品は悉く美學の囚ふる所となり、所有文學は美學の規矩を適用せられ、客觀主義の風は創作界を吹き靡けたりしも、今や漸く反動を起し、和歌に在りては「明星」『白百合』の青年歌人の奔放なる抒情歌となり、嘗て客觀描寫を極意とせし『ほとゝぎす』の俳句漸く主觀趣味を尙ぶに至り、新體詩に在りては敍事の一體遂に發展するを得ずして、泣菫有明林外泡鳴、皆主觀冥想の抒情的詩調を取り、特に最近の述作に於て神秘容靈の新詩境に突入せるを見る。若し夫れ小說に至りては、二十年來全盛を極めたりし寫實小說漸く凋落して、混沌飄蕩の裡、一道の內省的冥想的主觀的情調を帶び、風葉が妖艶なる寫

實の筆漸く惱みて方向一變の途上に在り、秋聲の特色漸く世に認められ、藤村省察の詩風小說に現はれて一味内觀の深きを示し、花袋は可憐なる情緒を描きし往時の作風を捨てて、泰西近代の夫れに近づけり。特に紅葉の死は過去寫實小說の一大段落を劃し、新陳代謝の現象は爭ふべからざる當面の事實となれり。

十九世紀科學主義の反動として這般の新思潮が思想界に波瀾を捲起せしは、獨り本邦に特發せる現象に非ずして、實に世界の各隅に遍滿せる大思潮に動かされたる者なりき。三十年來交通の發達、語學の普及、教育の進步、學術の隆盛、及び國力の發展は、泰西文明との交涉をして比隣よりも容易ならしめ、彼の國の學術文學の輸入益〻盛にして其の思想感情に觸るゝこと愈〻密に、其の推移は直ちに本邦思想界文學界に影響するに至れり。されば彼の國に於て輓近科學主義の反動としてニイチェの超人思想ゴルキイの放浪思想マーテルリンクの神秘思想等の現るゝや、直ちに本邦思想界に影響し、茲に自我發展主義天才主義個人主義神秘主義の思想を釀成するに

至りぬ。三十四年頃勃興したりし論壇の新ロマンチシズムは即ち此の風潮の所産なりき。

然れども此の物質的文明に反抗して心靈生活を鼓吹する一道の思潮の本邦文壇に存するは、決して無前の珍事に非ず。夙く二十年代に『女學雜誌』あり『文學界』ありて、文壇の一隅に其の峻峭清新の聲を揚げたりき。特に『文學界』は人生問題の煩悶に關する幾多の言說述作を載せ、所謂世紀末の一種の思潮既に其の間にほの見えたりしなり。北村透谷が世を破り世を壞ち、一切の傳習を滅絕して新生の新光明に浴せんと努力せしが如きは、正に斯界先覺の聲と言ふべく、彼自ら及び藤野湖白堂の悲慘なる最期（二十七年及び二十八年）は、實に時代の犧牲として仆るゝ新人の必至的運命と見つべし。されど透谷等の運動は、時代に先だつこと餘りに遙にして、未だ世人の耳目に入らず。其の一代の思想を動かして社會の表面に現はれ來りしは、實に此の次の運動を以て初めとなす。三十一年詩人晚翠カーライルの『英雄論』を紹介し、其の序に、舊信仰既に廢れて新信仰未だ起らず、

靈界嚮導の光明晴中に沒して民心其の憑依する所を知らずと道破せしより、三十四年樗牛竹風『太陽』『帝國文學』の誌上にニイチエ主義の大旆をかざして八方に馳突するに至り、天下青年の思潮翕然として之に向ひぬ。

樗牛論壇に立ちて既に六年、其の思想の徑路に幾變遷ありきと雖、其の間常に一種の煩悶の閃くあり、人生の理想と現實との扞挌に由來する無限の懊惱が片言隻語に現はれて、遂に凡俗世界に對する反抗の聲となりぬ。三十二年近代主義を說き翌年當代の文壇を論ぜし態度は、正にこの反抗の第一擊なりき。同年ニイチエの訃音傳はり、其の超邁豪放なる個人主義超人主義の思想普く弘まるや、靈界一點の火を點ぜられて、既に芽ぐみ初めたる自我の觀念炳乎として燿き出でぬ。爾來「文明批評家としての文學者」を論じて時代の文明に對する個人の反抗を說き、「嘲風に與ふる書」を裁して現代文學を非難し、「美的生活論」を唱へて奔放なる本能主義を呼號し、遂に進んで平清盛日蓮上人を讚美して自我主義天才主義を發揮するに至るまで、現代一切の事物を破壞して新しき文明新しき道德新しき文藝を打立

てんとする活動、猛烈にして當るべからざる概ありき。かくて樗牛は一代新思想の指導者として、三十五年世を終るまで健鬪の筆を絶たず、千軍を叱咤して陣頭に立つが如き態度を以て、絢爛痛烈の詞章を行り、崇高の詩調一脈の靈氣を放つて直ちに人の肺腑を衝き、當代の青年をして髣髴として自己心靈の聲を聞く思あらしめたり。彼れの評論は此の點に於て宛然創作たり。其の理路を辿り其の曲直を剖判すれば忽ち破綻百出せんも、奔放熱烈なる思想筆力直ちに迫つて人を魅するに至つては、洵に詩人の境地創作の領域に入れりと言ふべし。彼れの眞面目は、美學者たるよりも、美術史家たるよりも、批評家たるよりも、むしろ此の方面に在り。

思想界の新傾向の遂に到達すべき個人的自覺は、かくして世に普く、新ロマンチシズム、本能主義の稱呼は一代の人心を震ひ撼かしぬ。世に稱して狂飇時代（スツルム・ウント・ドラング）と言ふ。思ふに維新以來從來の倫理宗教に安立して何等求むる所なかりしもの、一朝新なる思索に入るに及んで、忽ち儒佛道德に疑を懷いて心靈の空虛を感じ、新なる充實を惆悵して何等與へらるゝ所なきまゝ、

去つて懷疑破壞の極に趨り、茲に思想界の過渡時代を出現せるに外ならず。而して此の思潮は直ちに文藝界に影響して、前章に説けるが如く、或は晶子の『亂れ髮』となり、或は風葉の『醒めたる女』『凉炎』『沼の女』、秋聲の『春光』、荷風の『地獄の花』『夜の心』、花袋の『重右衞門の最後』、竹風の『洗ひ髮』となり、甚しきは從來往々反道德なりとの非難を蒙れる自然主義的傾向の文藝は、茲に有力なる聲援を得たるもの丶如く、又一種の學理的是認を與へられたるもの丶如く誤解せられ、本能の暴露は即ち時代の精神なりと妄斷せらる丶に至り、遂に趨りて所謂世紀末の病的思想をすら文藝の上に現すに至れり。次節に述ぶべきデカダン傾向即ち是なり。

第二節　海外文學の輸入

吾人は前節に於て我が最近の思想及び文學の特質を擧げて、內省的實行的個人的主觀的の數條を算したり。今や進んで此の特質を帶びて現はれ來りし新興文學を叙せんとするに方り、豫め之が先驅となりし二三の文界の

現象を述べて、其の由來を詳にせざるべからず。而して此の敍述をなさんには、當代の新潮を捲起すに最も有力なる動機となりし海外文學の輸入紹介に就て記す所なかるべからず。

維新以來新文學の勃興を始めとして、文壇の新事象、一に海外文學の影響に出でたることは、本書一卷の說ける所によりて略推知するを得べし。特に前章既に說けるが如く、最近語學の進步、思想の發展、交通の繁榮は、一層彼此の接觸を密ならしめ、飜譯紹介の流行又往年の比に非ず、第六章第四節に述べし趨勢は益〻其の步を進めたり。三十四年以來詩歌小說の飜譯の出づるもの前後相望み、詩人文豪の評傳亦少からず現はれ、プラトーン、シェークスピアの全集すら飜譯し初めらるゝに至りぬ。而して其の間おのづから以前の飜譯界と異なる現象を呈して當代の特色をなせるを見る。異色とは何ぞや。露佛文學を主とする大陸新文學の流行是なり。

第二期並に第三期に於ける泰西文學の中心をなせるものは英獨の文學なりしや論を俟たず。政治小說時代は更にも言はず、逍遙の英文學に於ける、

鷗外の獨文學に於ける、各ゝ一時代を劃して其の傾向を代表するの觀あり。特に英語の普及は此の國の文學をして最もよく我が國民に親ましむるに至り、泰西諸國の文學も主として英譯によりて其の面影を窺ひ、飜譯の如きも多くは英譯より重譯せるものに係る。文科大學の外國文學科中英文學科は最も早く設けられ最も多數の學生を有し、早稻田專門學校文科の外國語は即ち英語に止まる。斯くて一般社會に於ける英語の勢力依然として隆盛を極むと雖、最近思潮の變遷の急激なる、從來紹介せられし英國クラシックをば漸次文壇の中心より遠ざからしめぬ。前章詩風一轉の機を敍せる條に示せる如く、最近の文界は又莊重沈靜なる英國クラシックを味ふの餘裕と趣味とを缺き、只管熱烈と痛快とを求めて露佛新文學に赴き、保守的秩序的道德的なる英國古文學に同情すること能はずして、專ら懷疑的破壞的進步的なる大陸新文學に趨りぬ。特に新ロマンチシズムの運動起るや、社會の現狀學界文界の狀勢に不滿を抱く者、相率ゐて大陸新文學の破壞的虛無的なるを歡迎し、從つて同じく大陸文學の中にても從前歡迎せられしダンテ、

カルデロン、セルバンテス、ゲーテ、シルレル、ユーゴー、モリエールの如きよりは、寧ろ最近佛國デカダン詩派、象徴詩派、佛國自然派、獨國自然派、露國自然派、那國イブセン、伯國マーテルリンク、伊國ダンヌンチオ等の小說戲曲を喜ぶに至りぬ。勿論ツルゲネーフ、トルストイの如きは、二葉亭鷗外等によりて夙く二十一年より紹介せられ、ドストエフスキーは魯庵によりて二十六年既に世に知られ、ピエル・ロチ、ゾラ、モーパッサン、ダンヌンチオ、ゴーゴリ等は上田柳村等によりて三十年前後移植せられきと雖、當時は唯漠然諸國の文學を知るに從ひて輸入紹介するに止まり、未だ民性の相通ずる所思潮の相應ずる所を自覺し、自己と同じきものを其の裡に見出でたる熱烈の同情を以て之を鼓吹奬說したるものに非ざりき。就中、二葉亭嵯峨の舍抱一庵、共に露國文學の紹介者を以て知られしも、未だ積極的に新思潮を捲起す活動に加はらざりき。當時の讀者は唯譯文の巧拙を言ひ、譯解の正否を判ずるのみにして、之に對する態度は猶シェークスピア、ミルトン乃至、マコーレー、カーライルの譯書に於けるが如く、極

めて超然たる者なりき。然るに新思潮の文壇に入るや、新なる意義を以て魯庵の『罪と罰』を推し、二葉亭の『片戀』『浮草』を薦め、後ればせに諸して吾人の胸奥を動かす者ありと唱說するに至りぬ。

三十四年月郊の『イブセン作社會劇』柳村の『みをつくし』花袋の『西花餘香』以來、三十六年孤蝶の『宿り木』三十七年竹風の『賣國奴』(ズーデルマン)三十八年魯庵の『復活』(トルストイ)柳村の『海潮音』を始め、ワグネルの歌劇、イブセン、ハウプトマン、マーテルリンクの劇、ズーデルマン、モーパッサン、バルザック、フローベール、ドーデー、ゾラ、ダンヌンチオ、ゴーゴリ、ゴルキー、ツルゲネーフ、メレジコウスキー、チエホフ、アンドレーエフ、ヒュイスマン等の小說、ボードレール、ヱルレーヌ、マラルメ、ヱルハーレン、モレアス、ローデンバッハ等の詩歌續々我に移植せられ、昇曙夢、瀨沼夏葉等、新進の露國文學研究者亦輩出し、近年特に其の旺盛なるを見る。是等の大陸文學が新興の文學に影響して、詩歌小說戲曲、所有方面に目ざましき變化を遂げしめし實相は、蓋し豫想の外に在り。要

するに本邦の文學は日に月に泰西文學と近接呼應するに至り、彼の地文壇の推移は直ちに來りて我が文界を動かす事、是れ近時斯界に於ける著しき現象なりとす。

第三節　象徴詩の勃興

海外最近文學輸入の大勢は略前述の如し。而して先づ之が直接影響を創作の上に現したるものは新體詩なりき。前章既に說きしが如く、神秘空靈を尙ぶ一派の詩風斯壇一轉の兆を示しゝが、三十七八年の交に至りて遂に象徴主義の形を取りて其の新面目を現し來れり。

象徴詩派の作風及び作家の我が文壇に紹介せられしや、近日の事に非ず。『文學界』『帝國文學』夙に海外詩壇の新風を紹介し、特に上田柳村之に勉めたり。吾人は二十九年既にリイル、エルレエヌ、ボードレエルの名を聞き、三十一年パルナッシャン、サムボリスト、エル。リブリストの名稱を聞き、彼等の詩には、聯想の力、視聽嗅味の官能を交錯する消息のよく現はれた

るを學び得たりき。然れども當時の詩壇は尙搖籃期に屬し、文界一般の幼稚なるとともに、未だ此の詩風の直接影響を受くるに至らず。吾人は唯幽婉微妙奇峭妖艷なる一派の詩風として白眼に看過したりき。爾來十年、詩壇は日に新しきものを追ひ、既にテニズン、ヲルヅヲルス、バーンス、キーツを棄てて、ロセッチ、スヰンバーンに就き、ラファエル前派の詩風一時文壇の流行なりしに、今や轉じて、デカダン、サムボリストの名喧傳せられ、技巧過重官能過重の詩風世にもてはやさるゝに至りぬ。

三十八年、有明『春鳥集』を公にし、前年來此の新詩流を汲みて作れる所謂象徵詩を編み、之に序して其の詩見を表白せり。曰く自然と我とは一なり、自然の呼吸を我に感じ我の影を自然に見る。既に詩想に此の新意あらば、其の表現に新なる方式を要するはおのづからなる勢なり。かの音節格調措辭造語の新意に適はんことを求むるとともに、邦語の制約を寬うして近代の幽致を寓せ易からしめんとするは、洵に已み難きに出づ。視聽の官能は常に鮮かに常に生意を保たざるべからず。視聽は又相交錯して近代

人の情念に維り、こゝに銀光の音あり、こゝに劉喨の色あり。啻に心眼と心耳とあるのみならず、われは靈の香味をも嗅味の官能に感ずることあり。嗅味を稱して卑官といふは、官能の痲切を知らざるものなりと。斯くして「日のおちぼ」に詩人の信念を日月の光彩に比し、「朝なり」に白壁を吾が胸として壁に映ぜる魚河岸の景を敍し、「五月靄」に靄と朝戶の響とを藉りて戀情の發作と其の消失とを抒べ、「わが思ひ」に夏の炎熱を人の心に比べ、其の他「君にさゝぐ」「みなといり」「家根の草」等、皆感覺印象交錯の技巧を弄して何等かの暗示を寓せんとするに似たり。然れども彼れの創作は、彼れの詩見の實現と見んには尙渾成の域に遠く、所謂サムボリストの模倣としては象徵的技巧未だ完からず。發達の初期に於ける試驗的述作としては蓋し已むを得ざるに出づと雖、晦澁朦朧の謗は遂に免る能はざりき。

遮莫有明の詩觀と製作とは、疑もなく佛國サムボリストの紹述模倣なり。利弊共に繼承せる固より其の所なり。夫れ佛國サムボリストのパルナッシヤン詩社を壓倒して文壇に地步を占むるや、時人は彼のボードレエル一派の

詩人を稱してデカダンといへり。デカダンとは衰退の義なり、神經質の謂ひなり。世紀末の人心を浸蝕せる神秘の思潮、主我の傾向、現實の厭倚、發して知力の減退となり、神經の衰弱となり、情緒獨り盛にして官能過敏に陥る。其の結果思想と感覺との交錯となり、感情と官能印象との交錯となり、若しくは官能印象相互の交錯となり、こゝに灰色の思想あり、こゝに赤色の詩歌あり。さては光る音、響く色、匂ふ聲、心靈の味も舌頭に感ぜらるゝに至る。以爲へらくかゝる狀態の下に外界の事物に過して、茲に催起せられたる一種縹渺たる情緒を寫し取れるもの即ち詩なり。詩歌に重んずる所は、思想に非ずしてこの情緒なりと。かゝる幽婉微妙なる情緒を傳へんには、おのづから從來に異なる一新技巧の發達なるべからず。即ち官能的手段によりて讀者の神經をして或る情緒を起さゞるを得ざらしめ、この情緒の中におのづから作者の傳へんとする心的狀態を捕捉するを得しむるは、彼等の新技巧なり。故に詩歌の對象を直接描出することなくして常に象徵の技巧を用ふ。思へらく對象を明にするは詩の享樂の四分の三を

失ふなり。詩の享樂は其の暗示を解くの快なりと。彼等が只管形式の彫琢に勉めて、隱言微辭、縹渺たる韻致あらんことに腐心するも之が爲なり。此の作風の佛國に起り獨逸に入るや、墮落頽廢を以て之を斥けたる批評家少からず。曰く神經衰弱して主我の念のみ盛に、現實の官能に泥みて想像力思考力なく、徒に神秘を衒ひて朦朧含糊に陷る。要するに官能過重技巧過重の病的狂的の現象なりと。思ふに其の表現せんとする詩人の心的狀態と、之を表現するに用ひたる詩的技巧とが上述の如くならば、其の表現の形式に卓越群を拔くものなくんば、晦澁朦朧、同臭味の小範圍の人にのみ解せらるゝ狂的詩歌なりとの非難を招かんこと異むに足らず。『春鳥集』の作者等は即ち此の詩風を移植したるものなれば、所有特色と缺點とは共に其の粉本によりて窺ふを得べし。特に晦澁難解の謗りを聞くこと多かりしは、其の本源の旣に此の傾向を帶べろに加へて、象徵的技巧の未だ至らざるものありしによる。

此の詩風は有明に至りて意識的に本邦詩界に移されたり。然れども有明

の詩見と創作とは、柳村の紹介と飜譯に負ふ所少からず。柳村近年此の新詩派を推奬すると共に、『明星』『藝苑』等の諸雜誌に其の名篇を譯載し、當時の詩界をして佛國象徵詩の一斑を髣髴せしめたり。三十八年末に出せる譯詩集『海潮音』を見るに、ボードレエル、ヱルレエヌ、ローデンバッハ、ヱルハーレン、レニエ、モレアス、マラルメを始め、新詩派の譯詩最も多きに居る。同年又片山孤村『帝國文學』に獨逸象徵派を紹介し、角田浩々『讀賣』に之を論述し、此の詩風は漸く文壇に勢力を張り來り、翌年公にせられたる詩集『あやめ草』の諸詩人は、概ね此の傾向を帶び、曩に暗中模索唯漠然と神秘を戀ひ空靈を慕ひ、求めて得ざる動搖の聲を揚げたりし人人も、茲に至りて稍明かなる道途を見るを得、聊か之に安住して向ふ所を定めぬ。こゝに於てか詩界は、從來模倣したりし『暮笛集』の詩風を棄て、一轉して『春鳥集』の新傾向に就き、泣菫の如きも、從來の古典的情緒的作風より、漸く變じて象徵派的色彩を帶ぶるに至れり。之を當時の詩集『白羊宮』(三十九年)に徵するに、自然物特に動植物に感興を寓せて、其の中

おのづから人間生活の趣致を象徴せんとし、色香味觸の官能印象を其の上に見出でて、各〻の特色を感覺的に表現せんとする傾向著しきものあり、所謂自然の中に我を感じ我の中に自然を見んとする象徴詩派の面影を存す。『零餘子』『日ざかり』の如きは蓋し此の方面の代表的作品なるべし。

かゝる間に有明が象徴的技巧の完からざるもの漸く熟し來り、嘗てデカダン詩派の新彩に醉うて、事を見景を捕へては、直ちに何等かの象徴となさんと試み、或は事物に對して起せる情緒興趣を如何に象徴すべきかの問題にのみ苦心し、其の結果象徴と其の暗示せんとする對象との渾融を失ひたる缺點は漸く脫せられ、人の如く呼吸し痛苦する自然を藉りて人生をシムボライズする技巧は著しく進めり。此の間の消息は最近の詩集『有明集』(四十一年)に於て畧窺ふを得べし。かくて此の潮流は青年詩人の間に汪溢し、『明星』の作者多くは日常卑近の事物に實際生活の意義を暗示せんとし、或は銀行砲兵工廠を歌ひ、或は試驗場鐵工場を賦し、或は機關車川蒸汽を詠じ、總べて象徴的技巧の應用に苦心せり。

以上述ぶる如く我が象徴詩は實に佛國デカダン派の模倣に起り、新を追うて一轉化を試みんとせる時流に乘ぜるものに過ぎずと雖、又是れ當時思想界文藝界一般に亘れる世紀末の大思潮が、暝々の中、斯界にも其の波を揚げたるに外ならず。其の神秘的趣致といひ、主我的傾向といひ、官能的特色といひ、現實的風尙といひ、擧げ來れば一として第一節に述べし作風ならざるはなし。

第四節　自然派小說の源流

曩に時代精神論起り、實世間に切實に觸れたる作品を要求する聲の盛なるや、一方に於て政治小說家庭小說の起ると共に、他方に於ては從來硯友社一流の寫實小說も、亦著しく其の風丰を變じたり。次に樗牛等近代主義の文學を說き海外最近文學の輸入速りなるや、小說壇の新傾向は茲に新興自然主義の形を取りて現れ來りぬ。『初姿』（三十三年）以來作每に寫實小說を標榜せる天外は、其の作の卷頭に序して曰く、「自然は善でもなく惡でも

ない。美でもなく醜でもない。小說亦想界の自然である。善惡美醜の孰れに對しても、叙すべし叙すべからずと羈絆せらるゝ理由はない。唯讀者をして、其の官能が自然界の現象に感觸する如く、作中の現象を明瞭に空想し得しむれば足る。詩人は唯其の空想したる者を在りのまゝに寫すべきのみで、讀者の感動すると否とは其の關する所でない。詩人は描寫に臨んで其の間に一毫の私を加へてはならぬ」と。言ふ所描寫の態度に止まり、其の內容に及ばずと雖、主張の存する所を見るに、新興自然主義の一面を提へたるに近し。

然れども天外の作品はゾラ一流の科學的實驗小說なり。心理の描寫に加ふるに生理の描寫を以てし、或は遺傳の說境遇の論に依り、或は酒毒浸染生存競爭の理法を取り、科學的研究を以て性格事件の發展を辿らんとす。されば其の態度は頗る十九世紀科學萬能の思潮に順じ、最近の主觀的主我的傾向と相容れざるの觀あり。三十六年の『魔風戀風』三十九年の『コブシ』、共に一時靑年讀者間に喧傳せりきと雖、深く其の內容を檢する者、當

代思想界を覆ふ特殊の暗流を其の中に見ること能はず。特に『コブシ』の如きは、唯かの主人公の血管を環れる强烈なる遺傳の勢力が、不知不識の間に有爲の青年が向上努力の意志を侵蝕し、遂に彼をして力爭煩悶の後甘んじて之が犧牲たらしむるに至りし經路を描きしに止まり、長篇全卷遺傳説を祖述せんが爲に作られたるかと疑はる。されば天外の作は一代文運に對する關係甚だ深からず。唯其の主張に於て、從來の字慕句練文辭を以て讀者の涙を絞らんとする作風を排し、自己の想像の最も自然なる描寫を唱説せるの一事は、新興文學の源流を探るに於て看過すべからざる事象なるべし。

若し夫れ作の內容に立入り、露佛新文學の影響を具現したる者を求むべくんば、蓋し風葉の『青春』を推すべし。風葉は固と時代思潮の推移に鋭敏なる感受性を有する作家にして、先きに新ロマンチシズムの運動起ると共に、『醒たる女』『涼炎』を出せしが、爾來露國小說家の新作風を究め、三十六年『へそ日記』翌年『未成年』をものしてツルゲネーフの飜案を試み

三十八年遂に『ルーヂン』に暗示を得たりといへる大作『青春』を草しぬ。作者は主人公をして時代の病弊に侵されたる青年を代表せしめ、知力徒に進みて意力之に伴はず、感情旺盛なれども移り易く醒め易く、而も主我の念强烈にして時には冷酷なる行動を取ることある一性格を描いて委曲を盡し、天外が唯事象の表面をさながらに描寫せんと努めしに反し、現代思潮の內面に突入して其の缺陷を剔抉せんと試みたり。然れども唯時代青年の弱點を擧ぐるに急にして、未だ現代の如き時勢に生れ現社會の如き境地に育てられたる青年が、不知不識かくの如き性格を作りかくの如き缺陷に墮せざるを得ざる消息を描寫するに及ばざりき。時代の背景を髣髴せしめ、此の背景の中に人と爲りたる青年が悲慘なる犧牲者となり行く眞相を躍如たらしむるが如きは遂に之に窺はれず。爲に讀者をして單に斯かる性格の人を深刻に描寫せる寫實派の作品と相距ること遠からざるを感ぜしむ。特に作者獨得の艷麗なる筆致は、興味中心主義の作品に於ける技巧の精粹を盡くして、往々此の新性格の描寫と相乖離せんとする傾なきに非ず。要す

るに作者は現代生活の內面を知ること明なりと雖、其の中に沒頭して之に呼吸し之に感觸し、斯くして得たる自家の主觀を描出する新態度に出づる能はざりしなり。此の點に於て『青春』は正しく新舊兩作風の旋轉軸に在る者といふべし。

斯かる間に露佛新文學を研究して深く其の趣味を身に體したる結果、意識的に舊來の態度を棄てて新作風に就かんとする作家あり。花袋是なり。曩にニイチエ文壇に知られ自我發展主義の唱道せらるゝや、花袋は從來のセンチメンタリズムの作風を棄てて『重右衛門の最後』(三十五年)をものしぬ。主人公及び之に配せられたる一少女は我が文學に珍しき性格を帶び、特に少女は野獸の如き自然兒にして、其の主人公に對する關係などズーデルマンの『猫橋』を想起せしむ。次いで翌年短篇『女敎師』を出しゝが、是亦ハウプトマンの『アインザーメ・メンシェン』を模して孤獨寂寥の時代病を描けり。爾來花袋の態度一變し、三十七年「露骨なる描寫」と題して描寫の技巧を論じ、十九世紀後半の泰西新文學の技巧は、從來の修飾誇張を

破壞して偏に露骨自然を尙び、形式の彫琢を斥けて直ちに時代の內面生活の眞を描出するに力むと述べ、自ら之を本邦文壇に試みんと努めぬ。

然れども一般文壇は未だ此の新運動の意義を解せず。未だ其の價値を認めず。新ロマンチシズムの大なる破壞運動の後を承けたる我が評論界は、依然として混沌の裡に各〻其の道途に迷へり。此の時に方り未曾有の新彩を帶びたる一作品の出づるあり、之を動機として所謂自然主義の語は先きに第六章第四節に述べし者とは全然別種の意義を以て唱道せらるるに至りぬ。

三十九年春、藤村は長篇『破戒』を出して世に問へり。『破戒』は舞臺を信州に取り、特殊階級として穢多を排斥する舊思想の强烈なる狀態を描き、其の種族に生れたる主人公が、先輩の激勵理知の發達よりして、自己の素姓を恥とせざる信念を有ちながら、惡辣なる社會の壓迫に堪へず、痛苦煩悶、亡父の戒を破つて、隱し來りし素姓を告白するに至るといふ一種の新しき個人の哀愁を寫し出でし小說にして、之を行るに理路說明の主觀的筆致を以てせずして、力めて客觀的敍述の態度に出で、其の文辭も精練周到

を極めながら尙天外風葉の濃艶誇張を避けたり。げにや個人對社會の衝突は小說の題材としては夙に陳套に屬すと雖、「破戒」に現はれたるは別に新味の掬すべきありて、深く人生の嚴肅なる方面に著想し、痛切なる生活問題に觸れたり。夫れ從來の小說に於ける個人對社會の衝突は、多くは戀愛中心の現象にして、主人公は生活上の所有問題に關係を有せざる觀ありしも、此の小說に於ては即ち生活中心の事件にして、主人公は社會に生きんとする個人の欲求を懷いて、茲に湧出づる悲哀を名殘なく味へる者なり。換言すれば、新しき自覺に伴ふ生活の願望と之を毀けんとする社會の舊俗との衝突、及び俗習を破らんとする知識と舊慣に從つて一時を安うせんとする感情との爭鬪、此の內外二面の痛苦よりして癒すべからざる創痍を負へる者なり。『破戒』の新味は即ち此の點に存す。よし其の描寫の技巧尙精美に過ぎて所謂露骨なる描寫に遠く、作爲の跡往々露れて未だ僞らざる人生の表白と稱するを得ずと雖、泰西近代自然派の面影を傳へて新生命を文壇に寄與せる功沒すべからず。蓋し藤村の泰西文學を翫賞するや久し。先

年の作『綠葉集』中の短篇、多少露獨近代の韻致を移せり。而も其の傾向の明瞭なる色彩を以て一世を動かしたるは實に『破戒』に始まる。『破戒』出でて斯壇の形勢一變し、或は此の作を以て泰西自然派の問題的作品に近しと稱し、或は鄕土藝術の趣を具ふと唱へ、或は無戀愛小說と名づけ、多くは其の新彩を謳歌し、延いて從來顧みられざりし一作家國木田獨步の價値をも認むるに至りぬ。獨步は決して新進作家に非ず、前期夙に新體詩家として知られ、『國民の友』『國民新聞』に短篇を草し、既に三十四年『武藏野』三十八年『獨步集』を公にせり。然れども當時天外風葉の寫實小說、蘆花春葉の家庭小說の流行せし文壇には、何等の注意を惹かざりき。然るに三十九年短篇集『運命』を出すや、俄然評壇の賞讃を得、忽ち自然派の大家を以て目せられたり。蓋し獨步の作は當時一般の作品に比して著しき特色に富めり。一道の新彩を有せり。彼れの小說は世相の寫實に非ずして問題の解釋なり。情の幾微を描くに非ずして智の煩悶を描くなり。かの戀愛を生命とする所謂小說的人物を寫すに非ずして、痛切なる生活問

題に觸れんとするなり。興味に富める人生を描くに非ずして敗れたる人生の悲哀を描くなり。總べて因襲的古典的思想に反抗して卒直に人生の眞を暴露せんとす。思へらく從來の作、西鶴近松にせよ、紅葉露伴にせよ、人を人として描くのみにて、之が大自然と相繫る所に觀及べる者なし。偉大なる自然の壓迫にをのゝく人間を見得るに非ずば、其の作や空論に終らんと。乃ちヲルヅヲルスに赴きツルゲネーフに參し、一種の自然觀運命觀を形作りて之を短篇に披瀝せり。「空知川の邊」の如きは正に其の標本たるべし。「正直者」等に肉の力の壓迫を寫せるも、即ち人間の内部に存する自然力を見たるに外ならず。而して其の敍述は露骨直截、其の文辭は素朴簡明、直ちに思想の骨髓に透徹す。此の新味や實に『破戒』に存する其れと一道相通ずる者あり。特に自然の描寫往々神に入り、人生と渾融默會する所亦『破戒』と同じく、地方色天然趣味を重んずる當代の新要求に投合せり。要するに從來の小說と異なるは、嚴肅なる人生の眞實を觀照して內省考察をなし、其の結果を自由に大膽に敍述せる點に在り。然り、此の特色は『武

藏野』の當時より既に存し、爾來今日に至るまで未だ嘗て其の態度を變せず。會〻文壇の潮流盤旋して恰も暗合默契する所あり、作者をして忽ち名をなさしめたり。

思ふに獨歩の作品は、哲理を說くに小說の形を以てせる者、問題に對する感想を敍するに小說の結構を藉りし者、人の情感に訴ふるに非ずして理知に訴ふる者、之を文藝の立場より見て尙夥多の缺陷を有す。彼は思想の文人理知の詩人なり、技巧の詩人妙筆の作家に非ず。彼自らの言によりて見るも、彼は世人の稱する如き自然派の小說家に非ず。唯其の性格の然らしむる所、文界時流の如何に顧慮することなく、胸奧を衝き來る人間生活の嚴肅なる事象に對し、僞らざる自己を暴露する態度、及びヲルヅヲルスに骨を得て所有修飾を棄却せる簡勁素朴の文章が、會〻自然派と呼吸相通ふ所ありしなり。所詮彼れの自然主義は彼自らの人格より來れる者、學んで得たるに非ず。翌年又『濤聲』を刊して、一層平淡なる描寫を以て一層淺近なる事象に托せる人生の特殊相を發揮せり。

三十四年來起り初めたる文壇の新運動は、泰西新文學の輸入と相緣りて小說界に入り、遂に上述の如き革新を成しぬ。顧みて之を過去の小說に比較すれば、其の差實に鮮少に非ず。先に樗牛が文藝中心の主義を以て社會の所有事象を論議するや、文藝をして哲學的基礎の上に立たしめんと努め、一方に於て哲學者の視聽を文學に集め、他方に於て文學者を鞭つて哲學的評論を容るゝに足るべき意義内容を有する小說を作らしめんと力めぬ。爾來逍遙紅葉時代に尙多少殘存せりし戯作の臭味を擺脫するを得、描寫の對象從來と同一なるものにても、著想の上に一種の哲學的歸趣を示すに至りぬ。從つて以前は情緒偏重の傾ありて殉情の行爲に厚き同情を表せしに反し、今は著しく理知の分子加はり、同じく戀愛を描くにも單純なる情熱のみの行動の如きは興味を惹かずなり、生活問題など理知によりて起る苦悶を加ふること少からず。其の代りに自我の念獨り强烈となり、犧牲の念目に衰頽し、自殺情死の如き悲劇は漸く減退しぬ。又從來小說の主人公は多く無教育にして、其の活動の舞臺は主として下層社會若しくは遊里狹斜の

巷なりしが、今は人情活動の主體を比較的教養ある男女に取れる者多く、從つて舞臺は移りて上流中流の家庭又は社交界に赴き、過去の社會組織に在りては性情の自由なる活動を見難かりし上流社會教養ある社會にも、今は至る所に意味深き複雜なる人情の種々相を現ずるに至れる近年世態の變遷を其の儘に具現せり。且つ從前に在りては、新小說家は概ね青年にして、讀者評家も亦青年なりしも、今は彼等既に壯年となりしかば、往時の如き年少男女の夢の如き戀愛談に滿足する能はず。後進年少の作家讀者も亦思想の進步に連れて意義ある作物を要求するに至り、玆に所謂中年の悲哀を描ける者、壯年の主我的觀念を寫せる者を生じぬ。

第五節　俳諧派小說の出現

三十八年の初、文壇は新なる作家を小說界に見出でて、いたく其の類例なき新彩に驚かされぬ。夏目漱石は從來『ほとゝぎす』派の俳人として、若しくは單に英文學者として知られたりしが、此の年「倫敦塔」を『帝國文

學」に、「我輩は猫である」を「ほとゝぎす」に出し、續いて數篇の小說を公にするや、世人は其の俳諧趣味の汪溢せる新作風を見て、俄に之を推重し、即ち斯かる作風を導ける源泉を探りて俳人等の寫生文に想到し、時恰も虛子四方太等が「ほとゝぎす」誌上の寫生文が多少世の注目を惹けるに際しければ、寫生文の名忽ち文壇に重要なる意義を有するに至れり。されば今漱石が作品を敍するに方りては、勢之が傳統を尋ねて寫生文發達の跡を辿らざるべからず。

三十二年子規既に俳句革新の業を終るや、從來俳句に用ひたる客觀寫生の手法を散文の上に試み、名づけて寫生文と稱し、「ほとゝぎす」誌上主張と作品とを揭げて、俳人の間に之が研究を促しぬ。思へらく藝術の生命は外界事象に對して起せる感情を僞る事なく描寫詠出するに在りと。彼は此の藝術觀を以て新俳句を試み、新和歌を試み、時には小說をものし、繪畫を論じ、進んで寫生文を起しぬ。されば當時の所謂寫生文は、猶其の俳句の如く、客觀的態度を以て自然人事の相を捕捉敍寫し、其の間に作者の私

意を加へざらんとする者、言はゞ自然人事のスケッチにして、其の名稱の如きも繪畫に於ける術語を藉り來りしなりき。故に描寫の對象は客觀の事物をありのまゝに捉へ來れるものにして、從つて其の間に意義あり歸趣あるを要とすることなし。特に當時は尙同人間の硏究習作中に屬し、『寒玉集』『寫生文集』出でしも、文壇に著しき反響を見ざりき。されば『寫生文集』中「倫敦消息」を載せたる漱石の如き、おのづから此の系統に出で、筆力後年に劣ることなきに係らず、未だ其の存在を認められざりき。然るに漱石が『猫』を出して文壇を驚かせしに方りて、他の虛子四方太鼠骨等、亦文壇大勢の影響を受けて多少作風に新味を加へ、其の技巧に著しき進歩を示し、時恰も天外等が客觀寫實の主張あり、續いて自然派の主張の一部として描寫の眞實自然ならんことを鼓吹するに際しければ、其の間一味相通ずる所あり、從來文壇の一隅に伏在せりし寫生文俄に其の中心に紹介せられたり。三十九年文集『帆立貝』の出でしは正に此の時とす。

此の時に方り、寫生文の作家も、觀照の眼を人間生活其の物の上に開き、

其の描寫の手法を用ひて一篇の小說を作成せんと試みるに至り、內には漱石に粉本を得、外には文界新潮の眞實なる描寫を要求する聲に刺擊を得、玆に寫生文の上に立ち俳諧趣味を帶べる一種の小說を生み成せり。同年より翌年に亘り、虛子を始めとして伊藤左千夫、鈴木三重吉、寺田寅彥等が『ほとゝぎす』の上に試みたる者、佐藤紅綠が初作『行火』等、即ち是なり。世に稱して俳諧派の小說と言ふ。而して是等作家の巨頭として夥多の追隨者を出し、文壇の中心に至大の感動を惹起せしものは、言ふまでもなく漱石其の人なり。

漱石旣に『倫敦塔』『我輩は猫である』を出し、續いて『幻影の盾』『薤露行』『趣味の遺傳』『坊ちやん』『草枕』等を草し、三十九年『漾虛集』四十年『鶉籠』の二集を結びて世に問へり。其の一作每に生面を開展し來る作者の才筆は、根柢ある學殖と先例なき風格と相俟つて騷壇注視の焦點となり、年ならずして居然たる大勢力となりぬ。げに漱石の面目は多樣なり複雜なり。單純なる概括論を以て一刷毛に抹し去ること能はずと雖、其の間おの

づから三様の異色を分つを得べし。『猫』『坊ちやん』に奇警なる觀察、鋭利なる諷刺、氣品ある滑稽を具へたる英國趣味江戸趣味の筆致を窺ふべく、『倫敦塔』『幻影の盾』『琴の空音』『薤露行』『趣味の遺傳』等に、富贍なる想像の翼を張つて空靈神秘の域に翔り、人をして幽玄沈痛の傳奇界に遊ばしむる超現實的技巧を見るべく、『薤露行』『一夜』『草枕』等には、即ち縹渺たる一種の美感を讀者に起さしめ、暫く人生を忘れて或は典雅なる或は洒脱なる詩境に神往せしめんとする俳諧的態度の作風を認むべきなり。

『我輩は猫である』は、中學教師苦沙彌先生の飼猫が、先生を中心として其の周圍に存する種々の人物、及び彼等が演ずる雜多の事件に對し、自己の觀察を物語るといふ脚色の下に、作者自らの感懷諷刺を披瀝せる者にして、從て事件の發展人物の性格等に關しては、何等の統一せる趣向なく、言はゞ小説に非ず寫生文にもあらぬ一種珍奇なる敍述文なり。而も動物の說話に假托して諷刺の文を行る一種の様式は決して漱石の獨創に非ず。明治文壇に於ても、既に二十年代、逍遙が一寓意譚に此の結構を見たりき。

然れども此の樣式を活用して其の風味を十分に發揮し、且つ其の諷刺諧謔に淸新卓越なる者あるは『猫』に於て始めて之を見る。夫れ滑稽諷刺の作の本邦文壇に存するや久し。明治に入りても、前に新二得知あり、後に綠雨あり、各〻一方の雄なりしかども、畢竟前代戲作者流の繼承に過ぎず。漱石が日常偶發の事件に對して觀察を下すや、奇警鋭利、骨を刺し髓を抉らずんば已まざると同時に、飄逸冲澹にして餘裕綽々たる者あり、灑脫にして諧謔を極むると同時に、沈痛にして一種の悲哀を帶ぶる者あり。泰西ユーモアの風骨を得て氣品高尙に、理路を說いて剖析細に入り、實境を寫して揮灑微を穿ち、內容手法共に全然戲作の流風を擺脫せり。『坊ちやん』は『猫』と異なり、一の纏りたる小說的趣向を凝し、江戶趣味の眼を以て地方の人物事象を觀察したる者なれども、根ざす所の作風筆致は即ち『猫』の類なり。されば是等の作の根柢に働く者は言ふまでもなく理知にして、一切の事件に臨みて冷靜に觀察し、周密に說明し、事相の眞核に觸れて理知に滿足を與へずんば已まず。從つて其の文章自由達意を旨とし、思想の流露

する所に放任せる傾あり。

翻つて『幻影の盾』『薤露行』等の傳奇的作品を見るに、雄勁簡淨の致を極め、理路の委曲心狀の詳細を述べ盡すことなくして、直ちに感興の神髓を表白し來る。故に華麗豐艶の文辭を弄しながら些の弛廢なく、莊重幽玄の詞章を作りながら些の冗漫なく、句々讀者の胸奥を衝いて强烈なる印象を留め、從來動もすれば綏漫贅長の謗を得たる明治の口語文の爲に萬丈の光焰を揚げ、斯道の一生面を開きたり。作者が近英の文豪スチブンソンに私淑せりと稱する者、蓋し此の文體を生み出すに至れる由來の久しきを知るべし。獨り文致に於て前條の作物と異なるのみならず、描寫の對象に於ても、彼の現實界なるに對して此は超現實界なり、ロマンチックの空想界なり。然り、神秘空靈の想像を逞うせりと雖、露作の如く露骨なる理窟に墮せず、鏡花の如く無內容の幻怪に陷らず。思ふに犀利なる洞察の眼を以て人生を觀る、諷刺の中に悲哀あり、諧謔の裡に痛苦あるは洵に已むを得ざる所、而も暫く此の傷むべき人生の煩を避けて神往すべき別天地を覓め、

即ち思を遠くロマンチックの空想界に走するに至るは、是亦然るべき徑路ならずや。此の條に揭げし作品は正に是なり。

次に第三類の諸作も略右と同一なる人生觀の態度より出でし者にして、『一夜』『薤露行』の一半面は唯美しき感じを讀者に起さしむるに在るが如く、『一夜』は唯一種の情調を催起すれば足るなり。『草枕』亦然り。就中『草枕』は一畫家の旅行記に托して、かの自然の風光を觀ずる態度を以て人間を見んとする寫生文的描寫を試みたる者、所謂非人情的觀察點より人事自然を寫して成功に近く、作者が筆端に磅礴せしめんと努めし一種の美しき情調は遺憾なく表はれたり。其の剖析的筆致の微を穿ち細に入るは『猫』『趣味の遺傳』に似たりと雖、談理窮らんとする時一轉して叙景の筆を著け、進んで抒情に移り又還りて談理に入る所、詩趣饒かに神韻浮動し、誠に渾融の作に近し。作者自ら曰く、斯かる作品は東西兩洋に其の類例を見ずと。然り、此の作の獨創なるは、根柢に横はる人生觀照の態度の特異なる點に存す。今は方襄きに一たび傷むべき人生の煩を避けて傳奇的空想界に遊びし者、

向を轉じて俳諧的態度に出で、一切の現實を超脱して傍觀の地位に立ち、悲痛に富める人生に沒頭せずして靜かに之を薄布の彼方に押し隱す。人事の眞相に突入して作者も共に泣くは普通の態度なり。斯くては可惜感興を殺ぐべし。思へらく、人生は退屈なり。執拗なり。觸れては例の人情に墮す。須く人情の外に立ちて美しき感興の中に生くべしと。故に此の類の作にはおのづから餘裕綽々として迫らざる趣あり。

斯くの如く漱石の作品には三樣の異色を認むと雖、共の間相通ずる一道の光彩あり。到る所常識の影動き、哲理の閃きを見し、倫理(モーラル)の色を宿し、人生を傷むと雖極端に走りて虛無自棄に陷ることなく、諷刺辛辣を極むと雖執拗惡烈の弊に入らず。諧謔洒脫を盡すと雖蕩逸閑放に流るゝことなく、枝葉時に非常識に入り感情に榮え沒道德に繫らんとすれども、所詮常識の幹に據り智慧の士に立ち倫理の根に返る。一言にして之を覆へば大陸的特質に對する健全明快の英吉利的特質、西洋趣味に對する寡欲沖澹の東洋趣味、隨所に流露して獨得の光を放てり。されば佛國新派の流を汲める者の

如き神經質的デカダン的世紀末的傾向、若しくは露國近代文學を學べる者の如き自棄的虛無的蕩逸的傾向は終に之を免むること能はず。自然派象徵派の作品を讀み終りて之に移れば、宛然別乾坤の觀あり。而して此の特徵は畢竟作者自身の人格より來る。作者思へらく進步したる文藝は個性の僞らざる表現なりと。此の點に於て作者主觀の嚴肅なる表白を旨とする新興文學一般の流風と呼吸相通ふことと切なるを見るべし。

第六節　脚本界の新聲

脚本演劇の事を論ずるに方りて常に遭遭する一箇の困難あり。讀むべき文學としての脚本の發達を尋ぬる事と、劇場に實演せらるゝ脚本の推移を觀察する事と、常に同一步調に出づる能はざること是なり。劇場の實演は觀客其の他種々實社會と直接の關係を有して、必しも文藝の理想に順應する能はず。其の進步も發展も多くは實社會の進退措置に俟たざるべからず。故に新に現はるゝ脚本に在りても、上場せんが爲に書き卸したる者と文藝

の理想の上に立ちて作せる者とは、等しなみに論ずべからざるに似たり。然れども前者必しも文藝の理想を無視すること難く、後者亦全く讀み物たるを以て甘ずるに非ざれば、兩者を別ち論ずるの複雜多岐に陷るを避け、茲には唯文學の發達を大觀するの見地に立ちて新作の脚本を論じ、上場せると否との如きは暫く措いて問はざるべし。

先づ當時劇界全般の大勢を觀るに、かの團菊諸優の歿後、舊劇は精神的死滅を遂げ、而も之に代るべき新劇未だ起らず、新派俳優新演劇といふ者も、專ら小説物飜案物の上場に腐心するに止まり、俳優興行主の頭腦趣味素養、依然として舊態に止まり、未だ新興思潮に順應すべき新藝術を見ざりき。文學の新潮に對し絕大の影響を與へし泰西新文學も、此の社會に入りては反響極めて少く、斯界最新の趨勢を代表する飜案物も、僅に古典的なるシェークスピヤを模するのみにて、偶ゝドーデーの『サッフォ』、ペリコの『フランチェスカ』、マーテルリンクの『モンナワンナ』、サルドーの『祖國』等の新劇を取る者ありと雖、其は唯盲目的に西洋物を取りしに止まり、意識

的に新趣味を移植せんと試みしに非ず。三十九年以來大劇場設立の運動起り、俳優養成の計畫成り、女優輩出の機運を作りしも、是等は寧ろ實社會の要求又は見識なき興行者の計畫に出で、未だ純粹なる文藝上の見地より新思潮の必然の所產として現はれしに非ざりき。

由來脚本は凡ての文學の中最も後れたり。而して演劇は脚本よりも一層後れたり。『桐一葉』の出現（二十九年）は旣に新派小說に比して五六年の後れを見る。而も之を實演して多少の成功を收めしは更に八年の後（三十七年）なりき。今日に至りて『ハムレット』『ヱニスの商人』を歡ぶが如きは、正に十年を後れたりと言ふべし。妄りに好脚本なきを歎ずる勿れ。今の俳優は現存の脚本すら滿足に演じ遂ぐる者なきに非ずや。俳優の時勢に後ること啻に十年のみに非ざるなり。イブセン、ハウプトマンを理解し實演し得る俳優の出づるは前途尙遼遠ならん。

此の時に際し、確たる文藝上の見地に立ちて劇壇革新の運動に著手せし者あり。文藝協會演藝部及び每日新聞社內の若葉會即ち所謂文士俳優の活

動、佐藤紅綠、松居松葉の劇部に於ける事業是なり。文藝協會は早稻田大學の文科を中心とする文藝團體にして、三十九年逍遙抱月等によりて起され、最も力を演藝に盡し、同年及び翌年二回の試演を行ひ、春曙鐵笛薇陽等『桐一葉』『ヱニスの商人』『ハムレット』『新曲浦島』を演ず。就中春曙の公子ハムレットは卓絕なる藝術として斯界に認められぬ。若葉會に在りては、三十九年來、劇評家岡鬼太郎杉贋阿彌等『日蓮上人辻說法』(鷗外作)『吉田寅次郞』(月郊)『甕破柴田』(紫紅)『信玄最後』(同)を演じ、專門家に非ざる文士硏究の結果を公にせり。紅綠は三十九年來劇場作者として作劇に從事し、松葉は歐洲巡遊を終へて歸朝し、同じく外遊せる俳優左團次と結んで斯界に革新を行はんとし、四十一年『袈裟と盛遠』(松葉)『ヱニスの商人』(逍遙譯)を演じ、左團次のシャイロックに舊型を抛つて新工夫に就かんとする意氣を示しき。我が俳優の技倆は、斯くして漸うハムレット、シャイロックを演ずるに足る程度に進むを得たりしなり。

然れども是等の劇は吾人より之を見れば尙『忠臣藏』と相距ること遠か

らず。現代人の胸奥を動かす新思潮と相關する所なきに似たり。畢竟將に來らんとする新演藝を導く先驅たるに過ぎず。脚本の如きも、進步の程度到底小說と同日の談に非ざるなり。而して斯壇發展の斯くの如く遲々たるは、其の由る所一にして足らず。俗衆を以て過半數を占めらるゝ觀客と稱する者の向背は、演劇生存の第一要件なること其の一なり。文學上何等の見識なく、唯演藝興行を以て己が營利事業とする劇場主興行者が、絕大の勢力を俳優の進退脚本の選擇の上に有する事其の二なり。興行主俳優其の他劇部內面に於ける多年蓄積の情弊牢固拔くべからざるものあり、俳優脚本家等にして偶〻革新を企つる者ありとも、此の情弊の纏綿する所一蹶復起つべからざる悲境に陷るに至る事其の三なり。俳優を始め劇部全體の趣味頭腦、到底新文藝を理解し受用する能はず、所謂改良改革と稱する者、遂に何等の新意義を齎さゞる事其の四なり。所謂糞土の牆治すべからず、修すべからず。之を指導育成して新文藝を產み出さんが如きは、百年河淸を俟つに等し。寧ろ之を拋棄して別に全然新しき者を建設せんに若かず。是

に於てか從來の劇場を棄てて新試演場を建設し、從來の俳優を顧みずして新優人を養成し、從來の見巧者風の劇評家に依らずして新思潮に養はれたる新批評家に聞き、從來の脚本を改作飜案する事に蹈踏せずして新意義を有する新脚本を迎へんとする傾向、漸く斯界に現はれぬ。げに逍遙の言へる如く、今は折衷の時代に非ずして創始の時代なり。所有舊套を排して人情自然の表白に歸るべき時代なり。第一節に說きし新ロマンチシズムの思潮は此所にも其の發現を見るべきなり。

舊套破るべく、舊型壞つべし。而も舊演劇の中、一種の藝術として新劇壇に生殘るべき唯一の技あり。振事又は所作事と稱する舞踊劇是なり。此の者や泰西樂劇と一味相通ずる所あり、且つ恰も室町時代の能樂の如く、時勢の大波に推流さるゝことなくして能く百世の好尙を維ぎ得べき特質を具ふ。故に之を變化改良して一新面目を與ふるを得ば、以て新時代の詩的劇曲として鑒賞するに足るべし。『新曲浦島』『新曲赫哉姬』を作れる逍遙の努力は、此の見地より見れば極めて重要なる意義を有す。爾來逍遙は益〻研

究の歩を進め、『鉢かづき姫』(四十年)『新曲初夢』(四十一年)『新曲金毛狐』(同)等、幾多の試作を公にし、既に其の二三は試演を經たり。然れども此の新樂劇又は新振事劇は、むしろ音樂舞踏に近く、人をして忘我の境に神遊せしむるを旨とする者にして、吾人の生活(ライフ)にひたと相合して感ぜしめ考へしむべき性質の者に非ず。從つて最新思潮との交渉甚だ切ならず。若し夫れ史劇と社會劇とに至りては、所有過去の歴史を放棄して全然新建設によるに非ずば其の前途誠に危むに堪へたり。史劇社會劇に對する新時代の要求苟にすべからざるなり。

史劇脚本は白星月郊等二三の新作ありしも、特に注目すべきものなく、山崎紫紅に至りて多少の新彩を見る。『七つ桔梗』(三十九年)の一幕物七篇、及び其の後の數篇、皆史的事實に寓せて新時代精神を現さんと試み、多く個性の發展自我の滿足を主張せんとするに似たり。其の結構に於ても、主人公の運命が生死の境に窮れる一刹那を舞臺に取り、過去未來を包容せる大なる背景の中に主人公の境遇心理を描出する手法を用ひ、一生面を斯界

に開けり。斯くの如きは現時の俳優にては十分に消化演出することを難んぜんも、内容に於て最新思潮に觸るゝ所あるが故に、脚本としての發展は頗る刮目するに足る。唯紫紅の作には、未だ新興文學の傾向を具現したりと見ゆる者あらず。イブセンの社會劇が文壇に知られしより既に十年、其の飜譯を見しより既に五年、其の影響は寧ろ小說界に著しく、社會問題に觸れ解放せられたる新人を描ける新興文學の作風は、近時斯壇の中心に大波瀾を捲起せりと雖、劇界の進步は未だ之に動かさるゝ程度に至らず、脚本に於ても、小說に於けるが如き強き感化を受けざりしに似たり。然れども三十九年イブセンの訃音傳はりし頃より、ノラ、ブランド、オスワルド、レベッカ等の名頻りに提唱せられ、之に刺擊せられて多少其の趣を傳へたる脚本漸く出でぬ。泡鳴の『焰の舌』(三十九年)『斧の福松』(四十一年)、佐野天聲の『意志』『大農』『不死の誓』(同)眞山靑果の『第一人者』(同)『生れざりしならば』(四十一年)等、脚本としての價値及び實演の上に於ける成功の如何は暫く之を措き、兎に角新彩を斯壇に寄與せる功沒すべからず。

就中天聲の作は、皆社會劇にして、紫紅の史劇に比すれば、頗る近代的の情趣に富み、現代思想界の苦悶暗鬪を具象化して、强健なる個人意志の發展を主張する所、疑もなくイブセンの影響を見るべし。試みに『大農』の脚色思想を尋ぬるに、主人公は强烈なる個人思想を懷ける新人にして、宗敎には基督敎を奉じ、戰爭に捕虜となりて恥とせず。事業には大陸式の大農主義を取り、以て、二宮明神を奉じ武士道を尙び固有の小農主義を守る父妹村民に反抗し、所有嘲笑憎惡と戰つて其の主張を貫徹し、遂に個人の權威自我の勝利を謳ふに至るといふを以て一篇の骨子となす。從來屢、文學の主題となれる新舊思想の衝突は、此の作に於ては、生活問題社會問題に觸れて著しく沈痛嚴肅の色を帶べること『破戒』と同一轍に出で、近代泰西の自然派戲曲家の徑路を踏んでハウプトマン等の跡を追へる觀あり。而も此の劇の主人公は、『破戒』の主人公の如く消極的の薄弱なる人物に非ずして、積極的革命的なる自我の結塊なり。恰も『猫橋』の主人公の如く、又『人民の敵』『ブランド』の主人公の如し。我が脚本は、茲に至りて始め

て小說と略同じ程度に於て新時代の面影を寫せりといふべし。よし其の作意に於ても臺詞に於ても幾多の缺點を存すとも、新社會劇として極めて重要なる意義を有す。

恰も此の際雜誌『歌舞伎』にもイブセンを模せる社會劇を載せ、新進小說家たる靑果、峭刻の筆力を此の方面に揮へり。『第一人者』は同じくイブセンの面影を髣髴し得べき新悲劇にして、傳習の俗見と新人の思想との葛藤に想を構へ、『大農』の峻烈なしと雖、渾融の致おのづから備はり、『大農』の如く革命的ならずして寧ろ道德的なり。舞臺上の効果はとにかく、脚本界の新聲として亦推讃すべきなり。

斯くの如くにして、我等は四十一年の今日、漸く一般文學の趨勢に平行すべき一二の脚本を見るを得たり。然れども其の質に於ても又量に於ても未だ大に稱するに足らず。特に實演の方面に在りては夜は猶深くして容易に醒めざる觀あり。吾人は唯新代の大思潮が文學界の所有部面に革新の波を揚げつゝある現狀を叙し得たるを以て滿足せんとす。

第九章　新興の文學

第一節　思想界の新潮

三十八年空前の國家的大鬪爭も其の終を告げ、十年の宿志茲に報いて光榮ある勝利の桂冠を戴くや、國運の進歩曩日の比に非ず。國民自覺の强固なる亦二十七八年の往時に超えたり。されば戰後の文學界は活氣縱橫、前年來の沈靜を破り、幾多の新現象踵を接して起り、其の狀恰も二十七八年戰役の後の如くにして、而も一層の確固と充實とあり。三十九年「早稻田文學」再興せられ「文章世界」發刊せられて、抱月花袋、評論の筆を執り、「趣味」亦新刊せられて新作家の誘掖に努め、其の他文藝雜誌の起る者相繼ぎ、論壇の活氣茲に再び現はれ、和歌界に在りては「舞姬」「夢の華」の作者晶子正に圓熟高華の調を出し、俳句界に在りては從來文壇の一隅に限られたりし所謂俳趣味を擴充して文界の中心に大影響を與へ、新體詩界に在

りては前年に起りし象徴詩益〻世に行はれ、小説界に在りては特に眩曄燦爛、或は自然派の先驅と言はるゝ『破戒』『運命』を出し、或は俳諧派と言はるる『漾虚集』『草枕』を出し、或は獨創の新味を斯界に齎したる正宗白鳥を出し、或は天外の『コブシ』、宙外の『月に立つ影』、二葉亭の『其面影』等、各〻趣を異にする長篇を出し、其の他新進作家の起る者十數にして止らず、演藝界に在りては、文藝協會成りて劇壇の刷新を計り、大劇場設立の議熟し、脚本募集の擧起り、文士演劇略〻成功の緒に就きて專門俳優に刺撃を與へ、樂苑會成りて歌劇を本邦藝壇に移さんとし、評論界に在りては自然主義論始めて盛に、思想界に在りては自稱神佛の論あり、宗教文藝の交渉論あり、文藝道德の交渉論あり、總べて人生觀上の主義論頻りに討究せられ、通じて之を見るに新興の氣勢何れの方面にも滿ち充ちたり。正に是れ百花新芳を競ふ時、文壇多望の春なり。

然れども當時の思想界文學界は、戰勝に醉ひ太平を謳うて高歌亂舞するが如き空虚の者に非ずして、大戰終局を告げ人心漸く沈靜するに及び、國

民がはたと面前に遭遇したるは、夢の如き樂境に非ずして、大負擔を雙肩にして苦鬪すべき斷崖の上なりき。暫く耽りつゝありし快き幻想より醒め來りて、一朝現實の苦しきに遭會する者、誰か痛切なる哀感に觸れざらんや。況んや文明の進步は社會問題の複雜なる交涉關係を惹起し、交通の發達は泰西諸國の社會狀態をして直に本邦に影響する所あらしめ、是に關する學者文人の論議創作は月を閲せずして我に渡來するをや。戰後の社會的大變動は、一として人生の嚴肅なるを思はしめざるなし。げに人生は嚴肅なり、遊戯に非ず。山鳥の尾の長々しき行列を作りて五十三驛を練り行ける悠遊太平の世は夢の如く去りぬ。憲法發布の何事なるかを解せずして唯めでたし〳〵と醉泣きせし景氣よき世も亦夢の如く去りぬ。生活問題の壓迫は所有空想を打破して赤裸々に吾人の前に暴露し、人をして深刻なる人生の悲哀に觸れしめずんば已まず。所謂自我意識の發展、個人思想の發達は、右に列叙するが如き狀態に在りては免るべからざる自然の現象なり。此の際に於ける我が思想界は果して如何なる特質を帶ぶべきか。情緒偏重

の詩的空想時代は既に去りて理知の力著しく發達し、如何なる事物に對しても情緒の盲動を許さず、覺醒の眼常に開きて惑溺すること少し。其の自我の念強きや、從來の思想が多く他人本位にして、君父國家を中心とせるに反し、言動總べて自己を本位にし、自我の發展を求めて屢〻舊道德を破らんとす。曩に日淸戰爭に勝つや、國民的大自覺を喚起せしも、日露戰爭に在りては、戰勝に慣れて國民的自覺は前戰役の時程に大ならざりき。却つて世界特に歐洲大陸の思潮を受けて個人的自覺を喚び起しぬ。斯くて個人の覺醒は人生の觀察に異色を呈せしめ、痛切なる主觀の甚彩を漲らしむ。三十四五年の當時、樗牛が豫言的高調を以て呼號せし狂飆時代の個人思想は、今に至りて、確たる根柢を現代人の思想に据ゑぬ。

斯かる時勢に生れ斯かる思想に根ざせる我が文學はおのづから種々の特色を帶ぶ。試みに之を列叙すれば、第一、前期の文學は理想を戀うて得られざる現實の苦痛を描きしが、今期のは傳統の理想を抛つて現實の眞に就き、常住不變を戀ひし昔に反して變化ある刹那を喜ぶに至れり。第二、常

て觀念小說出現の當時既に自我意識の發達するあり、人生を批評的に觀察して共の缺陷多き慘憺たる狀態に逢着し、乃ちかの悲慘小說深刻小說の作風を起すに至りしが、今は共の傾向一層著しく、熾烈なる自我意識が生活問題の活火に觸れて忽ち破壞的の人物を作り、虛無的の人物を作り、神經質の人物を作り、敗殘の人物を作り、デカダン小說頽廢小說茲に起る。第三に、逍遙紅葉時代の文學に在りては、作者と作物との間に多少の間隔あり、作者は自己の經驗せる事象を閑却して故らに材料を他の世界に求め、斯くて知り得たる所の者を說示し物語る如き態度に出でたりと雖、今の文學は作者が直接經驗せる人生の一片を赤裸々に表白する者にて、作者と作物、事實と文學、二者の間分つべからざる密接の關係を有す。即ち今の文學は僞らざる自己の告白或は一人格の自然なる表現にして、換言すれば嚴肅なる主觀の所產なり。第四に、從來の文學に在りては主として靈の方面に筆を著け、肉の力の强大なる事實を描くこと少かりしが、今は肉靈不二の說をなす者あり、官能尊重の論をなす者あり、所有生存慾は心靈と同等

の勢力を以て文學に入り來れり。第五に、從來の文學は興味中心の文學にして、唯感情に訴へ涙に訴へ、所謂小說的事件を探り求めて遊戲の境に入らんとせしも、今の文學は運命を靜思して人生を感得せしむる者、理性に訴へてひたすら事象の眞を得んとす。嘗て『小說神髓』の時代に在りては心理現象の表面を寫して滿足し、天外に至りて之に生理の事實を加ふる迄に發達せしが、今は更に人性全般の事象を顧み、根柢に立入りて內面描寫を試みるに至りぬ。されば『膝栗毛』に興を催し「涙を以て主眼とす」と標榜せる小說に感涙を絞りし時代は夢と過ぎて、嚴肅なる人生の眞實に觸れたる者に非ずば吾人を滿足せしむる能はざるなり。所詮文學はもはや閑人の閑事業に非ず、人をして喜ばしむるに非ずして考へしむるなり。第六に、前期寫實主義に比ぶれば、人生を觀る態度おのづから異なり、寫實主義に在りては人生と自己との間に或る距離を保ち、客觀的態度を以て之に對せしも、今の文學に在りては、自己の中に人生の全き相を見出で、價値の判斷なしに、結構脚色なしに其の眞相を暴露す。寫實主義は客觀の事

象を尊重し、之を全人生として取扱ふも、今の文學は自己が自然人生の事象に觸接して起す所の種々の曲折動搖を一の客觀的事實と見倣して之を文學の對境となす。即ち自然人事と自己との渾融合體せる者を全人生として取扱ふ。今の文學が自己暴露の文學となり、問題提供の文學となり、無解決の文學となり、無脚色の文學となり、主客兩體融合の文學となるは是が爲なり。更に其の技巧に就て見るも、或は露骨なる描寫と言ひ、或は無飾藝術と言ひ、何れも誇張を避け粉飾を去り、曲げず僞らざる事象を平淡達意の文辭に寓せ、白描素寫、直ちに事實の裸體的表現をなさんとす。

上述の如き文壇の新傾向は、世に稱して自然主義と言へり。或は自然の名に拘泥して單に之を客觀主義と解し、選擇せざる事象の寫眞的描寫をなす者と誤るあり。或は泰西文壇に於ける十九世紀後半の自然主義（ナチユラリズム）と異なるを難ずるあり。或は新傾向の一斑のみを擧げて全豹の價値を定めんとするものありきと雖、我が新興文學は斯く一口に說き去らるべき單純なる者に非ず。由來を有し歷史を有する一個文學上の大事實なり。上述の解說尚其

の要を悉くすに至らざるを思ふ。蓋し狂飆時代の新ロマンチシズムは、硯友社一派の舊文藝觀に對する新文藝觀にして、同時に儒教武士道等の舊人生觀に對する新人生觀なりき。而も舊文藝舊人生觀に對する破壞の運動を開始せしのみにて、未だ具體的に新文藝新人生觀を立するに及ばざりき。自然主義を標榜せる論客は、其の後を承けて舊文藝破壞の運動を續け、長谷川天溪は『太陽』に據つて幻像の破滅を論じ破理顯實を提唱し、泡鳴は『神秘的半獸主義』(三十九年)を著して、肉心不二半靈半獸の人生即藝術主義を呼號し、花袋『文章世界』に據つて無理想無目的を標榜し、抱月『早稻田文學』に據つて新主義に美學上の根據を與へんとせり。時會、藤村獨歩漱石等新作家の舊風を擺脫せる創作あり、之を動機として論壇俄に色めき、苟も文藝に從事する人々は爭うて之に關する論議をなし、舊人生觀舊文藝觀の一切を破壞し盡さんとする運動猛烈を極めたり。樗牛等の豫言的運動は、今日始めて鮮明なる色彩と重要なる意義を有せる一般的運動となれりと言ふべし。されば自然主義は、單に文藝上の新主義たるに止らずして、

又人生觀上の新主義たり。此の主義や、所有傳統を破壞して後に起りし新自我の所生なれば、即ち解放せられたる新人の人生觀にして、物心合一肉靈一致、自己は唯全一體として存するのみ、心性は知に非ず情意に非ず、又全一體として存するのみ、現實の外に理想なく眞の外に善美なしと稱する一元的新見地に立てる者なり。

第二節 新興の小說

自然派文學は論議のみことゝしかりしも、未だ世の矚目を値すべき創作を見ざりしが、四十年に至り、評壇に於ける此の主義の鼓吹者花袋、『隣室』『少女病』『蒲團』『一兵卒』等を草し、所謂自然派小說の一片を世に示せり。『隣室』と『一兵卒』とは、將に病歿せんとする礦夫と兵卒とを描きて、生理的壓迫の强烈なる苦痛が所有精神的心靈的の努力を推倒し行く消息を寫し、『少女病』と『蒲團』とは、家庭に興味を失ひ新時代に葬られんとする中年孤獨の感を敍して、之に伴ふ生理的衝動の壓し難き發作に及び、其

に自意識の盛なる現代人の生活の悲哀に觸れ、前章に擧げし『女教師』の續を繼ぎて更に一轉歩をなせり。特に『蒲團』は、作者の心的閲歴を客觀化して、僞らざる自己の大膽なる告白を試み、作家と作品とが有機的に渾融すといふ自然派の態度を最もよく代表する者にして、一篇の材料盡く作家を中心とする現存の事實に出づ。而して主人公の性格及び行動にはおのづから磨すべからざる時代の影あり。此の點に於て、『蒲團』は、夥多の缺陷を有するに係らず、新興自然派の最初の見本として見るに足るべし。

同年藤村『並木』の作あり、推移り行く時代の洪濤が遠慮なく舊人を倒して進む有樣を描きて、中年の悲哀を名殘なく現はし、獨歩『疲勞』『波の音』『竹の木戸』等の作あり、些末平凡なる事實を描きて其の背景たる現代人生の大なる影を暗示し、例の鋭利峻峭の筆を以て生の悲哀倦怠を痛切に寫す。風葉は『おと姬』『解脱』等の短篇、『天才』『戀ざめ』等の長編を出して、『青春』以來益時代の新潮に適應せんとする努力を示し、或は『蒲團』に見えたる如き中年の戀を描かんとし、或は壯年者の青年に對する嫉妬を

寫さんとし、就中『天才』には、倦怠と疲勞とに陷りたるデカダン的青年作家と、生活の苦痛に壓迫せられながらも自意識の飽くまでも强盛なる青年評論家とを中心として、現代文學者の生活の悲慘なる一面を刻劃に叙し、而も其の作風從來の爛熟なる技巧を破棄して白描素寫の新風を試みたり。秋聲は淡々として白湯を呑む如き筆致、寂寥にして沈欝なる作風、未だ文壇に其の價値を認められず、從來唯深刻沈痛なる人生の半面を寫せる小說家として知らるゝのみなりしが、新興文學の文壇に迎へらるゝや、會〻之に暗默契合する所あり、俄然として世に知らるゝに至りぬ。此の點に於ては頗る獨歩の出處に似たり。其の北國的陰欝の生活、心身上の劣等者の廢頽の生活を叙するに、獨得の寂しく沈みたる筆致を以てする所、露國文學と一味相通ずる點あり、『おのが縛』『焔』『獨り』『犧牲』『凋落』等の長短篇、何れも孤獨なる自我の寂しみを描き出で、其の徹底せる人生觀、人をして深く冥想せしむる力を具ふ。眞山青果は新進の作家にして『南小泉村』に僻村の生活を描き、ツルゲネーフを想起せしむる筆致を以て一躍斯壇に名を

なし、次いで『敗北者』『茗荷畑』等の短篇をものし、疲れたる生活の哀愁に想を寄せたり。以上は皆四十年、花袋の諸作と同時に起りし現象にして、自然派の特色を發揮して新運動に寄與する所少からず。
然れども花袋等の作品は未だ全然舊風を擺脱せりと言ふべからず。『蒲團』の如きは、當時自然派作家の態度を具現せる者と稱せられたれども、尙センチメンタリズムの餘弊を殘し、或は描かんとする究竟事象を暴露するに急にして、概念的説明の筆を行り、自己客觀の態度未だ十分ならざる者あり。此の點に於て正宗白鳥は卓出せる新作家と稱せらる。白鳥は三十七年の頃始めて文壇に知られし新進にして、四十年より次年にかけて『塵埃』『獨立心』『安心』『玉突屋』『何處へ』『五月幟』『世間並』『明日』等、即『紅塵』『何處へ』二集に收めたる短篇を草し、何れも自己經驗の上に材を求めて、些細平凡なる事象に全人生を暗示するが如き趣あり。彼れの人生を觀るや、冷靜なり、覺醒的なり。反抗するも甚しからず、憎惡するも極まるに至らず。好んで一切の刺擊に對して何等の興味を感ぜざる寂しき人生を描く。

蓋し、チエホフに私淑する所最も深きなり。而して其の描寫の態度は、唯示さんとする事象の生命を、素朴なる筆致を以て其の儘に直寫するのみにして、決して之を說明註釋することなし。

自然派の創作は白鳥に至りて略成熟したる標本を得たり。此の時に際し、更に之に加へて新興文學の發展を示すべき二個の作品を得たり。花袋の『生』と藤村の『春』と是なり。『生』は、作者の藝術に對する主張、即ちゴンクールの態度を學んで、現實に於ける自己の經驗を唯印象のまゝに平面的に描寫し、而も事象其の物のみにて讀者をしておのづから深く考ふる所あらしめんとの主張を實現せんと試みたる者にして、材を一家庭の親子兄弟の關係に取り、古葉凋落して新芽の發生する生の相を描き出でたり。之を讀めば人類各個が强固なる生の執着、親子兄弟と雖畢竟自己を本位として別別に各個の生を營むに努力する生の執着を窺ひ知ると同時に、大自然力の强壓が默々の裡新陳代謝を行うて止まざる人生の全相を名殘なく味ふを得べし。『春』は作者が從來の技巧を棄てて、自己生活の經驗を直寫するに印

象的粗描を以てせんと試みたる者にして、雜誌『文學界』の同人が新思想新文藝を鼓吹せし時代、思想界の曙、文藝界の春とも言ふべき時代を背景となし、此の運動に與りし若き人々の生活、即ち人生の春ともいふべき者を描出し、貫くに作者自身の生活を以てせり。之を讀めば、嘗て人生を論じ戀愛を談じ、所有舊文藝を破壞し、所有習俗を打破せんとし、健闘の極遂に時代の犧牲となりにしロマンチックの詩人北村透谷を中心とする精神的運動の消息おのづから思ひ浮べられ、ロマンチックの藝術生活と壓迫し來る實際生活との扞挌に懊惱せし作者が青春時代の消息おのづから回想せらるべし。上掲二作品は、共に作者の舊風を擺脫し、自然派の自己客觀の態度、印象的描寫の筆致を比較的によく表出せる者と稱せらる。

現時自然派の發展は大略茲に止まる。顧みて既出作品を通覽すれば、僞らざる自己の表現、飾らざる眞實の描寫と稱する中にも、特に廢頽哀愁の一面に馳せ、獸性解放の一角に赴き、デカダン人物の一方にのみ行くの觀あり。何が故に然るか。或は曰く、こは其の師として學べる泰西文學其の

物の傾向を模倣せしのみ。十九世紀大陸文學の自然派は、人生の現實を重んずるの極、獸性を描くを避けず、自意識發達して個性を重んずるの極、偏倚病的の人物を寫すを辭せず、實際生活を重んずるの極、疲勞孤獨の生活を筆にするを拒まず。當時社會の實狀正に然りしが爲なり。加之彼の國特に佛露二國の實情は、迷信に囚へられ、宗教に囚へられ、社會的若しくは政治的の壓制束縛を受くること甚しきを以て、其の反動として虛無的反抗的肉的病的の文藝を生じたるなりと。或は曰く、豈啻に佛露文學の模倣とのみ言はんや。我が國現時の社會狀態は正に斯かる文藝を起すべき素質を具ふ。曩に第三期初頭に方り、所謂深刻小說悲慘小說の行はれしは、洋洋たる戰勝の歡樂の中、既に急激なる文明の進步に伴ふ夥多の犧牲者を出したる當時の社會狀態の反映なりしが、今や我が文明の偏倚的進步、往日の比に非ず、覺醒の眼に映ずる社會の現狀は疾痛すべき事象に滿ち、生活の實況は哀傷すべき葛藤に充てり。生の壓迫は個人をして自覺せしめ、習俗を打破せしめ、赤裸々の態度を以て人生に向はしむ。此の時に方り、眼

前に曝露し來る現實の眞相を見ん者、悲哀痛苦の聲を放たざらんと欲するも能はざるなり。特に新生を翹望して一切の因襲を破らんとする時、事の容易ならざるを知り、或は舊習を破るも之に代るべき新人生の容易に實現し難きを見ては、誰か不安煩悶の聲を揚げざらん。透谷樗牛が十五年乃至七年以前に嘗めたりし苦悶の味が、今日遂に創作の形を以て現はれし事、偶然に非ず。且つ夫れ嚴格なる過去社會の桎梏より解放せられしのみにて未だ新秩序に訓練せられざる個人が、斯くの如く放縱懷疑に流るゝも亦已むを得ざるに出づと。思ふに、兩者各一面の理を闡明せるもの、生の痛苦は古今東西を通じて渝らざる大事實なるべしと雖、近時文明の爛熟は一層之れを切實ならしめたり。而も現代自意識の强烈なる、個人は過去人物の如く遁世自殺を學ぶ能はず、飽くまで世に生きんとする願あり。茲に悲哀起りデカダン傾向生ず。自然派の作品が理論の廣汎雄大なるに似ず、相率ゐて破壞廢頽の一面にのみ趨せしは即ち是れが爲めなり。

新興文學の主要なる一面をなせる自然派小說に關する論述は茲に筆を擱

き、轉じて他の一面なる俳諧派小說の發展を辿らん。右に敍べし人生の眞相は、俳諧派作家も亦之を洞察して近代的哀愁を身にしむ。然れども之を觀照する態度、若しくは之を文藝に表現する態度は、全然自然派と趣を異にし、現實の眞を赤裸々に暴露するを避け、美しき薄布を隔てゝ之を觀んとす。故に回避的態度と言ふ。現實の事象に沒頭熱中せず、冷靜に傍觀す。故に非熱情的態度といふ。冷靜に傍觀すと雖、淸淡溫藉の襟懷を存して一種の情味あり。故に微溫的態度と言ふ。事象の外相に棄て難き逸興を感じて內部意義の深きに入らんとはせず。故に低徊的態度と言ふ。其の他或は非人情的と言ひ、或は大人對小兒的と言ふ者、皆此の人生觀照若しくは文學製作の態度を指せるなり。されば此の作風に出でたる文學は、多くは人生の奧底に達せずして所謂觸れぬ作品となる。然れども全精神を盲目的に傾注する事なく、理性の眼を開いて一段の高所より全局を瞰下すが故に、餘裕ある作品となる。作者の態度既に右の如くなれば、從つて描寫の事象の意義內容に重きを置くよりは、寧ろ、如何にして事象より得たる作者の

感じを表現せんかと言ふ事、即ち描寫の技巧に全力を注ぐ。事象の無脚色無結構を觧せざる所は自然派に似たりと雖、表現の技巧に腐心する所は全く之に反す。以上擧げ來りし俳諧派の特質は、即ち東洋趣味の特產にして、一たび俳句となり、二たび寫生文となり、三たび小說となりて斯かる發展を遂げしなり。子規が鼓吹せし俳諧文藝の生命は、今に至りて明治文壇の中心に影響を與へたりといふべし。

虛子の『鷄頭』に收めたる短篇は、此の種の小說の主要なる者にして、漱石の作品と共に此の派を代表す。然れども彼等の態度は、四十年に入りて著しく色調を變じ、主觀的傾向を加へ、徹底的筆鋒を磨き、現實生活の內面に肉薄せんとする趣あり。即ち漱石の『虞美人草』は、全幅の苦心を文章に集め、妖艶の中におのづから薄命の韻を存する一種の感じを表現せんと試みし中にも、一味人生の根本に說き入らんとする風情あり。『野分』『坑夫』に至りては即ち嚴肅なる現實生活に觸れんと試みし者にして、『鷄頭』の二三篇亦此の傾向を帶ぶ。虛子の『俳諧師』は目下此の傾向の最も發展

せる者にして、材を新俳句勃興當時の俳人の生活に取り、恰も『春』が『文學界』同人の運動を描きしが如く、日本派俳人の文學運動を寫し、之を行るに印象的筆致を以てし、頗る近代的風趣に富む。『生』及び『春』と並べて新興文學の一方の代表作とすべし。

二葉亭の創作『其面影』(三十九年)『平凡』(四十年)は、評壇の一部より自然派の作品を以て目せられ、作中人物の自意識强きこと、人物及び事象に現代人の生の悲哀おのづから現はるゝこと等を、其の特色として擧げらる。然れども斯くの如きは新興文學の通性にして、自然派作品に限るに非ず。『其面影』『平凡』の如き、若し類を以て別つべくんば、寧ろ俳諧派の作品に近き所あり。試みに其の人生觀照の態度を見るに、人生を洞察して一段の高所より瞰下し、世は畢竟斯かる者ぞと冷かに說示する趣あり。即ち所謂非熱情的態度、大人對小兒的態度、餘裕ある態度なり。而も其の態度强きに過ぎて往々人生を侮り人物を弄ぶが如き弊に陷り、人生に對する嚴肅なる觀察、人物に對する溫藉なる同情を缺き、動もすれば冷嘲惡謔に陷

らんとする嫌あり。次に之を表現する技巧を見るに、精練優麗、老熟の極に達し、時に內容を離れて獨り其の妙を恣にせんとす。是れかの露骨描寫排技巧を主張する自然派との間に超ゆべからざる鴻溝を穿つ者と言ふべし。蓋し是等は決して世の讃稱する如き新興文學の佳什に非ず。往年の作『浮雲』の作風を追うて唯一歩を進めたるに止まる。其の價値はむしろ絕妙なる技巧に在り。

小說の作家には尙小山內薫、小川未明、水野葉舟、其の他新進の靑年甚だ多く、前期以來の新體詩人にして指を小說に染むる者亦少からず。女流作家も二三輩出するあり。其の作風多少差異あれども、皆近代的色調を帶びて新興文學の特質を存す。斯く新興文學の榮え初むるや、從來の作風を改めざる者漸く凋落し、宙外に長篇『月に立つ影』の作あり、鏡花に『春晝』『草迷宮』等の作あり、さすが往年の筆力を墮さずと雖、遂に新代の好尙に適せざる觀あり。澁柿園の歷史小說は依然二流以下の讀者に歡迎せらるれども、文運の大勢とは全然相關せず。

飜つて新體詩界を觀れば、かの鋭敏なる官能神經に訴へ人生の荒廢痛苦を歌ふ佛國デカダン詩派の遺流を汲む者尙斯壇に榮え、其の先達有明は『有明集』の諸篇に於て其の最も發達したる象徵詩歌の標本を示しぬ。然れども象徵詩は、畢竟一種の新技巧を詩界に導きし者なれば、詩の內容の進步に對して幾何の貢献を爲しゝかは、蓋し疑問に屬す。故に末流誤つて象徵の技巧を試みんが爲に象徵詩を作するの弊を生じ、甚しきは單純なる譬喩を以て象徵と思ひなすの謬りに陷る。勿論現代人の實際生活に觸るゝに至りしは、內容に於ける一進轉步に相違なしと雖、象徵技巧の硏究と晦澁難解の誚を免れんとする苦心とは、おのづから內容に對する注意を壓倒せんとする傾あり。是に於てか內容の根本的革新を稱ふる者詩界に出でぬ。泡鳴卽ち是なり。

先きに自然主義の人生觀藝術觀を發表せし泡鳴は、四十年に入りて之を

詩歌に擴充し、自然主義的表象詩を提唱して、所謂苦悶詩又は内容的デカダン詩を作しぬ。曰く、世に絶對なる者あることなし。人は刹那刹那に於ける心的活動に生くべし。而も其は情意に非ず、知に非ず、心性全體刹那の活動なり。熱情のみなるは少年青年の事なり。センチメンタリズム、ロマンチシズムの事なり。壯年の今は情熱知熱共に活動する熱想あらざるべからず。全心刹那の燃燒は即ち人格なり、行爲なり、詩なり。斯くして物靈合一肉心不二の藝術的妙境に至るを得べし。其の刹那の心境をさながらに表白せる者、之を自然主義的表象詩といふと。詩集『闇の盃盤』（四十一年）は、即ち此の刹那主義の人生觀を體現して、知熱情熱同時に燃えたる心熱の面影を寫さんと試みたる者なり。要するに作者の所謂苦悶詩は、現代人の哀愁を湛へ自家の生活の告白をなせる點に思想上の新味を有す。之を大局より見れば、藝術界全般を革新せんとする自然主義の洪波が、今や新體詩界に寄せ來りしものと言べく、所有古典的詩歌及び技巧的象徴詩に對する破壞運動の先聲と見るべし。されば泡鳴の詩論の如きも、獨り詩歌

に對する特殊の觀察に非ずして、普遍なる藝術觀なり。自然主義的表象の說は總べての文學に通ずべし。泡鳴は之を詩界に導きて先づ內容革新の運動を起せるなり。

然れども此の運動は廣く詩の內容に關し、未だ新體詩といふ特殊の形式に關して特殊の考察をなすに至らざりき。內容の激變右の如きに際し、依然として舊樣の詩語詩形を取る者、其の間豈扞挌なくして終らんや。小說に於ける自然主義の運動は、內容を一變すると同時に、其の表現の形式をも一變して全然新生の第一步に復らしめぬ。新體詩亦遂に此の事なかるべからず。思ふに新體詩が朦朧晦澁の非難の下に讀者社會に敬遠せられたるや久し。詩歌界最も發達すべき新文學たる新體詩が、文壇の大勢力たる能はずして少數の讀者にのみ鑒賞せられし事多年、象徵詩に至りて其の傾向の極點に達せり。當代の作家自らこゝに反省する所あり、表現の技巧に種種の硏究を試み、用語句法の上に種々の工夫を廻らし、如何にして、晦澁難解の域を脫せんかに腐心せりと雖、形式の彫琢愈〻細に入りて讀者の心胸

に觸るゝ者却つて失はれんとす。『有明集』の渾成を以てして尙此の缺點を免れざるなり。泡鳴に至りて詩の内容を一新せりと雖、尙同じく世に解せらるゝこと少く、其の他幾多靑年詩人の努力ありきと雖、一として此の非難を解くに至らざりき。かくて新體詩は漸く文壇の中心より遠ざかり、新興文學が冲天の勢を以て世に布き、從來斯界の一隅に潜みし寫生文すら文壇の中心に若干の影響を與へしに係らず、益〻讀者社會と乖離せんとす。詩人は必ずしも其の新感想の一般社會に解せらるゝを要せずと稱すと雖、新體詩其の物の日に〳〵文壇の中心に遠ざからんとするを見ては、詩人たる者如何ぞ現狀に安んずべけんや。而も從來彼等が試みし詩律詩形に關する所有試みも、表現の技巧に就ての慘憺たる苦心も、内容一新の目覺しき努力も、遂に其の功なきを見ては、深き懊惱と懷疑とに包まれざらんと欲するも得べからざるなり。

退いて新體詩が讀者に解せられざる理由を索むるに、或は思想の上に在り、或は表現の技巧の上に在り、或は用語措辭の上に在りて、必しも其の

軌を一にせずと雖、苟も近代の思想と沒交涉なる舊代の人に非ざるよりは、現今の新體詩の歌はんとする思想を了解せざる事あらざるべし。讀者は其の內容の如何に想到するに先だち、早く其の用語措辭の晦澁に苦しみ、表現の技巧の難解に感興を失ふ。新體詩をして讀書界より遠ざからしむるは、主として形式技巧の內容に添はざるに存す。刹那に流轉する現代人の心的活動の複雜なる印象を表現せんとするに方り、舊代人の詩想を寫すに用ひたる在來の詩語にのみ依らんとするは素より難事に屬す。詩技亦然り、詩形亦然り。內容の律調と言語の律調と相和せざるに至りては、到底詩的効果を見る能はざるなり。自然主義的表象詩の運動も形式革新に及ばざれば其の全効を收め難し。用語に古語復活を試み、口語混入を試み、詩技に俗謠體を取り、象徵を用ひ、詩律に七五を八六に變へ五七を七七に更め、詩形にソネット型を取り長短句を混ふるが如きは、畢竟末節に過ぎず。所有過去の形式を棄却して內容の中より流れ出づる自然の形體を取るに非ざれば、此の困難を解決する能はざるなり。從來の詩人茲に思ひ到らず、其の苦心

試練する所多く姑息に終る。

舊文藝破壞の運動は遂に新體詩の形式に及びぬ。四十一年相馬御風『早稻田文學』に「詩界の根本的革新」を唱道して曰く、之を歴史に徴するに、詩歌革新の第一聲は常に形式に對する內容の爆發なり。形式を破つて內容の流露せる作風は常に新しき時代を創む。之を我が詩界の現狀に見るに、象徵主義と言ひ自然主義と言ひ、革新の聲徒に高しと雖、改むる所言辭の末に止つて未だ根本的形式に及ばず。古典的西詩の詩形に則り奈良朝以來の詩律を繼承して作られたる『新體詩抄』の形式を踏襲し、外形先づ定まりて之に內容を適合せしめんと努むる弊套を承くる限りは、到底現代人の胸に觸るゝこと難し。詩界眞の革命は新體詩といふ者の歴史を棄却して、我が情緖主觀さながらの形式を新に創り出づるに在り。先づ從來の用語を斥けて現代口語の絕對自由なる採用をなせ。次に從來の固定的外存的詩律を捨てて情緖主觀其の物の律に從へよ。第三に古典的西詩に則れる行聯の制約を破りて絕對自由なる詩形を用ひよ。要するに內より湧き出でて自ら

形を成す詩歌發生の第一歩に歸れと。斯くの如きは當代詩人が正に思ひ及ぶべくして未だこゝに至らざりし所のものを大膽に道破せる說にして、詩界に於ける自然主義の主張は茲に始めて徹底するに至りき。

御風は續いて其の主張を創作に試み、絕對自由の詩形を以て新感味を歌へる象徵詩を草しぬ。但し口語を詩歌に用ひしは決して今日に始まりしに非ず。既に美妙齋梅花道人嵯峨の舍の昔に存し、近くは泣菫林外有明雨情等の民謠體の詩にも亦存す。又過去の詩歌に於ける律格句法を棄てて散文的にする事も、既に透谷梅花に始まり、ゝ山獨歩を經て白星林外に至るまで屢試みられたりき。然れども是等は唯用語詩形の變化多様ならんことを求めし試作に止まり、未だ内容を解放せんが爲に自ら起れる形式全部の根本的棄却に非ざりき。獨り片山孤村が三十八年獨逸の「神經質の文學」を紹介するに方り、デエメル、ホルツの小篇を口譯せる者は、絕對自由の形式に出で、恰も御風等の先聲をなすの感あり。而も是、意識的革新運動に非ざりしが故に深く注目せらるゝことなかりしが、御風等の作あるに至り

て俄然斯壇の大勢を動かし、新進靑年の作家をして競うて之に赴かしめぬ。同時に泡鳴はホイットマンの詩風を承けて、從來の詩律即ち言語律（外形律）を捨てたる散文詩を草し、續いて其の詩見に從ふ自己表現に最も適切なる言語として現代語を取り、御風等と呼應して盛に舊型破壞の筆を揮へり。世に稱して或は口語詩或は散文詩或は自由詩といふ。蓋し單に一特質を擧げたる便宜上の名稱のみ。拘すべからず。

先きに小說に於ける自然主義の運動を說ける際、論議の普遍的壯觀あるに係らず、作品は多く其の一局面を體現するに止れるを指摘せしが、此の現象は又新體詩にも之を見るを得。上述詩論の堂々なる、些の非難すべきなしと雖、試作する所多く印象的斷片的詩技の一局面にのみ熱する傾向あり。思ふに現代人の主我的官能的現實的デカダン的なるや、情緖生活甚だしく荒んで常に新なる刺擊を求め、其の極遂に異常なる刺擊を俟たずんば復感興を起さゞるに至る。其の情緖主觀さながらの聲は、即ち刹那に流動する情緖の各瞬間に於ける最も强き印象的表現なり。現時の新體詩が印象

的斷片的となれるは、小說に於ける傾向と同じく現代生活の實相より流れ來るに外ならず。特に櫻井天壇が獨逸の印象的自然主義を說きて、ホイットマン、アラン・ポーに源流を汲めるホルツ、デエメル、モムベルト等の詩風を紹介せるは、之に對する有力なる暗示となり、短句錯落、間歇的斷片的の措辭によりて强烈なる印象を直下に叫び出さんとする印象詩の一流、益々世に行はるに至れり。名づけて印象詩又は斷片詩といふ。

新體詩目下の發展は略茲に止まる。一切の自己活動が渾一して其の高潮に達せる刹那、おのづから迸出する全人格の聲をば、思想律(內容律)を追ひ現代語もて寫せる新詩は、詠ずべき詩又は讀むべき詩の境を脫して、考ふべき詩の域に入れりと言ふべし。斯くて詩界の新現象は新體詩に於て最も著しく、他の詩歌即ち和歌俳句に於ては、同じく文壇の大勢に動かされて、或は自己諷詠或は現實描寫等、注目すべき變化發展なきに非ずと雖、之を新體詩に比ぶればむしろ受動的なるの觀あり。

※　※　※　※　※

文學史家に從へば、泰西近代文學は、十八世紀のクラッシシズムより十九世紀のロマンチシズムに移り、リアリズム、ナチュラリズムに變じ、世紀末より二十世紀初頭にかけてシムボリズムに轉じ、今やミシチシズムに遷らんとすと言ふ。本邦現時の文學は泰西文學に負ふ所少からずと雖、是等四五の流派一時に紹介せられ、星霜百年の間に傳統あり順序ある推移をなしたる各種文學が、僅々數年の中に順序なく系統なく輸入せられしが故に、最近文壇の變遷は必ずしも此の順序に依らず、上述各時代が同時に來りしかの觀あり。且つ我が現時の文學や、假りに自然主義象徴主義印象主義と名づくと雖、固と是れ我が國民性に根ざし、我が社會狀態に養はれ、我が文學の歴史に培はれし者なれば、泰西文學に於ける同名の者と等しなみに觀んとする時は、却つて眞相を失ふべし。故に泰西文學史上の事實を以て、之を我が文學の現狀に推し、若しくは將來をトせんとするが如きは、力めて避くべき事に屬す。我が詩壇の象徴派は必しも露佛のシムボリズムに等しからず。小說界の自然派は必しも科學的眞實を重んずる本來自然主義に

非ずして、却つて主觀抒情の傾ある佛の印象的自然主義若しくは獨の徹底的自然主義に似たる者多し。唯其の大勢に於て、絕東の海表に立てる島帝國文學が、極西諸邦の文學と呼吸相通ふに至りし大發展を認むれば則ち足る。

蓋しこの新興の思潮は獨り文壇の事象のみに非ず。フォルケルト曰く、十九世紀後半の思潮の中心は實際的精神（ザルクリヒカイツジン）なりと。哲學に於ては、理論上の眞を發見するよりも、經驗上の實に近づかんことを欲し、道德に於ては、道義の理想を建設するよりも人類生活の實況に重きを置き、藝術に於ては、美の極致を發揮するよりも實際生活の描寫を勉むるは即ち輓近の潮流なり。思想界のプラグマチズムと言ひ、文藝界のナチュラリズムと言ひ、等しく此の源より出づる二の流に外ならず。我が文學は他の部面に先だちて世界の思潮に參するの光榮を荷へるなり。

新興思潮の運動は、斯くして各種文學を根柢より蕩搖し、到る所舊形を破壞し去れり。然り目下新運動の主なる事業は破壞なり。内容の進歩革新

ありて既定の形式に制約せらるゝに堪へざるや、乃ち爆發して所有舊型を燒き盡さんとするは文學史上の常態にして、鷲見柳之助間貫一の徒一轉して關欽哉となり、再轉して竹中時雄となり、菅沼健次となり、岸本捨吉となりし今日、硯友社を中心としたる舊文學の破壞せらるゝはおのづからなる運命に屬す。吾人は舊物の破壞を惜まず。今後の問題は、唯破壞し去りたる荒廢の中に立ちて、如何なる新文學の殿堂を築くかに在るのみ。紅葉歿して茲に五年、從來の名作家にして時代の大濤に推し流さるゝ者少からず、維新以來最暗黑の文壇に立ちて明治文學の基礎を築きし先進の諸士は、道を新進に讓りて過去の墓裡に沒しぬ。新進の作家評家は、破壞すべき者を破壞すると同時に、先進の功業を追讃するに吝なるべからず。彼等の努力は先づ文學の社會的地位を高めて之を社會各方面に弘布せしめ、舊時代の戲作文藝を排して新趣味を開拓し、次に一代文壇の指導者となりて後進作家を拔き、外邦文學を紹介して東西思潮の融合に資し、總べて將來の新文學を釀成すべき素地を作るに勉めたり。彼等は未來文學の大光明に達せ

んが爲に暗中に奮鬪せし過渡時代の勇士として、長へに其の功績を錄せらるべきなり。今や文學の社會に對する地位亦往時の比に非ず。三十四五年に於ける新ロマンチシズムの運動は、道學者教育者をして周章動搖せしめ、三十九年には劇壇の常例を破りて文士演劇の成功を見、四十一年には社會は獨歩眉山等の死に對して政治界其の他に於ける偉人の死と同等の注意を拂ひ、文部大臣は半公式に文學者を招きて文藝院設立の内談をなすに至りぬ。斯く一方に於て文藝と社會との交渉日に密に、他方に於て海外文學の輸入月に盛に、文運興隆の機正に至れり。かゝる時勢に際し、過去文學を破壞して立てる新文學者の責任は、二十年前に於ける先進諸家のそれと同日の談に非ず。吾人は此の重任を負へる現今及び將來の文學者が、如何なる新殿堂を建設して先進の勳業に對せんとするかを見ん。

明治文學史終

附録

明治文學年表

明治元年

一月　假名垣魯文『假名讀八犬傳』

二月　柳川春三『中外新聞』發刊

三月　太政官『日誌』發刊
　　　五箇條御誓文を發せらる

四月　福地源一郎條野傳平『江湖新聞』發刊
　　　岸田吟香橫濱に『藻鹽草』發刊

六月　昌平校を復興す

八月　江戸を東京と改稱す

九月　明治と改元す

十月　東京遷都

明治二年

一月　宮中歌御會復興

二月　出版條例新聞條例を公布す

三月　府縣に小學校を設く

五月　開成所昌平校に出版取調所を置く

六月　開成學校兵學校醫學校を合して大學校とす
　　　版籍奉還

八月　福澤諭吉『世界國盡』

不詳　福澤『西洋事情』第二編

明治三年

一月　大教宣布の詔發せらる
　　　魯文『西洋道中膝栗毛』第一編

九月　同人『胡瓜遣』
　　　府下に中學校を置く

不詳　中村正直譯『西國立志編』

明治四年

三月　木村黒川榊原編『語彙』

四月　『橫濱毎日新聞』發刊

五月　關篤輔等『新聞雜誌』發刊

六月　内田正雄譯『輿地誌略』初編
十二月　魯文『安愚樂鍋』

明治五年

二月　條野傳平落合芳幾西田傳助等『東京日々新聞』發刊
　　　福澤『學問の勸め』
　　　東京に女學校を起す
四月　東京に圖書館を開く
五月　萬亭應賀『釋迦八相倭文庫』五十九 六十
六月　小西義敬等『郵便報知新聞』發刊
七月　中村正直同人社を起す
八月　學制頒布
十一月　始めて太陽暦を用ゆ

明治六年

一月　二世春水『時代加賀實』四十編乃至四十五編
四月　渡邊溫譯『伊蘇普物語』
五月　東京外國語學校を起す
七月　森有禮等明六社を結ぶ
十月　征韓論起る
十二月　福地櫻痴官を辭して『日々新聞』に入る
不詳　福澤『文字の敎へ』

明治七年

一月　板垣退助等民選議院設立の建議をなす
二月　明六社『明六雜誌』(月二回)發刊
四月　服部撫松『東京新繁昌記』初編
九月　『朝野新聞』發刊成島柳北入社
十一月　本野盛亨『讀賣新聞』發刊鈴木田正雄入社
不詳　柳北『柳橋新誌』
　　　西周『百一新論』
　　　羅馬字採用論起る

明治八年

一月　『新聞雜誌』改題『東京曙新聞』
三月　『洋々社談』發刊

四月　松村春輔『復古夢物語』
　　　芳幾等『平假名繪入新聞』發刊

五月　春輔『近世櫻田紀聞』
　　　魯文『假名讀新聞』を横濱に發刊

十一月　新島襄西京に同志社を立つ
　　　『明六雜誌』廢刊

明治九年

三月　春輔『春雨文庫』

四月　撫松『東京新誌』發刊

七月　同人社『同人社文學雜誌』發刊

明治十年

一月　柳北『花月新誌』發刊

二月　鹿兒島に反亂起る

三月　野村文夫『團々珍聞』發刊
　　　『穎才新誌』發刊

四月　大學校東京大學と改稱す

八月　第一回内國勸業博覽會

九月　鹿兒島反亂平定す

明治十一年

四月　板垣等民權自由說を唱ふ

明治十二年

一月　學士會院を設く
　　　村山龍平大阪に『大阪朝日新聞』發刊

二月　『歌舞伎新報』發刊

九月　教育令を公布す

十二月　國會開設の請願建白出づ

不詳　織田純一郎譯『花柳春話』

明治十三年

三月　『東京學士會院雜誌』發刊

七月　東京大學文學科始めて卒業生を出す

十月　『六合雜誌』發刊

明治十四年

二月　中江兆民『政理叢談』發刊

十月　「東洋學藝雜誌」發刊
　　　國會開設の大詔發せらる
　　　板垣等自由黨を結ぶ

十一月　音樂取調掛編『小學唱歌集』初編

明治十五年

三月　福澤『時事新報』發刊

五月　外山ゝ山井上巽軒矢田部尚今『新體詩抄』

九月　第一回繪畫共進會

十月　兆民譯『民約譯解』
　　　東京專門學校早稻田に起る

明治十六年

一月　馬場辰猪『天賦人權論』

七月　『官報』發刊

十一月　兆民譯『維氏美學』

不詳　矢野龍溪『經國美談』第一
　　　坪內逍遙譯『自由太刀余波鋭鋒』

明治十七年

四月　角藤定憲大阪に壯士芝居を起す

九月　藤田鳴鶴『文明東漸史』

十一月　柳北死す四十八歲

不詳　かなのくわい起る

明治十八年

二月　ローマ字會起る

三月　尾崎紅葉石橋思案山田美妙等硯友社を結ぶ

四月　逍遙『小說神髓』

六月　同『當世書生氣質』第一
　　　柴東海散士『佳人の奇遇』第一二

八月　鳴鶴譯『繫思談』

十二月　官制改革內閣設置

明治十九年

一月 「反省雜誌」發刊

三月 帝國大學令發布

六月 私立明治學院創立

八月 末松謙澄等演劇改良會を起す

九月 末廣鐵腸「雪中梅」

明治二十年

一月 依田學海「吉野拾遺名歌譽」

二月 德富蘇峰「國民の友」發刊
「哲學雜誌」發刊
鐵腸「花間鶯」上卷
須藤南翠「新粧之佳人」

四月 蘇峰「新日本の青年」
鹿鳴館に假裝舞踏會を催す

五月 學位令を公布す

六月 二葉亭四迷「浮雲」上卷

八月 美妙齋「以良都女」發刊
「出版月評」發刊

十月 東京音樂學校起る

不詳 美妙紅葉「新體詩選」

明治二十一年

二月 二葉亭「浮雲」第二編

四月 三宅雄二郎等「日本人」發刊

五月 紅葉等「我樂多文庫」發刊
加藤弘之箕作麟祥伊藤圭介學位令によりて博士を授けらる

六月 「東京朝日新聞」發刊

七月 二葉亭譯「あひびき」「國民の友」に出づ
雜誌「文」發刊
田邊花圃女史「藪の鶯」

八月 美妙齋短篇集「夏木立」

十月 小說雜誌「都の花」金港堂より發刊
巖本善治「女學雜誌」發刊
東京美術學校起る

十一月　少年雜誌「少年園」發刊
　　　　小說雜誌「小說萃錦」春陽堂より發刊
　　　　狩野芳崖歿す六十一歲

十二月　「大阪毎日新聞」發刊
　　　　小說雜誌「大和錦」博文館より發刊

不　詳　末松青萍譯「谷間の姫百合」

明治二十二年

一　月　美妙「胡蝶」春の屋「細君」思軒譯「探偵ユーベル」
　　　　「國民の友」附錄に出づ
　　　　矢崎嵯峨の舍「初戀」「都の花」に
　　　　小說雜誌「新小說」春陽堂より發刊

二　月　憲法發布式擧行
　　　　幸田露伴「露團々」「都の花」に
　　　　新聞「日本」發刊

三　月　「我樂多文庫」改題「文庫」

四　月　紅葉「二人比丘尼色懺悔」「新著百種」第一

五　月　高田半峰「美辭學」

六　月　川上眉山「黄菊白菊」「文庫」に
　　　　森田思軒譯「探偵ユーベル」

七　月　饗庭篁村「たら竹」第一編

八　月　美妙「いちご姫」二葉亭「浮雲」續篇「都の花」に
　　　　森鷗外等譯詩「面影」北邨散士「流轉」「國民の友」
　　　　附錄に

九　月　露伴「風流佛」「新著百種」第五
　　　　東京專門學校文學科創立

十　月　篁村「當世商人氣質」
　　　　鷗外等「柵草紙」發刊
　　　　歌舞伎座落成

十一月　廣津柳浪「殘菊」「新著百種」第六

十二月　繪畫雜誌「國華」發刊

不　詳　思軒譯「瞽使者」

明治二十三年

一　月　鷗外「舞姬」「國民の友」に
　　　　新島襄死す
　　　　蘇峰「國民新聞」發刊

四月　『日本文學全書』刊行
五月　露伴短篇集『葉末集』
六月　宮崎湖處子『歸省』
七月　國學院創立
八月　露伴「一口劍」『國民の友』に
　　　紅葉「伽羅枕」『讀賣』に
十月　教育勅語發布
　　　三上高津共著『日本文學史』
十一月　帝國議會召集せらる
不詳　『新小說』發刊

明治二十四年

一月　巖谷漣山人「こがね丸」『少年文學』第一
　　　南新二「鎌倉武士」『新作十二番』第五
三月　中西梅花『新體梅花詩集』
五月　川上音次郎等新演劇「板垣退助」を演ず
　　　田口卯吉雜誌『史海』發刊
六月　原抱一庵「闇中政治家」『聚芳十種』第五
　　　中村正直死す六十歲

七月　村上浪六『三日月』
　　　齋藤綠雨「かくれんぼ」『文學世界』第六
八月　紅葉「二人女房」『都の花』に
十月　逍遙等『早稻田文學』發刊
　　　露伴『新葉末集』
十一月　綠雨『油地獄』

明治二十五年

二月　露伴『五重塔』『國會』に
七月　鷗外譯稿集『水沫集』
十一月　正岡子規「日本」に俳句を始む
　　　黑岩涙香『萬朝報』發刊
不詳　內田不知庵『文學一斑』
　　　探偵小說流行
　　　宗教教育衝突の論起る

明治二十六年

一月　古河默阿彌死す七十八歲
　　　北村透谷等雜誌『文學界』發刊

五月　子規「獺祭書屋俳話」
十月　逍遙「我國の史劇」『早稻田文學』に
　　　『二六新報』發刊
十二月　蘇峰「吉田松蔭」
不詳　露伴「風流微塵藏」第一「篷舟」『國會』に
　　　不知庵譯「罪と罰」
　　　民友社『十二文豪』發刊
　　　博文館「世界文庫」發刊

明治二十七年

一月　逍遙史劇「桐一葉」『早稻田文學』
三月　鹽井雨江譯「湖上の美人」
五月　透谷死す二十七歲
七月　淸國と開戰す
八月　雜誌「柵草紙」廢刊
十月　魯文死す六十六歲

明治二十八年

一月　帝國文學會『帝國文學』發刊
　　　雜誌『太陽』博文館より發刊
　　　露伴「新浦島」『國會』に
　　　紅葉「不言不語」『讀賣』に
二月　小說雜誌『文藝俱樂部』博文館より發刊
　　　外山正一散文詩「可兒大尉」『帝國文學』に
四月　泉鏡花「夜行巡査」『文藝俱樂部』に
　　　小杉天外「改良若殿」『讀賣』に
　　　淸國と講和す
五月　柳浪「黑蜥蜴」『文藝俱樂部』に
　　　後藤宙外「ありのすさび」『早稻田文學』に
六月　武島羽衣新體詩「小夜砧」『帝國文學』に
　　　鏡花「外科室」『文藝俱樂部』に
八月　眉山「裏表」漣「董日記」『國民の友』附錄に
　　　雜誌『文庫』發刊『少年園』改題
九月　外山上田中村『新體詩歌集』
　　　俳會秋聲會起る
　　　樋口一葉「濁江」『文藝俱樂部』に

十月　江見水蔭「女房殺し」『文藝倶樂部』に
　　　一葉「たけくらべ」『文學界』に
十一月　眉山「暗潮」『讀賣』に
十二月　南新二死す六十一歳
　　　『文藝倶樂部』增刊『閨秀小說』一

明治二十九年

一月　鷗外『めさまし草』發刊『柵草紙』の後身
　　　巽軒「比沼山の歌」『帝國文學』『太陽』
　　　逍遙史劇「牧の方」『早稻田文學』に
二月　紅葉「多情多恨」『讀賣』に
　　　『文藝倶樂部』增刊『靑年小說』
　　　若松賤子死す三十二歲
　　　鐵腸死す四十九歲
四月　音樂學校第一回演奏會
六月　村井弦齋「日の出島」報知新聞に
七月　小說雜誌『新小說』再興
　　　柳浪「今戸心中」『文藝倶樂部』に
　　　竹越三叉『世界之日本』發刊
　　　與謝野鐵幹詩歌集『東西南北』
八月　新詩雜誌『大和琴』發刊
九月　柳浪「河內屋」『新小說』に
　　　小栗風葉「寢白粉」『文藝倶樂部』に
　　　逍遙論集『文學其の折々』
十月　宙外「闇の現」『新小說』に
十一月　二葉亭譯『片戀』
　　　一葉死す二十五歲
十二月　鷗外論集『つき草』

明治三十年

一月　紅葉「金色夜叉」『讀賣』に
　　　『一葉全集』
　　　賤子譯『小公子』
　　　雨江羽衣桂月新詩文集『花紅葉』
二月　島崎藤村新體詩「天馬」『文學界』に
　　　美妙新體詩『魔界天女』『大和琴』に

三月 藤村「深林の逍遥」「帝國文學」に
新體詩集「この花」

四月 宙外天外等「新著月刊」發刊
土井晩翠新體詩「破鐘の響」「帝國文學」に
櫻痴歌舞伎座立作者となる

五月 二葉亭譯「浮草」「太陽」
獨歩花袋國男湖處子等「抒情詩」
天遊大來詩集「松虫鈴虫」
雜誌「日本主義」發刊

六月 鷗外喜美子譯稿集「かげ草」

八月 藤村詩集「若菜集」

九月 逍遥「沓手鳥孤城落月」「新小說」に
京都帝國大學設立

十一月 思軒死す三十七歳

十二月 雜誌「文學界」廢刊

明治三十一年

二月 露伴「二日物語」「文藝俱樂部」に
子規和歌論「日本」に

三月 魯庵「暮の二十八日」「新著月刊」に
日本派俳句集「新俳句」
竹柏園和歌雜誌「心の花」發刊

四月 晩翠「暮鐘」「帝國文學」に

六月 「新著月刊」廢刊
藤村詩文集「一葉舟」

八月 「國民の友」廢刊

九月 風葉「戀慕流」「讀賣」に

十月 日本派俳誌「ほとゝぎす」發刊
「早稻田文學」廢刊

十二月 藤村詩集「夏草」

明治三十二年

一月 德富蘆花「不如歸」「國民新聞」に
「反省雜誌」改題「中央公論」

二月 高山樗牛「時代精神論」「太陽」に
中村雪後死す三十三歳
高等女學校令實業學校令發布

四月　晩翠詩集『天地有情』

八月　矢田部尚今死す四十九歳
　　　私立學校令發布

九月　菊池幽芳「己が罪」「大阪毎日」に

十一月　薄田泣菫詩集「暮笛集」
　　　子規寫生文「ほとゝぎす」に

十二月　鏡花「湯島詣」

明治三十三年

一月　雜誌「歌舞伎」發刊
　　　芳賀矢一「國文學史十講」

二月　税所敦子死す七十六歳
　　　鏡花「高野聖」「新小説」に

三月　外山ゝ山死す五十三歳
　　　高安月郊詩文集「金字塔」

四月　鐵幹詩歌雜誌「明星」發刊
　　　宙外「田園生活論」「新小説」に

五月　清國義和團の變起る

五月　天外「初姿」「二六新聞」に

七月　清國事變平定す

十一月　大西操山死す三十七歳

明治三十四年

一月　樗牛「文明批評家としての文學者」「太陽」に
　　　ニイチェ論起る
　　　河井醉茗詩集「無弦弓」
　　　清澤滿之宗教雜誌「精神界」發刊

二月　福澤諭吉死す六十八歳

三月　國木田獨歩短篇集「武藏野」

五月　日本派俳句集「春夏秋冬」
　　　晩翠詩集「曉鐘」
　　　蘆花「思出の記」

六月　大橋乙羽死す三十三歳

八月　藤村詩集「落梅集」
　　　鳳晶子歌集「亂れ髮」
　　　樗牛「美的生活論」「太陽」に

十月　泣菫詩集「行く春」
　月郊譯「イプセン作社會劇」
十二月　北田薄氷小說集「薄氷遺稿」
　柳川春葉「錦木」『新小說』に
　上田柳村譯文集「みをつくし」
　兆民死す五十五歲

明治三十五年

一月　天外「はやり唄」
　樗牛「日蓮論」『太陽』に
　綱島梁川「宗教的眞理の性質」『早稻田學報』に
　條野採菊死す七十一歲
三月　雜誌「文藝界」金港堂より創刊
四月　子規「獺祭書屋俳句帖抄」上卷
　風葉「涼炎」『新小說』に
五月　田山花袋「重右衞門の最後」
八月　德田秋聲「春光」『文藝界』に

九月　子規死す三十六歲
　鷗外譯「卽興詩人」
　蘆花「黑潮」『國民新聞』に
十月　透谷集「透谷全集」
十一月　永井荷風「地獄之花」
　藤村「舊主人」『新小說』に
　獨步「酒中日記」『文藝界』に
十二月　樗牛死す三十二歲
不詳　淚香譯「噫無情」『萬朝報』

明治三十六年

一月　鷗外脚本「玉匣兩浦嶼」
　紅葉「新續金色夜叉」『新小說』に
　月郊脚本「大鹽平八郞」
二月　水蔭飜案「オセロ」新派劇に上る
　天外「魔風戀風」『讀賣』に
　俳優尾上菊五郞死す六十歲

三月　抱一庵譯『聖人與盜賊』
　　　平木白星詩集『日本國歌』
　　　專門學校令發布
四月　『不如歸』新派劇に上る
　　　月郊脚本『江戸城明渡』
五月　長山秋濤譯『椿姫』
　　　蒲原有明詩集『獨絃哀歌』
　　　清澤滿之死す
六月　紅葉十千万堂出版社を起さんとす
　　　對露開戰論起る
七月　音樂學校歌劇「オルフォイス」を演ず
　　　露伴『天打つ浪』『讀賣』に
九月　子規四方太等『寫生文集』
　　　俳優市川團十郎死す六十六歲
十月　紅葉死す三十七歲
　　　木村鷹太郎譯『プラトーン全集』第一
十一月　土井春曙飜案『ハムレット』新派劇に上る
　　　詩歌雜誌『白百合』發刊

十二月　紅葉譯『鐘樓守』
　　　鏡花『風流線』『國民』に
　　　落合直文死す四十三歲

明治三十七年

一月　『紅葉全集』第一
　　　『樗牛全集』第一
　　　兒玉花外『花外詩集』
　　　藤村小說『水彩畫家』『新小說』に
　　　老鼠堂永機死す八十二歲
二月　雜誌『時代思潮』發刊
　　　露國と開戰す
三月　露伴長詩『出廬』『讀賣』に
　　　『桐一葉』舊劇に上る
四月　鷗外脚本『日蓮上人辻說法』
　　　綠雨死す
五月　木下尚江小說『火の柱』
七月　抱一庵譯『巴里の秘密』

八月　抱一庵死す三十九歳
　　　俳優市川左團次死す六十三歳
九月　小泉八雲死す五十四歳
十月　登張竹風譯「賣國奴」
十一月　逍遙「新樂劇論」「新曲浦島」
　　　子規歌集「竹の里歌」
十二月　岩野泡鳴詩集「夕潮」

明治三十八年

一月　夏目漱石「倫敦塔」『帝國文學』に
　　　塚原澁柿園歴史小説「日々」に連載せらる
二月　漱石「我輩は猫である」『ほとゝぎす』に
　　　尚江「良人の自白」
三月　風葉「青春」『讀賣』に
　　　前田林外詩集「夏花少女」
　　　奉天大戰
四月　「牧の方」舊派劇に演ぜらる
　　　魯庵譯「復活」『日本』に
　　　田口鼎軒死す
五月　泣菫詩集「二十五絃」
　　　梁川「見神の實驗」『新人』に
　　　野口寧齋死す三十九歳
　　　日本海大海戰
六月　泡鳴詩集「悲戀悲歌」
　　　有明詩集「春鳥集」
　　　伊藤證信宗教雜誌「無我の愛」發刊
七月　梁川「梁川文集」
八月　獨歩「獨歩集」
　　　落合直文「萩之家遺稿」
九月　戶澤姑射淺野憑虛譯「沙翁全集」第一
十月　柳村譯詩「海潮音」
　　　梁川論集「病間錄」
　　　藤岡作太郎「國文學全史」平安朝篇
　　　露國と和す
十一月　逍遙「新曲赫哉姫」

明治三十九年

一月 「早稻田文學」再興
　　 晶子歌集「舞姬」
　　 櫻痴死す六十六歲
二月 文藝協會成る
三月 藤村「破戒」
　　 獨步短篇集「運命」
　　 宙外「月に立つ影」「日々」に
　　 天外「コブシ」「讀賣」に
　　 高濱虛子坂本四方太寫生文集「帆立貝」
　　 雜誌「文章世界」發刊
五月 漱石短篇集「漾虛集」
　　 泣菫詩集「白羊宮」
　　 木村鷹太郎譯「プラトーン全集」第一
　　 落合「萩の家歌集」
六月 晚翠詩集「東海遊子吟」
　　 あやめ會詩集「あやめ草」
　　 泡鳴論文「神祕的半獸主義」
　　 雜誌「趣味」發刊

　　 樂苑會第一回歌劇演奏會
　　 漱石「草枕」「新小說」に
　　 山崎紫紅脚本集「七つ桔梗」
九月 青萍「夏の夢日本面影」
　　 日本エスペラント協會成る
　　 京都文科大學開講す
十月 二葉亭「其の面影」「東京朝日」に
　　 秋聲「己が縛」「萬朝報」に
　　 晶子歌集「夢の華」
十一月 文藝協會演劇部第一回公試演
十二月 每日新聞社演劇園第一回公演
　　 大劇場設立の議起る

明治四十年

一月 「日本人」改題「日本及日本人」
　　 漱石集「鶉籠」
　　 藤村短篇集「綠葉集」
二月 正宗白鳥「塵埃」「趣味」に

三月　秋聲「焔」「國民」に

四月　風葉「天才」「萬朝報」

佐野天聲脚本「意志」「早稲田文學」に

五月　「思軒全集」第一

獨歩短篇集「濤聲」

眞山青果「南小泉村」「新潮」に

天聲「大農」「都新聞」に

六月　漱石「虞美人草」「朝日新聞」に

七月　春葉「春葉集」

花袋「蒲團」「新小説」に

九月　梁川死す三十六歳

陸羯南死す五十一歳

白鳥集「紅塵」

十月　青果脚本「第一人者」「中央公論」に

秋聲「凋落」「讀賣」に

文部省主催第一回公設美術展覽會

風葉「戀ざめ」「日本」に

十一月　二葉亭「平凡」「朝日」に

文藝協會第二回演藝會に春曙ハムレットを演ず

十二月　青果「青果集」

明治文學史索引（人名書名件名）

あ、い、ゐ

姉崎嘲風　四一九
あひびき　一一八
饗庭篁村　一五六、一七〇、一九五、二九八、三七六
石橋思案　一三一、一四一、二九七、三五七
石橋忍月　一六三、一七〇、一八七、二九七
磯貝雲峰　一八五
泉鏡花　二一八、二五二、二九九、三六九、三九九、四八八
伊藤左千夫　二四六、四五三
井上巽軒　八五、一〇〇、一八四、二〇六、三一〇、四二一
巖谷漣山人（小波）　一三一、一五九、二一八、二九六、三五三
岩野泡鳴　三三八、三九一、三九六、四三一、四六六、四七六、四八九、四九六
イブセン作社會劇　三五六、四二一
色懺悔　一二六、一二七、一三一

う、え、ゑ

浮雲　一〇九、一一四、一一八、一二三、一三一、四八八
內田不知庵（魯庵）　一六三、一七〇、一八七、三五九、三七八、四三一
上田柳村　三八〇、四三〇、四三七
埋木　一六五
運命　四四六、四七〇
江見水蔭　一三一、一四二、二一七、二七五、三五三、四〇九

お、を

小川未明　四八八
小栗風葉　二一八、二七八、三六一、三六五、四〇五、四二三、四二七、四四一
尾崎紅葉　一〇九、一二〇、一二六、一三七、一三九、一五二、二二五、二九四、二九八、三五五、三六三、三九九
長田秋濤　三八〇、三八二
小山內薰　四八八
織田純一郎　五五
落合直文　七四、七六、一一九、一八四、二三四
大西操山　一八五
大町桂月　三二四
於母影　一八四

か

慨世士傳　五八、一一五
海潮音　四三一、四三七
幸田露伴　一三一、一四二、一六九

三六一、三九一、三九八、四〇一
華堂得知　一六三、三五六、四五五
高野聖　三七一、四〇七
かげ草　三七八
佳人の奇遇　九九
雅俗折衷體　一三、一二七、一三一
片戀　三七九
活歴　一九三、三〇五
假名垣魯文　一三、三七、四五、四六
河井醉茗　三五九、三九八
川上眉山　一三、一四二、三二七
二五一、二六八、三五九
河竹默阿彌
古河默阿彌を見よ
河内屋　二六一
河東碧梧桐　二三〇、三二四
我樂多文庫　一三、一二六、一四二
花柳春話　五五、九五、一一五
蒲原有明　三二八、三九五、四二三
四三三、四三八、四八九

き

歸省　一八六
北村透谷　一八八、四二四、四八二
北川薄氷　二七四
木下尚江　四〇七
曉鐘　三三三
狂飆時代　四二六、四七二、四七六
伽羅枕　一三、一三四、一四七
清澤滿之　四一八
桐一葉　二一九、三四六、四一〇、四六一

く、け

陸羯南　七八
草枕　四五三、四五七、四七〇
國木田獨歩　三二八、四一九、四四六
四七八
暮の二十八日　三五九
黑岩涙香　一七二、一七九、三七五
三八〇
經國美談　九九
硯友社　一〇九、一一〇、一一三
二六五、三七九
言文一致　一五、一七、一一三
一三、一二四、一二六、一三〇、三〇二
四一五

こ

小金井喜美子　一六三、一八四
三七八
國民の友　一二六、一二七、一三五
一三、一四五、一八五、三一七
心の闇　一三三、一三六、四〇七
小杉天外　二八六、三六六、四〇六
四三九、四七〇
五重塔　一四三、一四五
胡蝶　一二五、一二六
後藤宙外　三八〇、三六二、四七〇
四八八
金色夜叉　三〇三、三九九、四〇七

さ

細君　一五五
西國立志編　一七、二六
齋藤綠雨　一五八、一六六

相馬御風　三六九、四九四
佐々木信綱　七六、一八八、二四二
佐藤紅綠　二三〇、二三六、四五三、四六二
佐野天聲　四六七
殘菊　一四一、二三三
三人妻　一三一、一三六

し

該撒奇談　五七、一九一
柵草紙　七七、一二六、一六〇、一九五、三四二、四二三
繁野天來　二八四、三一八
自然主義　三六四、四二七、四三九、四四四、四七〇、四七五、四九五
柴東海散士　五九
十三夜　二六七
十二文豪　一八一
鹽井雨江　三二四
島崎藤村　一九〇、三一九、三二七、三八九、四〇五、四三三、四四四、四七八、四八一
島村抱月　二八四、四一八、四六二、四七六
象徵主義　三九七、四三二、四八九
寫生文　四五一、四八六
春鳥集　四三三
新浦島　二九一、四〇八
新曲浦島　三九三、四一三、四六二
新粧の佳人　五九
新體詩　八五、九八、四九一
新體詩抄　一六、五八、八五、九四、九五、一〇〇、一八三
新體梅花詩集　一八六
新著百種　一二七、一三九、一四三
新俳句　三二八、三八六
新派劇　三四四、四二〇、四六〇

す

末廣鐵腸　三一、五一、五九、六四、一六九
末松青萍　三三、五七、一九四
薄田泣菫　三三三、三三五、三八九、三九四、四三二、四三七
鈴木三重吉　四五三
須藤南翠　四六、五九、一六三、一六九、一九五、三七五

せ、そ

生　四八一、四八七
政教社　六六
青春　四四一
西洋膝栗毛　二七、一二三
小說神髓　八八、九四、一〇三、一一〇、一三〇、四五三
世界國盡　一四、一六、九八
雪中梅　五九
即興詩人　三八一

た

當世書生氣質　九四、一〇三、一〇六、一一〇、一一八、一二六
高崎正風　二三、一三六
高濱虛子　二三〇、二三四、四五一、四八六

高安月郊 三三八、三五三、三六六
三六九、四〇八、四三一
高山樗牛 一八二、二〇六、四一九
四二五、四四九、四七二、四七六
瀧口入道 一八二、一八三
たけくらべ 二六七
武島羽衣 三三三、三六九
田澤稲舟 二七四
多情多恨 三〇〇、三〇七
獺祭書屋俳話 一九六、三四四
谷間の姫百合 五七
玉匣兩浦嶋 四〇八
田山花袋 一六七、二七七、三一八
三一九、四二三、四二七、四四三 四七七
四八一
探偵ユーベル 一一六

ち、つ

遲塚麗水 一七六、一八二、二六八
三七五
女學雜誌 一八八、四四四
塚原澁柿園(蓼洲)
一八二、三七五、四八八
土井晩翠 三二三、三三一、三六九
綱島梁川 三九八、四四四
四一九
坪内逍遙 五六、五七、八八、九四
一〇三、一一五、一一九、一五五、一七四
一九一、二〇〇、二四〇、三五六、四一一
四一四、四六二、四六四

て、と

帝國文學 二二七、三〇九、三三三
四三一
條野採菊(有人) 二二、三七
四六、六三、二九七
デカダン 四二七、四三五、四八四
四九〇
天地有情 三三一
東洋學藝雜誌 九五、一八四
土居春曙 三五三、四〇九、四六二
戸川殘花 一八五、一九〇、二二七
戸川秋骨 三一九、三八〇
徳田秋聲 二七九、三六一、四〇五
四二三、四二七、四七九
徳富蘇峰 一一六
徳富蘆花 四〇三
登張竹風 四三五、四二七、四三一
外山ヽ山 五八、八五、一〇〇、一九四
二〇六、三〇九

な

内藤鳴雪 三一九、三二六
永井荷風 四〇五、四二七
中江兆民 五〇、九五、一一七
長塚節 二四六
中西梅花 一八五
中村正直 一七、一九、二四
中村春雨(吉藏) 四〇四
夏木立 一二三、一三三
夏目漱石 二二〇、二二六、四五〇
四八六
成島柳北 二二、三四、四五、五一
一二一

に、ね

新島襄　一七
濁江　二六七
日蓮上人辻說法　四〇八
四二一、四六二
日本(新聞)　七七、七八、二一七
日本人(雜誌)　六九、七五
日本派　二一六、二二四、四三四
二人女房　一三二
人形の家　三一六
根岸派　一四六、三八七

は

梅花詩集
新體梅花詩集を見よ
俳諧師　四八六
破戒　四四四、四六七、四七〇
白羊宮　四三七
芭蕉雜談　二三二
長谷川四迷
二葉亭を見よ
長谷川天溪　四七六
初姿　三六六、四三九
服部誠一(撫松)三四、四五、五五
馬場孤蝶　三一九、三八〇、四三一
はやり唄　三六八
原抱一庵　一六三、一七六、二九七
三六二、四三〇
春　四八一、四八七

ひ、ふ、へ、ほ

樋口一葉　二六六、二七三、三一九
廣津柳浪　一二一、一四一、二五六
二六一、三五三、三六三、四〇四
風流佛　一四三、一四五
福澤諭吉　一三、一九、二四、二六
六四、九八、四二〇
福地櫻痴　一七、二〇、二三、二七
三四、一一九、一九五、一九八、三四五
三四
二葉亭四迷　一〇九、一一四、一一八
一六七、三七九、四三一、四七〇、四八七
藤田鳴鶴　三一、三五、五五、五九
六四、一九四
蒲團　四七七
古河默阿彌　三七、四一、一九三
二六四
文學界(雜誌)　一八八、三一九
三一〇、四一四、四三三、四八三
文藝協會　四六二
平凡　四八七
暮笛集　三五五、四六七
ほとゝぎす　二三八、二四六、四三三
四五一
沓手鳥孤城落月　三四九、四二一

ま

牧の方　三五〇、四二一
正岡子規　一一九、二二五、二二九
二三二、二四三、三一七、三八七、四五一
正宗白鳥　四七〇、四八〇
松岡國男(柳田)　三一八、三一九
松居松葉(松翁)　一六七

二八八、三五四、三七六、四六二
松村春輔（操）　四四
舞姫　一六〇
前田林外　三八九、三九五、四三二
眞山青果　四六八、四七九

み

三田派　六四、一一八
みだれ髮　三八八、四二七
水谷不倒　二八三
南新二　一六三、二八七、三七六、四五五
水沫集　一六五、二〇〇
明星　二四七、三三八、三八七、四三三
四三八
三宅雪嶺　六九
三宅花圃（田邊）　一六三、二七三

都の花　一〇九、一一八、一二五
一三一、一四二
宮崎湖處子　一八五、二九七、三一八
宮崎三昧　一六三、一七〇、一九六
二九八

む、め、も

村井弦齋　一七六、一八二、三七四
村井長庵巧破傘　四一
村上浪六　一七二、一七五、三七四
明六雜誌　二四、二七
瞽使者　一一六、三一六
めぐりあひ　一一八
森鷗外　一六〇、一六四、一七四
一八四、一九五、二〇〇、二〇七、三四二
三八一、四〇八、四三〇
森田思軒　一一六、三七八

や

矢崎嵯峨の舍　一三六、一六一
一八五、二二七、二九七、三一八、三七九
四三〇
矢田部尙今　八五、一〇〇、一九五
柳川春葉　四〇四
矢野龍溪　三一、三五、五九、六四
一六九、一九五
山崎紫紅　三九一、四六五
山田美妙齋　一三〇、一三三
一三〇、一八四、一八七、二九五、三一七
闇の盃盤　四九〇

ゆ、よ

湯淺半月　一八四、三一八、三七九
與謝野鐵幹　二四〇、三一六
三三八、三八九

與謝野晶子（鳳）　三八七
四六九、四二七
依田學海　一一九、一六九、一九一
一九四、一九七
讀賣新聞　一三三、一三三、一三三

ら、わ

落梅集　三三〇
若菜集　三三二
我輩は猫である　四五一、四五四
若松賤子　一六三、二七二、三七八
わかれ道　二六八
早稻田文學　二〇〇、二七九、三一八
三四〇、四六九
早稻田派　二七九、二八五
渡邊霞亭　一六三、三七六

索引

〔終〕

昭和二年十月一日印刷
昭和二年十月五日發行
昭和二年十二月一日再版發行
昭和四年八月十日三版發行
昭和七年四月十日四版發行

明治文學史

定價金參圓貳拾錢
改正定價金六圓五拾錢也

奈良市中筋町二四
著者　岩城準太郎

東京市神田區表神保町二
發行者　鈴木政雄

大阪市東區博勞町五丁目
發行者　鈴木常松

大阪市南區大寶寺町仲之丁六五
印刷者　田中松之助

發兌
東京市神田區表神保町二
大阪市東區博勞町五丁目
修文館書店
振替口座東京二六四四番
振替口座大阪四七一番

小宮山書店
東京神田神保町
電(291)0286

UNIVERSITY OF TORONTO
LIBRARY

WILLIAM H. DONNER
COLLECTION

purchased from
a gift by

THE DONNER CANADIAN
FOUNDATION

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02953 1423